

上細井蟬山遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.3

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上細井蝉山遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2013.3

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

国道17号線は、首都東京と日本海側の政令指定都市である新潟県新潟市を結び、日本列島の中央部を縦断する交通の大動脈です。上武道路は、国道17号の混雑緩和と沿線地域における物流の促進を図るため、大規模バイパスとして埼玉県熊谷市から群馬県前橋市田口町に至る路線が計画されました。

上武道路の沿線には、旧石器時代から近世に至る約3万年間に及ぶ遺跡が累積しています。この地域は県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地が広がっており、群馬県教育委員会の調整の結果、道路建設に先だって埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになりました。

上武道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和48年度から着手し、現在も発掘調査が進められています。上細井蟬山遺跡は、赤城山の南西麓に位置する遺跡であり、平成21・24年度に発掘調査を行いました。遺跡からは縄文時代から平安時代に及ぶ集落が発見され、この地域の歴史の一端が明らかになりました。ここに遺跡の発掘成果を埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行します。

発掘調査から調査報告書の刊行に至るまで、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ関係諸機関並びに関係各位の皆様には、多大なご高配とご協力を賜りました。ここに銘記して心より謝意を表しますとともに、本調査報告書が地域の歴史理解を深め、豊かな社会と未来を指向するための一助として広く活用されますことを願い、序といたします。

平成25年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 榮 一

例言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による上細井蛭山遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 上細井蛭山遺跡は、群馬県前橋市上細井町1614-2、1616、1618-2、1619-2、1624-2、1625-1、1629、1630、1631、1632-1、1632-2、1634、1635、1636-1、1636-2、1636-3、1651、1653-1、1653-2、1684-2、1677-1、1677-4 番地に所在する。
3. 事業主体は、国土交通省関東地方整備局である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)である。
5. 調査期間と調査面積、体制は次の通りである。

調査委託契約履行期間 平成21年4月1日～平成22年3月31日(平成21年度)
平成24年4月1日～平成25年3月31日(平成24年度)

調査期間 平成21年10月1日～平成22年3月31日(平成21年度)
平成24年11月1日～平成24年11月30日(平成24年度)

調査面積 10750.83㎡(平成21年度)、21.85㎡(平成24年度)

発掘調査担当 坂口一主任専門員(総括)、麻生敏隆主任専門員(総括)、平井敦主任調査研究員(平成21年度)
木津博明調査統括、笹澤泰史主任調査研究員(平成24年度)

遺跡掘削工事請負・地上測量 技研測量設計株式会社(平成21年度・平成24年度)

土器洗浄委託 須賀工業株式会社(平成21年度)
6. 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理委託契約履行期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日

整理期間 平成24年4月1日～平成24年12月31日

整理担当 矢口裕之専門員(総括)

岩石同定 飯島静男氏(地質学者、群馬地質研究会)

自然科学分析委託 株式会社火山灰考古学研究所(地質調査、テフラ及びプラント・オパール分析)
株式会社加速器分析研究所(放射性炭素年代測定)
株式会社パレオ・ラボ(放射性炭素年代測定、樹種同定)
7. 本書作成の担当者は以下の通りである。

編集・本文執筆 矢口裕之専門員(総括)

デジタル編集 齊田智彦主任調査研究員

遺構写真 発掘調査の担当者

遺物写真 佐藤元彦補佐(総括)

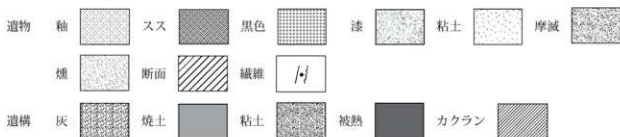
保存処理 関邦一補佐(総括)

遺物観察・観察表執筆 縄文土器 谷藤保彦上席専門員、石器・石製品 岩崎泰一上席専門員
土師器・須恵器・灰輪陶器 板岡正信資料統括
中世以降の土器・陶磁器 大西雅広上席専門員、鉄製品 関邦一補佐(総括)
鉄滓 笹澤泰史主任調査研究員
8. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、前橋市教育委員会事務局管理部文化財保護課のご指導とご助言を得た。
9. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡例

1. 本書で使用した方位は、総て座標・北である。遺跡内の測量は国家座標(世界測地系)第IX系を用いた。調査区は、X=47804～47704、Y=-68121～-67884の範囲に収まり、真北方位角は+0°27'01"である。
2. 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3. 遺構平面図の縮尺は各図にそれぞれ示し、遺物実測図の縮尺は1/3を基本として、それ以外の縮尺は遺物番号に()で示した。
4. 本書で使用した図のトーンは以下のことを表している。

土器類 • 石器類 =



5. 遺構や遺物の記述にあたっては以下の点に留意して記述した。

本書で使用する用語は、原則として文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』同成社発行に準拠して使用するが、群馬県内で従前から使用されてきた「竪穴住居」(竪穴建物)や「周溝」(壁際溝)はこれを使用する。また、遺跡で記載された堆積物の層名称については、ステノが1667年に使用したstrataの訳語である「地層」(土層)を使用する。時代区分の名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発行『第3収蔵庫収蔵展示室展示解説・時代が変わる道具も変わる』に準拠して使用した。

竪穴住居の位置は遺構が含まれるグリッドを記載した。遺構平面図に表した座標点はグリッドを複数記載した。主軸方位はカマドのある壁の直交方向、カマドを伴わない竪穴住居は北側の住居辺の方向を求めた。また、同様に道や溝、土坑などは遺構の長軸の方位を主軸方位として記述した。

遺構の重複は、検出平面の切り合いに基づいて新旧関係を判断し、必要に応じて断面で層序関係を確認して発掘した。また、出土した資料をもとに遺物の新旧を検証手段として遺構の新旧関係を記述した。遺構の形状は、正方形、長方形、隅が丸い方形(正方形の角が丸いもの)、隅が丸い長方形(長方形の角が丸いもの)に分類して記述した。

遺構の規模は、遺構確認面での大きさを計測し、推定により復原したものは計測値に+を付して記載した。なお、カマドが存在する竪穴住居の面積は、住居外のカマド部分は含まれない。面積は床面の面積をプランメーターで計測した。床面の状況は凹凸の有無、硬化した面の有無などを記述した。

遺構の埋土や被覆層は、層序や層相を記述した。火山山麓に堆積したテフラの風化物や風塵を起源とする土壌は、火山灰土を使用した。また、砕屑性堆積物からなる地層についてはウェントワースの方法により層相を記載した。

遺構内のカマドは位置や規模を記載し、遺構の保存状態を記述した。遺構内に見られる周溝、柱穴、貯蔵穴は位置や規模、残存状態について記述した。柱穴の規模は長径・短径・深さを記載した。

遺構から出土した遺物は、遺構内の遺物の出土状態と特徴的な遺物について記述した。遺構の時代は、出土した遺物や遺構の層序関係から推定した。遺物の器種名の杯や椀は「木匱」を使用した。

磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示した。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

6. 報告書で使用する火山砕屑物の鍵層は、通常はテフラの略称を使用した。主なテフラの略称の標記は次のとおりである。

浅間 B テフラ [As-B]、榛名ニッ岳渋川テフラ [Hr-FA]、浅間 C テフラ [As-C]

なお、テフラの命名や年代に関しては矢口(1999)「群馬県北西部のテフラとローム層の層序」、矢口(2011)「関東(平野北西部、前橋堆積盆地)の上部更新統から完新統に関わる諸問題」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要を参照されたい。

7. 報告書で使用した地形図は、国土地理院発行 1 / 25000 「前橋」図幅(平成22年12月1日発行)や前橋市原形図(平成21年発行)であり、個々の図に出典を明示している。
8. 遺構の推定年代は、出土遺物の相対年代によって推定されたものについて「○世紀」の前半・後半の範囲で示し表記した。

目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経過	
第1節 上武道路について	1
第2節 上武道路と埋蔵文化財	1
第3節 調査に至る経過	2
第4節 発掘調査及び整理事業の方法	4
第5節 発掘調査と整理事業の経過	6
第2章 遺跡の地理的、歴史的環境	
第1節 遺跡の自然環境	9
第2節 遺跡の歴史環境	11
第3節 調査区の層序	17
第3章 調査された遺構と遺物	
第1節 調査の概要	20
第2節 竪穴住居	20
第3節 竪穴	101
第4節 古墳	116
第5節 道	119
第6節 溝	119
第7節 井戸	123
第8節 土坑	124
第9節 旧石器調査グリッド	159
第10節 遺構以外で出土した遺物	161
第4章 自然科学分析による遺跡の理解	
第1節 地層とテフラ	171
第2節 テフラの放射性炭素年代	175
第3節 1号竪穴住居から出土した炭化材の放射性炭素年代	176
第4節 プラント・オパール分析	178
第5節 1号竪穴住居から出土した炭化材の樹種	180
第6節 自然科学分析の成果と発掘調査からの評価	180
第5章 調査成果のまとめ	
第1節 旧石器時代から縄文時代の遺跡	182
第2節 古墳時代から平安時代の遺跡	182
文献	183
遺物観察表	185
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	上武道路と遺跡の位置	1	第67図	26号竪穴住居の出土遺物	89
第2図	上武道路8工区の遺跡	3	第68図	27号竪穴住居	90
第3図	上武道路調査測量グリッド設定図	5	第69図	27号竪穴住居の出土遺物(1)	91
第4図	上層丹神山道路の範囲	7	第70図	27号竪穴住居の出土遺物(2)	92
第5図	赤城山西麓縁辺の地形	10	第71図	28号竪穴住居	94
第6図	遺跡周辺の詳細文化財埋藏地	12	第72図	28号竪穴住居と出土遺物	96
第7図	調査区の順序	18	第73図	28号竪穴住居の出土遺物	95
第8図	遺構全体図	21	第74図	29号竪穴住居	97
第9図	遺構部分図(1)	22	第75図	30号竪穴住居	99
第10図	遺構部分図(2)	23	第76図	30号竪穴住居の出土遺物	100
第11図	遺構部分図(3)	24	第77図	1号竪穴と出土遺物	102
第12図	1号竪穴住居	25	第78図	2号竪穴	103
第13図	1号竪穴住居の出土遺物(1)	26	第79図	3号・5号竪穴(1)	104
第14図	1号竪穴住居の出土遺物(2)	27	第80図	3号・5号竪穴(2)	105
第15図	2号竪穴住居	29	第81図	3号・5号竪穴(3)	106
第16図	2号・3号竪穴住居の出土遺物	30	第82図	3号・5号竪穴の出土遺物(1)	107
第17図	3号竪穴住居	31	第83図	3号・5号竪穴の出土遺物(2)	108
第18図	4号竪穴住居	33	第84図	3号・5号竪穴の出土遺物(3)	109
第19図	4号・5号竪穴住居の出土遺物	34	第85図	3号・5号竪穴の出土遺物(4)	110
第20図	5号竪穴住居	35	第86図	4号竪穴	111
第21図	6号竪穴住居(1)	37	第87図	4号竪穴と出土遺物(1)	112
第22図	6号竪穴住居(2)	38	第88図	4号竪穴と出土遺物(2)	113
第23図	6号竪穴住居の出土遺物	39	第89図	4号竪穴の出土遺物(1)	114
第24図	7号竪穴住居	41	第90図	4号竪穴の出土遺物(2)	115
第25図	7号竪穴住居の出土遺物	42	第91図	1号古墳	117
第26図	8号竪穴住居	43	第92図	1号古墳と出土遺物	118
第27図	8号竪穴住居と出土遺物	44	第93図	1号道と出土遺物	120
第28図	8号竪穴住居の出土遺物	45	第94図	1号・2号・3号溝	121
第29図	9号竪穴住居(1)	46	第95図	4号溝と出土遺物	122
第30図	9号竪穴住居(2)	47	第96図	1号井戸と出土遺物	123
第31図	9号竪穴住居の出土遺物(1)	48	第97図	1号〜6号土坑と2号・5号土坑の出土遺物	125
第32図	9号竪穴住居の出土遺物(2)	49	第98図	7号〜12号土坑	127
第33図	10号竪穴住居	50	第99図	13号〜20号土坑	129
第34図	10号竪穴住居の出土遺物	51	第100図	21号〜28号土坑と22号・23号土坑の出土遺物	131
第35図	11号竪穴住居	53	第101図	29号〜34号土坑	134
第36図	11号竪穴住居の出土遺物	54	第102図	35号〜44号土坑と39号土坑の出土遺物	136
第37図	12号竪穴住居	55	第103図	45号〜53号土坑	138
第38図	12号・13号竪穴住居の出土遺物	56	第104図	54号〜58号土坑・133号土坑と出土遺物	140
第39図	13号竪穴住居	57	第105図	59号・60号・61号土坑	141
第40図	14号竪穴住居	59	第106図	62号〜70号土坑	143
第41図	14号・15号竪穴住居の出土遺物	60	第107図	71号〜75号土坑	145
第42図	15号竪穴住居と出土遺物	61	第108図	76号〜111号・113号〜116号・121号・122号・123号土坑(1)	146
第43図	16号竪穴住居と出土遺物	62	第109図	76号〜111号・113号〜116号・121号・122号・123号土坑(2)	147
第44図	17号竪穴住居(1)	64	第110図	76号〜111号・113号〜116号・121号・122号・123号土坑(3)	148
第45図	17号竪穴住居(2)	65	第111図	117号・119号・120号・124号土坑及び18号・125号土坑と出土遺物	150
第46図	17号竪穴住居と出土遺物	66	第112図	126号〜132号土坑	152
第47図	17号竪穴住居の出土遺物	67	第113図	129号土坑の出土遺物	153
第48図	18号・19号竪穴住居	68	第114図	130号・134号の出土遺物	154
第49図	18号・19号竪穴住居と出土遺物	69	第115図	135号土坑・134号・137号土坑と出土遺物	156
第50図	18号・19号竪穴住居の出土遺物(1)	70	第116図	136号土坑と出土遺物	158
第51図	18号・19号竪穴住居の出土遺物(2)	71	第117図	遺構外から出土した石器と貯石器調査グリッドの出土遺物	159
第52図	20号竪穴住居と出土遺物	72	第118図	旧石器調査グリッド	160
第53図	21号竪穴住居(1)	73	第119図	遺構外で出土した遺物(1)	163
第54図	21号竪穴住居(2)	74	第120図	遺構外で出土した遺物(2)	164
第55図	21号竪穴住居の出土遺物(1)	75	第121図	遺構外で出土した遺物(3)	165
第56図	21号竪穴住居の出土遺物(2)	76	第122図	遺構外で出土した遺物(4)	166
第57図	22号竪穴住居(1)	78	第123図	遺構外で出土した遺物(5)	167
第58図	22号竪穴住居(2)	79	第124図	遺構外で出土した遺物(6)	168
第59図	22号竪穴住居の出土遺物	80	第125図	遺構外で出土した遺物(7)	169
第60図	23号竪穴住居	81	第126図	遺構外で出土した遺物(8)	170
第61図	23号竪穴住居の出土遺物	82	第127図	第1地点(7-700K-13)の柱状図	172
第62図	24号竪穴住居	84	第128図	第2地点(7-710K-10)・第3地点(7-800K-8)の柱状図	173
第63図	24号竪穴住居の出土遺物	85	第129図	曆年較正図	177
第64図	25号竪穴住居	86	第130図	プラン・オーラル分析結果	179
第65図	25号竪穴住居の出土遺物	87	第131図	調査区の竪穴住居の変遷	184
第66図	26号竪穴住居	88			

目次

第1表	上武道路8工区調査遺跡一覧表	3	第7表	放射性炭素年代の測定結果	176
第2表	遺構名、遺構番号の対照	8	第8表	放射性炭素年代の暦年較正年代	176
第3表	道路周辺の埋蔵文化財包蔵地	13	第9表	測定試料及び処理	177
第4表	礎土坑等の計測値	149	第10表	放射性炭素年代測定値及び暦年較正の結果	177
第5表	図や写真を掲載しなかった出土遺物の数量	162	第11表	プラント・オパール分析結果	179
第6表	テフラ検出分析結果	174			

写真目次

PL. 1	1	上空からみた上畑井神山道跡と赤城山麓緑(南西から)	3	7号竪穴住居の地層断面A(南から)
	2	上空からみた上畑井神山道跡と白川扇状地面(西から)	4	7号竪穴住居カマドの全景(南西から)
PL. 2	1	上空からみた調査区東部(南・上から)	5	7号竪穴住居カマド掘方の全景(南西から)
	2	上空からみた調査区東部(東・上から)	6	7号竪穴住居貯蔵穴の全景(南西から)
PL. 3	1	上空からみた調査区西部(南・上から)	7	8号竪穴住居の全景(西から)
	2	上空からみた調査区西部(東・上から)	8	8号竪穴住居掘方の全景(西から)
PL. 4	1	調査区東部の遺構群(東・上から)	PL. 11	1 8号竪穴住居の地層断面A(西から)
	2	調査区の遺構全景(南・真上から撮影して合成)		2 8号竪穴住居カマドの全景(西から)
PL. 5	1	1号竪穴住居遺物及び炭化材の出土状況(西から)		3 8号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	2	1号竪穴住居の全景(西から)		4 8号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)
	3	1号竪穴住居掘方の全景(西から)		5 9号竪穴住居の全景(西から)
	4	1号竪穴住居の地層断面A(西から)		6 9号竪穴住居掘方の全景(西から)
	5	1号竪穴住居カマドの全景(西から)		7 9号竪穴住居の地層断面B(南から)
	6	1号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		8 9号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	7	1号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)	PL. 12	1 9号竪穴住居カマド掘方の調査状況(西から)
	8	1号竪穴住居貯蔵穴遺物の出土状況(北から)		2 9号竪穴住居貯蔵穴の調査状況(西から)
PL. 6	1	2号竪穴住居の全景(西から)		3 9号竪穴住居掘方の地層断面A(西から)
	2	2号竪穴住居掘方の全景(西から)		4 10号竪穴住居の全景(西から)
	3	2号竪穴住居の地層断面A(調査区北壁・南から)		5 10号竪穴住居掘方の全景(西から)
	4	2号竪穴住居カマドの全景(西から)		6 10号竪穴住居の地層断面A(北壁・南から)
	5	2号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		7 11号竪穴住居の全景(西から)
	6	2号竪穴住居遺物の出土状況(西から)		8 11号竪穴住居掘方の全景(西から)
	7	3号竪穴住居の全景(西から)	PL. 13	1 11号竪穴住居カマドの全景(西から)
	8	3号竪穴住居掘方の全景(西から)		2 11号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
PL. 7	1	3号竪穴住居の地層断面A(西から)		3 11号竪穴住居の地層断面A(西から)
	2	3号竪穴住居カマドの全景(西から)		4 12号竪穴住居の全景(西から)
	3	3号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		5 12号竪穴住居掘方の全景(西から)
	4	3号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)		6 12号竪穴住居の地層断面A(西から)
	5	4号竪穴住居の全景(西から)		7 12号竪穴住居カマドの全景(西から)
	6	4号竪穴住居掘方の全景(西から)		8 12号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	7	4号竪穴住居の地層断面A(西から)	PL. 14	1 12号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)
	8	4号竪穴住居カマドの全景(西から)		2 13号竪穴住居の全景(西から)
PL. 8	1	4号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		3 13号竪穴住居掘方の全景(西から)
	2	4号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)		4 13号竪穴住居カマドの全景(西から)
	3	5号竪穴住居の全景(西から)		5 14号竪穴住居の全景(西から)
	4	5号竪穴住居掘方の全景(西から)		6 14号竪穴住居掘方の全景(西から)
	5	5号竪穴住居の地層断面A(西から)		7 14号竪穴住居の地層断面A(西から)
	6	5号竪穴住居カマドの全景(西から)		8 14号竪穴住居1号カマドの全景(西から)
	7	5号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	PL. 15	1 14号竪穴住居2号カマドの全景(西から)
	8	6号竪穴住居の全景(西から)		2 14号竪穴住居1号カマド掘方の全景(西から)
PL. 9	1	6号竪穴住居掘方の全景(西から)		3 14号竪穴住居2号カマド掘方の全景(西から)
	2	6号竪穴住居の地層断面A(西から)		4 14号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)
	3	6号竪穴住居1号カマドの全景(西から)		5 15号竪穴住居の全景(西から)
	4	6号竪穴住居2号カマドの全景(西から)		6 15号竪穴住居掘方の全景(西から)
	5	6号竪穴住居1号カマド掘方の全景(西から)		7 15号竪穴住居の地層断面A(西から)
	6	6号竪穴住居2号カマド掘方の全景(西から)		8 15号竪穴住居カマドの全景(西から)
	7	6号竪穴住居銅製品の出土状況	PL. 16	1 15号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	8	6号竪穴住居遺物の出土状況		2 15号竪穴住居遺物の出土状況
PL. 10	1	7号竪穴住居の全景(南西から)		3 16号竪穴住居の全景(西から)
	2	7号竪穴住居掘方の全景(南西から)		4 16号竪穴住居掘方の全景(西から)

	5	16号竪穴住居の地層断面A(西から)		7	29号竪穴住居カマドの全景(西から)
	6	16号竪穴住居カマドの全景(西から)		8	29号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	7	16号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	PL. 25	1	30号竪穴住居の全景(西から)
	8	16号竪穴住居遺物の出土状況		2	30号竪穴住居掘方の全景(西から)
PL. 17	1	17号竪穴住居の全景(南西から)		3	30号竪穴住居の地層断面B(南壁・北から)
	2	17号竪穴住居掘方の全景(南西から)		4	30号竪穴住居カマドの全景(西から)
	3	17号竪穴住居の地層断面A(南から)		5	30号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	4	17号竪穴住居カマドの全景(南西から)		6	1号竪穴の全景(東から)
	5	17号竪穴住居カマド掘方の全景(南西から)		7	2号竪穴の全景(東から)
	6	17号竪穴住居カマドの地層断面J(南西から)		8	2号竪穴の地層断面B(東から)
	7	17号竪穴住居1号貯蔵穴の全景(南西から)	PL. 26	1	3号竪穴遺物の出土状況(北から)
	8	17号竪穴住居2号貯蔵穴の全景(北から)		2	5号竪穴遺物の出土状況(北西から)
PL. 18	1	18号竪穴住居の全景(西から)		3	3号竪穴の全景(南から)
	2	18号竪穴住居掘方の全景(西から)		4	5号竪穴の全景(北西から)
	3	18号・19号竪穴住居の地層断面A(西から)		5	3号竪穴の地層断面A(南から)
	4	18号竪穴住居カマドの調査状況(北西から)		6	4号竪穴遺物の出土状況(南から)
	5	18号竪穴住居カマドの全景(西から)		7	4号竪穴の全景(南から)
	6	18号竪穴住居カマド掘方の全景(北西から)		8	4号竪穴の地層断面A(南から)
	7	19号竪穴住居の全景(西から)	PL. 27	1	1号古墳の全景(南西から)
	8	19号竪穴住居掘方の全景(西から)		2	1号古墳主体部の全景(南から)
PL. 19	1	19号竪穴住居1号貯蔵穴の全景(西から)		3	1号古墳主体部の全景(北西から)
	2	19号竪穴住居2号貯蔵穴の全景(西から)		4	1号古墳周囲の全景(南東から)
	3	20号竪穴住居の全景(北から)		5	1号古墳周囲の地層断面A(南から)
	4	20号竪穴住居掘方の全景(北から)	PL. 28	1	1号溝の全景(南から)
	5	20号竪穴住居の地層断面A(南壁・北から)		2	1号溝の全景(西から)
	6	21号竪穴住居遺物の出土状況(西から)		3	2号溝の地層断面A(南から)
	7	21号竪穴住居の全景(西から)		4	3号溝の全景(西から)
	8	21号竪穴住居掘方の全景(西から)		5	4号溝の調査風景・平成24年度(西から)
PL. 20	1	21号竪穴住居の地層断面B(北から)		6	4号溝の全景(西から)
	2	21号竪穴住居カマドの全景(西から)		7	1号井戸の全景(未完掘・南から)
	3	21号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		8	1号井戸の地層断面A(断ち割り・南から)
	4	21号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)	PL. 29	1	1号土坑の全景(南から)
	5	21号竪穴住居2号土坑の全景(西から)		2	2号土坑の全景(南から)
	6	22号竪穴住居遺物の出土状況(西から)		3	3号土坑の全景(南から)
	7	22号竪穴住居の全景(西から)		4	4号土坑の全景(南から)
	8	22号竪穴住居掘方の全景(西から)		5	5号土坑の全景(南から)
PL. 21	1	22号竪穴住居の地層断面A(東から)		6	6号土坑の全景(南から)
	2	22号竪穴住居カマドの全景(西から)		7	7号土坑の全景(東から)
	3	22号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		8	8号土坑の全景(東から)
	4	23号竪穴住居の全景(西から)		9	9号土坑の全景(南から)
	5	23号竪穴住居掘方の全景(西から)		10	10号土坑の全景(南から)
	6	23号竪穴住居の地層断面A(東から)		11	11号土坑の全景(西から)
	7	23号竪穴住居カマドの全景(西から)		12	12号土坑の全景(南から)
	8	24号竪穴住居の全景(南から)		13	13号土坑の全景(南から)
PL. 22	1	24号竪穴住居掘方の全景(南から)		14	14号土坑の全景(南から)
	2	24号竪穴住居の地層断面A(北壁・南から)		15	19号土坑の全景(南から)
	3	24号竪穴住居カマドの全景(西から)			
	4	25号竪穴住居の全景(西から)	PL. 30	1	20号土坑の全景(南から)
	5	25号竪穴住居掘方の全景(西から)		2	21号土坑の全景(東から)
	6	25号竪穴住居の地層断面A・B(南西から)		3	22号土坑の地層断面A(南から)
	7	25号竪穴住居カマドの全景(西から)		4	23号土坑の全景(南から)
	8	26号竪穴住居の全景(西から)		5	24号土坑の全景(南から)
PL. 23	1	26号竪穴住居の地層断面A(南西から)		6	25号土坑の全景(南から)
	2	26号竪穴住居カマドの全景(西から)		7	26号土坑の全景(南から)
	3	26号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		8	27号土坑の全景(南から)
	4	27号竪穴住居遺物の出土状況(西から)		9	28号土坑の全景(南から)
	5	27号竪穴住居の全景(西から)		10	29号・30号土坑の全景(西から)
	6	27号竪穴住居掘方の全景(西から)		11	31号・32号土坑の全景(西から)
	7	27号竪穴住居カマドの全景(西から)		12	33号土坑の全景(西から)
	8	27号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)		13	34号土坑の全景(西から)
PL. 24	1	28号竪穴住居の全景(南西から)		14	35号土坑の全景(南から)
	2	28号竪穴住居掘方の全景(南から)		15	36号土坑の全景(南から)
	3	28号竪穴住居の地層断面A(南から)	PL. 31	1	37号土坑の全景(南から)
	4	29号竪穴住居の全景(西から)		2	38号土坑の全景(南から)
	5	29号竪穴住居掘方の全景(西から)		3	40号土坑の全景(南から)
	6	29号竪穴住居の地層断面A(西から)		4	42号土坑の地層断面A(南東から)
				5	44号土坑の全景(南から)

	6	45号土坑の全景(東から)	11	127号土坑の地層断面A(南西から)
	7	47号土坑の全景(西から)	12	128号土坑の全景(東から)
	8	48号土坑の全景(南から)	13	129号土坑の全景(南から)
	9	49号土坑の全景(西から)	14	129号土坑の地層断面A(南から)
	10	50号土坑の全景(南から)	15	130号土坑の全景(南から)
	11	51号土坑の全景(南から)	PL.35	1 130号土坑の地層断面A(南から)
	12	52号土坑の全景(南から)	2	131号土坑の全景(南から)
	13	53号土坑の全景(南から)	3	131号土坑の地層断面A(南から)
	14	54号土坑の全景(南から)	4	132号土坑の全景(北から)
	15	55号土坑の全景(南から)	5	133号土坑の全景(南から)
PL.32	1	56号土坑の全景(南から)	6	133号土坑の地層断面A(南から)
	2	57号土坑の全景(南から)	7	134号土坑の全景(北から)
	3	59号土坑の全景(南から)	8	134号土坑の地層断面A(北から)
	4	60号土坑の全景(南から)	9	135号土坑の全景(南から)
	5	61号土坑の全景(南から)	10	135号土坑の地層断面A(南から)
	6	62号土坑の全景(南西から)	11	136号土坑の全景(南西から)
	7	63号土坑の全景(南から)	12	136号土坑遺物の出土状況(南西から)
	8	64号土坑の全景(南から)	13	136号土坑の地層断面A(南西から)
	9	66号土坑の全景(南から)	PL.36	1 旧石器調査グリッドの発掘風景(南から)
	10	67号土坑の全景(南から)	2	旧石器調査グリッドの全景(南から)
	11	68号土坑の全景(南から)	3	旧石器調査グリッドの地層断面(南から)
	12	69号土坑の全景(南から)	4	旧石器調査グリッドから出土した遺物
	13	70号土坑の全景(南から)	5	調査区の地層断面・第1地点(南から)
	14	71号土坑の全景(南から)	6	調査区の地層断面・第3地点(南から)
	15	73号土坑の全景(西から)	PL.37	1号・2号竪穴住居の出土遺物
PL.33	1	74号土坑の全景(西から)	PL.38	3号～6号竪穴住居の出土遺物
	2	75号土坑の全景(西から)	PL.39	7号・8号・9号竪穴住居の出土遺物
	3	76号～79号土坑の出土状況(東から)	PL.40	9号～12号竪穴住居の出土遺物
	4	76号～80号土坑の全景(西から)	PL.41	13号～19号竪穴住居の出土遺物
	5	80号～83号土坑の出土状況(南東から)	PL.42	18号・19号竪穴住居の出土遺物
	6	84号・85号・86号土坑の出土状況(南東から)	PL.43	20号・21号竪穴住居の出土遺物
	7	87号～115号土坑の全景(南東から)	PL.44	21号～24号竪穴住居の出土遺物
	8	87号～90号土坑の出土状況(東から)	PL.45	24号～27号竪穴住居の出土遺物
	9	95号・105号・106号・107号土坑の出土状況(東から)	PL.46	27号・28号竪穴住居の出土遺物
	10	97号土坑の地層断面(東から)	PL.47	28号・30号竪穴住居、1号・3号竪穴の出土遺物
	11	97号・98号・99号土坑の出土状況(東から)	PL.48	3号・5号竪穴の出土遺物(1)
	12	101号・102号・103号土坑の出土状況(南から)	PL.49	3号・5号竪穴の出土遺物(2)
	13	106号土坑の地層断面(東から)	PL.50	5号・4号竪穴の出土遺物
	14	101号・102号・103号・113号・114号土坑の出土状況(西から)	PL.51	4号竪穴の出土遺物
	15	116号土坑の地層断面E(北壁・南から)	PL.52	1号古墳、1号道、1号井戸、5号・22号・23号・39号・118号・125号・129号・133号土坑の出土遺物
PL.34	1	117号・118号土坑の全景(南から)	PL.53	129号・130号・134号土坑の出土遺物
	2	121号土坑の全景(南から)	PL.54	136号・137号土坑、旧石器調査グリッド、遺構外の出土遺物
	3	122号土坑の全景(南から)	PL.55	遺構外の出土遺物(1)
	4	123号土坑の全景(西から)	PL.56	遺構外の出土遺物(2)
	5	124号土坑の全景(南から)	PL.57	遺構外の出土遺物(3)
	6	125号土坑の全景(南から)	PL.58	遺構外の出土遺物(4)
	7	125号土坑の地層断面A(南から)	PL.59	遺構外の出土遺物(5)
	8	126号土坑の全景(南から)	PL.60	遺構外の出土遺物(6)
	9	126号土坑の地層断面A(南東から)		
	10	127号土坑の全景(南から)		

第1章 調査に至る経過

第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である。現道の西には、前橋渋川バイパス及び鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線網整備事業として期待されている。平成10年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では「幹線交通乗り入れ30分構想」の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

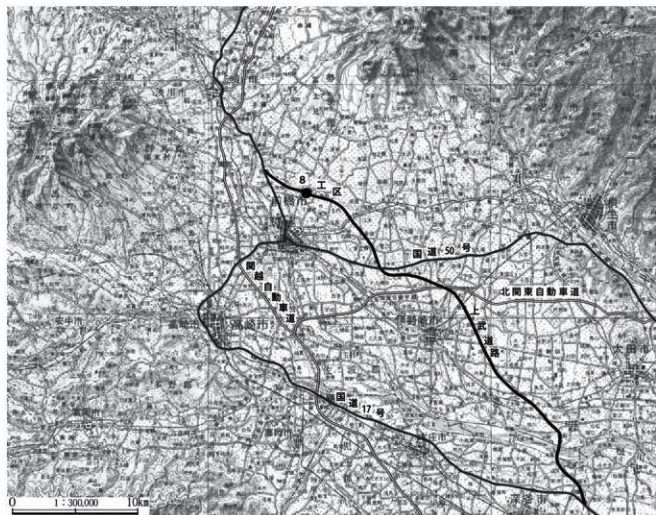
上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km

区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たし、全線開通までの最終3.5km間の発掘調査と工事が進められている。

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に



第1図 上武道路と道跡の位置 国土地理院発行1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用

文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、現在は③の中程まで供用が開始されている。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編「地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—」が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女船の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が続々と明らかになっている。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明している。特に最西端の田口下田尻遺跡では整穴住居280棟が検出された大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、JKを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号JK52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。JK52だけは、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上泉唐ノ堀遺跡にはJK52bをつけて7工区と区別している。また、JK59烏取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした(第1表)。また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ヶ沢遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行して82としたことから、関根細ヶ沢遺跡は81a、関根赤城遺跡は81bとした。

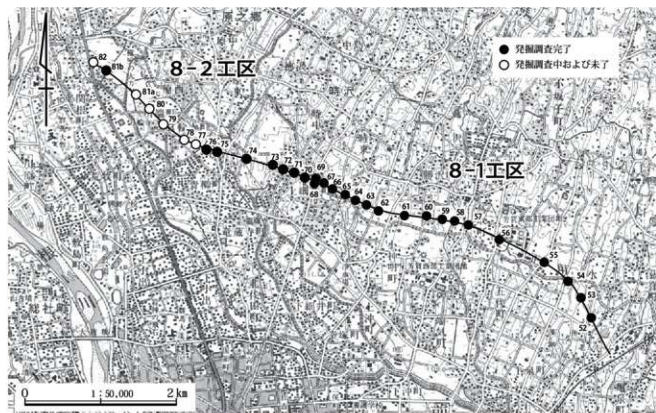
第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋大胡線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声有一段と強まった。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったこ

第1表 上武道路8工区調査遺跡一覧表

J KNo.	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 発行年度
52b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東原沼地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	駒城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上郷井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口遺跡	前橋市 上郷井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上郷井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上郷井五十嵐遺跡	前橋市 上郷井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東郷屋谷ノ遺跡	前橋市 上郷井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68		前橋市 上郷井町	00798	平成21年度	
69	上町・時沢西組屋谷ノ遺跡	前橋市 富士見町	90097	平成21年度	平成24年度
70	王久保遺跡	前橋市 上郷井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上遺跡	前橋市 上郷井町	00128	平成24年度	
72	上郷井中島遺跡	前橋市 上郷井町	00787	平成21・24年度	
73	上郷井獅子山遺跡	前橋市 上郷井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・築遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宮上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根榎ヶ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	



第2図 上武道路8工区の遺跡 国土地理院1/50000地形図(前橋)平成10年発行を使用

どから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上泉唐ノ瀬遺跡・上泉新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29日、平成22年12月6～20日、平成23年5月12日、同年8月22日～24日、同年10月18日、の13回(23年度末現在)にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

第4節 発掘調査及び 整理事業の方法

(1)埋蔵文化財包蔵地

文化財保護法第95条では「国及び地方公共団体は、周知の埋蔵文化財包蔵地について、資料の整備その他その周知の徹底を図るために必要な措置の実施に努めなければならない。」としている。ここでいう埋蔵文化財包蔵地とは、地下に埋蔵されている文化財を包蔵する範囲を呼び、遺跡はおおよそ埋蔵文化財包蔵地に相当する。

上細井蛭山遺跡は、群馬県前橋市に所在することから

前橋市教育委員会により登録、管理され、前橋市教育委員会と群馬県教育委員会によって資料の整備やその周知が行われている。遺跡の範囲は、群馬県文化財情報システムWEB版にて公開されており、遺跡の概要を検索することができる。

群馬県文化財情報システムWEB版に掲載された上細井蛭山遺跡の情報は以下の通りである。上細井蛭山遺跡は、前橋市上細井町1629番地に所在し、市町村遺跡番号は786である。遺跡の時代は縄文時代、奈良時代、平安時代とされ、遺跡の種類は集落とされる。現況は荒蕪地である。

(2)調査区の位置

発掘調査区の遺構や遺物の位置は、グリッド(grid)と呼ばれる方眼で面的に把握し、または座標を使って点としての位置を表した。

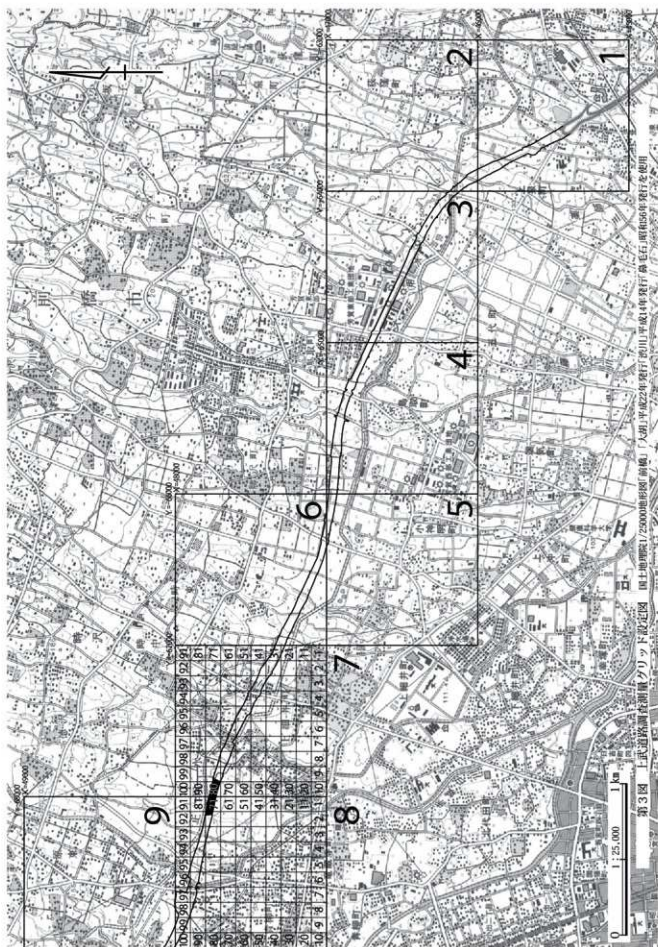
グリッドの設定は、国家座標(世界測地系)第IX系を利用した。上武道路8工区に1区画1km四方の大グリッドを網羅し、南から北へ1～13の番号を付した。上細井蛭山遺跡は7～8の大グリッドの境界に位置する(第3図)。

大グリッドは、さらに1区画100m四方の中グリッドに100分割した。分割された中グリッドは、大グリッドの南東隅を起点にして、東から西に向かって1～10の番号を付した。また起点に戻り、北に1桁ずらして11～20の番号を付す方法を繰り返し1～100に区分した。中グリッドは、1区画5m四方の小グリッドに400分割した。

小グリッドは、発掘調査区における最小の基本単位となる区画である。小グリッドは、中グリッドの南東隅を起点にして、東から西に向かってA～Tの記号を付し、同時に南から北に向かって1～20の番号を付して、A1～T20に区分した。

なお、大グリッドの境界が発掘調査区を通らない多くの調査区では、大グリッドの番号を省略して「79S」のように表記するが、大グリッドの境界が発掘調査区を通る本遺跡のような調査区では、「7-79区S-7」のように大グリッド名を先頭に付けて表記する。

発掘の調査区は、発掘作業の工程上で分けられた作業区の区分で、廃土や調査時期などの工程を勘案して付けられる。上細井蛭山遺跡の発掘調査は作業の工程により



第1章 調査に至る経過

1区と2区に分けて発掘調査が進められたが、これらの調査区名は遺跡の内容に関わらないために本報告書では原則として使用しない。上細井嶺山遺跡の発掘調査区は国家座標(世界測地系)第IX系のX=47804、Y=-68121～-67884の範囲である(第4図)。

(3) 発掘調査の記録方法

発掘調査は、調査担当者の指導の下で重機により表土を掘削し、遺構確認面の検出作業は発掘作業員による人力の掘削により行われる。

遺構確認面で確認された遺構の分布や重複、埋土の観察などから発掘調査の工程を計画し、遺構には原則として埋土を観察する帯を設定してから、人力による掘削をおこなった。なお、重機による表土掘削は作業委託で行われ、遺構などの人力掘削は、請負による遺跡掘削工事で実施した。

発掘された遺構は、セクション図、エレベーション図、遺構平面図を必要に応じて作成した。竪穴住居は、原則として20分の1遺構平面図で記録し、土坑や溝などの遺構は20～40分の1遺構平面図を作成した。なお、現地での測量作業は遺構平面図と一部の断面図を測量会社に委託した。遺構のセクション図やエレベーション図は、発掘調査の担当者の指導のもとで発掘作業員が測量した。

遺構の発掘過程で観察された埋土の地層断面は、調査担当者が観察し地質断面図に層相や土壌の観察所見を記録した。

発掘調査は、調査担当者が遺構や遺物の出土状態の写真撮影を行い、測量した平面図や断面図作成の他に観察された所見などを記録した。遺構や遺物、埋土などの地層断面は、一眼レフのデジタルカメラと中判カメラを使用してデジタルデータ及び銀塩写真フィルムで撮影を行い記録した。

(4) 整理作業の方法

遺構平面図やセクション図、エレベーション図は、調査区や遺構ごとに整理し、書類用の紙袋に入れて収納した。発掘現場で測量した遺構平面図などの電子データはCD-ROMなどのメディアに保管した。

発掘現場で撮影した写真データは、DVD-ROMなどのメディアに保管した。データのファイル名は、調査区、遺構略号、遺構番号、撮影方向、撮影内容を数値化したも

のに置き換えるリネーム作業を行った。

出土した遺物の整理は、土器や石器は遺構や包含層などを対象に破片の接合を行った。接合の作業は遺構平面図に記録された遺物の出土位置、出土状態の写真、遺構の地質断面図を参考にしながら進めた。

発掘調査報告書に掲載する土器は、接合の作業を終え復元されたものを中心に、各遺構の埋没当初に堆積したものや、遺構の時代を決定する根拠となる遺物を抽出して選択した。なお、報告書に掲載しない遺物は、遺構や出土位置、種別、器種などを観察した後に遺物収納箱に整理して収納した。

発掘調査報告書に掲載する土器や石器は、デジタルカメラを使用して写真撮影を行った後に遺物実測図を作成した。土器や石器の遺物実測図は等倍で作成し、完形の土器は三次元計測システムを使用して実測図を作成した。

作成した遺物実測図はトレースしたものを電子化した。土器の拓本は作成した拓本のコピーをスキャナーで電子化した。

土器や石器の観察記録は、表にまとめて観察表を作成した。土器の口径、底径、高さは実測図から読み取り、土器の胎土の観察は含まれる岩片などを中心に記載した。また土器の特徴は文様や整形技法の特徴を記載した。

石器の石材は、ルーペを使用した肉眼観察により行い、風化面や割れた断面の観察による所見から分類した。石材の鑑定は飯島静夫氏が行い、整理事業の担当者がこれを確認した。

第5節 発掘調査と整理事業の経過

(1) 発掘調査の経過

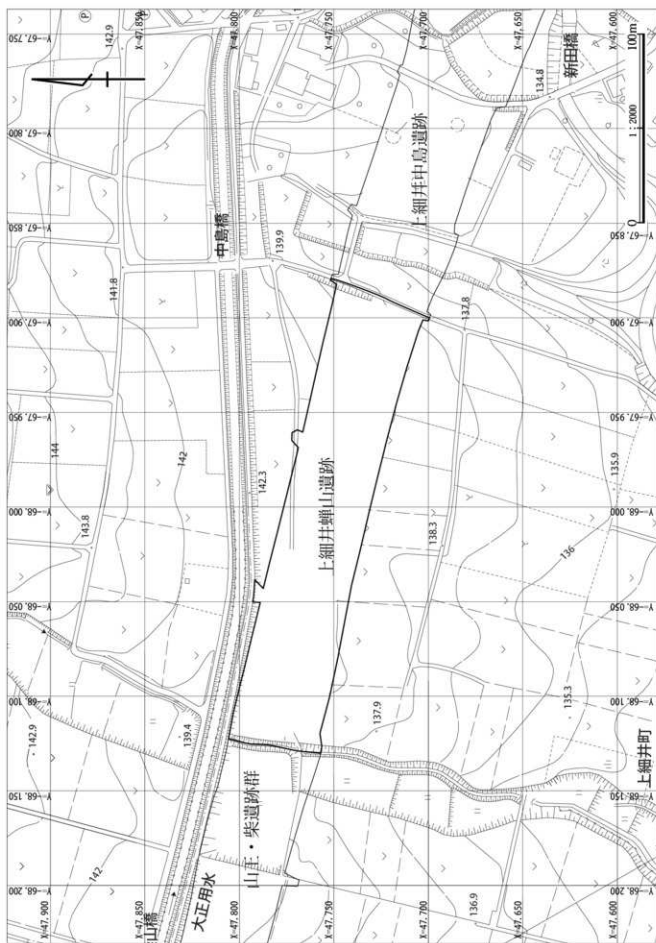
上細井嶺山遺跡の平成21年度の発掘調査は、平成21年10月1日から平成22年3月31日に実施され、平成21年度後半期の秋から冬、春先の季節にわたる発掘作業となった。

10月1日(木)調査担当者が発掘現場に着任し、現地では周辺の除草作業を開始した。

10月13日(火)台風の影響により遅れていた重機による表土掘削を開始する。

10月28日(水)1号～3号竪穴住居の精査を開始する。

11月2日(月)1号古墳の精査を開始する。



第4図 上細井山遺跡の範囲 前橋市地形図平成25年を使用

第1章 調査に至る経過

11月10日(火)1号古墳の全景写真を撮影する。
11月13日(金)6号～11号竪穴住居の精査を開始する。
12月2日(水)遺構群の空中写真撮影を実施する。
12月7日(月)井戸の断ち割り調査。旧石器の確認調査を開始する。
12月17日(木)群馬大学講師の右島和夫氏と学生が遺跡を見学。
12月18日(金)調査区東側(1区)の埋め戻しを開始する。
12月24日(木)調査区西側(2区)の表土掘削を開始する。
1月7日(木)遺構の確認作業を開始する。1月から調査担当者の坂口と麻生が交代。
1月13日(水)20号竪穴住居の精査を開始する。
2月2日(火)積雪のため発掘作業が中断。除雪作業を行い翌日から作業を再開する。
2月3日(水)縄文時代の竪穴遺構の精査を開始する。
2月8日(月)遺構群の空中写真撮影を実施する。
2月17日(水)土坑の精査を開始する。
2月23日(金)旧石器の確認調査を開始する。
3月5日(金)土坑群の精査が佳境となる。旧石器の調査グリッドから石器が2点出土した。
3月9日(火)積雪のため発掘作業が中断。3月11日から作業を再開。
3月23日(火)土坑と旧石器の調査を終了し、調査区の埋め戻しを開始する。
3月26日(金)発掘現場を撤収し、現地での作業を終了する。

上細井蟬山遺跡の平成24年度の発掘調査は、平成24年11月1日から平成24年11月30日に実施され、隣接する新田上遺跡の発掘調査を担当した調査班が平成21年度調査区の残地を発掘調査することとなった。

11月1日(木)調査担当者が発掘現場に着任し、現地では周辺の除草作業を開始した。

11月5日(月)重機による表土掘削を開始する。

11月8日(木)4号溝の精査を開始する。

11月14日(水)4号溝の精査を終了する。

11月16日(金)埋め戻し作業を開始する。

11月21日(水)現地での作業を終了する。

(2) 整理事業の経過

上細井蟬山遺跡の整理事業は、平成24年4月1日から開始し、平成24年12月31日まで行った。整理では遺物の

分類作業や土器の接合作業、復元作業を行い、遺構平面図の編集、トレース作業、遺物写真の撮影と編集を行った。この後で報告書に掲載する遺物の実測図作成や報告書のレイアウト作成と編集、遺構写真や遺物写真の校正、本文執筆を行い発掘調査報告書として刊行した。

(3) 整理事業で変更した遺構番号の対照

発掘調査で付けた遺構の名称及び番号は整理の過程で必要に応じて削除や変更を行った。発掘調査区で記録された資料は、整理で遺構内容の検討や解析を行う。その結果、発掘現場で認識された遺構の認定に誤りが認定された場合は遺構名称の変更や欠番化が行われる。

以下に遺構の名称や番号の付け替えに対する対照表をあげる。報告書刊行後に掲載遺物の資料を調べる場合、発掘調査資料の原因には付け替え前の番号で検索することができる(第2表)。

第2表 遺構名、遺構番号の対照

変更前の遺構名	変更後
112号土坑	欠番

第2章 遺跡の地理的、歴史的環境

第1節 遺跡の自然環境

上細井嶺山遺跡は、前橋市上細井町の赤城火山の南麓(以下、赤城南麓と略す)に位置する複合遺跡である。

赤城火山は火山フロント上に位置する第四紀大型成層火山で、山頂には外輪山の黒輪山(1827m)や駒ヶ岳(1685m)、溶岩ドームの地藏岳(1673m)が見られる。山頂のカルデラは南北4km東西2.5kmの規模で、カルデラ湖の大沼(おの)やカルデラ内の爆裂火口に形成された小沼(この)などが見られる。外輪山の山腹には鈴ヶ岳や荒山、鍋割山などの溶岩ドームが存在し、その山麓には火砕流堆積物が分布している。また北西麓から南東麓にかけて土石流堆積物や泥流堆積物から構成される火山麓扇状地が発達し、南北約40kmに及び広大な裾野を形成している。

赤城火山の形成史は、守屋(1968, 1986)により明らかにされた。Koga(1984)は赤城火山の岩石学的な形成史、鈴木(1990)や竹本(1999, 2008)はテフラや地形発達の見点から噴火史を明らかにした。

守屋(1968)は赤城火山の形成期を古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の3時期に区分し、守屋(1986)はそれを第1期から第4期に細分した。

第1期は古期成層火山の形成期に相当し、赤城火山が噴火を開始し、標高が2500mに達する富士山形の成層火山を形成した火山活動期を呼ぶ。古期成層火山の活動は中期更新世に遡ると考えられ、鈴木(1990)は古期成層火山から400千年前に真岡テフラが噴出したと考えた。しかし山元(2007)は真岡テフラの給源火山を飯土火山に比定している。

竹本(1999)は赤城火山北麓に分布する古期成層火山期の南郷凝灰角礫岩を草津白根火山のテフラから、50万年前とした。群馬県地質図作成委員会(1999)は古期成層火山噴出物の基底を占める沼尾川溶岩類のランラン沢溶岩は 0.95 ± 0.17 MaのK-Ar年代を示したが、竹本(1999)は沼尾川溶岩を240±60ka及び240±50ka、ランラン沢溶岩を110±150ka及び50±150kaのK-Ar年代を示すことを

報告した。

古期成層火山の末期には山体崩壊がおこり山頂に馬蹄形カルデラが形成された。この火山活動で南西麓や南～南東麓には大規模な岩なだれ堆積物が堆積した。竹本(2008)はこの山体崩壊を岩なだれ堆積物を被覆するテフラから200千年前と推定していることから、この時期はMIS(酸素同位体ステージ)6初頭にあたる可能性がある。

第2期は新期成層火山の形成期に相当し、馬蹄形カルデラの内部を埋めるように噴出した溶岩流などからなる。これは荒山や船原山、枳形山などを形成した溶岩で小型の成層火山が山頂に再構築された。成層火山が形成された後に火山活動の休止期が見られ、山麓には火山麓扇状地が形成された。この時期はMIS 6前半に相当する可能性がある。

第3期は爆発的噴火とカルデラ形成期である。山頂部に馬蹄形カルデラと新期成層火山の間を埋める形で鈴ヶ岳や鍋割山などの溶岩ドームが形成された。鈴ヶ岳西麓の沼尾川沿いには棚下火砕流堆積物などが、鍋割山の南麓には大胡火砕流が堆積し、山麓に台地を形成した。第3期の末期には山頂から赤城湯ノ口テフラが噴出し、ガラン石質火砕流堆積物が南東麓に堆積した。この活動で山頂にカルデラが形成された。第3期の棚下火砕流堆積物は120千年前、大胡火砕流堆積物は75千年前、赤城湯ノ口テフラは57千年前に噴出した。

第4期溶岩ドームの形成期は、45千年前にはカルデラ内から赤城麓沼テフラが噴出し、その後、小沼溶岩ドームに爆裂火口が形成され、カルデラ内には地藏岳の溶岩ドームが誕生した。山頂カルデラ内には湖成層が形成されたが、早川(1999)は湖成層に挟在するテフラから地藏岳溶岩ドームと小沼タフリングの年代は、始良Inテフラと浅間板鼻褐色テフラの間にあると考えている。

赤城火山は広大な裾野を有する火山で、北東部の足尾山地と接する部分を除いて東西約20km、南北30kmの火山麓扇状地が広がる。火山麓扇状地の大部分は成層した凝灰質角礫岩層から構成される扇状地堆積物で、その起源は土石流堆積物や泥流堆積物である。

上細井嶺山遺跡は赤城火山南西部に広がる白川扇状地

(守屋1968、新井1971)の扇端に位置する(第5図)。白川扇状地は標高400m付近を扇頂とし、扇尖は標高が200～250m付近で東西に幅が約4km程度、扇端は標高が130～120m付近で北西から南東に6km程度の幅であり広瀬川低地と浸食崖で接している。

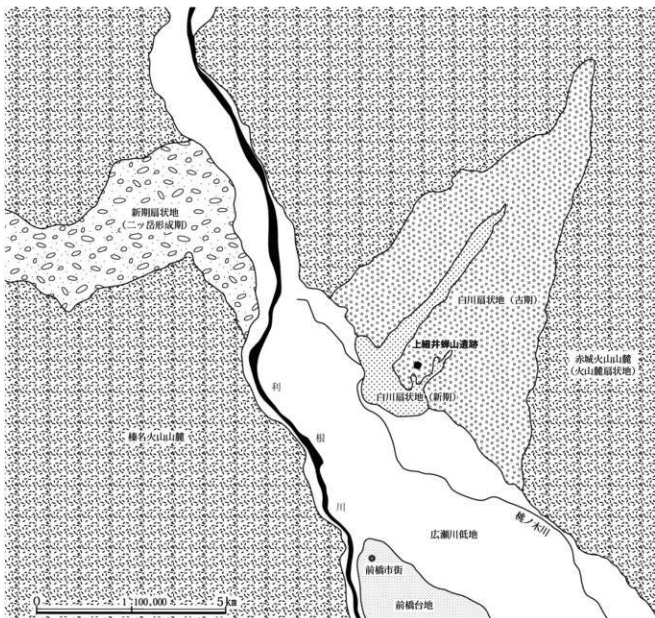
白川扇状地は、赤城白川が形成した火山麓扇状地で、地形の開析が他の火山麓扇状地に比べて少ないので、赤城火山の形成史の中では新しい時期に形成された地形面である。

扇状地の大部分は古期扇状地と呼ばれ、扇状地の前面にあつて広瀬川低地と接する浸食崖から張り出す新期の扇状地と複合した合成扇状地である。古期扇状地は土石

流堆積物からなる扇状地堆積物が認められ、榛名八崎テフラや、始良Tnテフラ以上の上部ローム層に被覆されている(早田1990)。

上部ローム層の浅間室田テフラ以上に被覆される土石流堆積物は、小暮東新山遺跡(群馬県教育委員会2011)で認められる。また東田之口遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団2011:以下事業団と略す)では、浅間板鼻褐色テフラから浅間大窪沢テフラの間に砂主体の泥流堆積物が認められる。

白川扇状地には龍ノ口川や観音川などの小河川が認められ、扇状地面に浅い谷を刻んでいる。谷の堆積物は上部ローム層や古期の扇状地堆積物を浸食して形成された



第5図 赤城南西麓縁辺の地形

谷を埋積して堆積しており、完新世の新期扇状地を構成する堆積物と同様の堆積物からなる。

新期扇状地や古期の扇状地内の谷を埋めた堆積物は、浅間総社テフラや浅間宮前テフラの上位及び縄文時代中期前半に形成された。これらは後水期のモンスーンの活動によりもたらされた扇状地堆積物であり、前橋台地に分布する総社砂層(早田1990)に相当する堆積物であると考えられる(矢口2011)。

上武道路8工区は、赤城南麓の縁を掠めるように横断しており、山麓の地形面を貫く、謂わば巨大な試掘溝の様である。これらの地形面と調査対象遺跡は以下のような関係となる。

すなわち上武道路の路線は大胡火砕流堆積物が形成した標高130m前後の台地(上泉唐ノ堀遺跡～胴城遺跡)を経て、藤沢川の谷底低地(鳥取塚田遺跡～小神明勝沢境遺跡)から白川扇状地の古期扇状地の台地(小神明富士塚遺跡～引切塚遺跡)を横断し、赤城白川を渡って新期扇状地(青柳宿上遺跡～諏訪遺跡)から広瀬川低地帯(川端山下遺跡～関根遺跡群)に至っている。なお、上細井蛭山遺跡西側の山王・柴遺跡群の南部には円頂丘からなる小丘がみられ、原之郷にある九九丸山もこれに相当する。これらは桶山火山岩類で構成された泥流丘群と考えられ、白川扇状地の基底を構成する岩なだれ堆積物により運ばれた巨大岩塊群であると思われる。

第2節 遺跡の歴史環境

群馬県の中央部に位置する赤城南麓は利根川流域に位置し、後期旧石器時代以降、各時代にわたって多数の遺跡が累積して残されてきた。利根川流域の赤城山麓には後期旧石器時代から縄文時代前期～中期の集落遺跡が多く、中部日本の内陸地域を代表する先史時代の遺跡密集地である。

利根川流域における先史時代の人類は、狩猟採集社会を形成し、その生活基盤は大河川とその支流が生み出す水産資源と様々な動植物を育む、森林から生み出される食糧資源を基盤として成立していたと考えられる。これらの自然環境は、火山活動によって形成された火山麓扇状地の緩斜面に起因する比較的災害の少ない台地や火山麓の豊富な湧水群の存在が特筆される。

弥生時代から古墳時代初頭には、赤城南麓にも農耕文化が伝わり水田や高を生活基盤にした農耕集落が形成された。水田は、山麓の緩斜面に枝状に広がる開析谷を中心に開発が進められた。また北側を火山や山地を後背地として南側の関東平野に開ける地形環境は、日照条件に恵まれた農耕地としての好条件を備え、豊かな湧水や森林資源がこの地域の経済的な基盤の底上げを果たしていた。

こうした歴史的な環境を織り込んだ風土は、古代社会において勢多部と呼ばれた広域の行政区域を形成し、中・近世から近代を経て21世紀の市町村合併によってその使命を失うまで地域社会に継続してきたものと考えられる。

赤城南麓の埋藏文化財蔵地の位置図と一覧を示し(第6図、第3表)、文章中の遺跡については番号を()に記した。

(1) 上武道路8工区周辺の旧石器時代の遺跡

上武道路8工区の発掘調査では赤城南麓の台地から旧石器時代の遺跡が発掘されている。上武道路の旧石器遺跡群(上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群・上泉武田遺跡・五代砂留遺跡群・芳賀東部窪地遺跡・胴城遺跡)からは、大胡火砕流が形成した台地上の旧石器遺跡が報告されている(事業団2012)。

上泉唐ノ堀遺跡(168)では、中部ローム層の榛名八崎テフラ～暗色帯下位から結晶片岩の礫が出土している。石器群が出土した層位は中部ローム層の暗色帯(第3文化層)と上部ローム層の始良Tnテフラ～浅間室田テフラ(第2文化層)と浅間白糸テフラ～浅間大窪沢テフラ(第1文化層)である。暗色帯からは直径約25mの環状ブロックが検出されている。

上泉新田塚遺跡群(47)でも上泉唐ノ堀遺跡と同様の層位から石器群が出土しているが、第2文化層は始良Tnテフラ～浅間板鼻褐色テフラの間にあって幅がある。

上泉武田遺跡(169)では、石器群が出土した層位は中部ローム層の暗色帯から上部ローム層の始良Tnテフラ～浅間室田テフラ(第3文化層)と上部ローム層の浅間板鼻褐色テフラ～浅間白糸テフラ下位(第2文化層)と浅間白糸テフラ～浅間板鼻黄色テフラ(第1文化層)である。

五代砂留遺跡群(33)は中部ローム層の暗色帯(第3文化層)、暗色帯から上部ローム層の浅間板鼻褐色テフラ

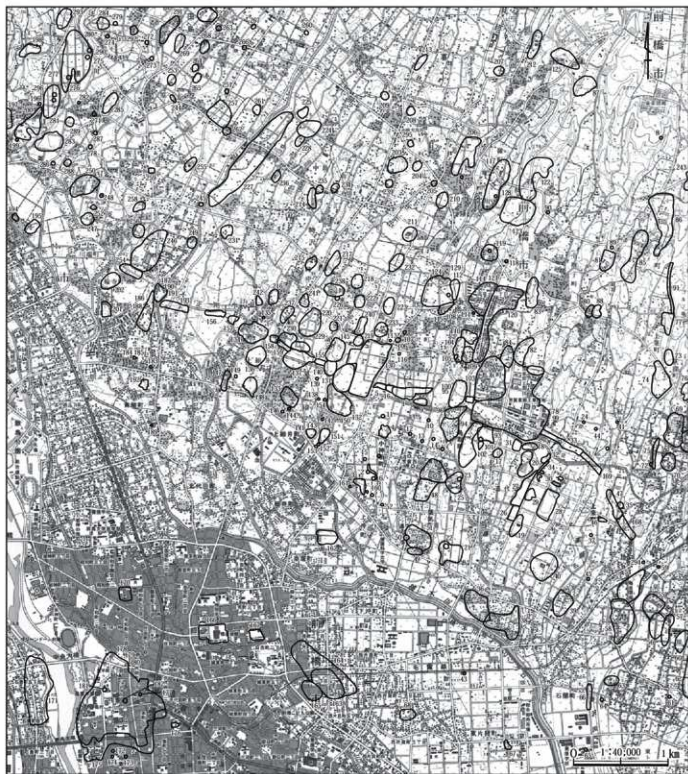
第2章 遺跡の地理的、歴史的環境

(第2文化層)と浅間白糸テフラ～浅間板鼻黄色テフラ(第1文化層)から石器群が出土した。

芳賀東部団地遺跡(99)では中部ローム層暗色帯(第2文化層)と暗色帯から上部ローム層の浅間板鼻褐色テフラ(第1文化層)から石器が出土し、第2文化層からは環状ブロックが検出された。

胴城遺跡(95)では、中部ローム層の椋名八崎テフラ～暗色帯下位から結晶片岩の礫が出土している。石器群が出土した層位は、浅間白糸テフラ～板鼻黄色テフラ(第1文化層)である。

また、上細井蟬山遺跡(156)の東隣に位置する上細井中島遺跡(157)では、平成21年度の発掘調査で上部ロー



第6図 遺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地

1/25000地形図「渋川」(平成14年10月1日発行)、「前橋」(平成9年10月1日発行)、「鼻毛石」(昭和56年3月30日発行)、「大湖」(平成8年11月1日発行)を使用した。

ム層の浅間大窪沢テフラ～浅間板鼻黄色テフラから石器が出土している。

群馬県南部の後期旧石器文化は、1～V期の文化層に区分されている(笠懸野岩宿文化資料館1993)。上武8工区で出土した旧石器文化は1～IV期に相当し、その年代はテフラの年代から推定すると37～17千年前と考えられる。この時期はMIS 3～2(酸素同位体ステージ)にあたる最終氷期の温暖期から寒冷期に相当している。

また、石器を伴わない人為的な持ち込みの可能性を指摘されている結晶片岩(津島2008)の出土層準は、中部ローム層の下半部にあり、その年代はテフラの年代から推定すると52～37千年前と考えられる。この時期はMIS 3の温暖期に相当している。

また、赤城南麓の各地では旧石器文化V期に区分される旧石器時代終末期の石器群が出土している。これには白川扇状地の上部ローム層から龍底形石核が出土した龍ノ口遺跡や湧別技法による細石刃石器群が出土した鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡(102)、槍先形尖頭器石器群を主体とする荒砥北三木堂遺跡や薄手で大型の尖頭器が出土した舞台遺跡などが上げられる。

(2) 上武道路8工区周辺の縄文時代の遺跡

赤城南麓は縄文時代の遺跡が多数発見されているが、当地の最古の縄文時代の遺跡は山麓末端に位置する小島田八日市遺跡である。小島田八日市遺跡では縄文時代草創期の隆起線文土器や局部磨製石斧が出土している。

また赤城南麓の引切塚遺跡(190)、芳賀西部団地遺跡(98)や小神明湯気遺跡(12)からは縄文時代草創期の尖頭器が、端気遺跡(52)からは有茎尖頭器や爪形文土器の破片が出土している。堤遺跡(1)からは槍先形尖頭器の制作跡が見つかっている。これらの遺跡は、古利根川の流路にあたる広瀬川低地北縁に近く、距離にして2km範囲の台地上に立地している。

縄文時代早期は、県内でも遺跡の数が少ない時代である。上細井山遺跡に隣接する上細井中島遺跡(157)では、縄文時代早期の燃糸文土器や沈線文土器、条痕文土器が出土し、竪穴住居や配石が検出されている。また白川扇状地の新期扇状地扇頂にあたる引切塚遺跡や青柳宿上遺跡では縄文時代早期の遺物包含層が検出された。このほかにも端気遺跡(52)や五代砂留遺跡群(33)で燃糸文土器が出土している。これらの遺跡は古利根川

の流路にあたる広瀬川低地に至近距離の台地上に立地しており、旧利根川流路と縄文時代草創期～早期の遺跡分布に関連性が窺える。

縄文時代前期は、赤城南麓で竪穴住居の棟数が増加する時代である。白川扇状地周辺の台地では、約150棟あまりの縄文時代の竪穴住居が検出されている。前期初頭の花積下層式の土器が出土した竪穴住居は芳賀西部団地遺跡(99)で検出されており、前期初頭の二ツ木式土器が出土した竪穴住居は上泉新田遺跡(47)で6棟が検出された。前期前半の有尾式や圓山式の土器が出土した竪穴住居は小神明西田遺跡(14)、芳賀西部団地遺跡(99)、芳賀西部団地遺跡(98)などで12棟が検出されている。さらに黒浜式の土器が出土した

竪穴住居は、芳賀北曲輪遺跡(115)や堤遺跡(1)、上細井五十嵐遺跡(155)、胴城遺跡(95)、上泉唐ノ堀遺跡(168)などで合計29棟が検出されている。この時期が縄文時代前期の竪穴住居棟数のピークとなっている。

縄文時代前期後半の竪穴住居は、上泉唐ノ堀遺跡(168)で諸磯a式から諸磯b式の土器が出土した竪穴住居が14棟検出されている。同様の竪穴住居は、九料遺跡(10)や芳賀西部団地遺跡(99)、芳賀西部団地遺跡(98)、芳賀北部団地遺跡(114)、芳賀北曲輪遺跡(115)、胴城遺跡(95)で27棟であるが、諸磯c式の土器が出土した竪穴住居は端気遺跡(52)と芳賀西部団地遺跡(99)、上細井山遺跡(156)、五代砂留遺跡群(33)で15棟が検出されている。この地域で検出された縄文時代前期の竪穴住居は104棟に達する。

この後、赤城南麓では縄文時代中期後半までが竪穴住居の空白期となる。この期間に相当する縄文時代前期末から中期前半は気候の寒冷期であり、利根川扇状地では総社砂層と呼ばれる扇状地堆積物が卓越している(矢口2011)。

縄文時代中期は赤城南麓で再び竪穴住居の棟数が増加する時代である。中期後半の加曾利E式の土器が出土した竪穴住居は上泉唐ノ堀遺跡(168)、五代砂留遺跡群(33)、小神明下田遺跡(9)、端気遺跡(52)、九料遺跡(10)や芳賀西部団地遺跡(99)、芳賀北部団地遺跡(114)、芳賀北曲輪遺跡(115)、上細井中島遺跡(157)等で43棟が検出されている。

縄文時代後期の称名寺式の土器が出土した竪穴住居

は、小神明下田遺跡(9)、九料遺跡(10)、芳賀東部団地遺跡(99)、堤遺跡(1)であり、20棟が検出されている。

赤城南麓に限らず、縄文時代早期の前半、縄文時代前期の前半及び中期後半から後期にかけて縄文時代の竪穴住居棟数の増減があることは、すでに榛名山麓などで知られている(鬼形1988)。このような縄文時代の集落の規模を直接的に示す竪穴住居棟数の変化は、人口の増減を反映したものである。

これは縄文時代の気候変動による降水量の変化と火山山麓の上砂供給に伴う森林や河川環境の悪化が食糧資源の確保に支障をきたし、人口の増減に反映していると考えられる。

(3) 上武道路8工区周辺の弥生時代の遺跡

上武道路8工区周辺の赤城南麓は、弥生時代の遺跡が少なく、弥生時代中期後半から後期の遺跡がわずかに発見されているが、地域の拠点となるような規模の大きな集落遺跡は発見されていない。

赤城南麓は、小神明倉本遺跡(13)で弥生時代中期から後期の竪穴住居が2棟、同じく小神明湯気遺跡(12)では後期の竪穴住居が1棟検出されている。また、広瀬川低地に近い端気遺跡(52)では弥生時代後期の竪穴住居2棟が検出されている。上武道路8工区路線内では小神明勝沢境遺跡(16)で、唯一の弥生時代後期の竪穴住居2棟が検出されている。

(4) 上武道路8工区周辺の古墳時代～飛鳥時代の遺跡

上武道路8工区周辺の赤城南麓は、古墳時代に遺跡の数が増加する。古墳時代前期～飛鳥時代の遺跡が各地で発見され、集落遺跡や方形周溝墓、古墳などの墓域、水田、畠などの生産域の遺構も数多く発見されている。

古墳時代前期の集落は、河川沿いに立地しており、藤沢川岸の芳賀東部団地遺跡(99)や五代砂留遺跡群(33)、五代中原Ⅰ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡(31)や赤城白川沿いの山王・柴遺跡群(193)などが上げられる。これらの遺跡はこの地域の弥生時代の遺跡と同様に山麓縁近くに並ぶように分布している。こうした遺跡の立地は、当地の農耕開発が赤城南麓末端の湧水を利用した開析谷で開始されたことを物語るものだろう。

赤城南麓縁外に位置し、広瀬川低地帯の微高地に立地する山口下田尻遺跡は、吉利根川沿いの集落遺跡である。竪穴住居の出現は3世紀後半の古墳時代初頭に遡り、3

世紀から4世紀代の竪穴住居は70棟で突出した存在である。

端気遺跡(52)では古墳時代前期の方形周溝墓が検出され、五代江戸屋敷遺跡(26)では4世紀代の方形周溝墓が2基検出されている。

古墳時代中期は、赤城南麓で群集墳が形成された。この地の農耕開発が本格化したことを示唆している。芳賀東部団地遺跡(99)や五代中原Ⅰ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡(31)、五代江戸屋敷遺跡(26)では5世紀後半の竪穴住居が検出されている。

古墳時代後期の6世紀前半には寺沢川左岸の山麓縁に位置する台地上に、この地域で初めて大型前方後円墳である正円寺古墳(63)が築造される。6世紀後半には赤城南麓縁の広瀬川低地帯に桂萱大塚古墳(67)や藤沢川右岸の白川扇状地上にオボ塚古墳(106)やオボ塚西古墳(113)が続いて造られた。

飛鳥時代の7世紀になると、大日塚古墳(22)、新田塚古墳(35)が白川扇状地に造られた。周辺には集落遺跡と20基前後の群集墳が点在している。

上武道路8工区周辺の古墳時代の集落には、古墳時代前期から中期にかけて集落が営まれるものと古墳時代中期や後期になって新たに形成されたものがある。前者は先に挙げた遺跡群であり、後者は5世紀後半から集落が形成された九料遺跡(10)や東田之口遺跡(131)である。特に東田之口遺跡から小神明富士塚遺跡及び小神明勝沢境遺跡にかけての台地上には6世紀～7世紀の竪穴住居が80棟検出されている。

(5) 周辺の古代の遺跡

赤城南麓は、古代の律令制下では「勢多部」として編成された地域である。古代の上野国勢多部は、もともと赤城山麓の全域にわたる地域であった。

平安時代の承平年間に成立した『和名類聚抄』に勢多部は、深田(ふかた)、田邑(たむら)、芳賀(はが)、桂萱(かいがや)、真壁(まかべ)、深渠(ふかみぞ)、深澤(ふかさわ)、時沢(ときざわ)の9郷からなる中部とある。

各郷の比定地候補は以下のようにある。深田郷は、前橋市上増田町、下増田町、駒形町、荒口町、荒子町、箱田町等に比定説があるが詳細は不明である。田邑郷は、前橋市粕川町西田面、上東田面、下東田面に比定説があるが詳細は不明である。

芳賀郷は、前橋市端気町、鳥取町付近に比定されている。柱堂郷は、前橋市東片貝町、西片貝町、上泉町、三俣町付近に比定されている。真壁郷は、渋川市北橋町真壁、箱田、上箱田、下箱田、上南室、下南室、前橋市富士見町米野、山口付近に比定されている。

深栗郷は、前橋市粕川町深津、女淵から前橋市東大室町、西大室町、下大室町付近に比定されている。深澤郷は、みどり市大間々町上神梅、下神梅、塩沢、桐生市黒保根町宿廻付近に比定されている。時沢郷は、前橋市富士見町時沢を中心とした原之郷、川端町、日輪寺町付近に比定されている。

古墳時代～飛鳥時代の集落遺跡に比べて奈良時代～平安時代の集落遺跡は、赤城南麓の広い範囲に高密度に分布し、この時代に弥生時代に始まる農耕集落が山麓の各地に隔間なく及んだことを示唆する。

芳賀東部団地遺跡(99)は、古墳時代後期から継続した奈良時代から平安時代の大集落である。検出された竪穴住居は400棟を越え、周辺の同時代の集落遺跡をあわせると8～11世紀までに山麓の台地上にまとまりのある集落景観を想像することが可能である。これらは山麓の開析谷に形成された水田や台地の畑作耕作地を生産基盤にした、古代の芳賀郷の姿であるとも考えられるが、芳賀郷を「芳郷」の墨書土器が出土した二宮洗橋遺跡周辺に比定する考えもあり、郷の範囲は確定していない。

絵巻遺跡(44)からは奈良三彩の壺、五代竹花遺跡(29)からは和同開珎や神功開寶、五代砂留遺跡群からは長年大寶などの皇朝銭が出土している。

9世紀末に成立した歴史書である『類聚国史』には、弘仁九(818)年に上野国を含む関東地方に大地震に関する記事がある。赤城南麓や周辺の台地でも地割れや地盤の液状化に伴う噴砂が発見されている。遺跡に残された地震跡と9世紀の年代を示す遺物を出した遺構との関係から、この地震は弘仁地震に比定されている。荒砥川沿いの中宮間遺跡や荒砥川下流の八瀬川低地に位置する中原遺跡では、この地震による洪水堆積物によって埋没した水田跡が検出されている。

平安時代末に浅間火山の噴火によって浅間Bテフラが噴出し、関東地方北部の広範囲に降灰した。この噴火は、右大臣藤原宗忠の日記「中右記」に、上野国内壊滅の旨が記されている噴火に比定され、仁元年(1108年)と考え

られている。

赤城南麓周辺の前橋台地では浅間Bテフラ下部によって覆われた水田跡が広範囲で発見されている。赤城南麓では、上細井五十嵐遺跡(155)において、浅間Bテフラによって覆われた水田跡が検出されている。

(6) 周辺の中世社会の動き

中世初頭は、赤城南麓を東西に横断する灌漑用水である女堀が開削されたと推定されている。女堀は用水路として未完成の遺構群と考えられており、取水口や用水としての設計や性格、開削年代などに未確定な部分が多い遺跡である。

中世前期に赤城南麓の一帯で勢力を持った集団は、10世紀の平将門の乱を制した藤原秀郷を祖とする武士団である。藤原秀郷は後に関東地方の受領を歴任し、その勢力基盤を子孫たちに継承した。上野国では淵名太夫系と呼ばれる氏族の淵名氏とその支族がこれに相当する。

また、北関東には河内源氏の源義国とその子である義康が足利荘に、同様に源義重が八幡荘や新田荘に進出して開発を進めた。彼らは東山道の拠点に勢力を確保しており、河内源氏が前九年の役と後三年の役で得た勢力基盤を継承したのと考えられる。

11世紀後半～12世紀には淵名氏の淵名兼行から長沼氏や左井氏、那波氏などが佐佐部や那波部に分流し、兼行の子である成行は下野国を基盤として足利氏(藤姓足利氏)を名乗り、その子らが赤城南麓で大胡氏や園田氏に分かれた。

足利成行の子である足利家綱は、河内源氏の棟梁である源為義や源義国の家人であったが、永久2年(1114年)に上野国の国衙領雑物押取の容疑で捕らえられた。これは浅間Bテフラによる被災が公領の疲弊に拍車をかけたことによる争執であろう。足利家綱からは赤城南麓に深橋氏や山上氏が分流し、藤姓足利氏の本流は、足利俊綱とその子である足利忠綱へ継承される。

大治3年(1128年)には浅間山が再び噴火し、上野国北部に浅間Bテフラ上部(粕川テフラ)が降灰した可能性が高い。上野国は耕作地が荒廃し、同年は納官封戸の済物免除を受けている。大治5年(1130年)頃には鳥羽上皇により仁和寺法金剛院が建立され、これ以降に金剛院領佐位(淵名)荘が成立したのと考えられる。また翌年の天承元年(1131年)には秩父氏の氏族である高山氏が関

わって藤岡南部を範囲とする高山御厨が成立したと考えられる。

1130年代後半から1160年代には上野国の受領を藤原保説、藤原家方、藤原重家が独占し、これらの人々は白河～鳥羽院政期に院の近臣を占めた藤原氏の普勝寺流の家系である。久寿元年(1154年)には藤原家成らの成功によって鳥羽法皇が金剛心院を建立し、この頃に金剛心院領新田荘が成立したと考えられる。

こうした鳥羽院政期の急激な上野国の荘園立荘の動きをみれば、女堀開削のような都を横断した大規模な土木事業は在地勢力のみによって立案された可能性は極めて薄いだろう。おそらくは浅間Bテフラの災害復興を名目に上野国の荘園再編を進めることが女堀開削に代表される治水事業や郡単位の荘園建設の背景であろう。

保元元年(1156年)の保元の乱には、極名西麓の群馬郡を勢力下とした物部氏や那波氏が源義朝方として参戦し、また平治元年(1159年)の平治の乱では、大胡氏、山上氏、深栖氏、那波氏らが源義朝方について参戦している。

長寛～永万年間(1163～1165年)には赤城南麓の広瀬川低地やその周辺を範囲とする青柳御厨が、前橋台地南部では玉村御厨が設置されている。

治承・寿永の乱では治承4年(1180年)に平家方として足利俊綱が源頼朝を牽制して上野国府に乱入した。その後、源義仲が一時的に上野国多胡荘に侵入した。大胡氏、大室氏、深栖氏、山上氏らは足利忠綱に従い、源頼朝のもとに参じた。鎌倉幕府の体制下で御家人として生き延びた氏族は藤姓足利氏では分流した一部の氏族に限られ、物部氏や那波氏などが再編されている。

上武8工区周辺の赤城南麓で勢力を形成した氏族は、藤姓足利氏の足利成行の子である大胡重俊を祖とする大胡氏である。

文治元年(1185年)に頼朝の弟、範頼が平家討伐の軍を編成した際の従軍諸將のなかに「大胡三郎実秀」の名がある。これらの史料から大胡氏は鎌倉幕府の御家人として定着したことが明らかである。

大胡氏の『吾妻鏡』での初見は、建久元年(1190年)の「大胡太郎」であり、その後『吾妻鏡』では、暦仁元年(1238年)の「大胡左衛門次郎」や「大胡弥四郎」、寛元4年(1246年)の「大胡五郎光秀」、正嘉2年(1258年)「大胡太郎跡」や「大

胡掃部助太郎」などにみられる。

知恩院藏『法然上人絵伝』によれば大胡小四郎隆義は、京都滞在中に法然と知り合い、大胡に帰った後も浄土宗に深く帰依し、また子の太郎実秀も浄土宗に帰依したとある。また『念仏往生伝』によると、大胡小四郎秀時は念仏修行を篤く行い、正元元年(1259年)死去の5年前に仏が夢に現れたと伝えている。これらのことから大胡氏は信仰と教養に篤く、この時代の地域と都の文化交流の様子がうかがえる。

南北朝時代の大胡氏は、室町幕府内の覇権を巡って足利尊氏とその弟直義とが争った親応の擾乱に参加した。『太平記』では大胡氏は、山上氏とともに足利尊氏方の大船義政の下で、足利直義側の桃井直常らと笠懸野で戦って敗れたとされた。また、その後も赤城南麓で勢力を維持していた様子が判明している。

史料上、大胡氏が赤城南麓に勢力を有していたことが確認できるのは、14世紀中葉までである。

上武道路8工区の発掘調査で検出された中世遺跡は、東田之口遺跡の井戸や土坑群であり、14～16世紀代と考えられる。東に隣接する小神明富士塚遺跡では中世の館跡と考えられる溝を境界にした方形区画に4棟の掘立柱建物や4棟の竪穴建物、土坑群が検出された。

第3節 調査区の層序

上細井蛭山遺跡に分布する地層は、下位より白川扇状地を構成する暗灰～黒色シルトや灰褐色泥炭堆積物及び白川扇状地の堆積物を被覆した関東ローム層の中部ローム層と上部ローム層及び黒色土である。調査区の模式的な層序(第118・127・128図)を柱状図として示し、層相や特徴について述べる(第7図、PL.36—5・6)。

I層は層相によりa～d層に細分される。Ia層は調査区の地表面を構成する表土層であり、耕作土からなる。Ib層は黄灰色砂質火山灰土からなり、調査区の東側に分布している。Ic層は暗黄灰色砂質火山灰土からなり下位のI d層の軽石粒を多く含む火山灰土である。I d層は灰褐色火山灰層で中粒～細粒砂サイズの火山砂まじりの軽石からなる。本層は、火山灰層に含まれる灰色軽石粒の特徴や鉱物組成から浅間Bテフラに対比される。

II層は層相によりaとb層に細分され、b層は含まれ

層序区分	層厚 (cm)	柱状図	層相	基本土層	テフラ
表土	16		耕作土、表土。	a	
黒色土	黒色火山灰土	40	黄灰色砂質火山灰土	i	b
		12	暗黄灰色砂質火山灰土		
		8	灰褐色火山灰層		
		10	暗褐色火山灰土	ii	a
	6	橙褐色粗粒火山灰層	b1		Hr-FA
	20	黒褐～黒色細粒火山灰土。 灰色軽石 (As-C) を含む。	b2		As-C
	14	暗灰～黒褐色細粒火山灰土。細粒の橙色軽石を含む。	iii		
	漸移帯	40	暗灰色火山灰土。軟質で母材は風化火山灰土。	IV	
上部ローム層	10		黄灰色風化火山灰土。黄灰色軽石 (As-YP) を含む。	V	As-YP
	30		黄灰色風化火山灰土。 青灰色岩片を含む黄灰色軽石 (As-Okp) が点在する。	VI	As-Okp
	24		黄灰褐色風化火山灰土。 鉱物粒が多い粉状の層相を呈する。	VII	As-SP?
	14		黄褐色風化火山灰土。橙褐色軽石 (As-BP3) を含む。	VIII	As-BP3
	22		黄褐色風化火山灰土。 橙褐色軽石 (As-BP2) がブロック状に堆積。	IX	As-BP2
	12		暗灰褐色風化火山灰土	X	
	20		灰褐色軽石層 (As-BP1)	XI	As-BP1
	20		暗灰褐色風化火山灰土	XII	
	20		暗灰褐色風化火山灰土。 褐色の軽石 (As-MP) や灰色の火山灰薄層 (AT) を挟在する。	XIII	As-MP/AT
	中部ローム層	10		暗灰色細粒風化火山灰土。暗色帯を形成する。	XIV
白川扇状地堆積物	130		灰褐色泥流堆積物 (未詳泥流堆積物)。 径20～50mmの安山岩角礫を含み、基質は灰褐色火山灰～火山灰質砂からなる。	XV	
	40		黒色シルト	XVI	
	20		暗灰色シルト	XVII	



第7図 調査区の層序

るテフラによってb1層とb2層に細分される場合がある。IIa層は暗褐色火山灰土からなり、下位のIIb層に比べ黒み強い火山灰土である。IIb層は調査区の全域にみられる火山灰土で、灰色軽石[As-C]と白色の発泡の良い軽石[Hr-FA]を含む暗灰～灰色の火山灰土である。IIb1層は少量の灰色軽石[As-C]と白色の発泡の良い軽石[Hr-FA]を多く含む暗灰～灰色の火山灰土で、榛名二ツ岳渋川テフラの降灰層準と考えられる火山灰土である。IIb2層は灰色軽石[As-C]を多く含む暗灰～黒色の細粒火山灰土で、白色軽石[Hr-FA]を含まない浅間Cテフラの降灰層準と考えられる火山灰土である。この層準の火山灰土は下位のIII層上部とともに黒色細粒火山灰土の層相を呈する。

III層は暗灰～黒褐色細粒火山灰土で、径0.5～1mm大の発泡の悪い橙色の軽石粒を含む。特に縄文時代中期後半に属する土坑などの遺構埋土には、この軽石粒が多く含まれる。

IV層は、暗灰～暗黄灰色火山灰土からなり、上位ほど暗灰色を呈し、全体的に軟質である。上位の黒色土であるIII層や下位の風化火山灰土との境界は不明瞭で、この火山灰土は母材を風化火山灰土とした黒色土の下部に相当する地層であると考えられる。

上細井嶺山遺跡に分布するI～IV層は群馬県中央部に分布する完新世の火山灰土である黒色土層に対比され、IV層はその漸移帯と考えられる。

V層は、黄灰色風化火山灰土からなり、径0.5～8mm大の黄灰色軽石[As-IP]を含む。V層は浅間板鼻黄色テフラの降灰層準と考えられる風化火山灰土である。

VI層は、黄灰色風化火山灰土からなり、径0.5～5mm大の青灰色岩片を含む2～5mm大の黄灰色軽石[As-0kp]が点在する。VI層は浅間大窪窪テフラ1と2の降灰層準と考えられる風化火山灰土である。

VII層は、黄褐色風化火山灰土からなり、全体に鉱物粒や発泡の良い細粒の白色粒が多い粉状の層相を呈する。上下の火山灰土に比べて明るい色調を呈し、この火山灰土は浅間白糸テフラ[As-SP]の降灰層準に相当する可能性がある。

VIII層は、黄褐色風化火山灰土からなり、褐色軽石粒や暗灰色火山砂を含む。本層には径1～2mm大の橙褐色軽石層(As-BP3)が径50mm大のブロック～レンズ状に堆積し

ている。

IX層は、黄褐色風化火山灰土からなり、褐色軽石粒や暗灰色火山砂を多く含む。径1～5mm大の橙褐色軽石層[As-BP2]がブロック状に堆積している。VIII層とIX層は浅間板鼻褐色テフラの降灰層準と考えられる風化火山灰土であるが、IX層は層としてテフラが保存されており、ブロック状の軽石層を降下テフラとして認定することが可能である。本層は浅間板鼻褐色テフラの上半部を構成する。

X層は、暗灰褐色風化火山灰土で、XI層とIX層を構成する浅間板鼻褐色テフラに挟在する褐色軽石粒や暗灰色火山砂を含む風化火山灰土である。本層は概ね10cm程度の層厚を呈する。

XI層は、灰褐色軽石層[As-BP1]からなり板鼻褐色テフラの下半部を構成する。風化して粘土化が著しく、火山砂まじりの灰～白色の火山灰土からなる部分もみられるが、軽石層の堆積構造を保存している。

XII層は、暗灰褐色風化火山灰土からなり、軽石粒や岩片を含む。

XIII層は、暗灰褐色風化火山灰土。雑色の軽石[As-IP]や灰色の火山灰薄層[AT]を挟在する。軽石は火山砂や岩片を多く含む風化火山灰土に散置している。灰色の火山灰層はレンズ状やブロック状を呈するが風化して粘土化が著しい。

XIV層は、暗灰色細粒風化火山灰土からなり、風化して粘土化が著しく暗色帯を形成する土壌である。

XV層は、灰褐色泥流堆積物からなり、分布や供給源が未詳の泥流堆積物である。径20～50mmの安山岩亜角礫を含み、基質は灰褐色火山灰～火山灰質砂からなる。塊状無層理を呈し一部は風化して粘土化や褐鉄鉱汚染が著しい。

XVI層及びXVII層は、黒色シルトや暗灰色シルトからなり、黒色シルトは植物の腐植によって形成された黒泥である。

V～XIII層は上部ローム層、XIV層は中部ローム層の最上部に相当し、XV～XVII層は中部ローム層に相当する白川扇状地堆積物の一部を構成するものと考えられる。

第3章 調査された遺構と遺物

第1節 調査の概要

上細井嶺山遺跡の発掘調査で検出した竪穴住居は縄文時代から平安時代ものが30棟である(第8～11図)。竪穴住居の年代ごとの内訳は、縄文時代前期が1棟、古墳時代後期～飛鳥時代の6～7世紀が2棟、奈良時代の8世紀が2棟、平安時代の9世紀中頃～10世紀前半が24棟で、古代の可能性のある竪穴住居が1棟である。竪穴住居の重複は18号・19号竪穴住居及び26号・27号竪穴住居の二カ所で認められるが、それ以外の竪穴住居では認められない。

調査区で検出された竪穴住居は風化火山灰土に掘り込まれており、床面は比較的明瞭で、硬化面が認められる。また床面や硬化面の認定が難しく、建物遺構とは認定できない竪穴状の遺構については、竪穴住居と分けて竪穴に区分した。検出した竪穴は縄文時代から古墳時代以降のものが4棟である。竪穴の年代ごとの内訳は、縄文時代が2棟、古墳時代以降の竪穴が2棟である。

古墳は7世紀代に構築された可能性があるものを1基検出した。飛鳥時代～平安時代の竪穴住居は、古墳との重複がなく、古墳を避けるようにして周堀から8m以内には見られないことから、墳丘を意識して立地しているものと考えられる。

道は1条で、平安時代である。溝は4条で、8世紀代が1条、古代の可能性のある溝が2条、不明が1条である。井戸は1基で平安時代である。土坑は136基で、時代の推定が可能となった土坑は62基である。土坑の内訳は、縄文時代の土坑が5基、縄文時代の可能性のあるものが4基、平安時代1基、近世以降が45基、近現代に属する土坑が7基である。

調査区で検出された遺構は、主に自然埋没で堆積した埋土からなるが、人為的な埋没の可能性のある埋土については、その可能性について記載した。

第2節 竪穴住居

1号竪穴住居(第12・13・14図、PL. 5-1～8・37、185頁)
グリッド 7-79区S-7・8

主軸方位 N88°W

周辺の遺構 2号竪穴住居に主軸方位が近似し、10mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有する、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.30m、短径は3.05m、床面までの深さ0.28m、掘方までの深さ0.36m、面積8.15㎡である。

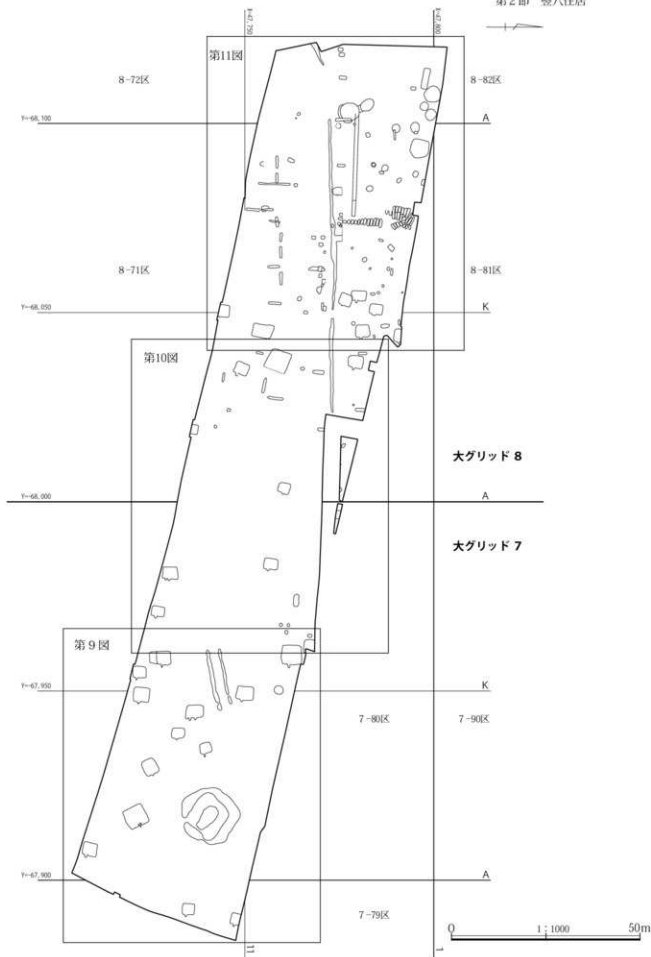
埋土 褐色火山灰土の互層からなりHr-FAの軽石を含む。床面付近の埋土は、炭化物や風化火山灰土ブロックを含む火山灰土からなる。南側の壁際から竪穴中央にかけて炭化物や焼土、風化火山灰土のブロックを含む明褐色火山灰土が堆積している。これは竪穴全体が埋没する前に堆積した埋土の基底に分布する堆積物である。

床面 黄褐～褐色風化火山灰土のブロックを含む火山灰土を層厚5cmほど貼り、床としている。カマドの手前右側には長径1m、短径0.5mの範囲に不定形の炭化材や灰の薄層を検出した。これらは床面よりも若干高い位置に検出し、竪穴住居廃絶後に焼失した建築部材などの可能性が高い。なお、床から出土した炭化材2点は後述する樹種同定によりクリであることが判明し、放射性炭素年代測定による暦年代較正値は、8世紀第3四半期～9世紀末の年代を示す(第4章第3節を参照)。

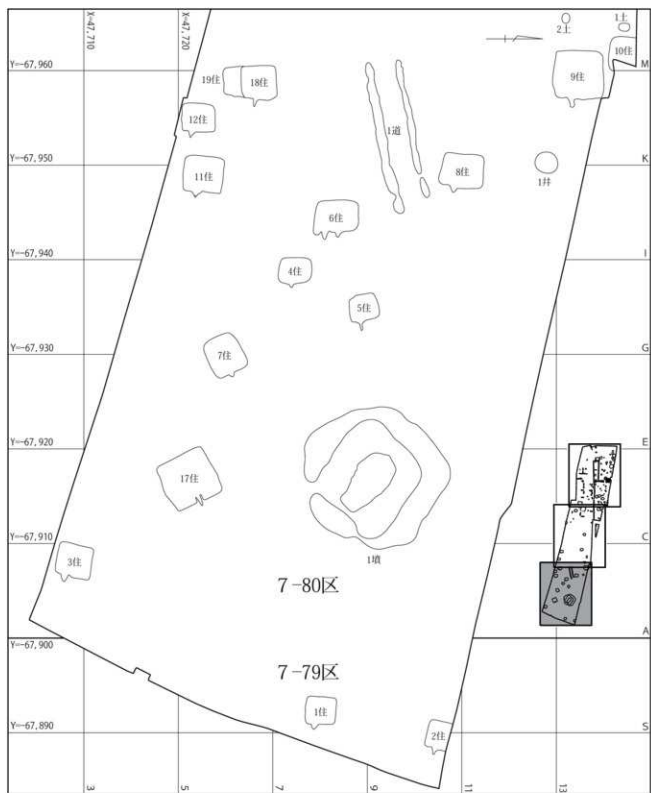
掘方 V層の風化火山灰土を平坦に掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.01～0.12m。竪穴住居の南半部は5～10cm程度の不定形の窪みを多く検出し、南壁中央の壁寄りには直径1.04m大の浅い窪みを検出した。

周溝 カマドの周囲と南壁中央から貯蔵穴周辺を除いて壁際を周回する。最大の上幅は17cm、最小の底幅は8cm、深さ6cmである。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、暗灰褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁面は焼土化が著しく、

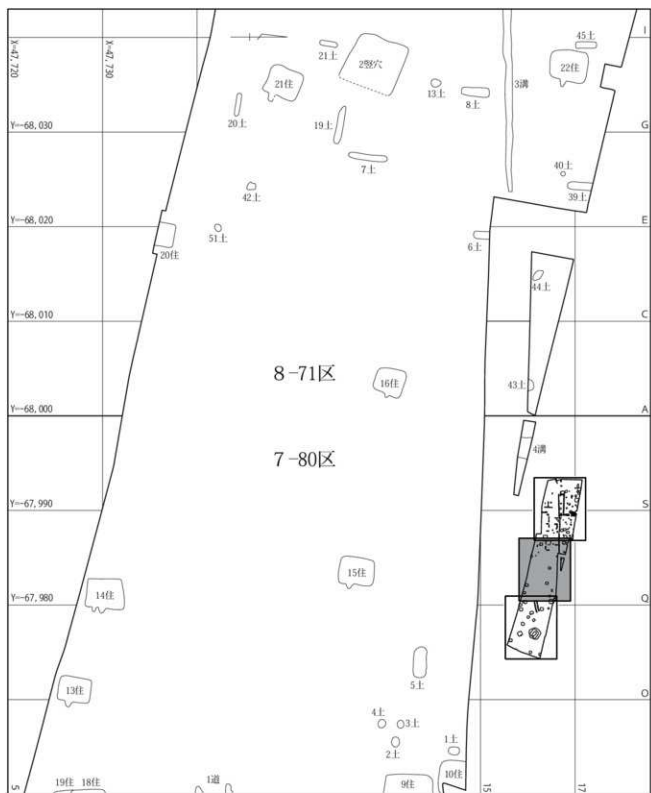


第8図 遺構全体図

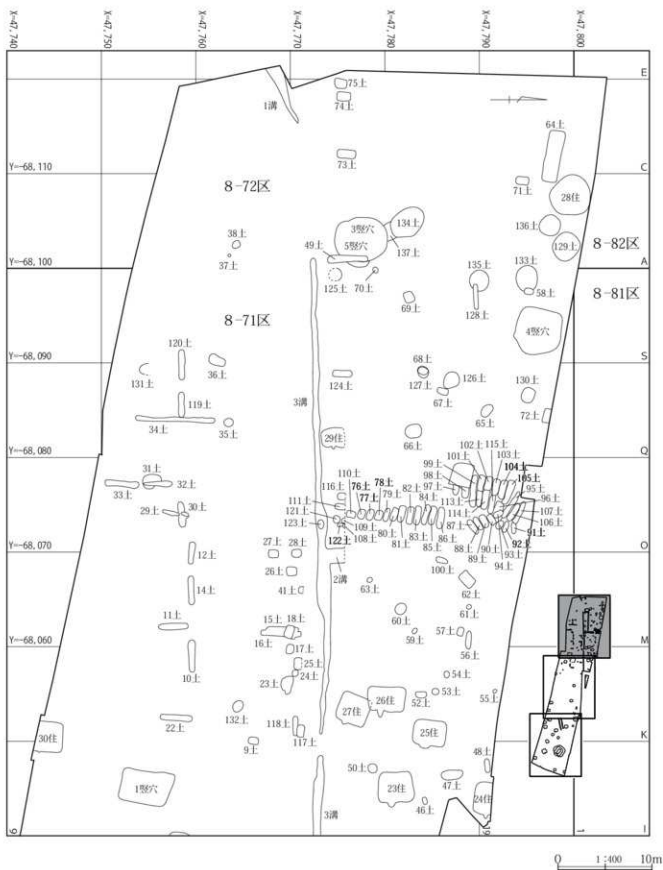


0 1:400 10m

第9図 遺構部分図(1)

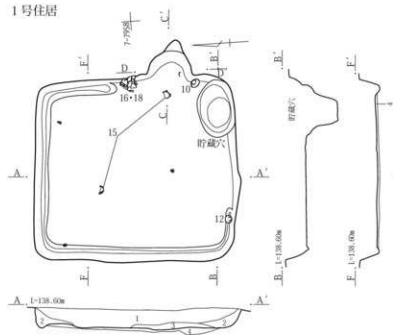


第10図 遺構部分図(2)



第11図 遺構部分図(3)

1号住居



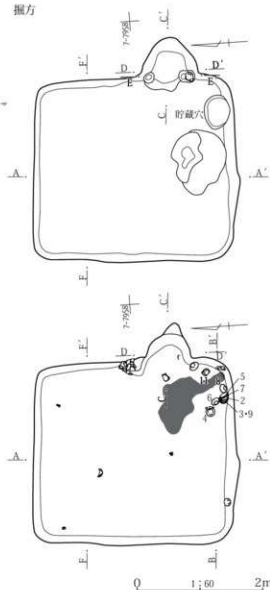
A・F断面

- 1 褐色火山灰土。炭化物や焼土粒、径5～10mmの軽石(Hr-FA?)を含む。径200mm大の火山灰土ブロックを含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 明褐色火山灰土。炭化物や風化火山灰土のブロックを含む。
- 3 黒褐色火山灰土。多量の炭化物や焼土粒を含む。
- 4 黄褐色～褐色風化火山灰土上のブロックを含む火山灰土。(竪穴埋土)

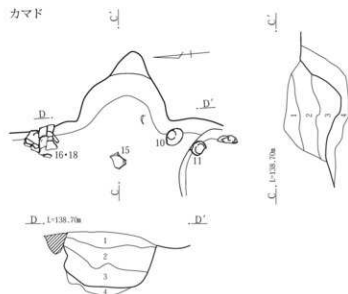
C・D断面

- 1 灰褐色火山灰土。径2mmの白色軽石を含む。(1・2・3はカマド埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。径2mmの白色軽石や焼土粒を含む。焼土は下半部に多く、下位ほど粗粒。
- 3 赤褐色焼土ブロックを多く含む暗灰褐色火山灰土。焼土ブロックは10～40mm大を呈し、袖に近い部分ほど粗粒。径10mmの炭化物を含み全体が土壌ブロックで構成される堆積物である。
- 4 暗灰褐色火山灰土。赤褐色焼土ブロックを含む。(カマド埋方埋土)

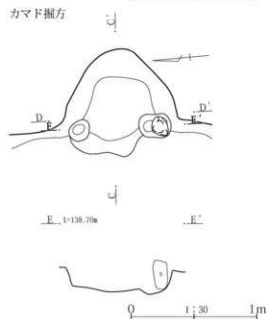
掘方



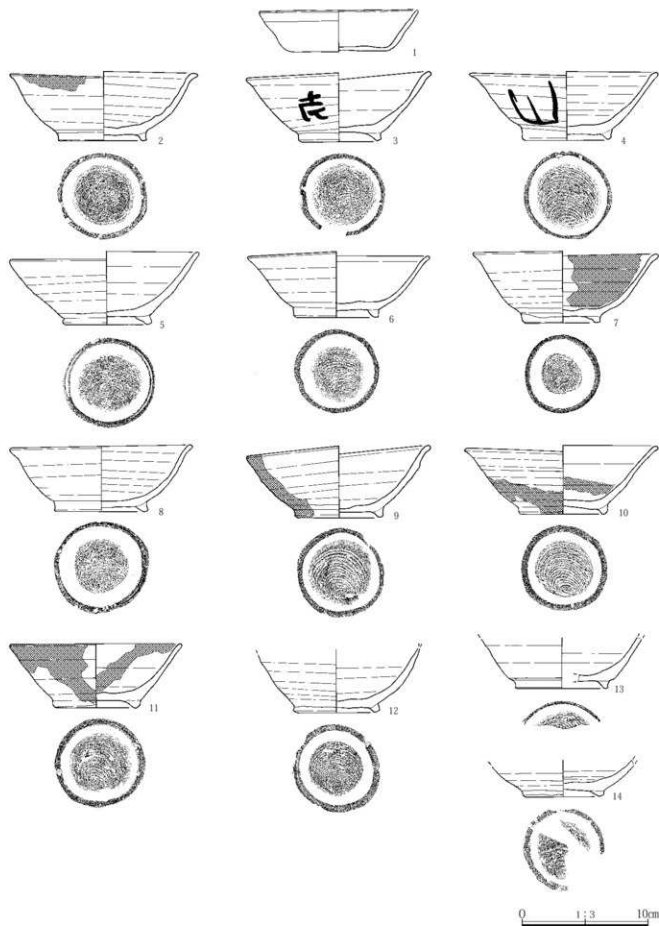
カマド



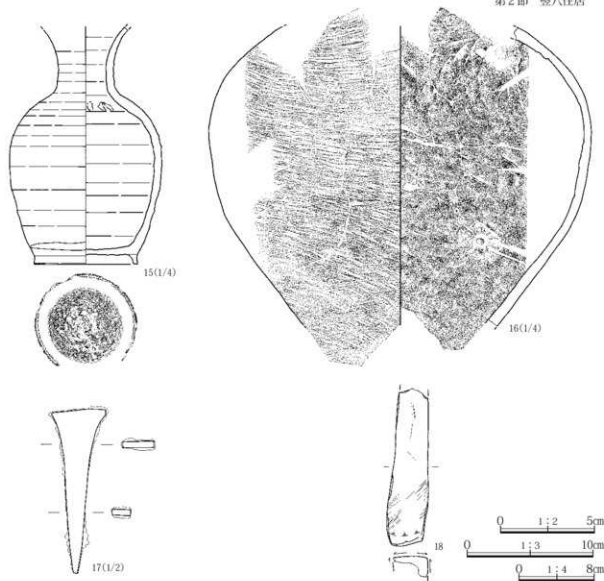
カマド掘方



第12図 1号竪穴住居



第13図 1号竪穴住居の出土遺物(1)



第14図 1号竪穴住居の出土遺物(2)

ブロック状を呈する。煙道は失われているが、使用面からは42～56の勾配で立ち上がる。カマド燃焼部を埋める埋土は、軽石や焼土を含む黒褐色火山灰土と赤橙色焼土ブロックを多く含む暗灰褐色火山灰土からなる。下位ほど埋土の焼土が多く、燃焼部の天井部を構築していたブロックが溶落して堆積したものと考えられる。袖部は失われており確認できないが、カマドの掘方の焚口両脇からは2基のピットを検出し、直径は28cmである。右側のピットは直径18cm、長さ35cmの円礫が立った状態で埋め込まれており、これらはカマド袖の構築材の礫であると考えられる。カマドの長さは48cm、焚口の幅48cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、南壁の東寄りに位置する。楕円形を呈し長径92cm、短径60cm、深さ50cmである。貯蔵穴付近の床面直下及び貯蔵穴上からは10点の須恵器碗(2

～11)が出土し、貯蔵穴上から出土した遺物は床面とほぼ同じ高さか、少し高い位置から出土した。また、これらの遺物と前述の炭化材は、遺物が炭化材の下位にある。これらの遺物は貯蔵穴が埋没後に移動して堆積したものと考えられる。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の面の破片(15)や砥石(18)が、カマドの左側の床面から須恵器の裏(16)が出土した。埋土からは楕形の鉄製品(17)が出土している。

時代 出土遺物から平安時代9世紀後半と考えられる。炭化材試料の放射性炭素校正年代は、誤差1σの暦年代780-794 calAD (12.2%)および801-870 calAD (56.0%)、

誤差2σの暦年において773-888 calAD (95.4%)を示すので、出土遺物の相対年代と矛盾しない。

2号竪穴住居(第15・16図, PL. 6-1~6・37, 185頁)

グリッド 7-79区R・S-10

主軸方位 N75°W

周辺の遺構 1号竪穴住居に主軸方位が近似し、10mの距離にある。

形状と規模 北西方向に長軸を有する方形を呈する竪穴住居であるが、北側が調査区外にある。長径は3.07m、短径は2.48m+、床面までの深さ0.73m、掘方までの深さ0.86m、検出された最大の面積は5.57㎡+である。

埋土 北壁の断面観察では、埋土はⅡb層とⅢ層の層理面から掘り込まれている。埋土は下位より風化火山灰土ブロックを含む黒褐色火山灰土からなり、東西の壁側から竪穴中央に傾斜した黄灰色火山灰土のブロックを多く含む黄褐色火山灰土互層により竪穴が埋積している。ほとんどの埋土にはAs-CやHr-FAの軽石を含む。断面観察から竪穴は、より鉢状に埋積した黄灰色火山灰土ブロックを主体として埋土の堆積過程が顕著である。

床面 黄灰色火山灰土ブロックを含む黄灰色細粒火山灰土を層厚8cmほど貼り、床面を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を平坦に掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.08~0.12m。竪穴住居の中央に長径2m、短径1.14mの不定形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前に平坦な使用面、奥を掘り込んで壁の外側に燃焼部壁を構築し、燃焼部壁から煙道へは52°の勾配で立ち上がる。燃焼部の壁面は直径3~5cm大のブロック状に焼土化し暗褐色の還元帯がみられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む黒褐色火山灰土と暗黄褐色焼土ブロックを多く含む火山灰土からなる。下位ほど焼土ブロックを多く含むことから、最下部は燃焼部の天井部を構築していたブロックの一部が滑落したものと考えられる。カマド埋土の最下底から直径3~5cm大の安山岩礫が出土した。これらはカマド袖の構築材として利用されたものと考えられる。燃焼部の掘方からは黒色灰層の薄層が検出された。これはカマドの使用面を貼り替える前の使用面に残されたカマドの灰と考えられる。カマドの左袖は東壁の手前に風化火山灰土を削りだ

して構築し、残存状態が良好である。

カマドの幅は77cm、長さは79cm、焚口の幅53cmである。煙道は残存する部分の幅が19cm、長さ17cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南壁の東寄りに位置する。楕円形を呈し長径92cm、短径59cm、深さ13cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 カマドの手前左側の床面から須恵器の蓋(6)と土師器の杯(1・3)が、床面付近から土師器の杯(2)が出土した。埋土からは釘(8)が出土した。

時代 奈良時代8世紀前半。

3号竪穴住居(第16・17図, PL. 6-7~7-4・38, 186頁)

グリッド 7-80区B・C-2・3

主軸方位 N73°W

周辺の遺構 17号竪穴住居に10mの距離にある。

形状と規模 北東方向に長軸を有する、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.95m、短径は3.53m、床面までの深さ0.43m、面積8.15㎡である。

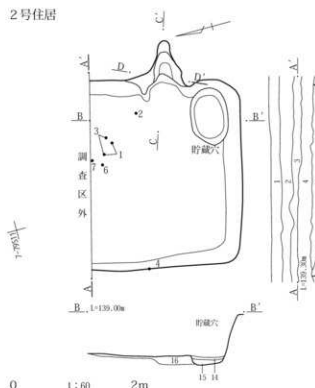
埋土 黒褐色~暗灰色火山灰土の互層からなり軽石を含む。床面を埋積した埋土は、北壁付近が黒褐色火山灰土からなるが、南側の大部分は風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土からなる。

床面 V層の風化火山灰土を削りだして床面を構築しており、一部に暗灰色火山灰土の掘方埋土が検出されたが、明瞭な貼床はみられない。

掘方 カマドの周囲及び床面の四隅をV層の風化火山灰土を不定形に掘り込んで構築している。カマド周囲の不定形の窪みは、長径0.69~0.94m、短径0.5~0.7m、深さ0.22~0.25mである。

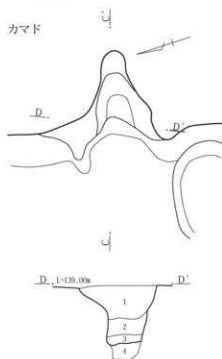
カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、ひょうたん形を呈する平坦な使用面は褐色風化火山灰土を底部に貼って構築している。煙道は燃焼部使用面の奥にある平坦な面から68°の勾配で立ち上がり壁が良好な状態で検出された。燃焼部から煙道の壁面は厚さ1~3cmほどの赤褐色焼土帯を形成しており、壁面の上半部ほど顕著である。カマド燃焼部を埋める埋土は、暗褐色火山灰土と黄褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部中央から煙道

2号住居

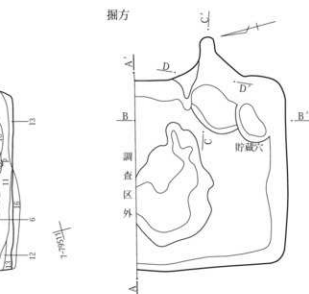


- 1 暗褐色砂質土。耕作土。(1～4は遺構の被覆層)
- 2 褐色砂質火山灰土。
- 3 暗褐色砂質火山灰土。多量の軽石質火山灰(As-B)を含む。径10～50mm大の黒～暗褐色火山灰土ブロックを含む。
- 4 黒色細粒火山灰土。径5～8mm大の軽石(Hr-FAやAs-C)を含む。
- 5 暗灰色火山灰土。径5～8mm大の軽石(Hr-FAやAs-C)を含む。(5～13は竪穴住居埋土)
- 6 風化火山灰土のブロックを含む黄褐色火山灰土。径200mm大のブロックを含む。

カマド

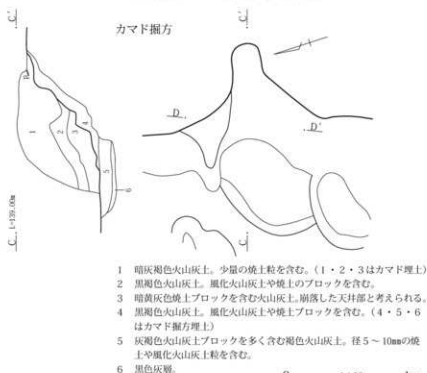


掘方



- 7 黒褐色火山灰土。径5mm大の軽石(Hr-FAやAs-C)や径50mm大の黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。
- 8 風化火山灰土のブロックを含む黄褐色火山灰土。径100～200mm大のブロックを含む。
- 9 黄褐色火山灰土。径5mm大の軽石(Hr-FAやAs-C)や径50mm大の黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。
- 10 黒色火山灰土。軽石(Hr-FAやAs-C)や黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。
- 11 風化火山灰土のブロックを含む黒褐色火山灰土。径10～50mm大のブロックを含む。
- 12 黄褐色火山灰土。少量の風化火山灰土のブロックを含む。
- 13 黄褐色火山灰土。
- 14 黒褐色土。炭化物を含む。(14・15は貯蔵穴埋土)
- 15 黄褐色火山灰土。風化火山灰土からなり焼土粒を含む。
- 16 黄褐色火山灰土ブロックを含む黄褐色細粒火山灰土。径50mm大の黒色火山灰土ブロックを多く含む。(掘方埋土)

カマド掘方

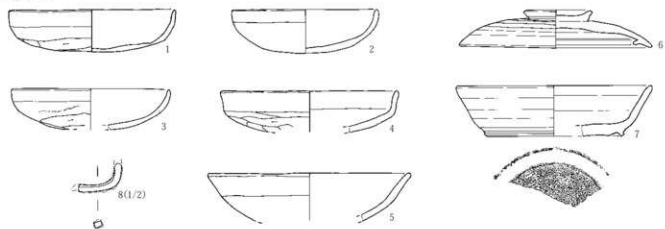


- 1 暗褐色火山灰土。少量の焼土粒を含む。(1・2・3はカマド埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。風化火山灰土や焼土のブロックを含む。
- 3 暗黄褐色焼土ブロックを含む火山灰土。崩落した天井部と考えられる。
- 4 黒褐色火山灰土。風化火山灰土や焼土ブロックを含む。(4・5・6はカマド掘方埋土)
- 5 暗褐色火山灰土ブロックを多く含む褐色火山灰土。径5～10mmの焼土や風化火山灰土粒を含む。
- 6 黒色灰層。

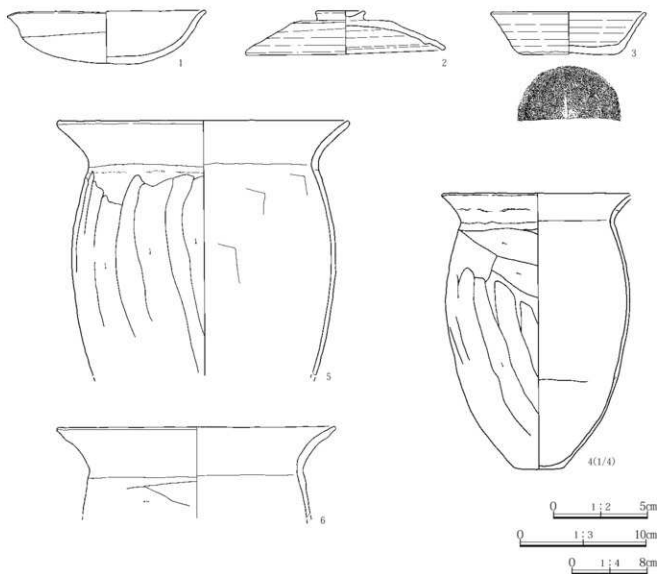
第15図 2号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物

2号住居

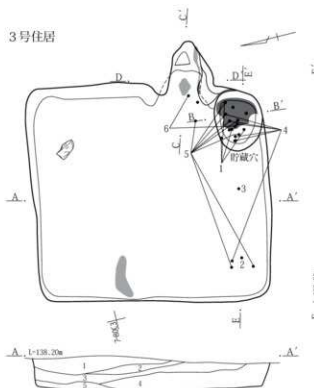


3号住居



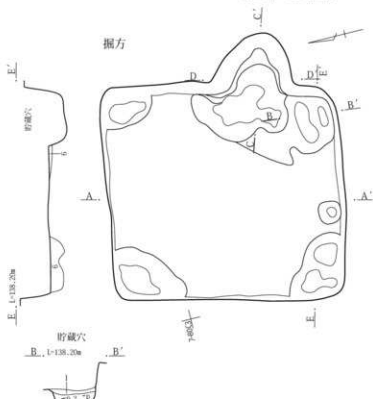
第16図 2号・3号竪穴住居の出土遺物

3号住居



- 1 黒褐色火山灰土。径10～50mmの風化火山灰土ブロックや径5～10mmの軽石を含む。(1～5は竪穴住居理上)
- 2 黄褐色火山灰土。径10～50mmの風化火山灰土のブロックを多く含む。
- 3 暗灰色火山灰土。径200mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 4 黄褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックを含む。
- 5 黒褐色火山灰土。
- 6 暗灰色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックまじり。(掘方理上)

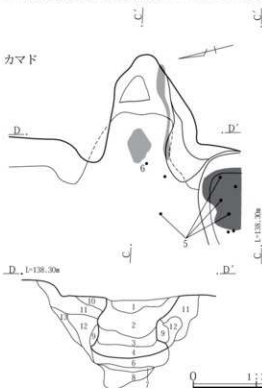
掘方



- 1 黒色灰と炭化物や焼土ブロックまじり火山灰土。(1・2は貯蔵穴理上)
- 2 黄灰褐色火山灰土。径10～20mmの黒色火山灰土のブロックを含む。

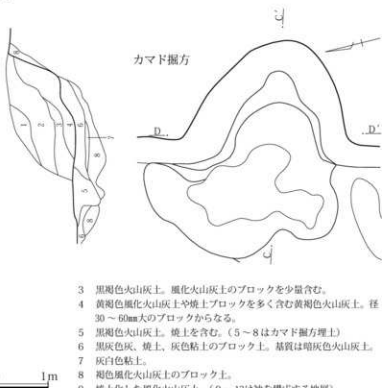
0 1:60 2m

カマド



- 1 暗褐色火山灰土。焼土粒を少量含む。(1～4はカマド理上)
- 2 黄褐色風化火山灰土のブロック上。径300mm大の角礫状のブロック構造を呈し、基質は黄灰色風化火山灰土。径10mmの焼土ブロックを含む。(風化火山灰土を貼った天井部の崩落ブロックと推定される)

カマド掘方



- 3 黒褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックを少量含む。
- 4 黄褐色風化火山灰土や焼土ブロックを多く含む黄褐色火山灰土。径30～60mm大のブロックからなる。
- 5 黒褐色火山灰土。焼土を含む。(5～8はカマド掘方理上)
- 6 黒灰色灰。焼土、灰色粘土のブロック上。基質は暗灰色火山灰土。
- 7 灰白色粘土。
- 8 褐色風化火山灰土のブロック土。
- 9 焼土化した風化火山灰土。(9～13は袖を構成する地層)
- 10 黄灰色風化火山灰土のブロック上。(天井材)
- 11 黒褐色火山灰土。
- 12 黄灰色風化火山灰土のブロック上。(側壁材)
- 13 褐色風化火山灰土。

第17図 3号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物

の天井部分が失われているが、燃焼部両壁の天井部分の残存は良好である。袖は焚口部の構造は失われているが、燃焼部に近い部分は保存され、黄褐色風化火山灰土を厚く貼って構築されている。燃焼部の使用面には黒色の炭化物や灰の薄層が検出された。

カマドの幅は118cm、長さは57cm、焚口の幅93cmである。煙道は残存する部分の幅が45cm、長さ48cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南壁の東寄りに位置する。楕円形を呈し長径97cm、短径75cm、深さ30cmである。貯蔵穴からは底面から15cmの埋土中に土師器皿(1)が出土し、底面から土師器の裏(4・5・6)の破片が多く出土している。これらの遺物は貯蔵穴底から出土したものと周辺の床面の破片が接合している。貯蔵穴周囲の床面及び貯蔵穴埋土は、焼土粒まじり黒色炭化物の薄層に覆われている。この炭化物層はカマド構築材が移動した塊を覆っており、カマドの崩落や貯蔵穴の埋没後に堆積したものと考えられる。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 埋土から完形の須恵器の蓋(2)や床面付近から須恵器の杯(3)が出土している。

時代 奈良時代8世紀前半。

4号竪穴住居(第18・19図、PL. 7-5~8-2・38、186頁)

グリッド 7-80区H・1-7

主軸方位 N S

周辺の遺構 5号・6号竪穴住居に主軸方位が平行で2~5mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.60m、短径は2.69m、床面までの深さ0.42m、掘方までの深さ0.50m、面積6.56㎡である。

埋土 褐色火山灰土の互層からなり軽石を含む。最上部を構成する黄褐色火山灰土には、褐色風化火山灰土ブロックを多く含み、層相も塊状を呈することから人為的な埋積や急激な堆積作用で埋没した可能性がある。

床面 黒褐色火山灰土を層厚5cmほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 床と掘方の間は0.05~0.24mで、竪穴住居の南半部はV層の風化火山灰土を不定形に掘り込んで構築

し、浅い窪み状を呈する。窪みは長径2.06m、短径1.96m、深さ0.24mである。また北半部の中央には歪んだ円形の1号土坑を検出した。土坑は長径1.04m、短径0.92m、深さ0.32mで風化火山灰土ブロックを多く含む黒褐色火山灰土の互層を埋土とする。

カマド 東壁中央の若干南に寄る位置にある。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、暗褐色火山灰土を貼っている。煙道は一部が残存し、使用面から73°の勾配で燃焼部壁が立ち上がる。燃焼部壁面及び使用面は破壊されて残存状態は不良であり、検出された遺構面には凹凸がある。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土や風化火山灰土ブロックを含む明褐色火山灰土で成層しているが、焼土帯が顕著な燃焼部の天井部を構成するブロックなどは見あたらない。袖は失われているが、灰褐色シルト質火山灰土を貼って構築している。カマド掘方の、燃焼部壁の両脇下からは直径8~10cmの円礫が立てられた状態で埋め込まれている。これらはカマド燃焼部壁の構築材として利用された石材であるとされる。またカマドの掘方埋土からは須恵器杯(1)が出土した。

カマドの長さは44cm、焚口の幅は48cmである。煙道は残存する部分の幅が17cm、長さ26cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁際に位置する。歪んだ円形を呈し直径49cm、深さ24cmである。貯蔵穴底の16cm上から須恵器の椀(4)の破片が出土した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 埋土や掘方から須恵器の椀(2・3・5)の破片が出土している。

時代 平安時代9世紀後半。

5号竪穴住居(第19・20図、PL. 8-3~7・38、186頁)

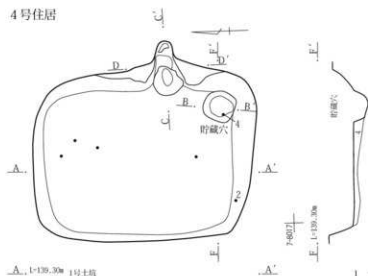
グリッド 7-80区G・H-8・9

主軸方位 N78°E

周辺の遺構 4号・6号竪穴住居に主軸方位が平行で4~7mの距離にある。

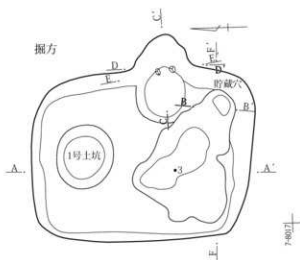
形状と規模 北西方向に長軸を有し、歪んだ正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.20m、短径は2.85m、床面までの深さ0.37m、掘方までの深さ0.44

4号住居



- 貯蔵穴
B, l=138.00m B'
- 1 明褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックや径1~2mmの白色軽石を含む。(1・2・3は貯蔵穴埋土)
2 褐色火山灰土。風化火山灰土粒を含む。
3 暗褐色火山灰土。径40~70mmの風化火山灰土ブロックを含む。

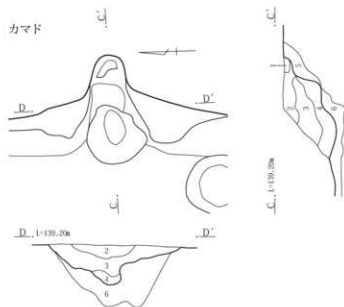
掘方



- 1 褐色風化火山灰土ブロックを含む褐色火山灰土。径1~10mmの白色軽石(As-C)を含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
2 褐色風化火山灰土ブロックを多く含む黄褐色火山灰土。径1~4mmの白色軽石(As-C)を含む。
3 褐色風化火山灰土ブロックを含む褐色火山灰土。
4 黒褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。(4~7は掘方埋土)
5 風化火山灰土ブロックを多く含む黒褐色火山灰土。
6 黒褐色火山灰土。黄褐色火山灰土のブロックを含む。
7 黒褐色火山灰土。

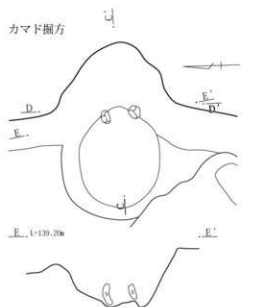
0 1:60 2m

カマド



- 1 暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを少量含む。(1~4はカマド埋土)
2 明褐色火山灰土。径10mm大の風化火山灰土や焼土ブロックを含む。径1~5mmの灰色軽石(Hr-FA)を含む。
3 明褐色火山灰土。径50mm大の風化火山灰土や焼土ブロックを多く含む。径1~5mmの灰色軽石(Hr-FA)を含む。
4 暗褐色火山灰土。径10mm大の風化火山灰土や焼土ブロックを含む。
5 灰褐色シルト質火山灰土。焼土粒を含む。(5・6はカマド掘方埋土)
6 黒褐色火山灰土。焼土粒を含む。

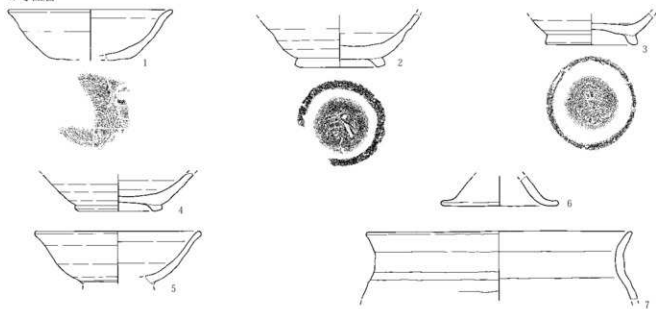
カマド掘方



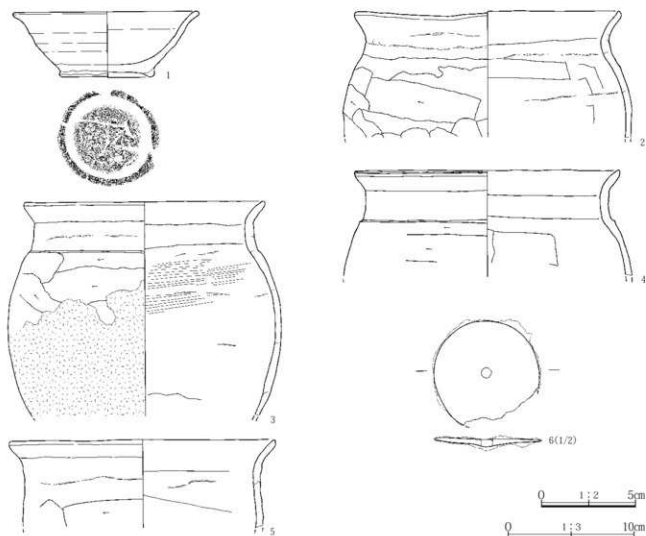
0 1:30 1m

第18図 4号竪穴住居

4号住居

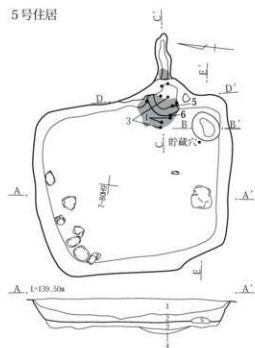


5号住居

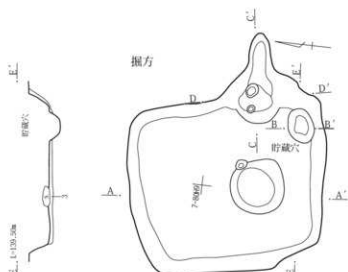


第19図 4号・5号竪穴住居の出土遺物

5号住居



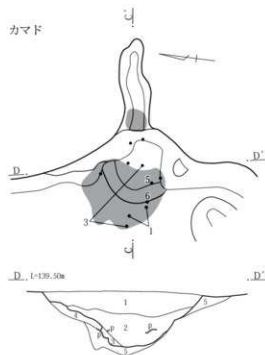
- 貯蔵穴
I-139.10m
B. B'
- 1 黒褐色火山灰土。(1・2は貯蔵穴埋土)
 - 2 風化火山灰土ブロックを含む黒褐色火山灰土。



- 掘方
- 1 風化火山灰土のブロックを含む黒褐色火山灰土。白色軽石(As-C)を少量含む。(1・2は竪穴住居埋土)
 - 2 風化火山灰土のブロックを含む黒褐色火山灰土。
 - 3 火山灰土ブロックを含む褐色風化火山灰土。(3・4は掘方埋土)
 - 4 風化火山灰土ブロックを含む暗褐色火山灰土。

0 1:60 2m

カマド



カマド掘方

- 1 黒褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックまじりで白色軽石を含む。(1・2・3はカマド埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックまじり。
- 3 黒褐色火山灰土。基質に焼土がまじり、径10～20mmの焼土ブロックを含む。
- 4 褐色火山灰土。(4・5はカマド掘方埋土)
- 5 褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックまじり。

0 1:30 1m

第20図 5号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物

m、面積6.13㎡である。

埋土 成層した風化火山灰土のブロックを含む黒褐色火山灰土からなり、As-Cの軽石を少量含む。埋土の堆積状況は塊状を呈し特徴に乏しい。

床面 褐色火山灰土を層厚7cmほど貼って床面を構築している。床面の直上には直径14～36cmの安山岩垂角礫が8点出土し、その内の7点は北壁際に集中している。

掘方 V層の風化火山灰土を平坦に掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.07～0.11mである。竪穴住居の中央寄りに長径94cm、短径88cm、深さ10cmの歪んだ楕円形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、平坦な使用面は褐色風化火山灰土を底部に貼っている。煙道は燃焼部奥壁から56°の勾配で立ち上がる。燃焼部から煙道の底面や壁面は薄い赤褐色焼土帯を形成している。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土まじりの黒褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部の使用面には赤褐色焼土帯が残されている。燃焼部の使用面には、ほぼ完形の須恵器の椀(1)と土師器の裏(3・5)の破片が出土した。カマドの袖はV層の黄灰色風化火山灰土を削りだして構築しているが殆どが失われている。カマド掘方の、燃焼部中央からは直径10～19cm、深さ9cmの小ピットが2基検出された。燃焼部の奥にある大きい方のピットは位置からみてカマド支脚の構築材が埋め込まれたピットである可能性が考えられる。

カマドの長さは58cm、焚口の幅51cmである。煙道は残存する部分の幅が21cm、長さ73cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁際に位置する。歪んだ円形を呈し長径48cm、短径41cm、深さ18cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 カマド埋土から土師器の裏(2・4)の破片が、カマド焚口の手前の床面から鉄製紡錘車(6)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

6号竪穴住居(第21・22・23図、PL. 8-8～9-8・38、186・187頁)

グリッド 7-80区I・J-7・8

主軸方位 N87°E

周辺の遺構 4号竪穴住居に主軸方位が平行で2mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.85m、短径は3.77m、床面までの深さ0.41m、掘方までの深さ0.47m、面積12.01㎡である。

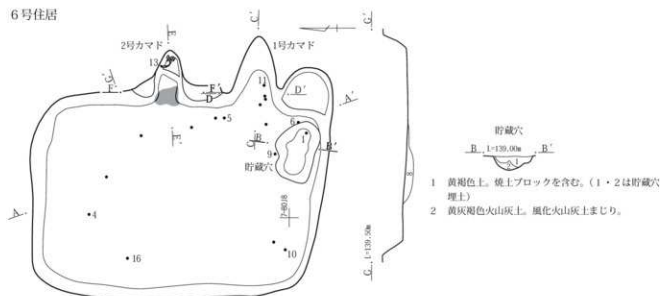
埋土 竪穴住居の埋土は南北方向に不連続な二つの埋土から構成される。これらは竪穴北半部を埋める埋土上半部を構成する黒褐色火山灰土の互層と竪穴の南半部を埋める黒褐色～黄褐色火山灰土が成層した埋土下半部であり、埋土にはAs-CとHr-FAの軽石を含む。地層断面は竪穴の南壁側が先行して埋没したと推定される堆積状態を示す。

床面 黒褐色風化火山灰土を層厚6cmほど貼って、やや凹凸のある床面を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.02～0.06mである。西壁周辺では、長径3.52m、短径1.09m、深さ0.19mの方形の浅い窪みを検出した。また北側と中央には歪んだ円形の1号・2号土坑を検出した。1号土坑は長径0.98m、短径0.95m、深さ0.24mで黒褐～黄褐色火山灰土の互層を埋土とする。2号土坑は長径1.10m、短径1.05m、深さ0.30mで黒褐色火山灰土の互層を埋土とする。2号土坑は北側と南側の両方の埋土に覆われている。

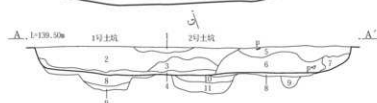
カマド 東壁の中央南寄りに位置する旧カマドを1号カマド、東壁の中央北寄りに位置する新カマドを2号カマドと呼ぶ。両カマドとも燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、黒褐色風化火山灰土を底部に貼っている。1号カマドは燃焼部壁が29°の勾配で立ち上がり上半部は失われている。燃焼部壁の底面には薄い赤褐色焼土ブロックが点在し、須恵器の椀(11)がカマド埋土から出土している。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土まじりの黒褐色火山灰土の互層からなり、カマドのほとんどは失われている。2号カマドは燃焼部から61°の勾配で立ち上がり煙道に続いている。残存する燃焼部壁や底面には明確な赤褐色焼土帯が形成されている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土まじりの黒褐色火山灰土の互層からなり、カマドのほとんどは失われており、煙道部の境界から土師器の裏(13)の破片が出土した。1号

6号住居



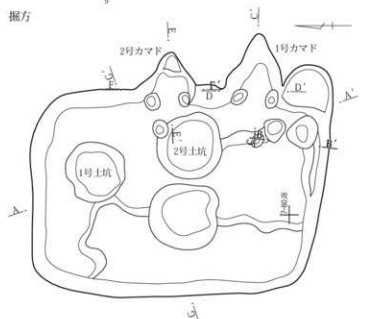
貯蔵穴

- 1 黄褐色土。焼土ブロックを含む。(1・2は貯蔵穴埋土)
- 2 黄灰褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。



- 1 褐色砂質土。(1～7は竪穴住居埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。
- 3 黄褐色火山灰土。径30mmの灰色軽石(Hr-FA)が点在。
- 4 褐色火山灰土。
- 5 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。
- 6 黄灰褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックを多く含む、少量の灰色軽石を含む。
- 7 黄褐色火山灰土。
- 8 黒褐色風化火山灰土、焼土粒まじり火山灰土。(8～11は掘方埋土)
- 9 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 10 黒褐色火山灰土。
- 11 暗褐色火山灰土。

掘方



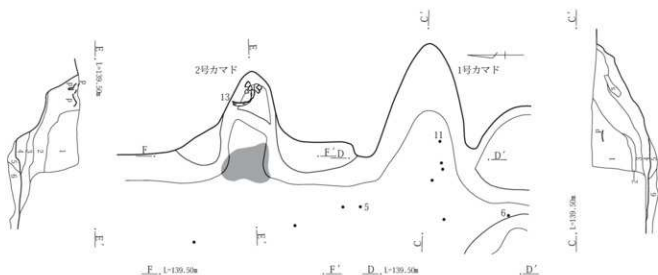
第21図 6号竪穴住居(1)

カマド掘方の、燃焼部両脇からは長径30～32cm、短径22～24cm、深さ2～4cmの小ピットが2基検出された。これらはカマド燃焼部壁の基礎をなす構築材が埋め込まれたピットである可能性が考えられる。同じように2号カマド掘方の、燃焼部両脇からは直径22～24cm、深さ1cmのピット状の窪みが2基検出された。これらもカマドの位置から考えて燃焼部壁の構築材が埋め込まれたピットである可能性がある。

1号カマドの長さは123cm、焚口の幅59cmである。煙道の可能性がある窪みは長さ56cm+である。

2号カマドの長さは56cm、焚口の幅29cmである。煙道は残存部分の幅が40cm、長さ34cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南壁際に位置する。歪んだ方形を呈し主軸方位は、N71°W、長径98cm、短径64cm、深さ22cmである。貯蔵穴底の直上から土師器の杯(1)が出土した。

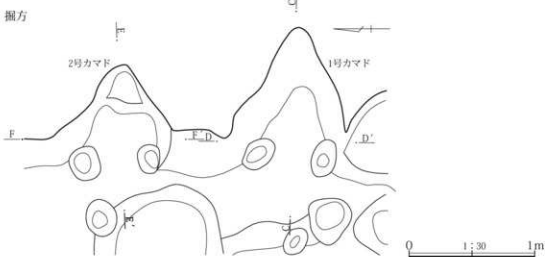


2号カマド E・F断面

- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1～4はカマド埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土上のブロックを含む。
- 3 黄褐色風化火山灰土ブロックを含む火山灰土。
- 4 赤褐色焼土ブロックを多く含む火山灰土。
- 5 赤褐色焼土帯。母材は黄褐色風化火山灰土。(5・6はカマド掘方埋土)
- 6 黒褐色火山灰土。風化火山灰土上ブロックまじり。

1号カマド C・D断面

- 1 褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1～4はカマド埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。焼土や風化火山灰土上のブロックを含む。
- 3 黄褐色火山灰土。径10～50mmの風化火山灰土上ブロックや灰色軽石を含む。
- 4 赤褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。
- 5 赤褐色焼土帯。母材は赤褐色風化火山灰土。(5・6は掘方埋土)
- 6 黒褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。



第22図 6号竪穴住居(2)

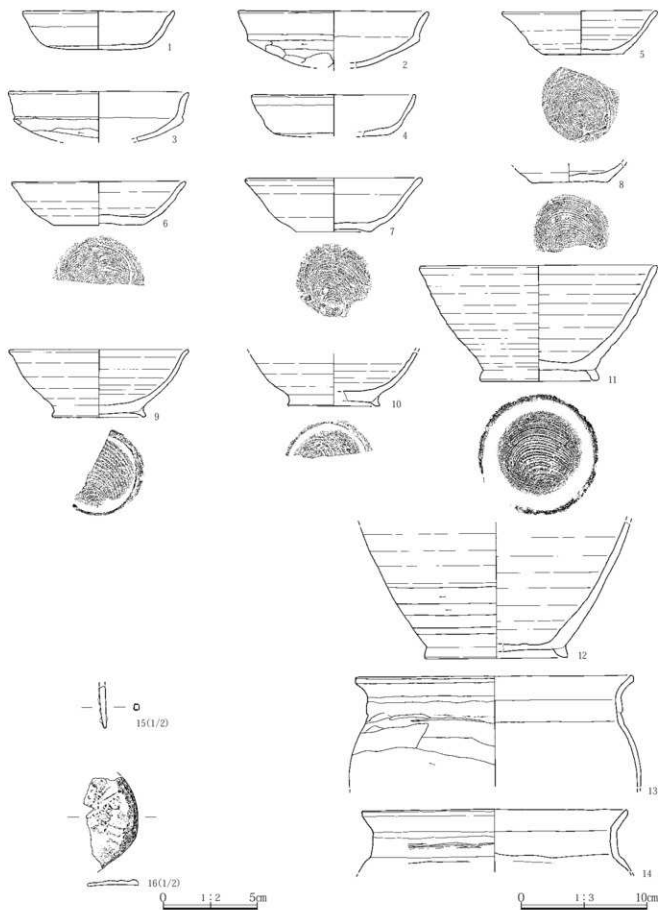
柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(5・10)や1号カマドの周辺から貯蔵穴縁にかけての床面付近から須恵器の杯(6)、掘方埋土からは床面の遺物よりも年代の古い土師器の杯

(2・3)が出土した。埋土からは鉄釘(15)が、床面からは銅製品(16)が出土した。

時代 平安時代9世紀中頃。

7号竪穴住居(第24・25図、PL.10-1～6・39、187頁)
グリッド 7-80区F・G-5・6



第23図 6号竪穴住居の出土遺物

主軸方位 N64°E

周辺の遺構 17号竪穴住居に主軸方位が平行で8mの距離にある。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.38m、短径は3.89m、床面までの深さ0.61m、掘方までの深さ0.62m、面積11.27㎡である。

埋土 黄褐色火山灰土の互層からなりAs-CやHr-FAの軽石を含む。埋土は緩やかに成層しながら竪穴を埋積した堆積構造が顕著である。

床面 V層の風化火山灰土を削りだしてほぼ平坦な床面を構築し、部分的に層厚1～2cmの暗灰色火山灰土を薄く貼っている。

掘方 カマドの周辺が掘り込まれているが、床面には掘方が見られない。

カマド 北東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は北東壁の手前から奥にV層を削りだして壁の内側に構築し、燃焼部の底や袖部分は黄灰色火山灰土を貼っている。両袖は良く保存されており、燃焼部を囲んで逆U字形の形状を呈する。燃焼部壁面や底の一部は焼土化が著しく、赤橙色焼土帯を形成し、燃焼部底の使用面には灰の薄層を検出した。燃焼部壁はほぼ直角に立ち上がるが煙道は失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む黄褐色火山灰土と赤褐色焼土ブロックを多く含む火山灰土からなる。使用面に接した埋土下底の焼土化が著しいことから燃焼部の天井部がブロックで滑落して堆積したものと考えられる。カマド両袖は残存状態が極めて良く、V層の風化火山灰土を細く削りだして基礎とし、暗褐色火山灰土を内側と外側に厚く貼って構築している。カマドの掘方の燃焼部中央からはピットを検出した。ピットの長径は38cm、短径29cm、深さ11cmである。ピットは燃焼部内の位置から推定して支脚に利用された石材が埋め込まれたピットの可能性がある。

カマドの幅は106cm、長さは108cm、焚口の幅35cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、東壁際に位置する。歪んだ円形を呈し、長径55cm、短径44cm、深さ55cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から土師器の高杯(2)の破片が、床面やカマド使用面から土師器の甕(3)の破片8点が出土して接合

した。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

8号竪穴住居(第26・27・28図、PL.10-7～11-4・39、187・188頁)

グリッド 7-80区J・K-10-11

主軸方位 N81°W

周辺の遺構 1号道とは竪穴住居の主軸は一致しない。1号道との距離は1mである。1号井戸は5mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.80m、短径は3.82m、床面までの深さ0.54m、掘方までの深さ0.58～0.94m、面積11.02㎡である。

埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土の互層からなり、南壁側から緩く傾いて成層し竪穴を埋めている。黒褐色火山灰土はAs-CやHr-FAの軽石を含み、下位ほど黄褐色火山灰土が優勢である。

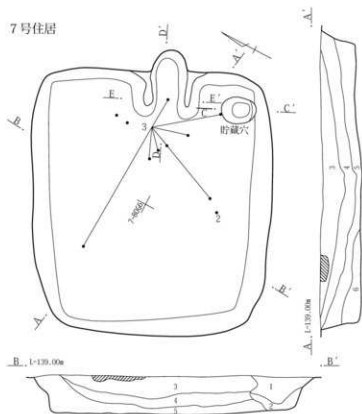
床面 褐色風化火山灰土と黒色土ブロックまじりの褐色火山灰土を層厚4cmほど貼って、ほぼ平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.04～0.40mである。南壁周辺では、全体が不定形の浅い窪みである。また北東壁際と中央、西壁付近には歪んだ円形の1号土坑、方形の2号土坑、歪んだ方形の3号土坑をそれぞれ検出した。1号土坑は長径0.76m、短径0.66m、深さ0.16m。2号土坑は長径1.39m、短径0.95m、深さ0.29m。3号土坑は長径1.16m、短径0.80m、深さ0.24mで、これらは褐色火山灰土を埋土とする。

周溝 カマドの周囲と貯蔵穴から南壁を除いて壁際を周回する。最大の上幅は31cm、最小の底幅は18cm、深さ9cmである。似た規模の周溝を持つ竪穴住居は、1号竪穴住居である。

カマド 東壁のほぼ中央南寄りの位置にある。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、底部は黒褐色細粒火山灰土を貼っている。燃焼部壁は47°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁面及び使用面は破損が著しく、焚口に近い燃焼部の底面に焼土帯を一部残すのみである。カマド燃焼部を埋める埋

7号住居



- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を多く含む。(1～6は竪穴住居理上)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックを含む。
- 3 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を少量含む。
- 4 黄褐色砂質火山灰土。粗粒砂を含む褐色火山灰土からなる。
- 5 黄褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を含む。
- 6 黒褐色火山灰土。灰色軽石や風化火山灰土のブロックを含む。

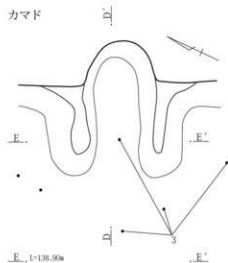
掘方



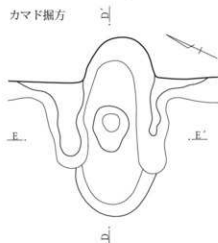
- 1 黄褐色土。風化火山灰土のブロックを含む。(1・2・3は貯蔵穴理上)
- 2 暗褐色土。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

0 1:60 2m

カマド



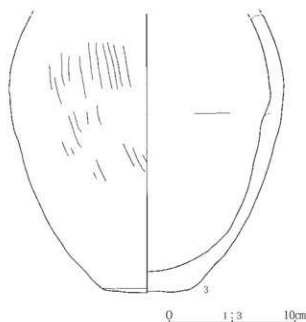
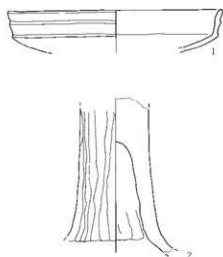
カマド掘方



- 1 黄褐色火山灰土。径10～100mmの風化火山灰土や径10mm大の焼土のブロックを含む。(1・2・3はカマド理上)
- 2 暗褐色火山灰土。風化火山灰土や焼土のブロックを含む。
- 3 赤褐色火山灰土。焼土ブロックまじり。
- 4 暗褐色火山灰土。焼土まじり。(4・5はカマド掘方理上)
- 5 黄褐色風化火山灰土のブロック上。(袖部の構築材)

0 1:30 1m

第24図 7号竪穴住居



第25図 7号竪穴住居の出土遺物

土は、焼土や風化火山灰土ブロックを含む明褐色火山灰土で成層しているが、焼土帯を伴う燃焼部天井部を構成するブロックなどは検出されない。カマド掘方の、燃焼部壁の両脇下からは長径34～37cm、短径26～28cm、深さ5～7cmの小ピットが検出された。これらはカマド燃焼部壁の構築材のピットである可能性がある。

カマドの長さは94cm、焚口の幅は78cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁隅に位置する。歪んだ方形を呈し、長径88cm、短径60cm、深さ29cmである。貯蔵穴底の7cm上から須恵器の椀(2)が出土した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(5・10)、掘方から椀(3)の破片が出土し、またカマド焚口の手前付近の埋土から鉄滓2点(21・22)が出土した。床面南東隅の壁際からは長径30cmの扁平な礫が出土しており、砥石の可能性がある。

時代 平安時代9世紀中頃。

9号竪穴住居(第29～32図、PL.11-5～12-3・39・40、188・189頁)

グリッド 7-80区L・M-12・13

主軸方位 N88°W

周辺の遺構 10号竪穴住居に1m以内の至近距離にあり、同時存在の可能性は少ないが、この時期の竪穴住居

の構造から同時存在の可能性は否定しない。1号～4号土坑は、3～6mの距離に位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は5.51m、短径は5.25m、床面までの深さ0.46m、掘方までの深さ0.48～0.54m、面積20.71㎡である。

埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土の互層からなり、緩く傾き成層して竪穴を埋めている。火山灰土はAs-CやHr-FAの軽石を含み、最下底と最上位は黄褐色火山灰土が優勢である。

床面 風化火山灰土のブロックを含む褐色火山灰土を層厚8cmほど貼って、ほぼ平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.02～0.08mである。南壁周辺では、不定形の深い歪んだ方形や円形の窪み群が検出された。また中央付近には歪んだ円形の1号土坑、円形の2号土坑、歪んだ円形の3号土坑をそれぞれ検出した。これらの土坑は褐色風化火山灰土と黒色土ブロックまじり火山灰土を埋土としており、下底に黒褐色火山灰土を貼っているのので人為的に埋められた可能性がある。

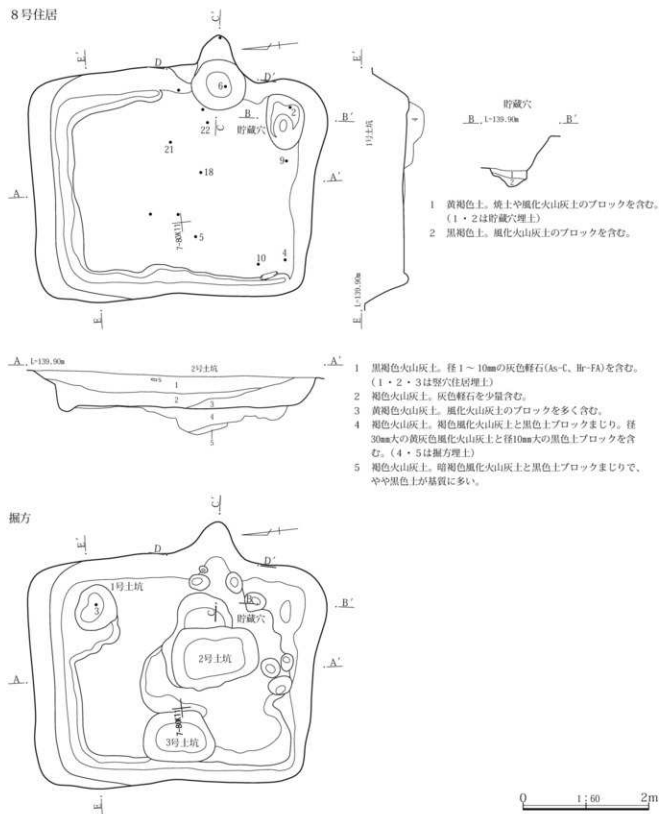
1号土坑は長径1.54m、短径1.04m、深さ0.26m。

2号土坑は長径0.94m、短径0.78m、深さ0.52m。

3号土坑は長径1.02m、短径0.84m、深さ0.45m。

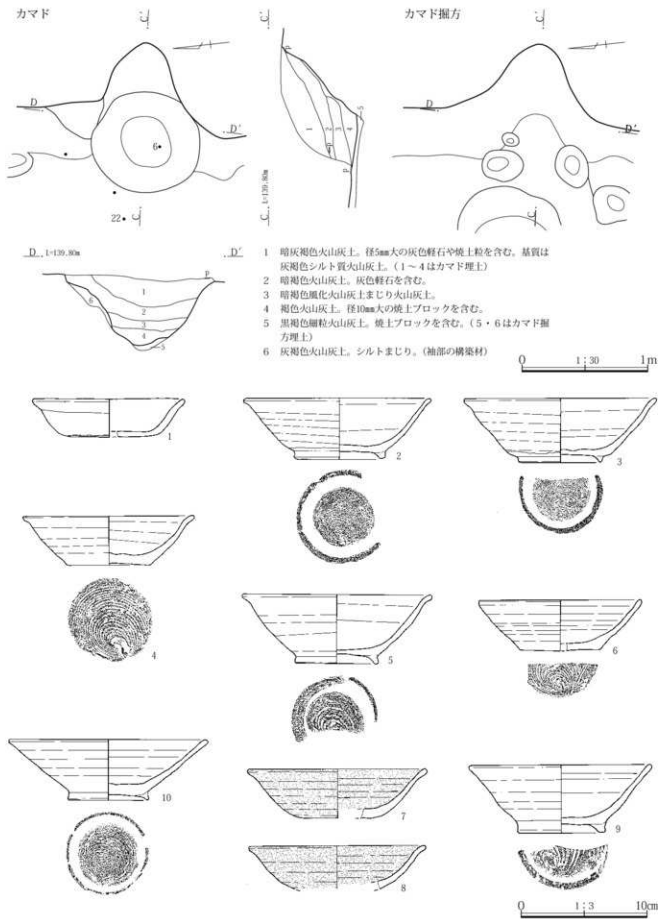
周溝 カマドの周囲と貯蔵穴から南壁を除いて壁際を周回する。最大の上幅は20cm、最小の底幅は9cm、深さ7

8号住居

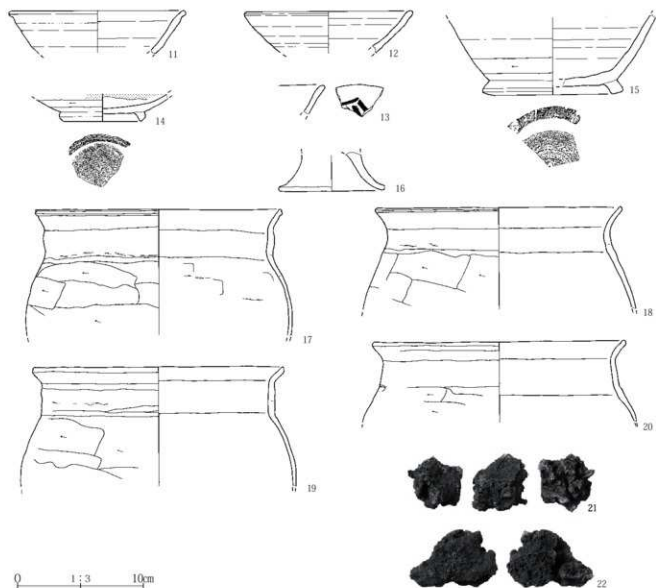


第26図 8号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物



第27図 8号竪穴住居と出土遺物



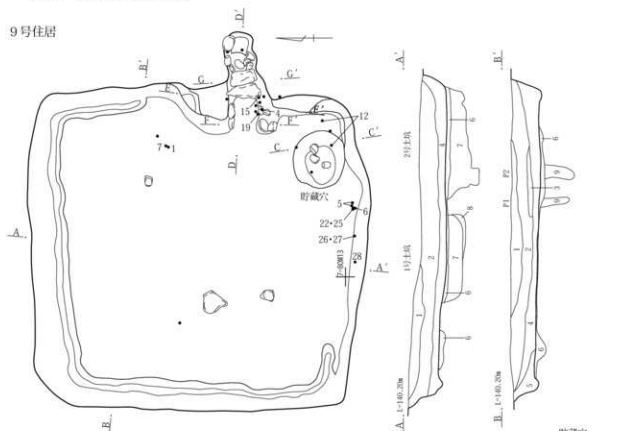
第28図 8号竪穴住居の出土遺物

cmである。似た規模の周溝を持つ竪穴住居は、1号・8号竪穴住居である。

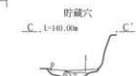
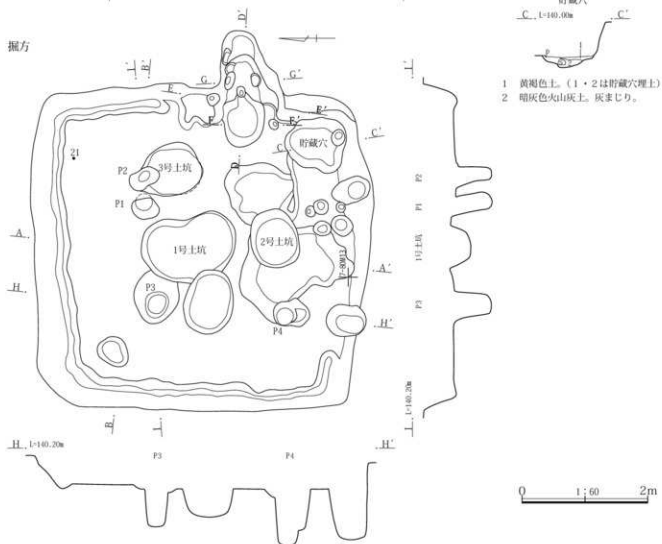
カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、燃焼部使用面は緩やかに18°の勾配で傾き、75°の勾配で立ち上がって煙道に続く。燃焼部の壁面は長径34～38cm大の垂円～垂角礫を並べて構築しており、壁面を構成する礫は22個に及ぶ。これらの礫は燃焼部壁面に晒された部分が強く焼土化して赤褐色を呈している。燃焼部から煙道に及ぶ燃焼部上部は、長径42～55cm、短径22～24cm、厚さ9～14cmの安山岩角礫が2点置かれ、燃焼部の天井壁を構築している。これらの角礫も燃焼部側が赤褐色に強く焼土化している。燃焼部の底は暗灰色シルト質細粒火

山灰土を貼って構築しているが、部分的に分布する赤褐色焼土帯は掘方下位のV層にまで達している。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む黄灰褐色火山灰土の互層からなる。燃焼部の天井部を構築していた2点の礫を残して大部分は消滅し、失われたものと考えられる。カマドの左袖はV層の風化火山灰土を削りだした部分を基礎として、シルトまじりの灰褐色火山灰土を厚く貼って構築しており、残存状態が良好である。カマド掘方の燃焼部壁の両脇からは小ピット列が検出されたが、これらは前述した壁面を構築していた礫の下底部に接した窪みである。また、燃焼部中央には長径18cm、短径14cm、深さ23cmのピットが検出された。これはカマド燃焼部の位置から考えて支脚の構築材が埋め込まれたピットの可能

9号住居



掘方

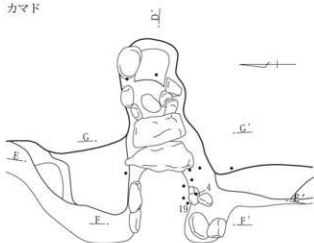


- 1 黄褐色土。(1・2は貯蔵穴埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。灰まじり。

0 1:60 2m

- 1 黄褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を少量含む。径50mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。(1～5は竪穴住居埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を多く含む。
- 3 灰褐色火山灰土。焼上り風化火山灰土上のブロックを含む。
- 4 黄褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を少量含む。径50mm大の風化火山灰土上ブロックを含む。
- 5 黒褐色火山灰土。
- 6 褐色火山灰土。風化火山灰土上のブロックを少量含む。(6・7・8は掘方埋土)
- 7 褐色風化火山灰土と黒色土ブロックまじり火山灰土。径10～30mmの黄灰色風化火山灰土上ブロックや径10mm大の黒色土ブロックを多く含む。
- 8 黒褐色火山灰土。土坑底に貼られている可能性がある。
- 9 黄褐色火山灰土。(P・P2埋土)

カマド



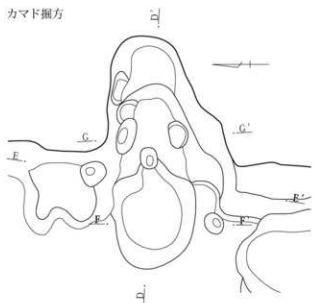
E., 1:140, 10m



D., 1:140, 10m

- 1 黄褐色火山灰土。径1径5mmの灰色軽石を含む。(1～5はカマド埋土)
- 2 灰褐色火山灰土。シルトまじり。
- 3 黄灰～灰褐色火山灰土。焼上りブロックを含む。
- 4 黄灰褐色火山灰土。焼上りブロックを含む。
- 5 暗灰色火山灰土。焼上りブロックを含む。
- 6 暗灰色シルト質細粒火山灰土。径5～10mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。(6・7はカマド掘方埋土)
- 7 灰褐色火山灰土。シルトまじりで、基質は風化火山灰土まじりの火山灰土。(袖部の構築材)

カマド掘方



G., 1:140, 10m



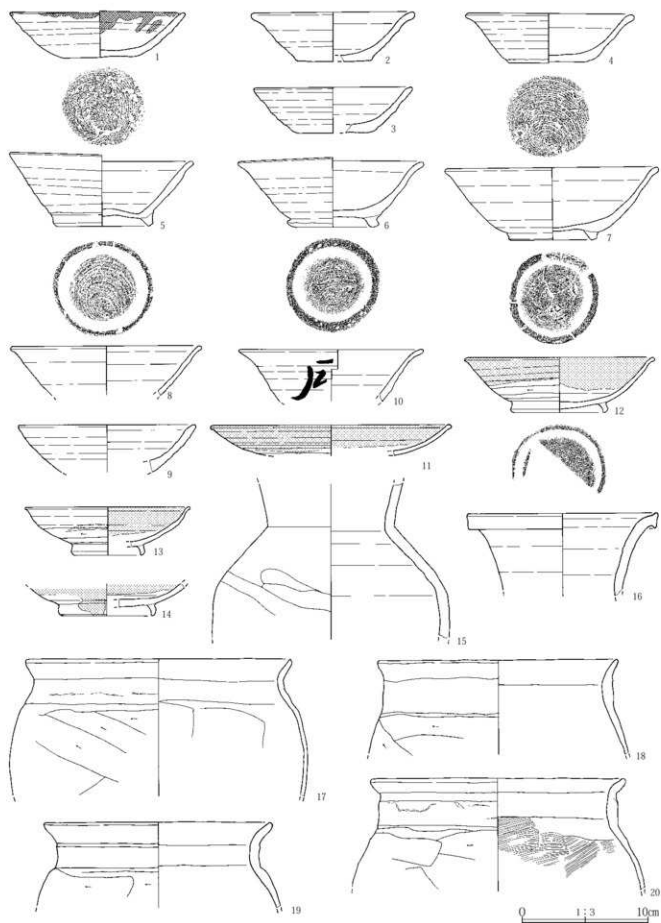
E., 1:130, 30m



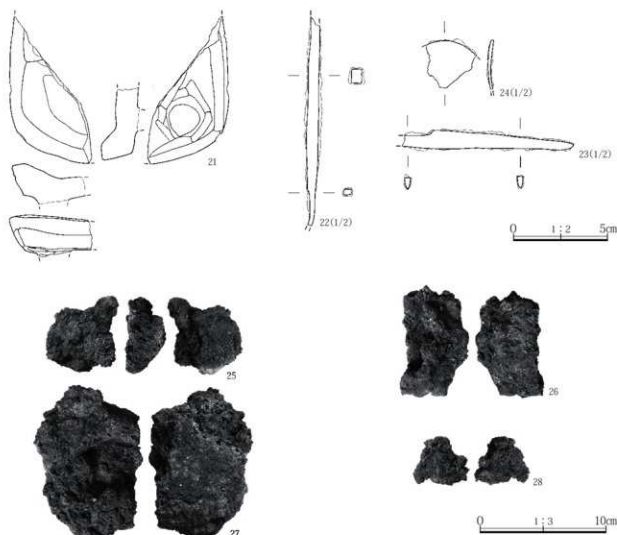
0 1:30 1m

第30図 9号竪穴住居(2)

第3章 調査された遺構と遺物



第31図 9号竪穴住居の出土遺物(1)



第32図 9号竪穴住居の出土遺物(2)

性がある。

カマドの幅は163cm、長さは131cm、焚口の幅41cmである。煙道は残存する部分の幅が45cm、長さ33cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南壁の南東隅寄りに位置する。歪んだ円形を呈し、長径92cm、短径80cm、深さ22cmである。貯蔵穴底直上から灰軸陶器の椀(12)の破片が出土し、貯蔵穴周辺の床面から出土した破片と接合している。また下底から直径18cmの円礫が3点出土している。

柱穴 床面では検出することができず、掘方の調査で3基の支柱穴と考えられるピット2・3・4を検出した。ピットは褐色風化火山灰土と黒色土ブロックまじり火山灰土を埋土としており、ピット2・3の柱間は2.06m、ピット3・4の柱間は2.12mである。ピット2の西寄りにはピット1が検出され、長径44cm、短径33cm、深さ42cmである。

ピット2は長径50cm、短径30cm、深さ46cm。

ピット3は長径46cm、短径37cm、深さ59cm。

ピット4は長径40cm、短径38cm、深さ70cm。

遺物 床面からは灯明の可能性のある須恵器の杯(1)や椀(7)、南壁際の埋土から須恵器の椀(5)が出土し、床面から16cm上の出土であるが竪穴が埋没する比較的初期に堆積した可能性が高い。カマドの埋土からは、須恵器の杯(4)、壺(15)の破片が、使用面からは土師器の甕(19)の破片が出土した。掘方からは須恵器の椀(9)、壺(16)や灰軸陶器の椀(14)の破片が出土し、須恵器の碗(21)の破片が出土していることが特筆される。また埋土からは刀子(23)や鉄製品(22)が、カマド埋土からは鉄製品(24)が、南壁際の埋土から鉄滓(25～28)4点が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

10号竪穴住居(第33・34図、PL.12-4～6・40、189頁)

グリッド 7-80区M-14

主軸方位 N88°W(南緑の参考値)

周辺の遺構 9号竪穴住居に1m以内の至近距離にあり、同時存在の可能性は少ないが、この時期の竪穴住居の構造から同時存在の可能性は否定しない。1号土坑は1m、2号～4号土坑は、5～7mの距離に位置する。
形状と規模 東西方向に長軸を有し長方形を呈するが、竪穴住居の北側は調査区外にある。長径は3.73m、短径は2.98m+、床面までの深さ0.58m、掘方までの深さ0.62～0.72m、検出された最大の面積は6.73㎡+である。

埋土 北壁の断面観察では、埋土は耕作土からなるI層とII層の層理面から掘り込まれている。埋土は下位より黒色火山灰土ブロックや軽石を含む暗褐色火山灰土の互層からなり、東西の壁側より埋没している。ほとんどの埋土にはAs-CやHr-FAの軽石を含む。

床面 風化火山灰土ブロックを含む暗灰色火山灰土を層

厚4cmほど貼って、平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.04～0.10mである。中央から南東部付近には長径2.56mの不定形の浅い窪みを検出した。

周溝 西壁の北寄りの壁際の一部を周回する。最大の上幅は25cm、最小の底幅は10cm、深さ4cmである。

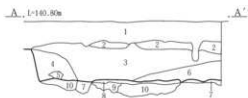
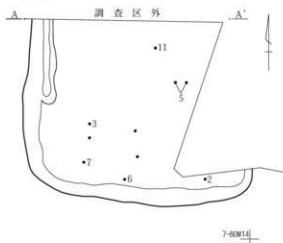
カマドと貯蔵穴 床面では検出されなかった。調査区外に存在するものと考えられる。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から完形の須恵器の耳皿(2)や須恵器の椀(5)、灰釉陶器の椀(7)、土師器の甕(11)の破片が出土した。また、埋土から須恵器の長頸壺(9)の破片が出土している。

時代 平安時代9世紀後半。

10号住居



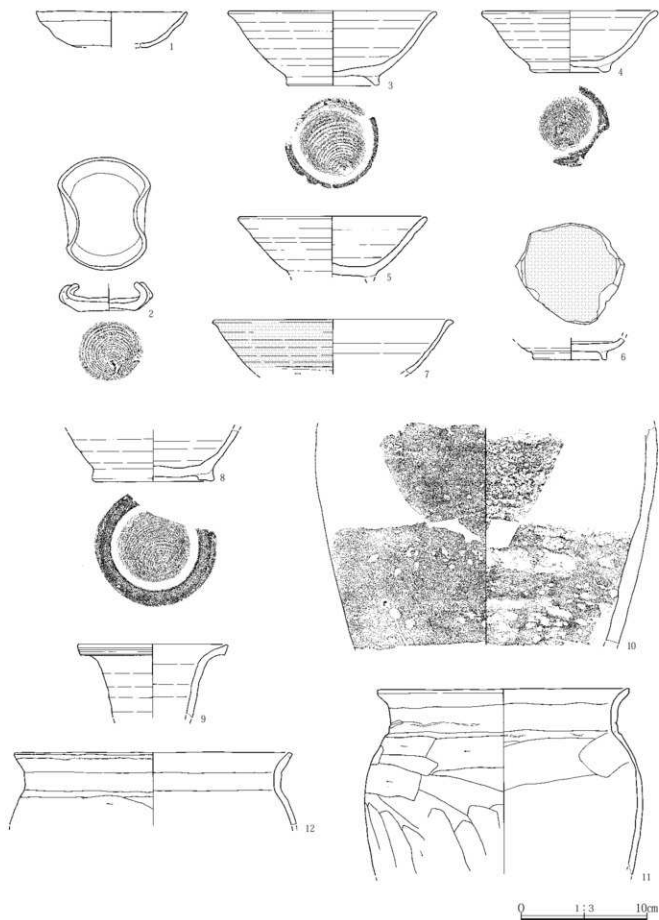
掘方



- 1 灰褐色土。(耕作土・表土)
- 2 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を少量含む。(2～6は竪穴住居埋土)
- 3 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石が点在する。径10mm大の風化火山灰土ブロックを含む。
- 4 黄褐色火山灰土。基底に径200mm大の黒色土ブロック5を含む。
- 5 黒褐色火山灰土。灰色軽石を含む。
- 6 暗褐色火山灰土。灰色軽石や黒色火山灰土ブロックを含む。
- 7 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。(7～10は掘方埋土)
- 8 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 9 風化火山灰土ブロックを含む暗褐色火山灰土。径20～50mmの黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。基質は暗褐色火山灰土。
- 10 風化火山灰土ブロックを含む暗褐色火山灰土。径50mmの黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。ブロックは角礫状を呈する。基質は暗褐色火山灰土。

0 1:60 2m

第33図 10号竪穴住居



第34図 10号竪穴住居の出土遺物

11号竪穴住居(第35・36図、PL. 12-7～13-3・40、189頁)

グリッド 7-80区J・K-5

主軸方位 N85°W

周辺の遺構 12号竪穴住居に主軸方位が近似し、3m以内の至近距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.40m、短径は4.01m、床面までの深さ0.27m、掘方までの深さ0.36～0.51m、面積13.53㎡である。

埋土 黒褐色火山灰土の互層からなり、南壁側から竪穴に向かって緩く傾いて成層している。火山灰土にはAs-CやHr-FAの軽石を含むが特徴に乏しい。

床面 風化火山灰土ブロックを含む暗灰色火山灰土を層厚4cmほど貼って、平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.09～0.24mである。中央から南壁付近に緩く傾きながら窪み、底面は平坦である。中央北寄りには長径68cmの不定形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土を底部に貼っている。燃焼部奥壁は66°の勾配で立ち上がり煙道に続いている。燃焼部壁や底面はブロック状の赤褐色焼土が検出される。カマド燃焼部を埋める埋土は、灰褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖のほとんどが失われている。カマド掘方の燃焼部中央からは直径31cm、深さ21cmのピットが1基検出された。ピットは位置から推定して支脚の基礎をなす構築材が埋め込まれたピットである可能性が考えられる。

カマドの長さは72cm、焚口の幅は42cmである。煙道は残存する部分の幅が19cm、長さ22cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁隅に位置する。歪んだ円形を呈し、長径65cm、短径55cm、深さ12cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 カマド手前の床面から須恵器の杯(1)が、北壁際の床面から須恵器の椀(3)、カマドの埋土から土師器の甕(5)の破片が出土している。

時代 平安時代9世紀中頃。

12号竪穴住居(第37・38図、PL. 13-4～14-1・40、190頁)

グリッド 7-80区K・L-5

主軸方位 N87°W

周辺の遺構 11号・19号竪穴住居に主軸方位が近似し、それぞれに3m以内の至近距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.66m、短径は3.12m、床面までの深さ0.40m、掘方までの深さ0.45～0.67m、面積8.23㎡である。

埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土の互層からなり、緩く傾いて成層し、すり鉢状に竪穴を埋めている。火山灰土はAs-CやHr-FAの軽石を含み、最下底と最上位は黒褐色火山灰土が優勢である。

床面 黄褐色風化火山灰土ブロックを多く含む火山灰土を層厚5cmほど貼って、平坦な床を構築している。

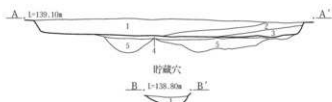
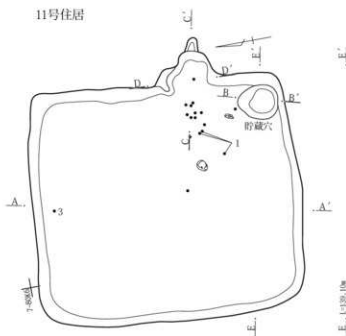
掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.05～0.27mである。南西壁際には不定形の1号土坑を検出した。土坑は長径1.70m、短径1.32m、深さ0.27mである。1号土坑の埋土は黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む暗灰色火山灰土で、人為的に埋積した可能性が高い。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、暗灰色火山灰土を貼っている。燃焼部奥壁は55°の勾配で立ち上がり煙道に続き、燃焼部壁や使用面には薄い赤褐色焼土帯や灰などが検出された。カマド燃焼部を埋める埋土は、暗褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖の大部分が失われている。燃焼部底の掘方からは、埋没した赤褐色焼土帯が検出されており燃焼部の底を貼り替えているものと考えられる。燃焼部中央からは直径20～28cm、深さ12～15cmのピットが2基検出された。奥のピットは位置から推定して、支脚の構築材が埋め込まれたピットである可能性がある。

カマドの長さは69cm、焚口の幅は48cmである。煙道は残存する部分の幅が13cm、長さ20cm+である。

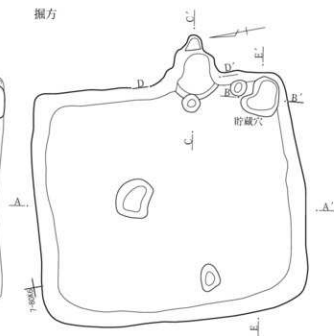
貯蔵穴 カマドの右側、南東壁隅に位置する。歪んだ方形を呈し、直径74cm、深さ39cmである。貯蔵穴底の直上から須恵器の椀(3)が、貯蔵穴底10cm上から須恵器の杯(2)の破片が出土し、貯蔵穴上の床面付近の高さからは土師器の台付き甕(4)や甕(5・6)の破片が出土した。

11号住居



1 暗灰褐色火山灰上。黄灰褐色火山灰土ブロックを含む。

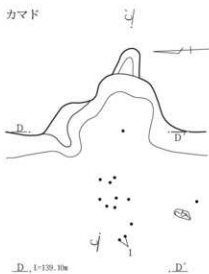
掘方



- 1 黒褐色火山灰上。径1~20mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 褐色火山灰上。径1~5mmの灰色軽石を少量含む。
- 3 黒褐色火山灰上。径1~5mmの灰色軽石を少量含む。
- 4 暗褐色火山灰上。風化火山灰土まじり。(4・5は掘方埋土)
- 5 風化火山灰土ブロックを含む黒褐色火山灰上。径10~30mmの黄灰色風化火山灰土ブロックや黒色火山灰土ブロックを含む。基質は暗灰色火山灰上。

0 1:60 2m

カマド

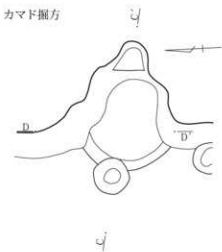


D., 1:139.10m



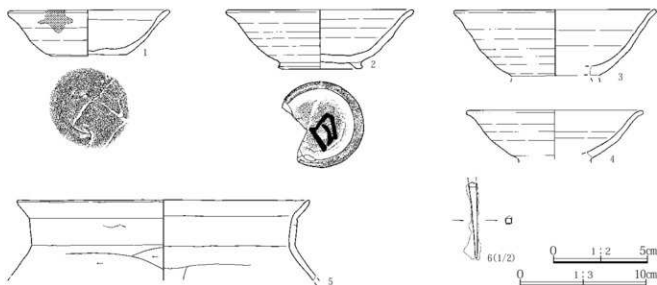
C., 1:139.10m

カマド掘方



- 1 灰褐色火山灰上。灰色軽石を含む。(1~4はカマド埋土)
- 2 灰黄褐色火山灰上。灰褐色シルト質火山灰土ブロックを含む。
- 3 褐色火山灰上。径10mm大の灰褐色火山灰土ブロックを含む。
- 4 灰褐色シルト質火山灰上。焼土まじり。径10mm大の焼土ブロックや炭化物を多く含む。
- 5 黒色細粒火山灰上。(5・6はカマド掘方埋土。5は灰層か?)
- 6 風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰上。

0 1:30 1m



第36図 11号竪穴住居の出土遺物

後者の遺物は貯蔵穴が埋没後に移動して床面と同じ高さに堆積した遺物である。貯蔵穴底27cm上から鉄製品(8)が出土した。

柱穴 中央西壁寄りに掘方からピット1を抽出した。ピット1は床面のほぼ中央部分に位置することや床面を構築する黄褐色風化火山灰土ブロックを多く含む火山灰土に被覆されている可能性が高いことから、竪穴住居の柱穴である可能性はないものと考えられる。

ピット1は長径36cm、短径27cm、深さ72cmで北東に傾いた形状を呈する。

遺物 貯蔵穴以外から時代を示す遺物の出土はなかった。

時代 平安時代9世紀中頃。

13号竪穴住居(第38・39図、PL. 14-2～4・41、190頁)

グリッド 7-80区N・O-6

主軸方位 N80°W

周辺の遺構 14号・18号・19号竪穴住居に主軸方位が近似し、7～9mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.51m、短径は2.67m、床面までの深さ0.19m、掘方までの深さ0.25～0.40m、面積7.66㎡である。

埋土 黄褐色火山灰土からなりAs-CやHr-FAの軽石を含むが特徴に乏しい。

床面 風化火山灰土ブロックを含む褐色火山灰土を壁際

で壁厚6cmほど貼って、平坦な床を構築している。

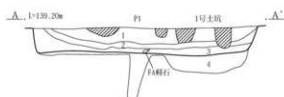
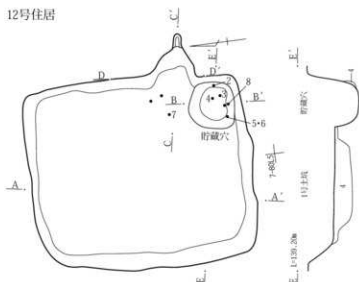
掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.06～0.21mである。南壁際には歪んだ方形の1号土坑を検出した。土坑は長径0.88m、短径0.72m、深さ0.21mである。1号土坑の埋土は黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む暗灰色火山灰土で、人為的に埋積した可能性がある。カマドの周囲と東壁から北壁、西壁の壁際は周溝のように掘方が溝状に周回する。最大の幅は42cm、最小の底幅は22cm、深さ6cmである。
カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は46°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁や底面の一部には薄い赤褐色焼土帯が残存するが、殆どは失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、シルト質火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖のほとんどが失われている。カマド掘方燃焼部中央からは直径26cm、深さ12cmのピットが1基検出された。ピットは位置から推定して、支脚の基礎をなす構築材が埋め込まれたピットの可能性がある。

カマドの長さは80cm、焚口の幅は43cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁側に位置する。歪んだ楕円形を呈し、長径81cm、短径49cm、深さ23cmである。

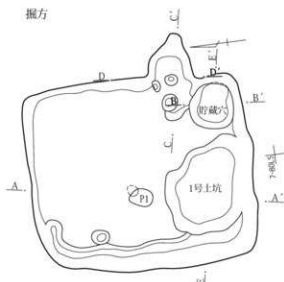
柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

12号住居



- 1 黒褐色土、径20mmの風化火山灰土や焼土、灰褐色シルト質火山灰土のブロックを含む。(1・2・3は貯蔵穴埋土)
- 2 黄灰褐色風化火山灰土のブロック上。径10～20mmの角礫状の風化火山灰土や黒色上のブロックからなる土壌で基質は褐色火山灰土上。炭化物や焼土粒を含む。
- 3 黄灰褐色風化火山灰土のブロック上。径10～20mmの角礫状の風化火山灰土ブロックからなる土壌で基質は褐色火山灰土上。径5mm大の焼土粒を含む。

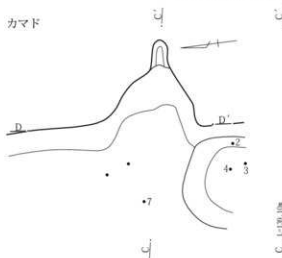
掘方



- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。風化火山灰土上のブロックを含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。灰色軽石を少量含み、風化火山灰土上のブロックを含む。
- 3 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。基底に60mmの灰白色軽石(Hr-FA)を含む。
- 4 黄褐色風化火山灰土ブロックを多く含む火山灰土。(掘方埋土)

0 1:60 2m

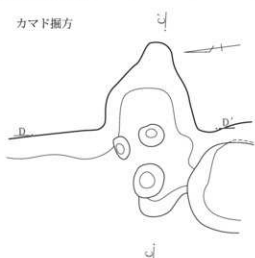
カマド



- 1 暗褐色火山灰土。径10～30mmの黄灰褐色風化火山灰土ブロックを含む。(1～4はカマド埋土)
- 2 黄褐色火山灰土上。風化火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗褐色火山灰土。灰褐色シルト質火山灰土上のブロックを含む。
- 4 黒褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。
- 5 焼土ブロックを含む黒褐色火山灰土。(5～8はカマド掘方埋土)
- 6 暗灰色細粒火山灰土。焼土ブロックまじりで炭化物を含む。
- 7 赤褐色焼土帯。母材は暗灰色火山灰土。
- 8 暗灰色火山灰土。(焼土帯下位の還元された土壌帯と考えられる火山灰土)

0 1:30 1m

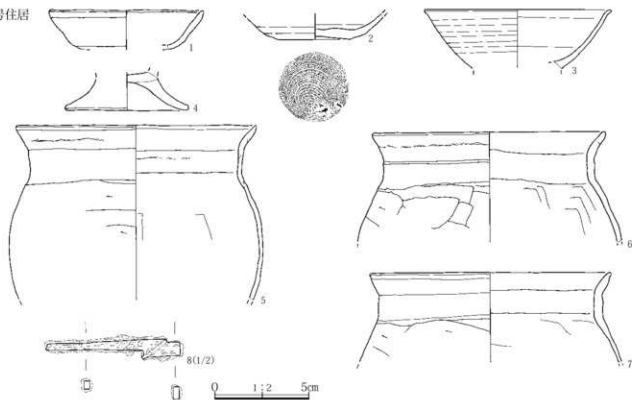
カマド掘方



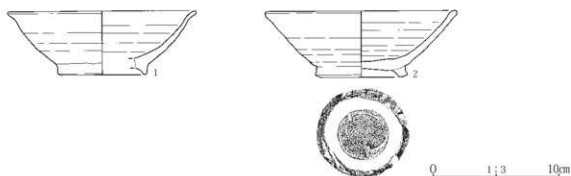
第37図 12号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物

12号住居



13号住居



第38図 12号・13号竪穴住居の出土遺物

遺物 カマド使用面付近から須恵器の椀(1)、床面付近から椀(2)の破片が出土した。

時代 出土遺物が少ないが平安時代9世紀中頃と推定される。

14号竪穴住居(第40・41図、PL. 14-5～15-4・41、190頁)
グリッド 7-80区P・Q-6・7

主軸方位 N84°W

周辺の遺構 13号竪穴住居に主軸方位が近似し、7mの距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.21m、短径は3.28m、床面までの深さ0.17m、掘方までの深さ0.25m、面積11.03㎡で

ある。

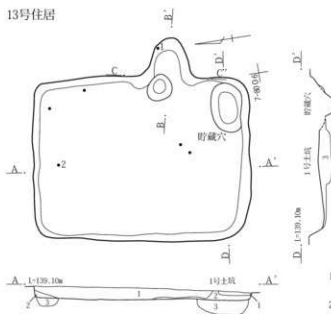
埋土 黒褐色火山灰土からなり、As-CやHr-FAの灰色軽石を含む。

床面 暗灰色火山灰土を層厚6cmほど貼って、平坦な床を構築している。

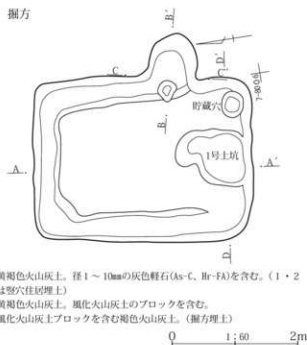
掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.08mである。カマドの周囲に不定形のピット状の窪みが検出されたが、全体に平坦である。

周溝 カマドと貯蔵穴の周囲を除いて壁際を周回する。掘方からは、西壁北半分の中央寄りに周溝が検出された。これは竪穴住居の建て替えによって埋められた周溝であると考えられる。周溝の最大の上幅は22cm、最小の底幅は10cm、深さ12cmである。

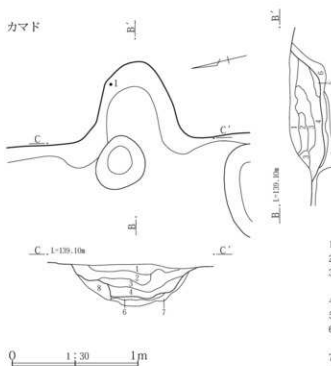
13号住居



掘方



カマド



カマド掘方



第39図 13号竪穴住居

カマド 東壁の中央南寄りに位置する旧カマドを1号カマド、東壁のほぼ中央に位置する新カマドを2号カマドと呼ぶ。両カマドとも燃焼部は東壁から奥を掘り込み壁の外側に構築しており、黄褐色火山灰土を底部に貼っている。1号カマドは底面に薄い赤橙色焼土ブロックを検出した。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土まじりの黄褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖のほとんどは失われている。燃焼部壁は51°の勾配で立ち上がるが煙

道は失われている。2号カマドは燃焼部壁に薄い赤橙色焼土帯がブロック状に残存している。燃焼部壁は47°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土まじりの黄褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖の主な部分は失われている。これらのカマドの検出状況から1号カマドを廃絶後に破壊、埋設し2号カマドを使用したものと考えられる。1号カマド掘方の、燃焼部左壁には長径24～36cm、短径19～

第3章 調査された遺構と遺物

20cm、深さ7～24cmの小ピットが2基検出された。これらはカマド燃焼部壁の構築材が埋め込まれたピットである可能性がある。同じように2号カマド掘方の、燃焼部中央からは直径32cm、深さ12cmの小ピットが1基検出された。これはカマドの位置から推定して支脚の基礎が埋め込まれたピットの可能性がある。

1号カマドの長さは58cm、焚口の幅36cmである。2号カマドの長さは76cm、焚口の幅64cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、南東壁隅に位置する。歪んだ楕円形を呈し、長径63cm、短径45cm、深さ26cmである。貯蔵穴底11cm上から須恵器の椀(4)の破片が出土した。貯蔵穴底の西壁には長径24cm、短径12cmの垂角礫1点が出土した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 貯蔵穴周辺の床面から須恵器の椀(3・5)の破片が出土し、カマドやカマド前の床面付近から須恵器の杯(2)や土師器の甕(8)の破片が出土した。また北壁や西壁の周溝の床面付近からは、土師器の杯(1)や台付甕(7)の破片が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

15号竪穴住居(第41・42図、PL.15-5～16-2・41、190・191頁)

グリッド 7-80区Q・R-12

主軸方位 N84°W

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。8mの距離に5号土坑が位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.82m、短径は3.02m、床面までの深さ0.35m、掘方までの深さ0.49m、面積8.13㎡である。

埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土が南壁側から緩く傾きながら成層して竪穴を埋めている。火山灰土はAs-CやHr-FAの軽石を含み、上位ほど黒褐色の火山灰土からなる。

床面 竪穴住居の北西隅側は暗灰色火山灰土を削りだして床とし、掘方は見られない。それ以外の南東側の床面は、暗褐色風化火山灰土ブロックを含む火山灰土を層厚

14cmほど貼って、平坦な床を構築している。

掘方 竪穴住居の南側は、V層の風化火山灰土を掘り込んで掘方を構築しており、床と掘方の間は0.14mである。竪穴住居の中央には不定形の浅いピット状の窪みが複数検出されている。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、暗灰色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は46°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。煙道に近い燃焼部壁の上部や底面の一部には赤褐色焼土帯が残存する。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む黄褐色火山灰土の互層からなり、燃焼部や袖のほとんどが失われている。燃焼部のカマド掘方からは直径18～26cm大、深さ3～4cmのピットが6基検出されている。ピットは燃焼部中央の位置などにも存在し、燃焼部壁の構築材のピットやそれ以外の機能を有するピットである可能性がある。

カマドの長さは98cm、焚口の幅は43cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、南東隅寄りに位置する。歪んだ方形を呈し、長径126cm、短径77cm、深さ29cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 カマド使用面付近から土師器の杯(1)や甕(8・9)、須恵器の皿(2)が出土し、床面からは須恵器の椀(5)の破片や床面付近から須恵器の椀(4・6)の破片が出土した。

時代 平安時代9世紀中頃。

16号竪穴住居(第43図、PL.16-3～8・41、191頁)

グリッド 8-71区A・B-12・13

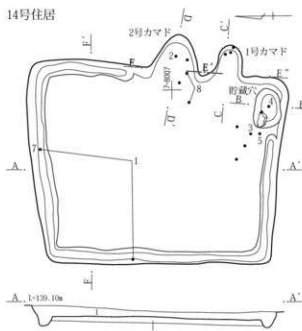
主軸方位 N66°W

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、歪んだ正方形を呈する竪穴住居である。長径は3.22m、短径は3.02m、床面までの深さ0.34m、面積7.17㎡である。

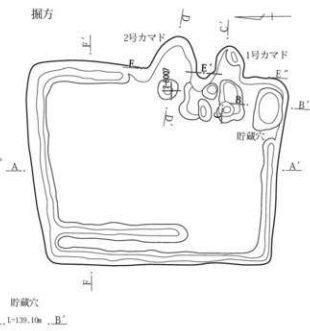
埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土が壁側から緩く傾きながら成層してすり鉢状に竪穴を埋めている。火山灰土はAs-CやHr-FAの軽石を含み、上位ほど黒褐色の火山灰土からなる。

14号住居



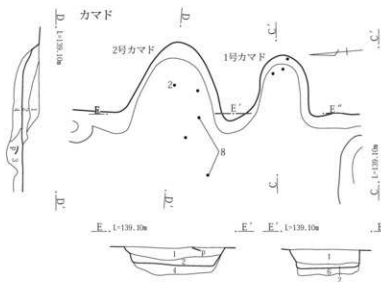
- 1 黒褐色火山灰土。径1～20mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(竪穴住居埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックまじり。(掘方埋土)

掘方

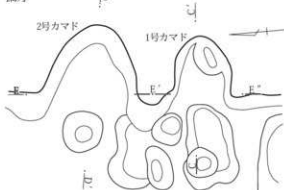


- 1 褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(貯蔵穴埋土)

0 1:60 2m



掘方



1号カマド C・E断面

- 1 黄褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)や焼土粒を含む。(1・2はカマド埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。径10mmの焼土粒を含む。
- 3 赤褐色焼土帯。母材は黄褐色火山灰土6。(3～7はカマド掘方埋土)
- 4 黒褐色火山灰土。焼土粒を含む。
- 5 風化火山灰土ブロックを含む褐色シルト質火山灰土。
- 6 黄褐色火山灰土。焼土粒を含む。
- 7 風化火山灰土ブロックを含む褐色火山灰土。

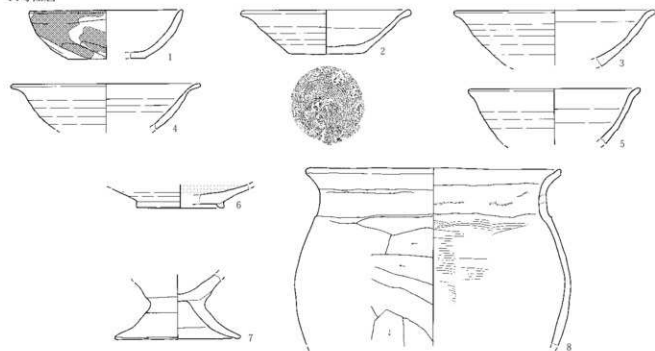
2号カマド D・E断面

- 1 黄灰褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)や焼土粒、灰褐色シルト質火山灰土ブロックを含む。(1・2はカマド埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックや焼土ブロックまじり。(3・4はカマド掘方埋土)
- 4 風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土。

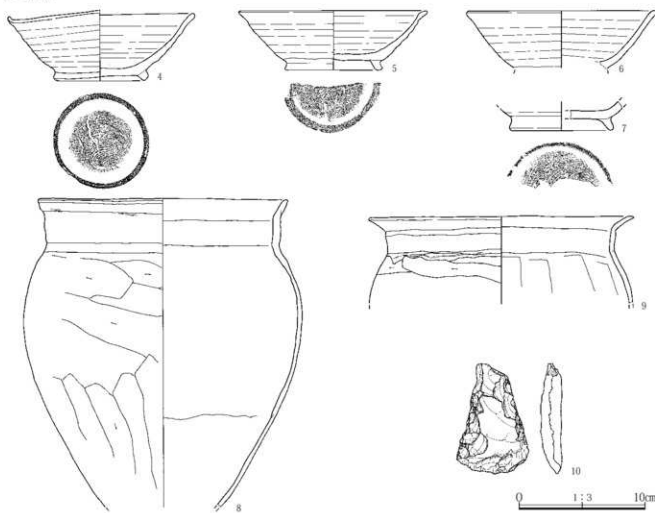
0 1:30 1m

第40図 14号竪穴住居

14号住居

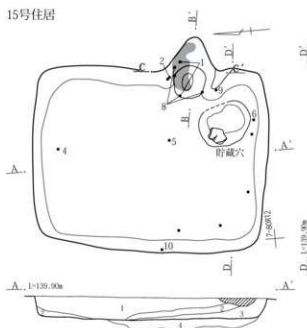


15号住居

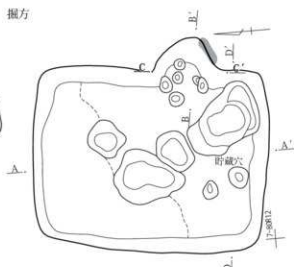


第41図 14号・15号竪穴住居の出土遺物

15号住居

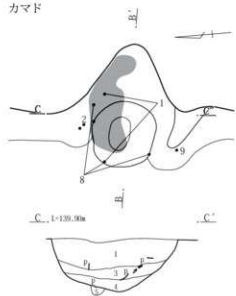


掘方

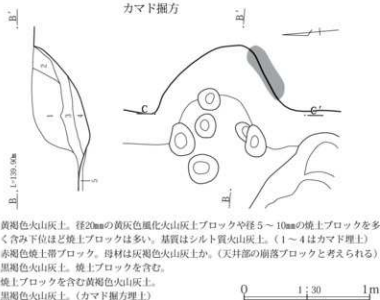


- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Hr-FA)を含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- 3 黄褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- 4 暗褐色風化火山灰土ブロックを含む火山灰土。(掘方埋土)

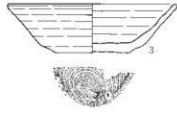
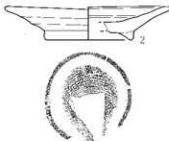
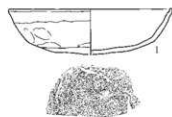
カマド



カマド掘方



- 1 黄褐色火山灰土。径20mmの黄灰色風化火山灰土ブロックや径5～10mmの焼土ブロックを多く含む下位ほど焼土ブロックは多い。基質はシルト質火山灰土。(1～4はカマド埋土)
- 2 赤褐色焼土帯ブロック。母材は灰褐色火山灰土か。(天井部の崩落ブロックと考えられる)
- 3 黒褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。
- 4 焼土ブロックを含む黄褐色火山灰土。
- 5 黒褐色火山灰土。(カマド掘方埋土)

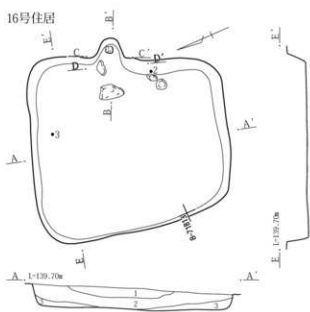


0 1:3 10cm

第42図 15号竪穴住居と出土遺物

第3章 調査された遺構と遺物

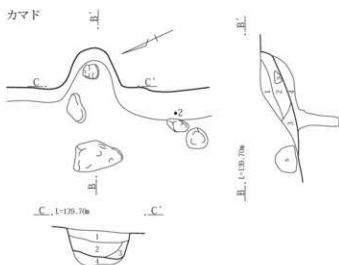
16号住居



- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石を少量含む。
- 3 黄褐色火山灰土。

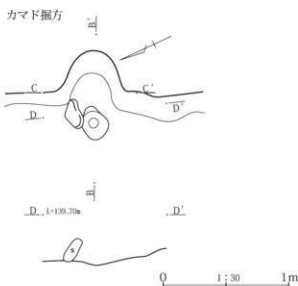
0 1:60 2m

カマド

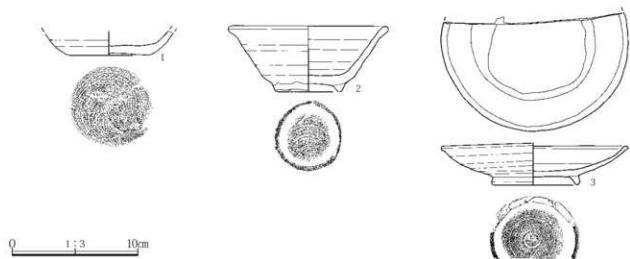


- 1 暗褐色火山灰土。灰色軽石を含む。(1・2・3はカマド埋土)
- 2 暗赤褐色火山灰土。径50～150mmの赤褐色焼土ブロックを多く含む。
- 3 黒褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックや焼土粒、炭化物などを含む。
- 4 暗褐色火山灰土。(カマド掘方埋土)

カマド掘方



0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第43図 16号竪穴住居と出土遺物

床面 IV～V層の暗灰褐色火山灰土を掘り込み、床をほぼ平坦に削りだして構築しており、貼床等は見られない。**カマドと貯蔵穴** 東壁の中央北寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、底部に暗灰色火山灰土を貼っている。燃焼部の使用面は緩く20°の勾配で傾斜し、68°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部左壁の一部にはブロック状に赤褐色焼土帯が残存する。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を多く含む暗赤褐色火山灰土からなり、天井部分の燃焼部が崩落して堆積したものと考えられる。カマドの禁口手前の床面からは長径37cm、短径24cmの垂角礫が出土しており、出土位置や形状からカマドの天井架構材の可能性がある。また、燃焼部左壁のカマド掘方からは直径22cm大の垂角礫が立った状態で検出された。また燃焼部中央からは直径23cm、深さ34cmのビットが検出された。これらは前者が燃焼部壁の構築材である可能性が高く、後者は支脚の構築材が埋め込まれたビットの可能性が高い。しかし後者のビットは構築材の基礎にしてはあまりに深すぎるため、地鎮などの目的で支脚の下に掘られたビットの可能性が高い。

カマドの長さは44cm、焚口の幅は35cmである。

なお、貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の皿(3)や床面から14cm上の埋土から須恵器の椀(2)、埋土から須恵器の杯(1)が出土した。

時代 出土遺物が少ないが平安時代10世紀前半と推定される。

17号竪穴住居(第44～47図、PL. 17-1～8・41、191頁)

グリッド 7-80区C・D・E-4・5

主軸方位 N65°E

周辺の遺構 7号竪穴住居に主軸方位が平行で8mの距離にある。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は5.89m、短径は5.49m、床面までの深さ0.70m、面積24.84㎡であり、調査区で最大規模の竪穴住居である。

埋土 黒褐色～黄褐色火山灰土が壁側から緩く傾きなが

ら成層し、すり鉢状に竪穴を埋めている。埋土の上部は黒褐色火山灰土互層からなりAs-CやHr-Faの軽石を多く含む。埋土の下部は黄褐色火山灰土の互層からなり、壁際から竪穴の中央に向かって傾いて堆積している。このような埋土の層相変化は、竪穴の埋積当初に起こった竪穴周囲に存在した黄褐色土の崩落、竪穴中央をすり鉢状に埋めていった黒褐色火山灰土の堆積に至る竪穴の埋没過程を示している。また、上位の埋土ほど軽石を多く含むことは、当時の地表面を構成する土壌の流入が竪穴の埋積期後半に顕著であったことを示唆する。なお、竪穴の埋積期当初に起きた黄褐色土の堆積は、南東壁側を除いた3壁面で顕著であることから、貯蔵穴や壁側のビットなどが存在した竪穴住居の南東壁付近には、崩落土の起源となる周溝帯の盛土などが比較的少なかったことが類推される。この理由としては、南東壁際の床面から検出されたビット1の位置などと併せて周溝帯の非対称性を考えると、この付近に竪穴住居の出入口があった可能性などが考えられる。

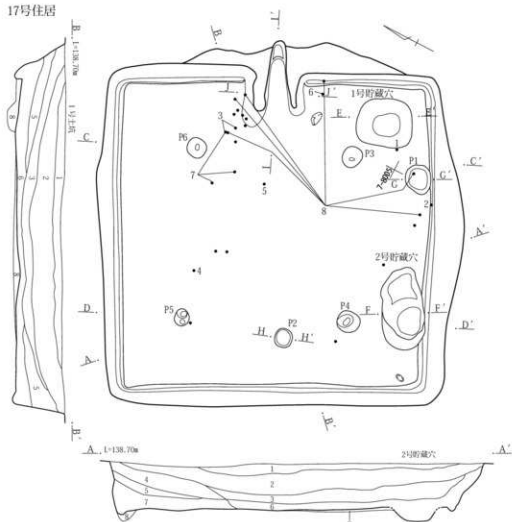
床面 V層の風化火山灰土を掘り込み、ほぼ平坦な床を削りだしているが、部分的に暗褐色火山灰土を層厚5cm程度貼って床面を構築している。

掘方 竪穴住居の南西、2号貯蔵穴周辺に掘方が検出されたが不定形で不連続である。床と掘方の間は最大で5cm程度で、面的な分布は示さず、削りだした床面の凹凸を埋めている。

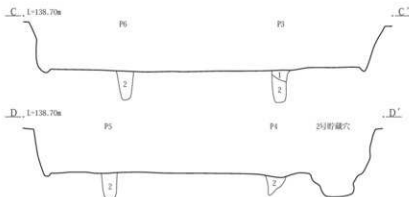
周溝 カマドの周囲を除いて壁際を周回する。周溝の最大の上幅は13cm、最小の底幅は6cm、深さ6cmである。

カマド 北東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前から奥を掘り込んで壁から内側に構築し、暗灰色シルト質火山灰土を貼っている。残存状態が良好な袖、燃焼部及び煙道の一部が検出された。燃焼部壁は削りだした黄褐色火山灰土を基礎にして、厚く暗灰褐色シルト質火山灰土を貼って構築されている。燃焼部壁面は、赤褐色を呈する焼土帯が顕著であり最大で12cmに達する。焼土帯は削りだした火山灰土の境界付近まで達しているが、貼られた火山灰土のみが焼土化しており、焼土化の程度は燃焼部の温度条件以外に土壌の含有物や混和材の差による要因が推定される。燃焼部の底は、部分的に赤褐色焼土ブロックが検出され、炭化物や灰の薄層が検出された。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土ブロックと

17号住居



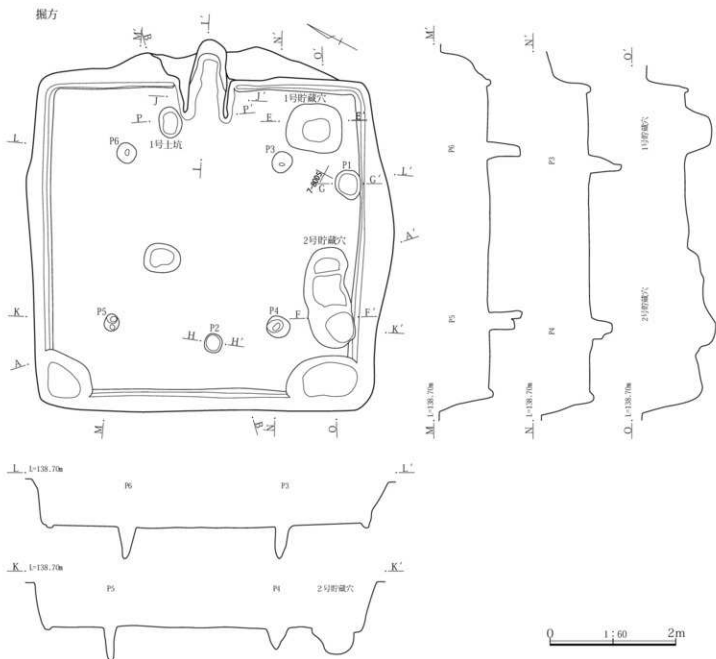
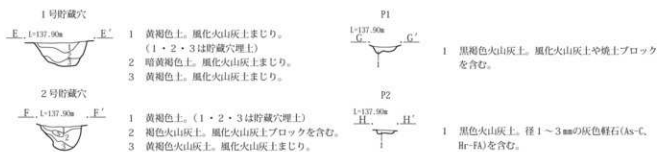
- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C、Bt-FA)を含む。(1～7は惣穴住居埋土)</p> <p>2 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。</p> <p>3 黒褐色火山灰土。灰色軽石を含み、径20mm大の風化火山灰土ブロックを含む。</p> <p>4 黄灰褐色火山灰土。灰色軽石を含み、風化火山灰土ブロックを多く含む。</p> | <p>5 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。</p> <p>6 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。</p> <p>7 黄褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。</p> <p>8 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。(掘方埋土)</p> |
|---|--|



- | |
|---|
| <p>1 暗黄褐色土。(1・2はP3～P6埋土)</p> <p>2 黄褐色土。風化火山灰土まじり。</p> |
|---|

0 1:60 2m

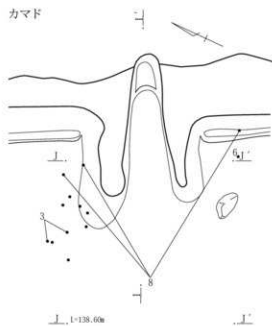
第44図 17号貯穴住居(1)



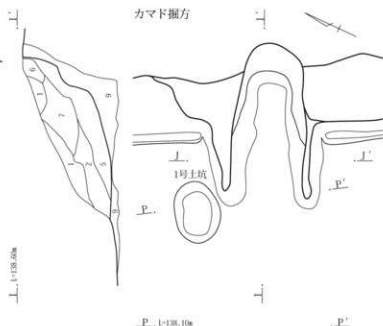
第45図 17号竪穴住居(2)

第3章 調査された遺構と遺物

カマド



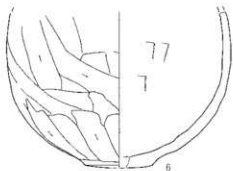
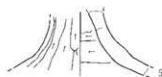
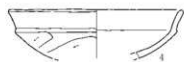
カマド掘方



- 1 暗褐色火山灰土。径100mm大の灰褐色シルト質火山灰土ブロックを含む。焼土を含む。(1～7はカマド埋土)
- 2 赤褐色焼土ブロック上。母材は黄褐色風化火山灰土からなる。(カマド天井部左側の崩落ブロック)
- 3 暗褐色火山灰土。径50mm大の焼土ブロックを含む。
- 4 赤褐色焼土ブロック上。母材は黄褐色風化火山灰土からなる。(カマド天井部右側の崩落ブロック)
- 5 暗褐色火山灰土。焼土ブロックを多く含む。
- 6 黒褐色火山灰土。

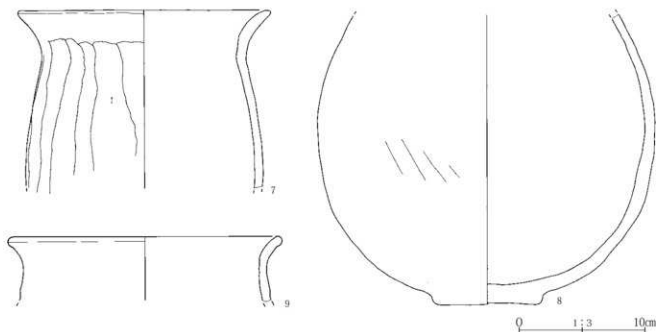
- 7 灰褐色火山灰土。灰褐色シルト質火山灰土と焼土ブロックを多く含む。
- 8 黄灰褐色風化火山灰土ブロック上。径100mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。基質は暗褐色シルト質火山灰土。燃焼部厚よりは赤褐色焼土帯を形成している。(8・9は掘方埋土。8は袖の構築材)
- 9 暗灰色シルト質火山灰土。径50mm大の焼土ブロックや風化火山灰土ブロックを含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第46図 17号竪穴住居と出土遺物



第47図 17号竪穴住居の出土遺物

暗褐色火山灰土が成層しており、層厚7～18cmの焼土ブロックは、燃焼部の天井部を構築していた部分があるまま燃焼部に滑落して保存されたものと考えられる。カマドの両袖は壁にほぼ直交する直線的で、V層の風化火山灰土を削りだした部分を基礎として、シルトまじりの黄灰褐色火山灰土を厚く貼って構築している。左袖の端部には、長径17cmの垂角礫が立った状態で埋められており、これは袖の芯材と考えられる。煙道は燃焼部奥壁から59°の勾配で立ち上がり大部分が失われている。煙道は残存する部分の幅が25cm、長さ25cm±である。

貯蔵穴 カマドの右側、南東隅寄りに位置する1号貯蔵穴と南東壁際の南寄りに位置する2号貯蔵穴を検出した。1号貯蔵穴は隅の丸い方形を呈し、長径89cm、短径78cm、深さ41cmで、貯蔵穴の向きは竪穴住居の隅に平行である。2号貯蔵穴は歪んだ楕円形を呈し、長径161cm、短径70cm、深さ45cmで、貯蔵穴の主軸方位はN56°Eで南東壁にほぼ平行である。

柱穴 主柱穴と考えられるピット3～6を検出した。ピットは黄褐色土や黒色火山灰土を埋土としており、桁行に相当するピット3・4とピット5・6間の柱間は2.62～2.68m、梁行に相当するピット3・6とピット4・5間の柱間は2.47～2.54mである。ピット4と5の間に位置する浅いピット2は、柱間のピット4寄りに位置

し、柱筋の外側から検出された。

ピット1は長径48cm、短径43cm、深さ8cm、
 ピット2は長径30cm、短径28cm、深さ6cm、
 ピット3は長径34cm、短径31cm、深さ52cm、
 ピット4は長径38cm、短径34cm、深さ34cm、
 ピット5は長径28cm、短径23cm、深さ52cm、
 ピット6は長径33cm、短径31cm、深さ51cm、

遺物 カマド手前の床面から土師器の杯(3)や甕(8)の破片が出土し、床面付近からは土師器の高杯(5)が出土した。また埋土からは土師器の杯(1・2・4)が出土した。
時代 古墳時代6世紀後半と推定される。

18号・19号竪穴住居(第48～51図、PL.18-1～19-2・41・42、191・192頁)

グリッド 7～80区L・M-5・6・7

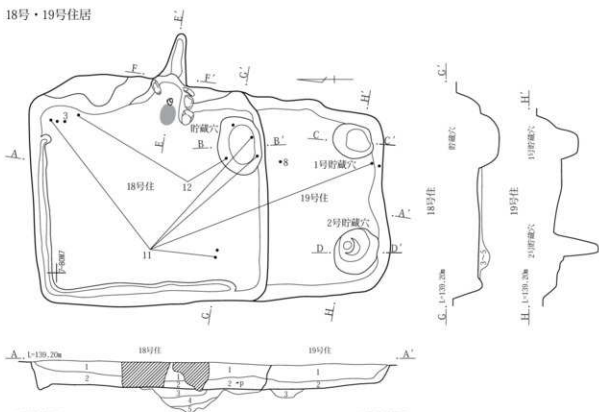
主軸方位 N82°W(18号竪穴住居)

重複 地層断面では18号竪穴住居埋土は19号竪穴住居埋土を切ることから、18号と19号竪穴住居は新・旧の関係にある。また両竪穴住居の東西の壁面は、ほぼ一致している。

周辺の遺構 12号竪穴住居に主軸方位が近似し、3m以内の至近距離にある。

形状と規模 18号竪穴住居は、南北方向に長軸を有し、歪んだ正方形を呈する竪穴住居である。長径は3.81m、

18号・19号住居



18号惣穴住居

A・G断面

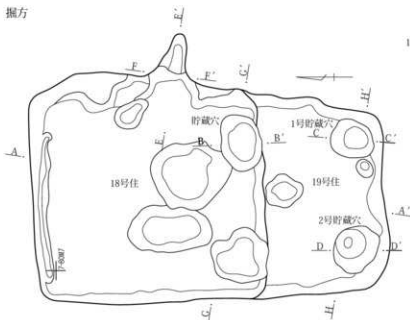
- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, B-F)を含む。(1・2は惣穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。灰色軽石を少量含む。
- 3 黒褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。(3・4・5は掘方埋土)
- 4 暗褐色火山灰土。径10～20mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 5 黒褐色火山灰土。基底に南から傾斜して堆積する。

19号惣穴住居

A断面

- 1 暗黄褐色火山灰土。(1・2は惣穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。
- 3 暗灰色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックを含む。(掘方埋土)

掘方



19住1号貯蔵穴
C, 1-138.90m C'



- 1 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。

19住2号貯蔵穴
D, 1-138.90m D'



- 1 黒褐色火山灰土。(1・2・3は貯蔵穴埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。
- 3 黄灰褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

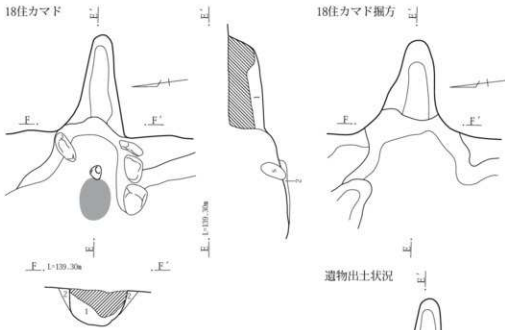
18住貯蔵穴
B, 1-138.80m B'



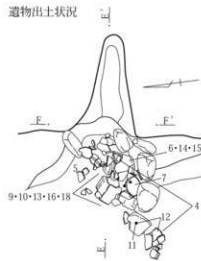
- 1 暗灰褐色火山灰土。

0 1:60 2m

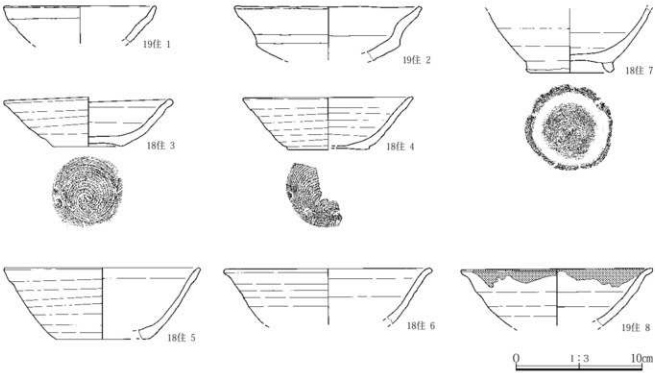
第48図 18号・19号惣穴住居



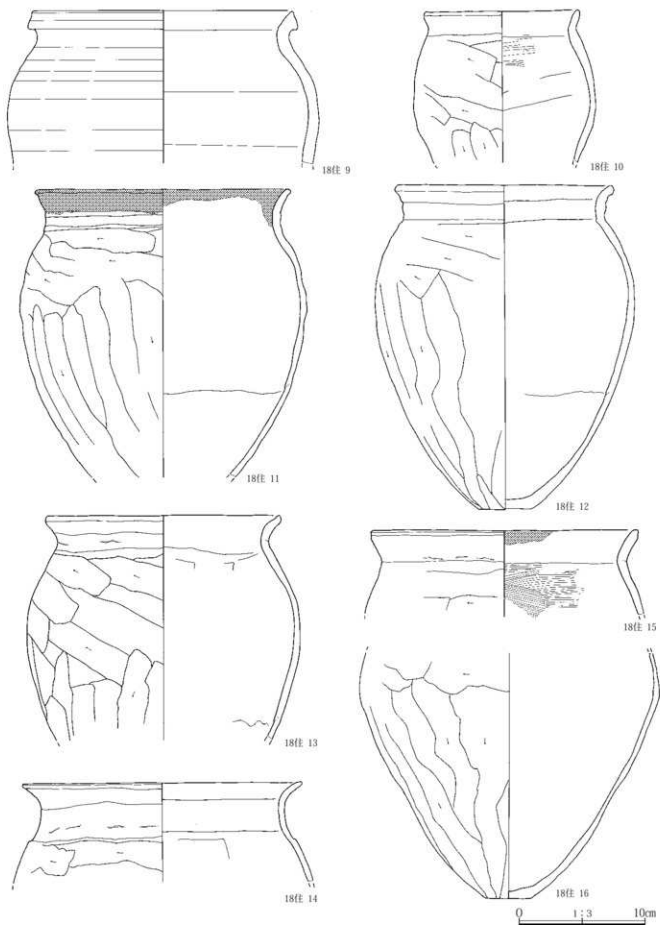
- 1 黄褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。(カマ道理上)
- 2 暗灰色火山灰土と赤褐色焼土帯。焼土帯の母材は黄灰色風化火山灰土。(カマド掘方理上)



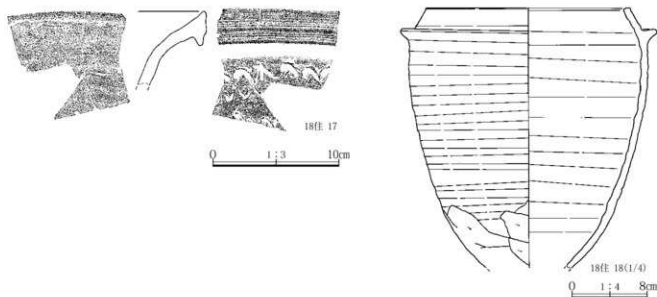
0 1:30 1m



第49図 18号・19号竪穴住居と出土遺物



第50図 18号・19号竪穴住居の出土遺物(1)



第51図 18号・19号竪穴住居の出土遺物(2)

短径は3.73m、床面までの深さ0.38m、掘方までの深さ0.42m、面積10.16㎡である。19号竪穴住居も南北方向に長軸を有した可能性が高く、方形を呈する竪穴住居である。残存する長径は2.26m+、短径は3.37m、床面までの深さ0.39m、残存する最大の面積は4.58㎡+である。

埋土 18号竪穴住居は軽石を含む黒褐色火山灰土と黄褐色火山灰土が成層する。19号竪穴住居の埋土は暗灰褐色を基調とする特徴に乏しい火山灰土が成層しており、人為的な埋土の特徴を示すブロックを含む土壌の典型的な層相を示さない。

床面 18号・19号竪穴住居は、V層の風化火山灰土を掘り込み、ほぼ平坦な床を削りだして構築している。18号竪穴住居の南半部は、風化火山灰土ブロックを含む暗灰色火山灰土を層厚6cmほど貼って床を構築している。

掘方 18号竪穴住居の南側は、V層の風化火山灰土を不定形の窪み状に掘り込んでおり、床と掘方の間は0.06～0.39mである。19号竪穴住居の中央にも不定形の浅い窪みが検出されている。

周溝 18号竪穴住居の東・南壁際を除いて北・西壁際を周回する。周溝の幅は10cm、深さ6cmである。

カマド 18号竪穴住居の東壁の中央に位置する。19号竪穴住居のカマドは、残存部分から検出されなかったので18号竪穴住居により失われたものと考えられる。18号竪穴住居カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の内側に構築している。燃焼壁は64°の勾配で立ち上がり煙道に続く。燃焼部の右壁面は長径20～25cm大の垂円礫が3点

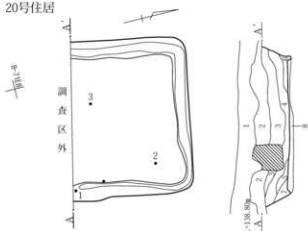
並べられており、左壁には長径20cmの垂円礫が立った状態で出土した。これらは燃焼部壁面の構築材と考えられるが右手前の垂円礫を除いて礫表面の焼土化が認められないことから、壁の基礎として埋められていた可能性がある。燃焼部の中央には長径22cmの垂円礫が傾いた状態で出土しており、これは支脚であると考えられる。埋土からは長径30cm大の安山岩角礫が2点出土しており、これは燃焼部の天井壁の構築材の可能性がある。また埋土やカマド使用面には多量の土器片が含まれており、これらの遺物の器種は須恵器の杯(4・5)、椀(6・7)、鉢(9)や土師器の小型甕(10)、甕(11～16)、須恵器の羽釜(18)など様々である。これらはカマドの破壊時にカマド上部に存在した土器やカマドに廃棄された土器片などがカマドの構築材などとともに混入した可能性が高い。燃焼部の底はV層の風化火山灰土を削りだして構築し、焼土ブロックや灰に覆われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む黄褐色火山灰土からなり、燃焼部や袖の大部分は失われていた。

カマドの長さは74cm、焚口の幅58cmである。煙道は残存部分の幅が18cm、長さ66cm+である。

貯蔵穴 18号竪穴住居の貯蔵穴はカマドの右側、南壁際に位置する貯蔵穴である。貯蔵穴は隅の丸い方形を呈し、長径95cm、短径68cm、深さ30cmで、貯蔵穴の主軸は竪穴住居の隅に平行である。19号竪穴住居の貯蔵穴は、竪穴住居の南東隅に位置する1号貯蔵穴と南西壁間に位置する2号貯蔵穴を検出した。1号貯蔵穴は歪んだ円形を呈

第3章 調査された遺構と遺物

20号住居



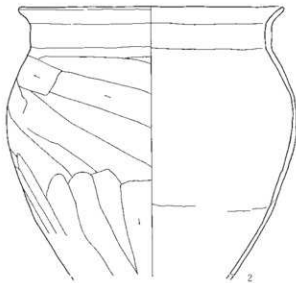
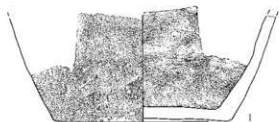
掘方



- 1 耕作土。表土。(Ia層、1・2は遺構の被覆層)
- 2 黒褐色火山灰土層。灰色軽石(As-C)を多く含む。暗褐色火山灰土粒を少量含む。(II層)
- 3 暗灰色火山灰土。暗灰色風化火山灰土粒を少量含む。(3～7は堅穴住居埋土)
- 4 暗褐色火山灰土。風化火山灰土粒を少量含む。
- 5 暗褐色火山灰土。焼土粒や暗褐色火山灰土粒を少量含む。
- 6 暗褐色火山灰土。径20mm大の風化火山灰土ブロックを少量含む。
- 7 暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを少量含む。
- 8 褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(掘方埋土)

1 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第52図 20号堅穴住居と出土遺物

し、長径67cm、短径54cm、深さ27cmである。2号貯蔵穴は歪んだ円形を呈し、長径76cm、短径67cm、深さ71cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 19号竪穴住居の埋土からは灯明の可能性ある須恵器の椀(8)の破片が出土した。18号竪穴住居床面から出土した土師器の甕(11)の破片は、掘方と貯蔵穴上の床面から4～5cmの埋土及び19号竪穴住居の埋土から出土した小破片が接合している。このことは19号竪穴住居埋土の遺物が切り合いのある18号竪穴住居掘方埋土に取り込まれ、18号竪穴住居の埋没過程で19号竪穴住居よりの壁際から移動した破片が貯蔵穴付近の埋土に移動したものと考えられる。

時代 両遺構とも平安時代10世紀前半と考えられる。

20号竪穴住居(第52図、PL.19-3～5・43、192頁)

グリッド 8-71区D・E-8

主軸方位 N80°W

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。4mの距離に51号土坑が位置する。

形状と規模 東西方向に長軸を有し方形を呈する竪穴住居であるが、南側が調査区外にある。長径は2.57m、短径は1.97m+、床面までの深さ0.37m、掘方までの深さ0.47m、検出された最大の面積は4.19m²である。

埋土 南壁の断面観察では、埋土はⅡ層の中から掘り込まれているが、埋土を被覆する黒褐色火山灰土はAs-Cの軽石を多く含み、色調は黒みが強い。埋土は成層した暗灰～暗褐色火山灰土からなり、下底に風化火山灰土プ

21号住居

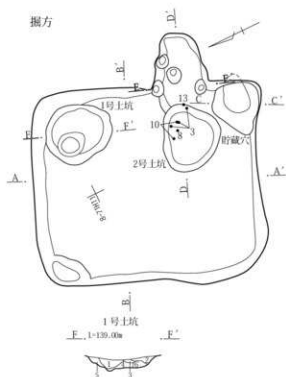


- 1 黒褐色火山灰土。灰色軽石を含む。(1～4は竪穴住居埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。
- 3 黒褐色火山灰土。
- 4 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰まじり。
- 5 暗灰褐色火山灰土。径10～40mm大の風化火山灰土ブロックを含む。(掘方埋土)



- 1 暗褐色火山灰土。焼土を少量含む。風化火山灰土粒を含む。(1・2・3は貯蔵穴埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。風化火山灰土粒を含む。
- 3 暗赤褐色火山灰土。焼土を少量含む。風化火山灰土を少量含む。

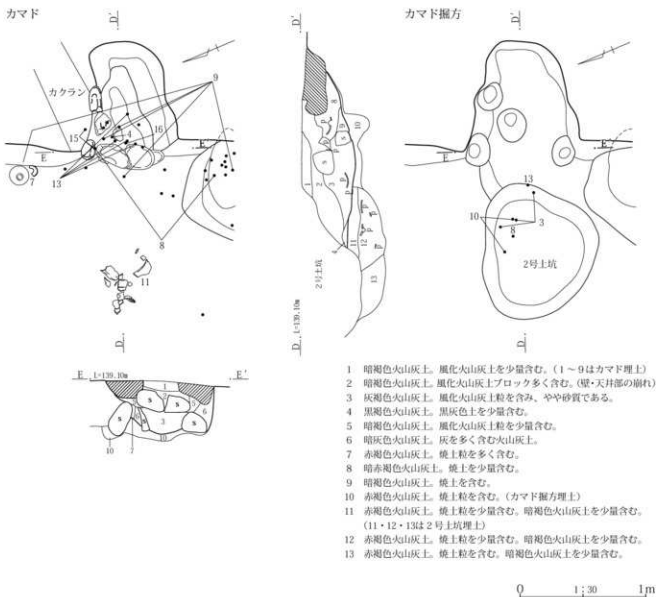
掘方



- 1 暗褐色土。灰色軽石を含む。(1～6は土坑埋土)
- 2 暗褐色土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗褐色土。風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土。風化火山灰土まじり。
- 5 暗褐色土。
- 6 暗褐色土。風化火山灰土ブロックを多く含む。

0 1:60 2m

第53図 21号竪穴住居(1)



第54図 21号竪穴住居(2)

ロックを含む暗灰色火山灰土が壁際から竪穴に向かって傾斜して堆積している。埋土の上部は、すり鉢状の竪穴の中央部を緩やかに成層している。

床面 V層の風化火山灰土を掘り込み、凹凸のある床を削りだしているが、南東部は部分的に暗褐色火山灰土を層厚10cmほど貼って床面を構築している。西壁際の北寄りには、長さ0.44m、短径、0.37m、深さ0.10mの1号土坑が検出された。

掘方 西壁や北壁周囲には歪んだ円形の浅い窪みが発見された。南東部に不定形の窪みが発見された。

周溝 検出された床の西・北・東壁際を周回する。周溝の最大の上幅は15cm、最小の底幅は4cm、深さ6cmである。

カマドと貯蔵穴 床面では検出されなかった。調査区外に存在すると考えられる。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

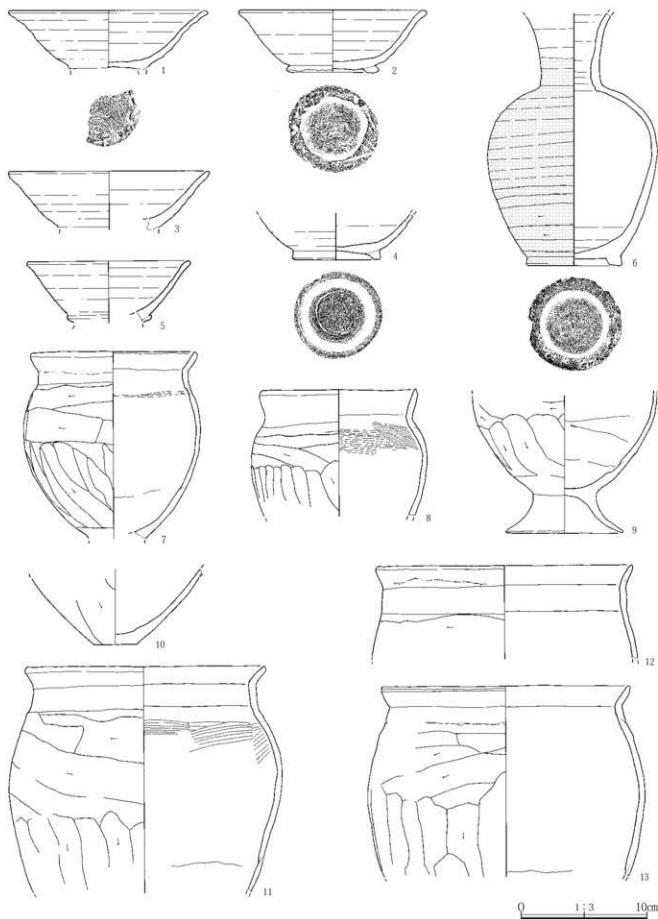
遺物 床面から土師器の甕(2)、床面付近から須恵器の甕(1)の破片や敲石(3)が出土した。

時代 平安時代9世紀中頃。

21号 竪穴住居(第53～56図, PL.19-6～20-5・43・44, 192・193頁)

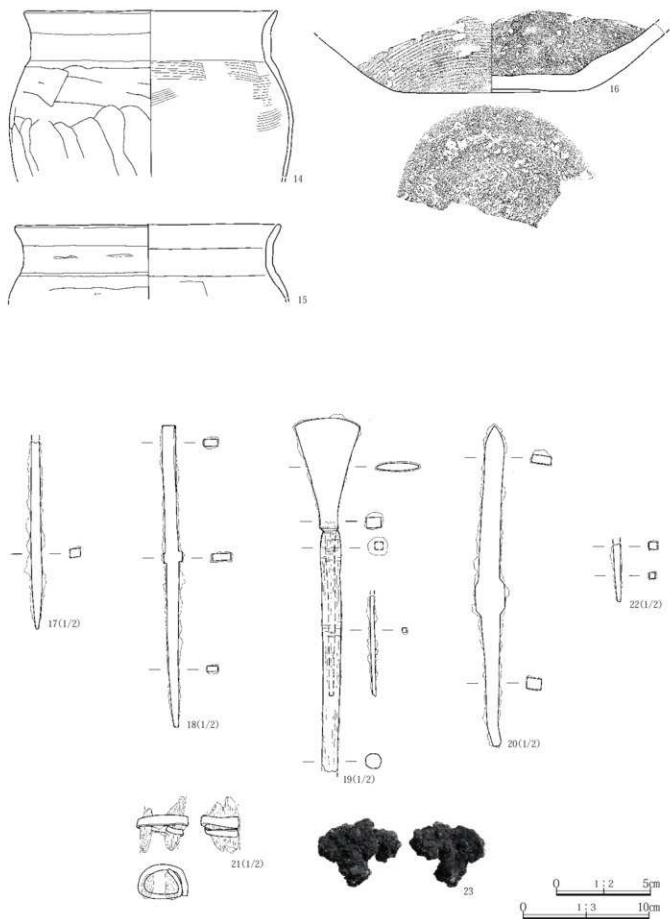
グリッド 8-71区G・H-10・11

主軸方位 N67°W



第55図 21号竪穴住居の出土遺物(1)

第3章 調査された遺構と遺物



第56図 21号竪穴住居の出土遺物(2)

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。2mの距離に20号土坑が位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.75m、短径は3.26m、床面までの深さ0.39m、掘方までの深さ0.42m、面積9.36㎡である。

埋土 黒褐色～暗褐色火山灰土が緩やかに竪穴を埋めるように成層しているが、特徴に乏しい層相を呈する。火山灰土は軽石を含み、上位ほど黒褐色の火山灰土からなる。

床面 暗褐色火山灰土を層厚3cmほど貼ってほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.03～0.05mである。竪穴住居の北東隅に1号土坑、カマドの焚口手前に2号土坑を検出した。1号土坑は、歪んだ円形を呈し、長径1.10m、短径0.92m、深さ0.15m。2号土坑は、歪んだ方形を呈し、長径1.09m、短径0.92m、深さ0.31mで、土坑の底から12cm上で須恵器の椀(3)、底から18cm上で土師器の甕(10)の破片が出土している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、使用面には暗褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は緩やかに傾き、29°の勾配で立ち上がるが、燃焼部の上部は失われている。燃焼部の壁面は長径18～25cm大の垂円礫を左右に5個を並べて構築している。これらの礫は燃焼部壁面に晒された部分が強く焼化して赤褐色を呈している。焚口からは長径46cm、短径20cm、厚さ16cmの安山岩円礫2点が接合して出土した。これらは前者が燃焼部壁を構築した石材で、後者は天井架構材と考えられる。燃焼部の底は赤褐色焼土ブロックが残存するか使用面のかんりの部分が失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を含む暗褐色火山灰土の互層からなる。カマド使用面付近からは須恵器の椀(4)、使用面からは土師器の甕(15)の破片が出土した。また、カマドの使用面から出土した土師器の台付甕(8・9)の破片は貯蔵穴埋土から出土した破片と接合した。カマド掘方の燃焼部壁の両脇からは小ピット列が検出されたが、これらは前述した壁面を構築していた礫の下底部に接したピットである。また、燃焼部中央には長径28cm、短径22cm、深さ13cmの

ピットが検出された。これはカマド燃焼部内の位置から考えて支脚の構築材が埋め込まれたピットの可能性がある。なお、カマド焚口下の掘方から検出された2号土坑の埋土は風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土と赤褐色焼土ブロックを多く含む火山灰土からなる。このことから2号土坑はカマドの作り替え等によって埋められた可能性がある。

カマドの長さは104cm、焚口の幅47cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。貯蔵穴は隅の丸い方形を呈し、長径76cm、短径68cm、深さ38cmである。貯蔵穴底から21cm上に土師器の甕(14)が出土し、床面の破片と接合した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面からは土師器の台付甕(7)、床面付近から須恵器の椀(2)、灰釉陶器の壺(6)が出土した。埋土から鉄製品(22)が、竪穴住居の北西壁際周辺からは、床面付近から鉄製品(17・18・20)が、床面から鉄鏝(19)、鉄滓(23)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

22号 竪穴住居 (第57～59図、Pl.20-6～21-3・44、193・194頁)

グリッド 8-71区G・H-16・17

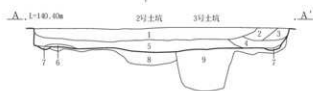
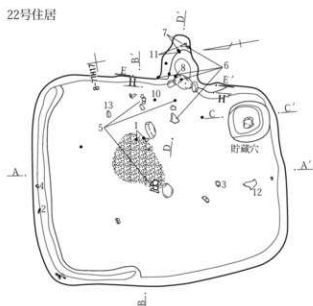
主軸方位 N76°W

周辺の遺構 23号竪穴住居は5mの距離にあり、1m以内の至近距離に45号土坑が位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴住居である。長径は4.10m、短径は3.51m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.39m、面積11.01㎡である。

埋土 As-CやBr-FAの軽石を含む暗灰褐色火山灰土が成層している。北壁際から傾斜した風化火山灰土のブロックを含む黄褐色火山灰土の互層が検出されているが、連続性に乏しい。埋土の下部を構成する黄褐色火山灰土には、炭化物や焼土が数カ所にわたって検出され、これらは竪穴住居の北西隅に集中する。最大で長径106cm、幅20cmの範囲に炭化材や橙色焼土帯が検出されたが、これらは床面から数～10数cm高い埋土中に保存されている。

22号住居



- 1 暗灰色細粒火山灰土。径10mmの炭化物や焼土ブロックが点在。(1・2は貯蔵穴埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。径10mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

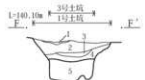


- 1 暗灰色火山灰土。径5～10mmの灰色軽石を含む。(1・2・3は5号土坑埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。

掘方



- 1 暗灰褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1～7は竪穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む、風化火山灰土まじり。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。
- 4 暗褐色火山灰土。灰色軽石を含む。
- 5 黄褐色火山灰土。径10～20mm大の風化火山灰土ブロックを含む。本層中には炭化材と焼土化した埋土を含み、これらは埋土堆積時に形成されたものである。炭化材と焼土は、床面から数cmの高い位置に存在する。
- 6 黄褐色火山灰土。径20mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 7 黄褐色火山灰土。径5～20mm大の風化火山灰土ブロックや黒色土ブロックを多く含む。基質は褐色火山灰土。
- 8 暗灰色火山灰土。風化火山灰土ブロックや黒色土ブロックを多く含む。(8・9は掘方埋土)
- 9 暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。



- 1 黒褐色土。褐色土まじりで炭化物を含む。(1～4は1号土坑埋土)
- 2 暗褐色土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗褐色土。
- 4 暗黄褐色土。風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 5 褐色土。風化火山灰土ブロックを多く含む。(3号土坑埋土)



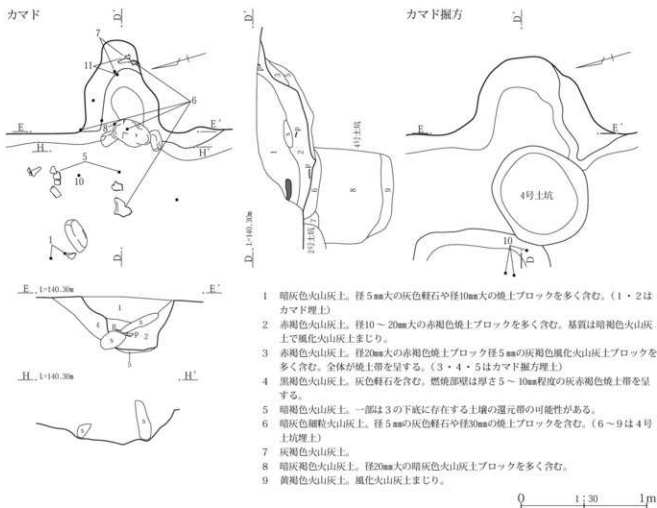
第57図 22号竪穴住居(1)

このことから、検出された炭化材等は埋土の堆積期に竪穴住居の建築部材などが焼失して保存されたものと考えられる。

床面 風化火山灰土や黒色土ブロックを多く含む暗灰色火山灰土を7cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.03～0.07mである。竪穴住居の中央

からカマド焚口付近に1～4号土坑、竪穴住居の北東隅に5号土坑を検出した。1号土坑は、歪んだ方形を呈し、長径1.21m、短径1.13m、深さ0.34mで3号土坑と重複しており、3号土坑よりも新しい。埋土は炭化物を含有する黒褐色～暗褐色土の互層である。2号土坑は、歪んだ方形の浅い窪みで、長径1.11m、短径1.00m、深さ0.21mである。埋土は暗灰色火山灰土の互層で、風化火山灰



- 1 暗灰色火山灰土。径5mm大の灰色軽石や径10mm大の焼上ブロックを多く含む。(1・2はカマド埋土)
- 2 赤褐色火山灰土。径10～20mm大の赤褐色焼上ブロックを多く含む。基質は暗褐色火山灰土で風化火山灰土まじり。
- 3 赤褐色火山灰土。径20mm大の赤褐色焼上ブロック径5mmの灰褐色風化火山灰土ブロックを多く含む。全体が焼土帯を呈する。(3・4・5はカマド掘方埋土)
- 4 黒褐色火山灰土。灰色軽石を含む。燃焼部厚さ5～10mm程度の灰赤褐色焼土帯を呈する。
- 5 暗褐色火山灰土。一部は3の下底に存在する土塊の還元部の可能性がある。
- 6 暗灰色細粒火山灰土。径5mmの灰色軽石や径30mmの焼上ブロックを含む。(6～9は4号土坑埋土)
- 7 灰褐色火山灰土。
- 8 暗灰褐色火山灰土。径20mm大の暗灰色火山灰土ブロックを多く含む。
- 9 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

0 1:30 1m

第58図 22号竪穴住居(2)

土ブロックを含む埋土が狹在することから人為的に埋められた可能性がある。3号土坑は、歪んだ円形を呈し、長径1.10m、短径1.08m、深さ0.67mでしっかり掘られた筒形の土坑である。埋土は褐色土からなり風化火山灰土ブロックを多く含む。4号土坑は、歪んだ円形を呈し、長径0.83m、短径0.72m、深さ0.71mで、3号土坑よりも規模は小さいがしっかり掘られた筒形の土坑である。埋土は火山灰土ブロックを含む暗灰色火山灰土であり、焼土粒を含む火山灰土が埋土の上層に見られる。5号土坑は、円形を呈し、長径0.49m、短径0.44m、深さ0.31mである。埋土は暗灰色～黄褐色火山灰土からなり成層する。

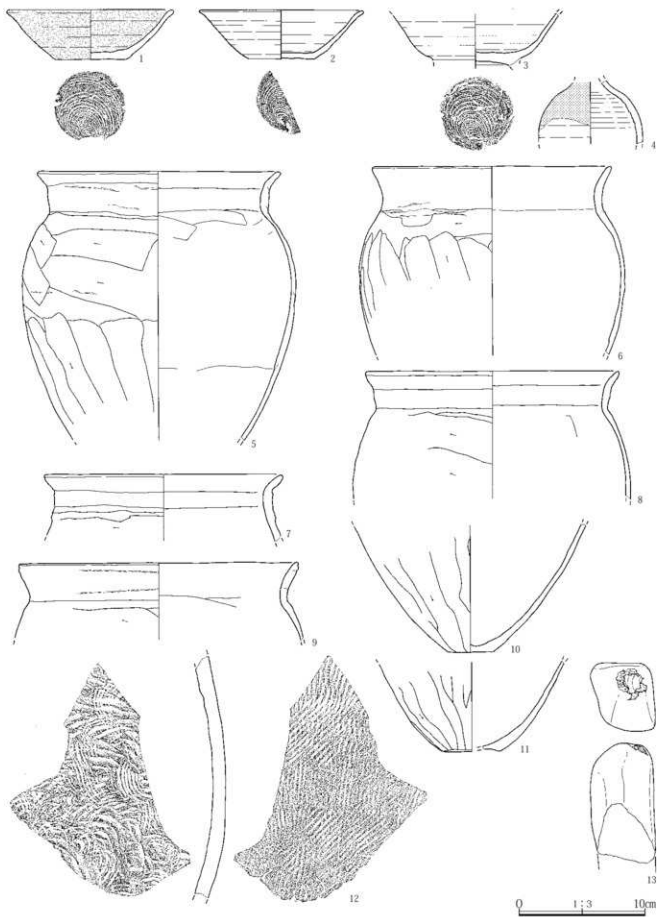
周溝 北壁と西壁隙の北寄りを周回する。周溝の幅は11cm、深さ3cmである。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、底には黒褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は65°の勾配で立

ち上がるが煙道は失われている。燃焼部の焚口は長径22～34cm大の垂円礫が左右に立てられて燃焼部壁を構築している。燃焼部左壁の礫は焚口に向かって傾斜しているため、少し上部が移動した可能性がある。両側の礫の上面からは長径32cm、短径19cm、厚さ7cmの安山岩円礫がほぼ水平を保った状態で出土しており、礫は天井架構材と考えられる。燃焼部の底は赤褐色焼土ブロックが残存すが使用面のかなりの部分が失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、焼土を多く含む暗褐色火山灰土からなり、土師器の糞(6・7・8・11)の破片が出土した。なお、カマド焚口下の掘方から検出された4号土坑は埋土に焼土ブロックを含まないが、カマドの使用面下にある遺構であることは確実であり、同様の位置に土坑が検出された21号竪穴住居と類似したカマドの構造を持つ可能性がある。

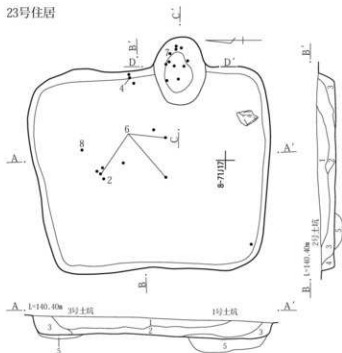
カマドの長さは84cm、焚口の幅35cm+である。

貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。

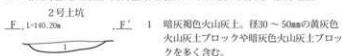


第59図 22号竪穴住居の出土遺物

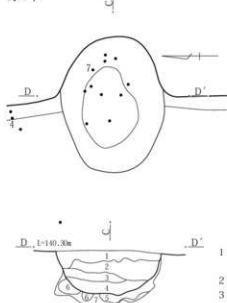
23号住居



- 1 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-Fa)を含む。(1～4は竪穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。灰色軽石を含む。径20mm大の暗黄褐色火山灰土ブロックを含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 4 黄褐色火山灰土。風化火山灰土のブロックを含む。
- 5 暗褐色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックを多く含む。(掘方埋土)



カマド

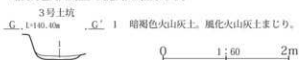


- 1 灰褐色シルト質火山灰土。径5～10mmの灰色軽石を多く含み、風化火山灰土ブロックが点在する。(1～4はカマド埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。灰を含む土壌のブロックを少量含み、灰色軽石を含む。
- 3 黄灰色火山灰土。径50mm大の焼土ブロックや黄灰色シルト質火山灰土ブロックを多く含む。基質は暗灰色火山灰土。
- 4 暗灰色火山灰土。炭化物、灰を含む土壌のブロックや、焼土ブロックを含む。
- 5 黒褐色火山灰土。黒色火山灰土ブロックを少量含み、褐色火山灰土や風化火山灰土粒を含む。(5・6・7はカマド掘方埋土)
- 6 暗褐色火山灰土。黒～褐色火山灰土や焼土まじり。
- 7 暗褐色火山灰土。黒色火山灰土のブロックを含み、一部は焼土化している。

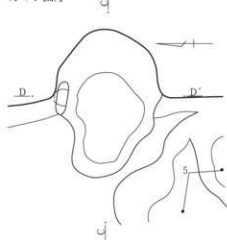
掘方



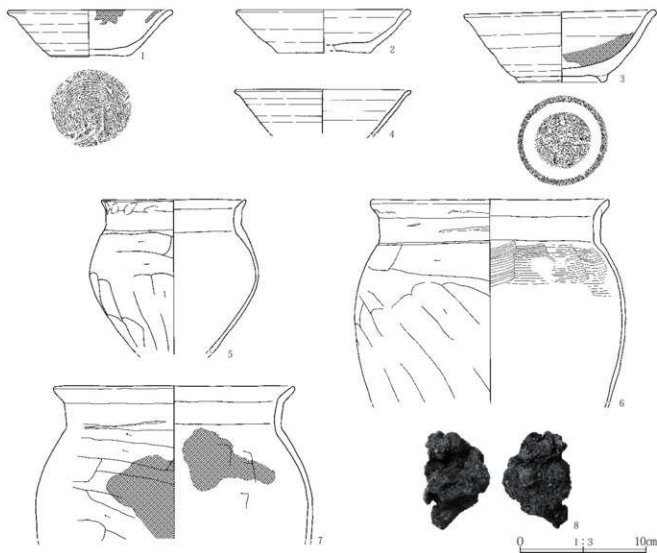
- 1 黒褐色火山灰土。灰色軽石や風化火山灰土ブロックを含む。(1・2は貯蔵穴埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。径20mm大の黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗褐色火山灰土。径20mm大の暗褐色火山灰土ブロックを含む。(3・4・5は1号土坑埋土)
- 4 暗褐色火山灰土。径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 5 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。



カマド掘方



第60図 23号竪穴住居



第61図 23号竪穴住居の出土遺物

貯蔵穴は隅の丸い正方形を呈し、直径66cm、深さ24cmである。貯蔵穴底から9cmに垂円礫が出土した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)と椀(3)、土師器の甕(5)の破片が出土し、床面付近からは須恵器の杯(2)灰釉陶器の小瓶(4)、須恵器の甕(12)の破片や叢石(13)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

23号竪穴住居(第60・61図、PL. 21-4～7・44、194頁)

グリッド 8-71区 I・J-16・17

主軸方位 N87E

周辺の遺構 22号竪穴住居は5m、25号竪穴住居は3m

の距離にあり、1m以内の至近距離に50号土坑が位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.90m、短径は3.32m、床面までの深さ0.29m、掘方までの深さ0.49m、面積10.34㎡である。

埋土 As-CやBr-FAの軽石を含む暗灰褐色火山灰土と黄褐色火山灰土が成層している。下位ほど黄褐色火山灰土が優勢で、壁際を連続性に乏しく傾斜した黄褐色火山灰土が埋めた後に竪穴の中央部を暗灰褐色～黄褐色火山灰土が埋積している。

床面 V層の風化火山灰土を掘り込み、床を削りだして構築しているが、風化火山灰土や暗灰色土ブロックを多く含む暗灰色火山灰土を部分的に20cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 南壁の西寄りを除く周辺に、不定形の浅い窪みである1号土坑、西壁と北東壁間に2号・3号土坑を検出した。1号土坑は、不定形を呈し、竪穴住居の南壁から南部に広がる窪みで、深さ0.23mである。埋土からは貯蔵穴底から12cm上で完形の須恵器の杯(1)が、土坑底から8cm上で須恵器の椀(3)、土坑底直上から土師器の台付裏(5)の破片が出土した。2号土坑は、歪んだ方形の浅い窪みで、長径1.19m、短径0.73m、深さ0.16mである。3号土坑は、北東壁際の隅に平行な歪んだ方形を呈し、長径1.66m、短径0.84m、深さ0.05mである。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁手前から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、黒褐色火山灰土を底部に貼っている。燃焼部壁は54°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁面や底面はブロック状に焼土が残存するが燃焼部壁や使用面は大部分が失われている。カマド燃焼部を埋める埋土は、軽石を含む黒褐色火山灰土と赤褐色焼土ブロックを多く含む暗灰褐色火山灰土からなる。これらは燃焼部の天井部を構築していたブロックが滑落して堆積したものと考えられる。

カマドの長さは98cm、焚口の幅48cmである。

貯蔵穴 床面の調査で、貯蔵穴と重複する1号土坑を同時に検出したため、掘方で貯蔵穴と考えられる窪みを1号土坑内に認めた。貯蔵穴はカマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。直径68cm、深さ9cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 埋土から須恵器の杯(2)や椀(4)の破片が、床面付近から土師器の裏(6)の破片が出土した。床面から鉄滓(8)が出土した。

時代 平安時代9世紀中頃。

24号竪穴住居 (第62・63図、PL. 21-8~22-3・44・45、196頁)

グリッド 8-71区 I・J-18・19

主軸方位 N85°W

周辺の遺構 25号竪穴住居は5mの距離にあり、1m以内の至近距離に48号土坑が位置する。

形状と規模 東西方向に長軸を有し長方形を呈するが、

竪穴住居の北側は調査区外にある。長径は3.48m、短径は1.93m+、床面までの深さ0.62m、掘方までの深さ0.68m、検出された最大の面積は5.02㎡+である。

埋土 北壁の断面観察では、埋土は1層と2層の層理面から掘り込まれている。埋土はAs-CやHr-FAの軽石を多く含む黒褐色火山灰土や黄褐色火山灰土からなり成層しているが、下位ほど黄褐色火山灰土が優勢である。

床面 風化火山灰土のブロックを多く含む暗灰褐色火山灰土を層厚6cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.01~0.06mである。南壁の南東壁際寄りに浅い窪みである1号土坑、南西壁際に2号土坑を検出した。1号土坑は、歪んだ方形を呈し、長径0.95m、短径0.72m、深さ0.08mである。2号土坑は、楕円形の浅い窪みで、長径1.09m、短径0.89m、深さ0.05mである。

カマド 東壁の南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁手前から奥を掘り込んで壁から外側に構築し、黄褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は42°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁面や底面は薄い赤褐色焼土帯が検出され、使用面の残存状態は良好である。燃焼部底の中央左壁寄りに長径15cmの垂円礫が立った状態で検出された。礫の表面は被熱を受け焼土化しており、支脚と考えられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、軽石を含む黒褐色火山灰土と黄褐色火山灰土、赤褐色焼土ブロックを多く含む暗灰褐色火山灰土が成層している。これらは下位より燃焼部の天井部を構築していた燃焼部壁ブロック及び天井部の構築材が滑落して堆積したものと考えられる。カマド使用面付近から土師器の裏(5)の破片が出土した。

カマドの幅は88cm、長さ88cm、焚口の幅37cmである。

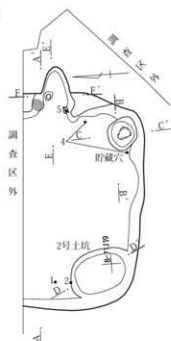
貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。貯蔵穴は円形を呈し、長径56cm、短径49cm、深さ39cmである。貯蔵穴底から長径22cmの垂円礫が出土した。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から土師器の小型裏(4)の破片が出土した。埋土から土師器の杯(1)や須恵器の椀(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

24号住居



掘方



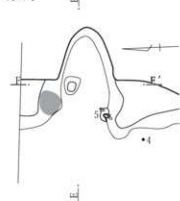
- 1 灰色餅作土。表土。(1a層)
- 2 黄灰褐色火山灰土。(1b~1c層)
- 3 暗灰色火山灰土。(3・4・5は竪穴住居埋土)
- 4 黒褐色火山灰土。径1~10mmの灰色軽石(As-C、B-Fa)を含む。
- 5 暗灰色火山灰土。
- 6 黄灰褐色火山灰土。径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(掘方埋土)



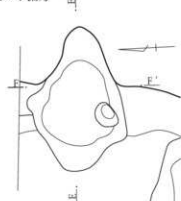
- 1 暗褐色土。径5~20mm黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(1・2は貯蔵穴埋土)
- 2 暗褐色土。焼土や黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土。径10mm大の暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(1号土坑埋土)

0 1:60 1m 2m

カマド



カマド掘方

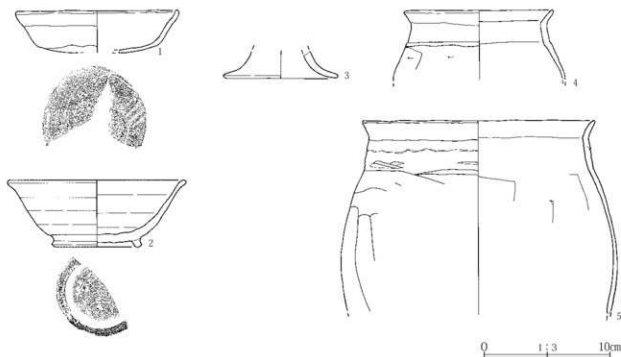


E-E', 1:100.00m

- 1 暗褐色火山灰土。褐色火山灰土ブロックを少量含む。(1~5はカマド埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 4 暗褐色~黒色火山灰土。径30mm大の赤褐色焼土ブロック含む。
- 5 赤褐色焼土ブロック上。径10mm大の赤褐色焼土ブロックや炭化物。灰を含む土塊ブロックを多く含む。基質は褐色火山灰土。
- 6 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを多く含む。(6~9はカマド掘方埋土)
- 7 黄褐色火山灰土。風化火山灰まじりのシルト質土。燃焼部は焼土帯を呈する。(袖構築材)
- 8 黒褐色火山灰土。黒色火山灰土や焼土のブロックを少量含む。
- 9 黒赤褐色火山灰土。焼土ブロックを多く含む。

0 1:30 1m

第62図 24号竪穴住居



第63図 24号竪穴住居の出土遺物

25号竪穴住居 (第64・65図、Pl. 22-4～7・45、195頁)

グリッド 8-71区J・K-17・18

主軸方位 N81°W

周辺の遺構 23号・26号竪穴住居とは3mの距離にあり、2mの至近距離に52号・53号土坑が位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し長方形を呈する。長径は3.56m、短径は2.74m、床面までの深さ0.44m、掘方までの深さ0.48m、面積は7.70㎡である。

埋土 暗黄褐色火山灰土の互層からなりAs-CやHr-FAの軽石を含む。床面付近の埋土は、直径3cmの風化火山灰土ブロックを含む火山灰土からなり、壁側から竪穴中央に向かって傾きながら堆積する不連続の単層からなる。上位の暗黄褐色火山灰土は竪穴をすり鉢状に埋めるように緩く傾きながら成層する。

床面 風化火山灰土のブロックを含む暗黄褐色火山灰土を層厚4cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.02～0.04mである。西壁際に溝状の窪みを検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を浅く掘り込んで、壁の外側に構築し、燃焼部壁は37°の勾配で立ち上がり煙道に達している。カマド及びカマド手前の長径125cm、短径115cmの範囲はシルト質の灰褐色火山灰土を薄く貼って構築している。燃

焼部壁面や底面は赤褐色焼土帯が検出され、使用面の残存状態は良好である。燃焼部奥壁からはカマドの天井部の一部と煙道壁が完全な状態で検出された。煙道は土器の細片や赤褐色焼土ブロック土で埋積され、筒状の構造の一部が残されていた。カマド燃焼部を埋める埋土は、軽石を含む暗褐色火山灰土が成層している。カマド掘方の燃焼部壁の両脇からは長径25cm、深さ4～6cmのピット2基が検出された。また、燃焼部中央左壁寄りには長径23cm深さ3cmのピットが検出された。これらのピットはカマド燃焼部の位置から考えて前者2基が燃焼部壁の構築材、後者が支脚の基礎にあたるピットの可能性が高い。カマドの長さ54cm、焚口の幅40cmである。煙道の幅は25cm、長さ26cm±である。

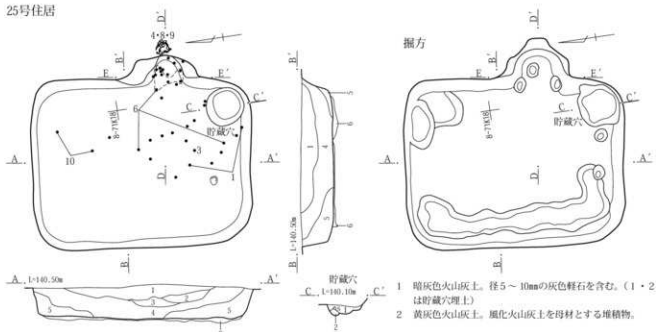
貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。貯蔵穴は円形を呈し、長径62cm、短径59cm、深さ13cmである。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、椀(3)、土師器の甕(10)と床面付近から土師器の甕(6)の破片が出土した。カマドの煙道は土師器の甕(4・8・9)の破片が出土した。

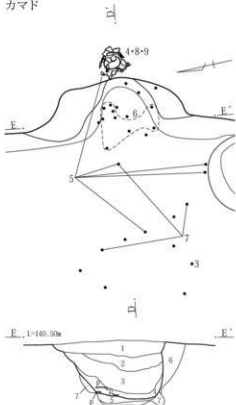
時代 平安時代9世紀後半。

25号住居

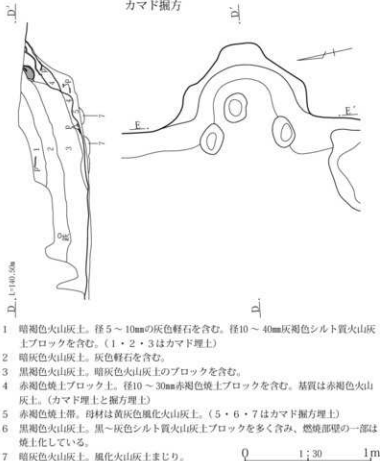


- 1 暗黄褐色火山灰土。径1～5mm灰色軽石(As-C, Br-FA)を含む。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(1～5は貯穴住居埋土)
- 2 暗黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗黄褐色火山灰土。灰色軽石や風化火山灰土ブロックを含む。径100mmデイスイト確？を含む。
- 4 暗黄褐色火山灰土。径10～30mmの風化火山灰土ブロックを含む。
- 5 暗褐色火山灰土。径30mmの風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 6 暗灰褐色火山灰土。径10～30mmの黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(掘方埋土)

カマド

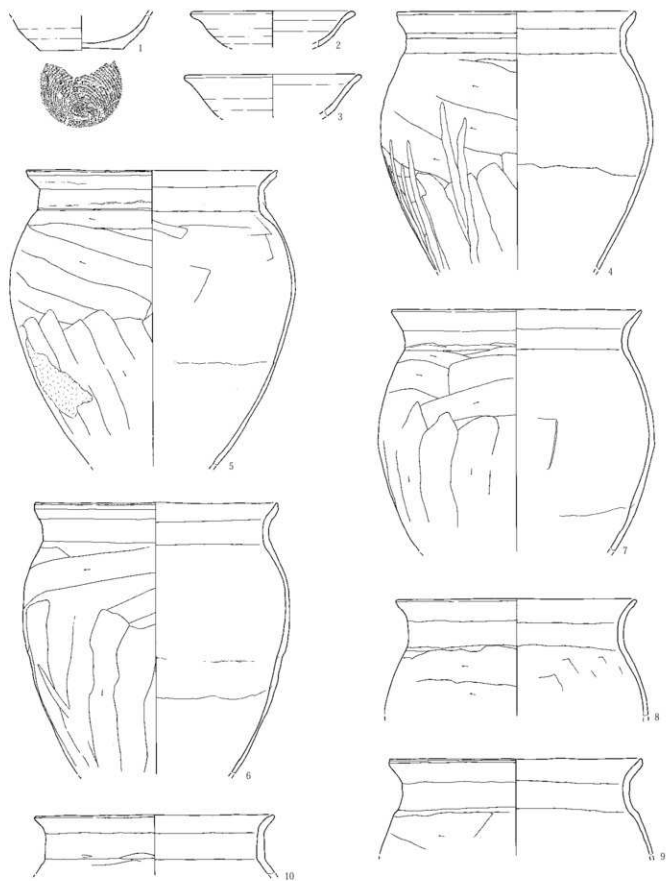


カマド掘方



- 1 暗褐色火山灰土。径5～10mmの灰色軽石を含む。径10～40mm灰褐色シルト質火山灰土ブロックを含む。(1・2・3はカマド埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含む。
- 3 黒褐色火山灰土。暗灰色火山灰土のブロックを含む。
- 4 赤褐色焼土ブロック上。径10～30mm赤褐色焼土ブロックを含む。基質は赤褐色火山灰土。(カマド埋土と掘方埋土)
- 5 赤褐色焼土部。母材は黄灰色風化火山灰土。(5・6・7はカマド掘方埋土)
- 6 黒褐色火山灰土。黒～灰色シルト質火山灰土ブロックを多く含み、燃焼部壁の一部は焼土化している。
- 7 暗灰色火山灰土。風化火山灰土まじり。

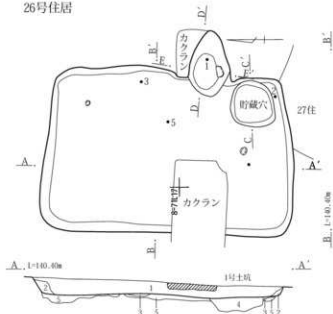
第64図 25号貯穴住居



0 1:3 10cm

第65図 25号壑穴住居の出土遺物

26号住居

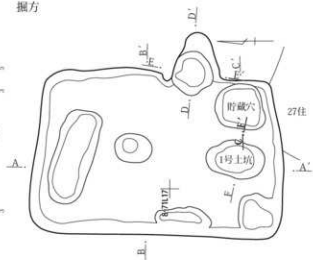


- 1 暗灰色火山灰土。径5～10mm灰色軽石を含む。(1・2は貯蔵穴住居埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。径10mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗灰色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(3・4・5は埋方埋土)
- 4 暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。
- 5 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。



- 1 灰褐色火山灰土。径10～20mm黄灰色風化火山灰土や暗灰色火山灰土のブロックを多く含む。基質は暗灰色火山灰土。(1・2・3は貯蔵穴埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。黄灰色風化火山灰土や暗灰色火山灰土のブロックを含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

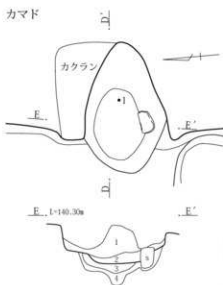
掘方



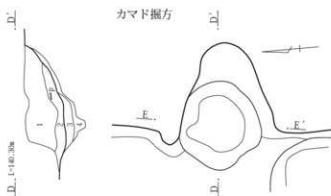
- 1 黒褐色火山灰土。焼土ブロックまじり。(1・2は1号土坑埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

0 1:60 2m

カマド



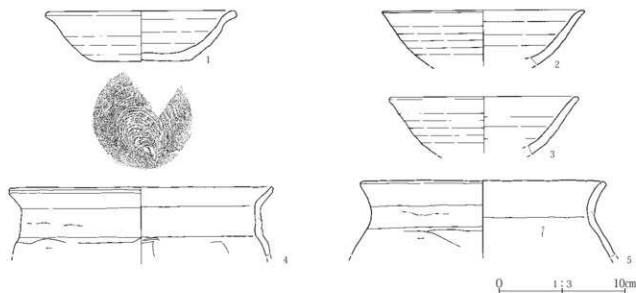
カマド掘方



- 1 暗灰色火山灰土。径5～10mm灰色軽石を含む。径80mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(1・2はカマド埋土)
- 2 暗黄褐色火山灰土。焼土ブロックを含む。
- 3 赤褐色焼土層。母材は黄褐色風化火山灰土。炭化物や黒色火山灰土ブロックを含む。(3・4はカマド掘方埋土)
- 4 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

0 1:30 1m

第66図 26号貯蔵穴住居



第67図 26号竪穴住居の出土遺物

26号竪穴住居 (第66・67図、PL. 22-8～23・3・45、195頁)

グリッド 8-71区K・L-16・17

主軸方位 N86°W

重複 発掘調査の所見では27号竪穴住居北西隣の埋土を切っており、27号竪穴住居よりも新しいと考えたが、整理作業で明らかになった竪穴住居の出土遺物は矛盾する。埋土の切り合いは竪穴住居の一部分であることから、遺構の重複関係は遺物から26号竪穴住居の方が古い。

周辺の遺構 25号竪穴住居とは5mの距離にあり、1mの至近距離に3号溝が位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し長方形を呈する。長径は4.08m、短径は2.70m、床面までの深さ0.19m、掘方までの深さ0.28m、面積は8.71㎡である。

埋土 暗灰褐色火山灰土からなり軽石を含む。床面付近の埋土は、風化火山灰土ブロックを含む黄褐色火山灰土からなり、北西壁側に断片的に堆積する。

床面 暗褐色～黄褐色火山灰土を層厚9cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.04～0.09mである。南壁寄りに浅い窪みの1号土坑を検出したほか、方形から不定形の浅い窪みを検出された。1号土坑は、歪んだ楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.59m、深さ0.22mである。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、暗褐色

～黄褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は41°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部右壁や底面は薄い赤褐色焼土帯が少しだけ検出されたが、使用面の大部分は失われており、使用面付近から須恵器の杯(1)の破片が出土した。燃焼部右壁には長径16cmの亜円礫が立った状態で検出された。礫の表面は被熱を受け焼土化しており、燃焼部壁を構成する構築材と考えられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、暗灰色火山灰土と暗黄褐色火山灰土が成層している。燃焼部底の掘方からは層厚7cmの炭化物を含む焼土が検出された。これは過去にカマドを構成した壁材などを構築材として埋め込んで掘方埋土とし、上位に使用面を構築したものと考えられる。カマドの長さ103cm、焚口の幅55cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の東壁際に位置し、南壁とは少し離れる。貯蔵穴は隅の丸い歪んだ正方形を呈し、長径73cm、短径71cm、深さ21cmである。

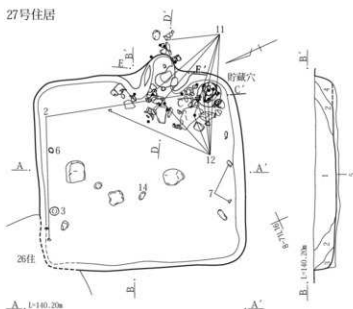
柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(2・3)の可能性のある破片が出土した。

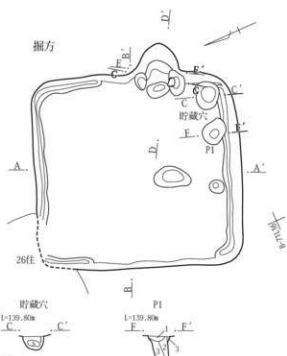
時代 平安時代9世紀後半。

27号竪穴住居 (第68・69・70図、PL. 23-4～8・45・46、195・196頁)

27号住居



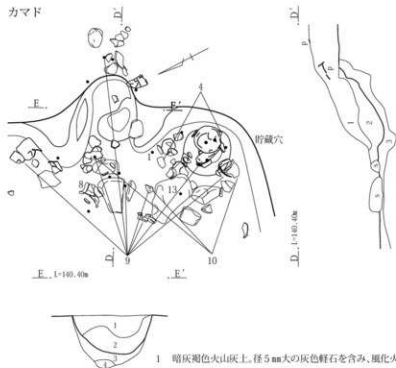
- 1 黒褐色火山灰土。径5～10mmの灰色軽石(As-C, B-Fa)を多く含む。(1～4は竪穴住居理上)
- 2 暗灰褐色火山灰土。灰色軽石が点在。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 4 灰褐色土。(カマド理上)
- 5 黄褐色火山灰土。径10mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。(掘方理上)



- C断面
1 灰褐色細粒シルト質火山灰土。風化火山灰土粒を含む。(貯蔵穴埋土)
- F断面
1 黒褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石を含む。(1・2・3はP1埋土)
2 暗灰色砂質火山灰土。塊状無層理を呈する。
3 暗黄灰色砂質火山灰土。風化火山灰土まじり。

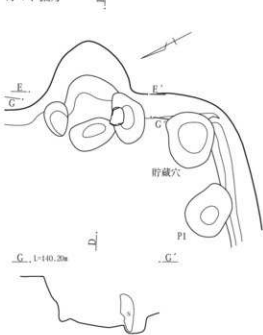
0 1:60 2m

カマド



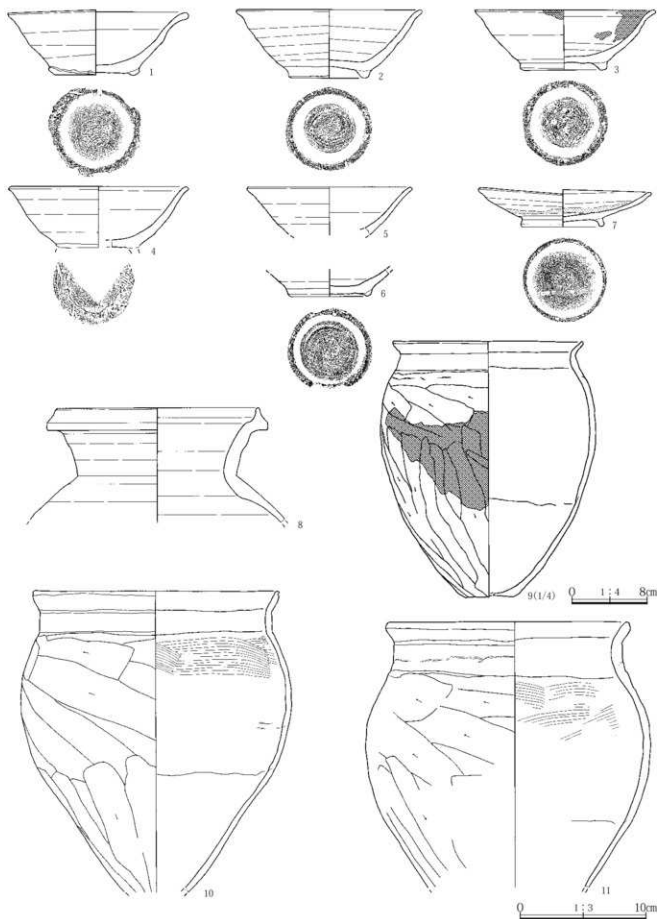
- 1 暗灰褐色火山灰土。径5mm大の灰色軽石を含み、風化火山灰土まじり。(1・2はカマド理上)
- 2 暗灰色火山灰土。暗黄灰色火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗黄褐色火山灰土。径40mm大の焼土ブロックや径20～40mmの黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(3・4はカマド掘方理上)
- 4 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

カマド掘方

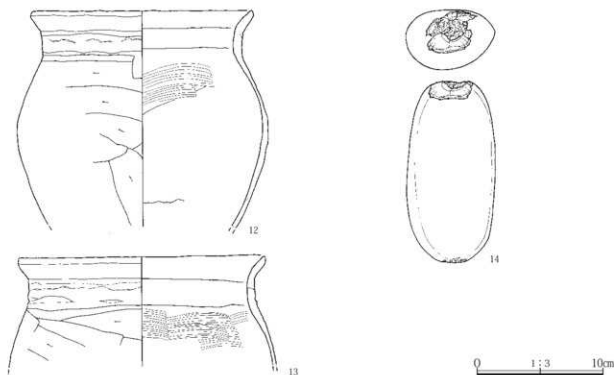


0 1:30 1m

第68図 27号竪穴住居



第69図 27号竪穴住居の出土遺物(1)



第70図 27号竪穴住居の出土遺物(2)

グリッド 8-71区K・L-15・16

主軸方位 N68°W

重複 調査所見では北西隅が26号竪穴住居の埋土に切られており、26号竪穴住居よりも古いと考えたが、出土遺物と矛盾するため、遺構の重複関係は26号竪穴住居よりも新しい。

周辺の遺構 25号竪穴住居とは2mの距離にあり、1mの至近距離に52号土坑が位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する。長径は3.35m、短径は3.13m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.38m、面積は8.58㎡である。

埋土 黒褐色～黄褐色のAs-CやHr-FAの軽石を含む成層した火山灰土からなる。埋土は壁側から竪穴中央に向かって緩く傾き、すり鉢状に成層して竪穴を埋めており、上位ほど黒褐色系土からなり軽石も多い。

床面 黄褐色火山灰土を層厚6cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.02～0.06mである。南壁寄りに1号ピットを検出したほか、円形の浅い窪みが検出されている。1号ピットは、歪んだ楕円形を呈し、長径42cm、短

径34cm、深さ43cmである。

周溝 カマド周辺と西壁の中央付近の大部分を除いて、北・東・南壁際を周回する。周溝の最大の上幅は9cm、最小の底幅は4cm、深さ4cmである。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁手前から奥を掘り込んで、壁の外側に構築し、暗黄褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は33°の勾配で緩く傾斜し、84°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁や底面は薄い赤褐色焼土ブロックが点在し、使用面には黒色の炭化物や灰が残されている。燃焼部右壁には長径32cmの垂円礫が立った状態で検出された。礫上部の表面は被熱を受けており、燃焼部壁を構成する構築材と考えられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、暗灰色火山灰土と暗黄褐色火山灰土が成層している。カマドの両袖はIV層の火山灰土を緩やかに削りだした部分を基礎として、シルトまじりの灰褐色火山灰土を厚く貼って構築しており、残存状態は良好である。カマド焚口周辺の床面から貯蔵穴周辺には、大小の安山岩垂角～垂円礫が出土している。これらはカマド構築材として利用された礫の可能性が考えられるが、同様の礫は床面の中央部からも出土しており、カマドの構築材としてはその量が少し多いように思われる。カマド掘方の燃焼

部壁の両脇からはビットが検出されたが、これらは前述した右壁面を構築していた礫の下底部の掘方を構成する窪みが含まれる。また、燃焼部中央には長径36cm、短径24cm、深さ10cmのビットが検出された。これはカマド燃焼部の位置から考えて支脚にあたる構築材を埋め込んだビットの可能性が高い。カマドの幅は96cm、長さは77cm、焚口の幅32cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、竪穴住居の南東隅に位置する。貯蔵穴は歪んだ円形を呈し、直径38cm、深さ21cmである。前述したカマド周辺の礫は貯蔵穴縁にも及ぶため、貯蔵穴が床面の高さまで埋没後にこれらの礫は散乱したものと考えられる。同様に貯蔵穴埋土からは、貯蔵穴底から17cm上に須恵器の椀(4)、底から10cm上に土師器の甕(9)の破片が出土したが、これらの破片は床面の破片と接合することから、礫と同様に移動して堆積したものと考えられる。

柱穴 床面や掘方の調査で柱穴は検出されなかった。南壁際から検出されたビット1は、単独で存在し、位置から考えても支柱には相当しない。竪穴住居は、床面に支柱となる柱穴を持たない構造であると想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(1・2・3)や蔽石(14)が、床面付近から灰釉陶器の皿(7)の破片が出土した。またカマド周辺の床面や貯蔵穴埋土、カマド使用面からは土師器の甕(9～13)の破片が出土し、接合している。

時代 平安時代9世紀末～10世紀初頭。

28号竪穴住居(第71・72・73図、PL.24-1～3・46・47、196・197頁)

グリッド 8-72区B-20・8-82区B-1

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく、10mの距離に4号竪穴が存在する。また1m以内の至近距離に64号土坑が、2mの距離に129号土坑が位置することから、同時存在はない。

形状と規模 北西方向に長軸を有する歪んだ正方形に近い長方形を呈する竪穴遺構である。長径は4.46m、短径は4.27m、床面までの深さ0.80m、掘方までの深さ0.93m、面積は9.65㎡である。

埋土 下位より黄灰色～黄褐色火山灰土、暗灰色～黄褐色火山灰土、暗灰～黒色火山灰土の順に成層しAs-CやHr-FAの軽石を含まないⅢ～Ⅳ層相当の火山灰土からな

る。埋土は壁側から竪穴中央に向かって傾きながらすり鉢状に成層して竪穴を埋めており、上位ほど黒色系火山灰土からなり、下位ほど風化火山灰土のブロックを含む。**床面** 暗黄灰色火山灰土を厚さ13cmほど貼って構築しているが、その境界は不明瞭である。また床面にがや焼土の痕跡は検出できなかった。

掘方 V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.06～0.28mである。中央部は方形に深く窪むが、境界は凹凸があり不明瞭である。掘方の壁際には南東壁際を除いて、北東・北西・南西壁際を周溝が周回する。周溝の最大の上幅は22～43cm、最小の底幅は10～20cm、深さ8cmである。

柱穴 掘方で暗黄褐色土を埋土とするビットを5基検出した。桁行に相当するビット1・2とビット4・3間の柱間は1.55～1.70m、梁行に相当するビット1・4とビット2・3間の柱間は1.42～1.84mで歪みが著しい。ビット1と2の柱筋には外側にビット5が検出された。ビット1は長径26cm、短径24cm、深さ28cm、ビット2は長径32cm、短径30cm、深さ15cm、ビット3は長径35cm、短径27cm、深さ12cm、ビット4は長径31cm、短径19cm、深さ23cm、ビット5は長径26cm、短径22cm、深さ10cm。

遺物 28号竪穴住居からは244点の土器の細片や剥片が出土しているが、その多くは埋土1～2に含まれている。竪穴内における主な遺物の出土位置は、床面付近と床面からの70cmの高さに及んでいるが、遺物の全点を地層断面に投影すると埋土2の上面や埋土1の下底付近がやや密になっている。出土した土器片は、細片からなる縄文時代前期の有尾式や諸磯式を主体とし、埋土1と2層の境界部には中期の阿玉台式の土器片が出土した。

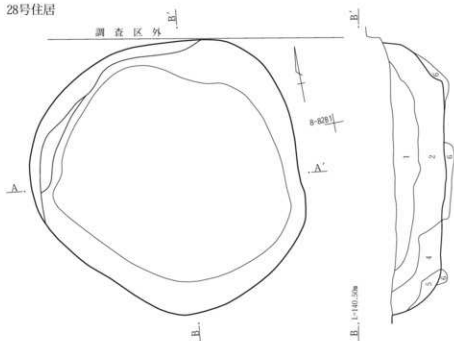
床面の直上から凹石(48)が、床面から10～12cmから凹石(47)と台石(49)が出土し、床面付近からは同一個体と考えられる深鉢(34・35・36)が出土した。台石は12.6kgあることから床面付近の場所に当初から留まって埋土に堆積したものと考えられる。また床面付近からは石鐘(46)が出土した。

時代 縄文時代前期後半。

29号竪穴住居(第74図、PL.28-4～8)

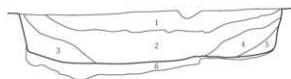
グリッド 8-71区Q-15・16

28号住居



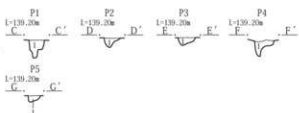
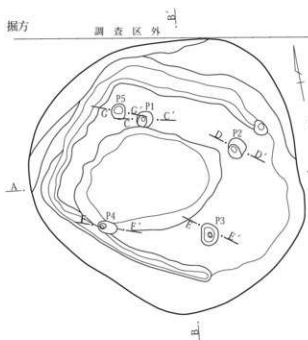
A. 1=140.50m

A'



- 1 暗灰～黒色火山灰土。径50～200mmの暗灰色細粒火山灰土ブロックを多く含む。(1～5は壁穴住居理上)
- 2 暗灰～黄褐色火山灰土。径10～200mm大の暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む、中央部ほど暗灰色ブロックが多い。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 4 黄褐色火山灰土。径100mm大の黄褐色火山灰土や風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 5 黄灰褐色火山灰土。母材は黄灰色風化火山灰土から構成される堆積物。
- 6 暗黄褐色火山灰土。径200mm大の暗灰色火山灰土ブロックを多く含む。(掘方理上)

掘方

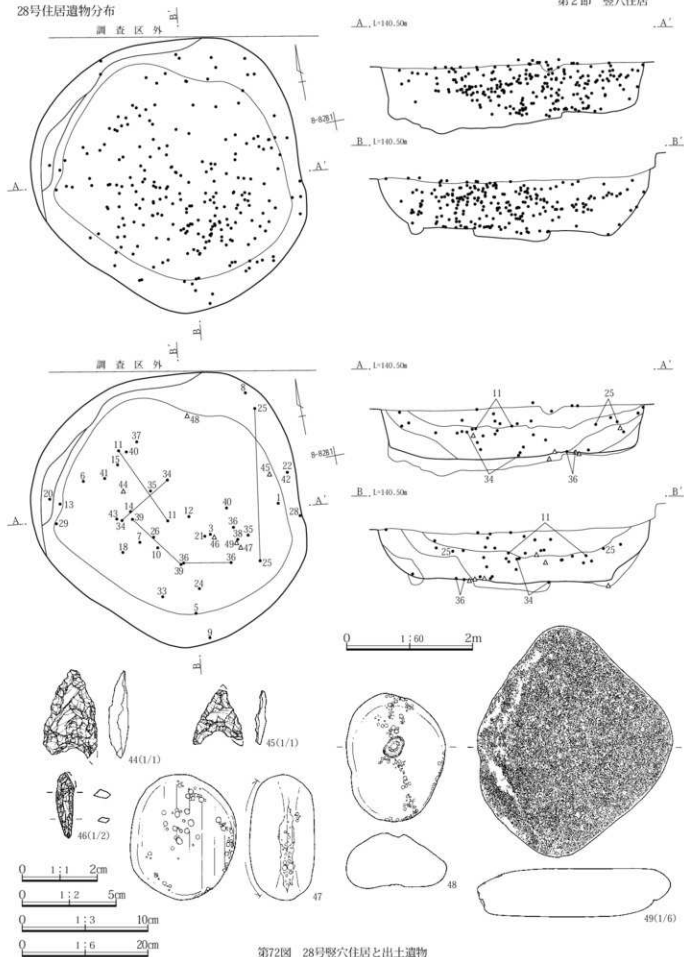


C～G断面

- 1 暗黄褐色土。風化火山灰土まじり。(P1～P5埋土)

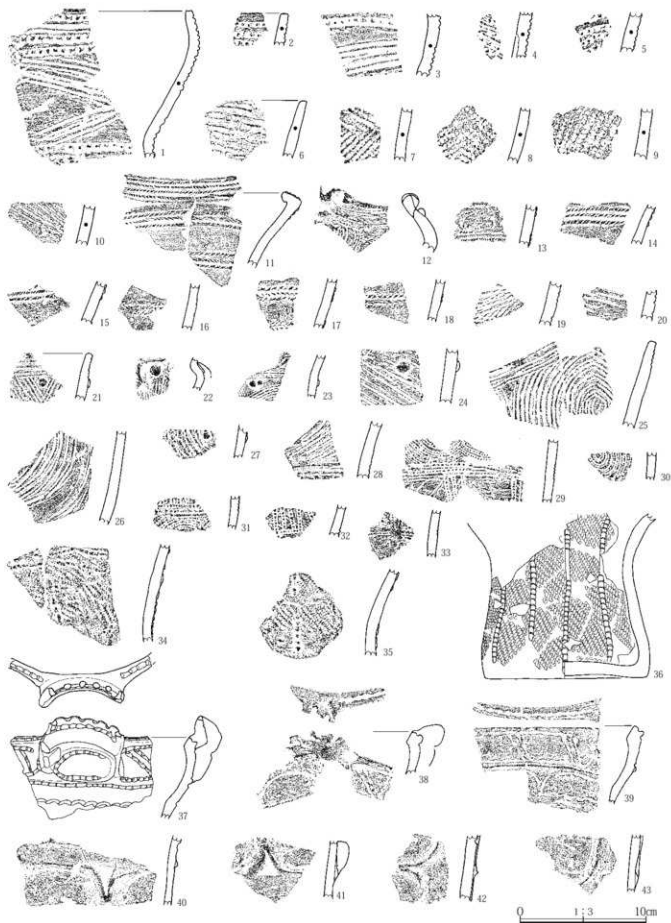


第71図 28号壁穴住居



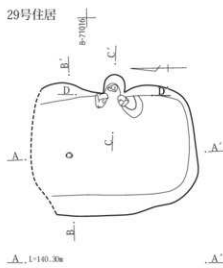
第72図 28号竪穴住居と出土遺物

第3章 調査された遺構と遺物

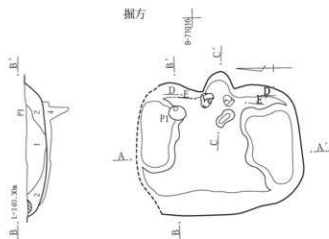


第73図 28号竪穴住居の出土遺物

29号住居



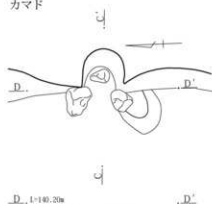
掘方



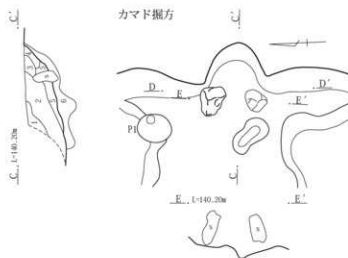
- 1 黒色細粒火山灰土。径5mmの灰色軽石(A・Cを含む)。下底に径20mmの暗灰色火山灰土ブロックを含む。(1・2・3は竪穴住居埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含む。径10～30mmの黄褐色火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗黄褐色火山灰土。黄褐色火山灰土ブロックを含む。
- 4 褐色火山灰土。黄灰褐色風化火山灰土まじり。(掘方埋土)

0 1:60 2m

カマド



カマド掘方



- 1 暗灰色火山灰土。径20mmの黄灰色火山灰土ブロックを含む。灰色軽石を含む。(1～5はカマド埋土)
- 2 黄灰褐色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックを多く含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり径5～10mm大の赤褐色焼土粒を含む。
- 4 赤褐色火山灰土。10mm大の焼土ブロックや黒色火山灰土ブロックを含む。
- 5 暗灰色砂質火山灰土。灰まじりの火山灰土で赤褐色の焼土粒を含む。
- 6 暗灰色火山灰土。風化火山灰土まじり。(6・7はカマド掘方埋土)
- 7 黒褐色火山灰土。灰色軽石を多く含む。

0 1:30 1m

第74図 29号竪穴住居

主軸方位 N88°W

周辺の遺構 周辺10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。1m以内の距離に3号溝が位置することから、同時存在はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有する長方形を呈する竪穴住居である。北側が現代の耕作により失われているが、掘方で床面の輪郭が検出できたことから規模は推定できる。長径は2.70m、短径は2.17m、床面までの深さ0.30m、掘方までの深さ0.39m、面積は3.72㎡である。

埋土 黒色～褐色のAs-CやHr-FAの軽石を含む成層した火山灰土からなる。埋土は南北の壁側から竪穴中央に向かって傾きながらすり鉢状に成層して竪穴を埋めており、最上位は黒色細粒火山灰土からなる。

床面 褐色火山灰土を層厚9cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 IV～V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.06～0.09mである。東壁寄りの北側に1号ピットを検出したほか、北壁側と南壁側に歪んだ方形の浅い窪みが検出されている。1号ピットは、円形を呈し、直径22cm、深さ31cmで底部は尖っている。

カマド 東壁のほぼ中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁手前から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、暗灰色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は44°の勾配で立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁には赤褐色焼土ブロックが点在するのみで、使用面はほとんどが失われている。燃焼部の両壁には長径24～28cmの垂円礫が立った状態で検出された。また燃焼部中央には長径19cmの円礫が同様に立てられた状態で検出した。後者の礫上部の表面は被熱を受けて赤褐色化が顕著である。前者の礫は燃焼部壁を構成する構築材、後者の礫はカマドの支脚と考えられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、黄灰褐色火山灰土の上部と赤褐色焼土ブロックを含む赤褐色火山灰土が成層している。これらは下位より燃焼部の天井部を構築していた燃焼部壁のブロックが滑落して堆積したものと考えられる。カマドの右袖はIV層の火山灰土を緩やかに削りだした部分を基礎として、暗亜褐色火山灰土を薄く貼って構築していることが窺える。カマド焚口周辺の床面から貯蔵穴周辺には、大小の安山岩亜角～垂円礫が出土している。

カマドの幅は75cm+、長さは54cm、焚口の幅34cmである。

貯蔵穴と柱穴 床面や掘方の調査で貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。床面の北東から検出されたピット1は、単独で存在し、位置から考えても主柱には相当しない。竪穴住居は、床面に主柱となる柱穴を持たない構造であると想定される。

遺物 時代を示す遺物は出土しなかった。

時代 埋土に古墳時代後期のテフラを含有し、古墳時代から古代の時期に帰属することは確実であり、他の竪穴住居と規模やカマドの構造などを比較すると平安時代の可能性が高いものと思われる。

30号竪穴住居(第75・76図、PL.25-1～5・47、198頁)

グリッド 8-71区J・K-9・10

主軸方位 N86°W

周辺の遺構 1号竪穴とは8mの距離にあるが、周囲には遺構が存在しない。

形状と規模 東西方向に長軸を有し方形を呈する竪穴住居であるが、南側が調査区外にある。長径は3.27m、短径は3.09m+、床面までの深さ0.21m、掘方までの深さ0.30m、検出された最大の面積は7.68㎡+である。

埋土 暗灰褐色のAs-CやHr-FAの軽石を含む成層した火山灰土からなる。埋土はほぼ水平に成層して竪穴を埋めており、軽石を含む黒色細粒火山灰土のII層に被覆されている。

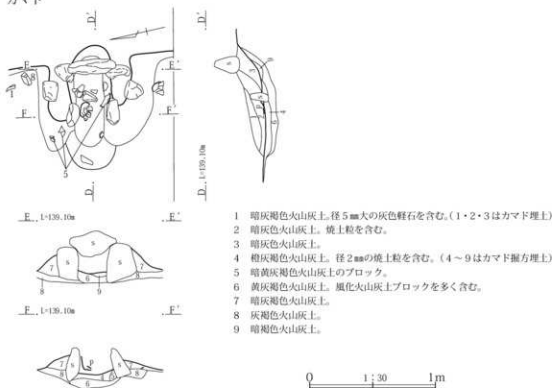
床面 黄灰褐色火山灰土を層厚15cmほど貼って平坦な床を構築している。

掘方 V層の風化火山灰土を浅く掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.05～0.15mで平坦である。

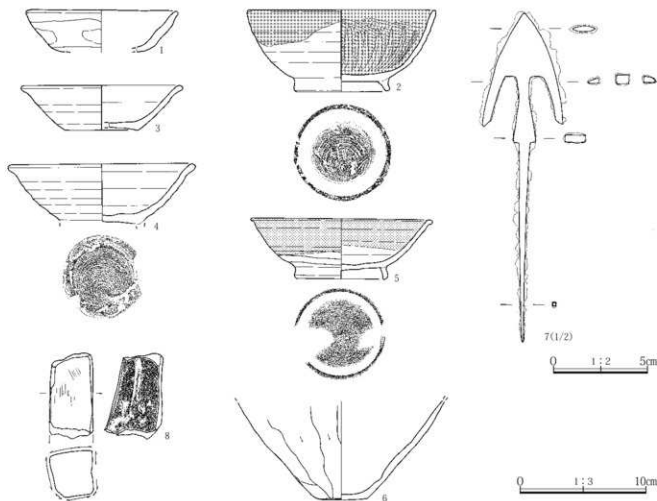
カマド 東壁に位置するが竪穴住居の南側は調査区外にあり、カマドの位置は東壁中央ないし南寄りと推定した。カマドの燃焼部は東壁手前を掘り込んで、壁の内側に構築している。袖や燃焼部は暗灰褐色火山灰土を貼っている。燃焼部壁は38°の勾配で緩く立ち上がるが煙道は失われている。燃焼部壁は構築材の垂角礫が高温酸化によって赤褐色を呈しており被熱の痕跡が著しい。使用面には赤褐色の焼土粒が点在するのみで、灰や焼土は失われている。カマドの使用面からは灰釉陶器の椀(5)の破片が出土した。燃焼部の両壁には長径26～34cmの垂角～垂円礫が立った状態で4点検出され、燃焼部奥には長径39cmの垂角礫が積まれている。また燃焼部中央には



カマド



第75図 30号竪穴住居



第76図 30号竪穴住居の出土遺物

長径16cmの円礫が同様にしてられた状態で検出した。これらの礫の表面は、カマド燃焼部の側面に対して強い被熱を受け赤褐色化が顕著である。前者の立てられた礫は燃焼部壁を構成する構築材、積まれた礫は天井架構材で、後者の礫はカマドの支脚と考えられる。カマド燃焼部を埋める埋土は、暗灰色火山灰土の暗灰褐色火山灰土が成層しているが燃焼部壁のブロックなどの痕跡は認められない。カマドの袖は灰褐色火山灰土を厚く貼って作られ、袖の外縁には長径15cmの垂円礫2点を埋めて構築している。カマド使用面の埋土からは大小の土師器甕が出土しており、カマドの廃絶時に存在した土器であるものと考えられる。

カマドの幅は90cm、長さは75cm、焚口の幅25cmである。
貯蔵穴と柱穴 床面や掘方の調査で貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は調査区外に存在する可能性が高い。また竪穴住居は、床面に主柱となる柱穴を持たない

構造であると想定される。

遺物 床面から土師器の甕(6)や鉄鏝(7)、床面付近から土師器の杯(1)、須恵器の椀(2)が出土し、埋土から須恵器の杯(3)の破片が出土した。またカマド左袖奥の外側の床面から砥石(8)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

第3節 竪穴

1号竪穴(第77図、PL. 25-6・47、198頁)

グリッド 8-71区I・J-11・12

主軸方位 N11°E

周辺の遺構 2号竪穴とは3mの距離にある。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ長方形を呈する竪穴遺構である。長径は5.60m、短径は3.76m、床面までの深さ0.19m、面積は16.90㎡である。

埋土 黒褐色～暗褐色火山灰土が凹凸を埋めるように成層している。埋土にはAs-CやHr-FAの軽石を含む黒褐色火山灰土を含まない。

床面 III～IV層の火山灰土を削りだして平坦な床面を構築しているが、硬化面はない。

柱穴 床面では柱穴は検出されなかった。竪穴の規模から考えて主柱となる柱穴を持たない構造の建物であるとは考えにくい。

遺物 床面から12cm上の埋土から凹石(3)が、埋土から石礫(1・2)が出土した。これらは縄文時代の遺物であるが、現代の畑の耕作痕がおよぶ検出面付近に存在することから混入した遺物である可能性は否定できない。

時代 出土遺物は縄文時代であるが、時代は不明である。

2号竪穴(第78図、PL. 25-7～8)

グリッド 8-71区G・H・I-12・13

主軸方位 N23°E

周辺の遺構 1号竪穴とは3mの距離にある。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ長方形を呈する竪穴遺構である。長径は5.97m、短径は5.58m、床面までの深さ0.13m、面積は28.64㎡である。

埋土 灰色軽石を含む黒褐色火山灰土と暗灰色火山灰土が水平に成層して竪穴を埋めている。

床面 III～IV層の火山灰土を削りだして平坦な床面を構築しているが、硬化面はない。

柱穴 床面では柱穴は検出されなかった。竪穴の規模から考えて主柱となる柱穴を持たない構造の建物である可能性は極めて低い。

時代 遺物の出土がなく、検出面付近の埋土は現代の耕作によってテフラが混入した可能性もあるが、古墳時代

以降のテフラが埋土に混入しているため古墳時代以降である可能性がある。

3号・5号竪穴(第79～85図、PL. 26-1～5・47～60、198～201頁)

グリッド 8-72区A・B-15・16・17

重複 3号竪穴の埋土は49号土坑に切られることから49号土坑より古い。

周辺の遺構 70号土坑とは1m以内の至近距離にある。

形状と規模 発掘調査では歪んだ円形を呈する竪穴遺構の3号竪穴と3号竪穴に重複した5号竪穴として検出したが、整理作業で両遺構の遺物の出土状態や層位などを検討した結果、これらを3号・5号竪穴に統合した。調査時の3号竪穴の長径は5.14m、短径は4.77m、床面までの深さ0.94m、面積は12.66㎡である。調査時の5号竪穴は竪穴の北西部の大部分が3号竪穴により失われたと推定し、残存する最大の長径は5.27m+、短径は3.10m+、床面までの深さ0.55m、残存する最大の面積は3.06㎡+である。

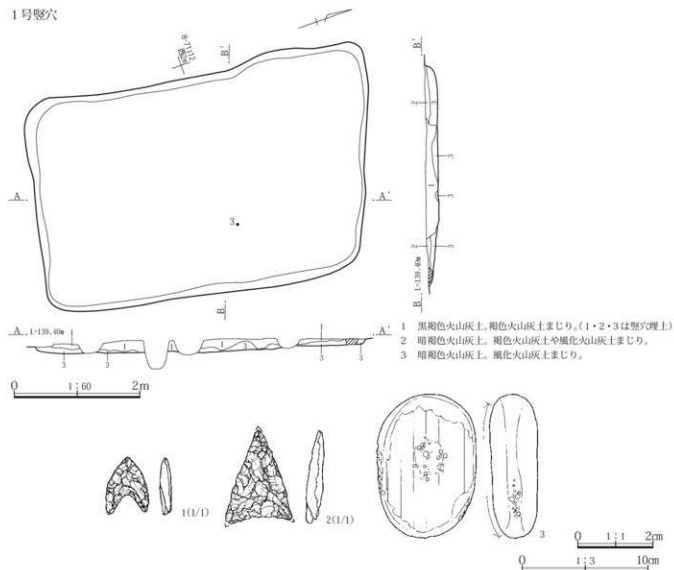
整理作業で統合した3号・5号竪穴の長径は5.91m、短径は4.74m、床面までの深さ1.01m、面積は15.72㎡である。

埋土 3号竪穴の埋土は、下位より黄灰色～黄褐色火山灰土の互層、暗灰～黒褐色火山灰土の互層の順に成層し、As-CやHr-FAの軽石を含まないIII～IV層相当の火山灰土からなる。埋土は壁側から竪穴中央に向かって傾きながらすり鉢状に成層して竪穴を埋めており、上位ほど黒色系火山灰土からなり、下位ほど風化火山灰土のブロックを多く含む。5号竪穴部分の埋土は、褐色火山灰土の互層からなる。

床面 3号竪穴の床面は、風化火山灰土のブロックを含む暗灰色火山灰土を凹凸の窪みを埋めるように床面を構築しているが硬化面はなく、お跡や焼土の痕跡も検出できなかった。5号竪穴の床面はV層の火山灰土を削って床面を構築しており、掘方は見られない。5号竪穴の床面からは長径34cmの安山岩円礫が出土している。

掘方 3号竪穴の掘方は、V層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は最大11cmである。竪穴の北側は不定形の窪みが複数検出されたが、境界は凹凸があり不明瞭である。

1号竪穴



第77図 1号竪穴と出土遺物

柱穴 3号・5号竪穴ともに床面や掘方では柱穴は検出されなかった。竪穴の規模から考えて主柱となる柱穴を持たない構造の建物であるとは考えにくい。竪穴の外側に柱穴を持つ構造の建物である可能性も否定できない。

遺物 3号・5号竪穴からは729点の土器の細片や剥片が出土しているが、その多くは埋土1・3・4に含まれている。竪穴内における遺物の出土位置は、床面付近と床面から90cmの高さに及んでおり幅がある。遺物の全点を地層断面に投影すると埋土1の下底や埋土3の上部、埋土4の下部がやや密になっている。出土した土器片は、細片からなる縄文時代前期の有尾式を含み諸磯b式から諸磯c式が主体である。また中期の五領ヶ台式や阿玉台式の土器片も少量含まれている。埋土から出土した深

鉢(18・22・23・30・31)は数点の細片が接合している。床面付近からは打製石斧(56)が出土したが、1kg近い重量を有する石製品は見あたらない。床面付近20cm土から凹石(63・64)や磨石(66)が出土している。

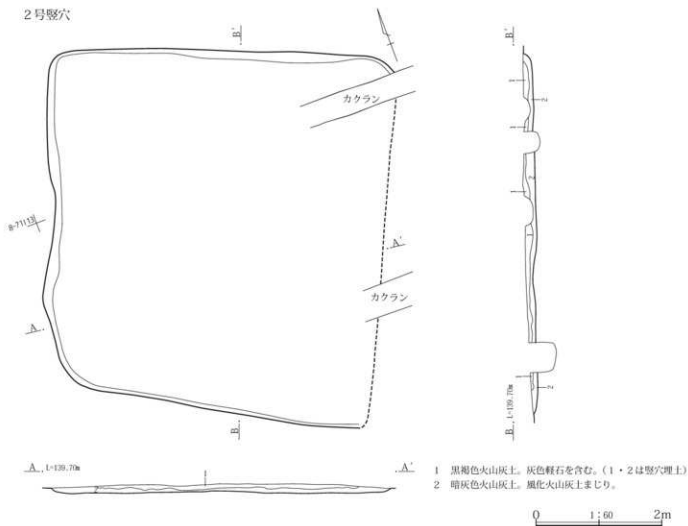
時代 縄文時代前期後半。

4号竪穴(第86～90図、PL.26-6～8・50・51、201・202・203頁)

グリッド 8-71区S・T-19・20

周辺の遺構 28号竪穴住居とは10mの距離にある。58・133号土坑は2mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ正方形を呈する竪穴遺構である。長径は5.05m、短径は5.03m、床面までの深さ0.61m、掘方までの深さ0.74m、面積は10.91㎡である。



第78図 2号竪穴

埋土 下位より黄灰色～黄褐色火山灰土、暗褐色火山灰土の順に成層し、As-CやHr-FAの軽石を含まないⅢ～Ⅳ層相当の火山灰土からなる。埋土は壁側から竪穴中央に向かって傾きながらすり鉢状に成層して竪穴を埋めており、上位ほど黒色系火山灰土からなり、下位ほど風化火山灰土のブロックを多く含む。

床面 風化火山灰土のブロックを含む暗褐色火山灰土を層厚13cmほど貼って床面を構築しているが硬化面はみられず、灰跡や焼土の痕跡も検出されなかった。

掘方 Ⅴ層の風化火山灰土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は3～13cmである。竪穴の中央からは不定形の歪んだ菱形の窪みが検出され、長径28cmの台形の垂円礫や長径18～22cmの垂円礫が4点出土している。

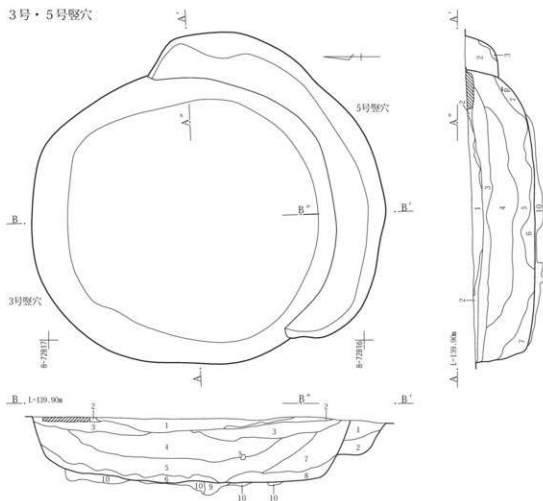
柱穴 床面では柱穴は検出されなかった。竪穴の規模から考えて主柱となる柱穴を持たない構造の建物であると考えるにくい。

遺物 4号竪穴からは1942点の土器の細片や剥片が出土しているが、その多くは主に埋土1・2・3に含まれている。竪穴内における主な遺物の出土位置は、床面付近と床面から70cmの高さに及んでおり幅がある。遺物の全点を地層断面に投影すると埋土1の下底や埋土3の全体が均一にやや密になっており、埋土1・2の下底はやや面的な密集が認められる。出土した土器片は、細片からなるが縄文時代前期の諸磯b式～c式が主体である。また、興津式の深鉢(39・40・41)の細片も含まれている。床面付近の埋土から出土した深鉢(14・33)は数点の細片が接合している。床面付近から石核(53)や多孔石(62)や重量のある石製品が数点出土した。これらは床面付近から出土した石皿(60)や凹石(57)、台石(61)などであり重量が1kgを越えるものが出土している。

時代 縄文時代前期後半。

第3章 調査された遺構と遺物

3号・5号竪穴



3号竪穴

- 1 黒褐色火山灰土。褐色火山灰土ブロックを含む。(1～8は竪穴埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。褐色火山灰土や風化火山灰土ブロックを含む。
- 3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 4 暗灰～暗黄褐色火山灰土。径30～100mmの暗灰色火山灰土ブロックを多く含む。
- 5 暗褐色火山灰土。径50～200mmの黄褐色火山灰土ブロックを多く含むが、ブロックの濃密は不均一で塊状の堆積状態を呈する。
- 6 暗灰色火山灰土。黄灰色風化火山灰土のブロックを含む。
- 7 暗褐色火山灰土。径100mm大の暗灰色火山灰土ブロックを多く含む。

- 8 黄褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 9 暗灰色火山灰土。風化火山灰土まじりで粘土化が著しい。(9・10は掘方埋土)
- 10 黄灰色火山灰土。暗灰色火山灰土ブロックを含む。

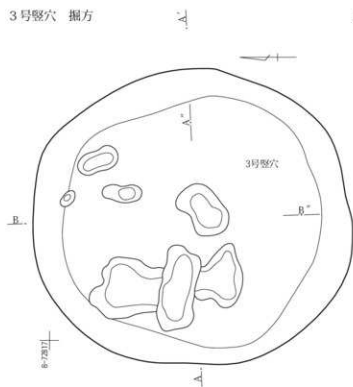
5号竪穴

- 1 褐色火山灰土。径2～5mm白色軽石粒を含む。(1・2・3は竪穴埋土)
- 2 褐色火山灰土。径2mm大の白～灰色軽石粒が点在。
- 3 褐色火山灰土。

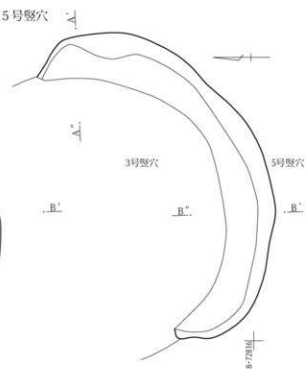
0 1:60 2m

第79図 3号・5号竪穴(1)

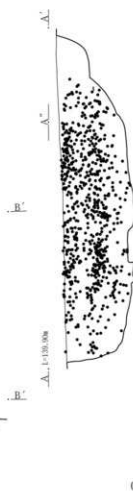
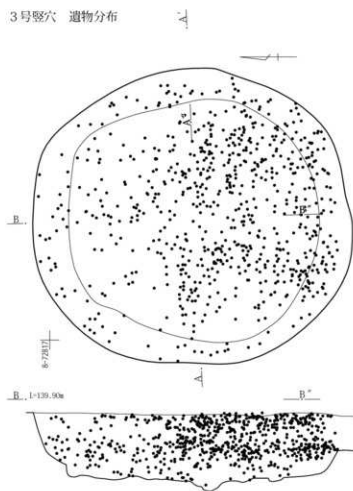
3号竪穴 掘方



5号竪穴



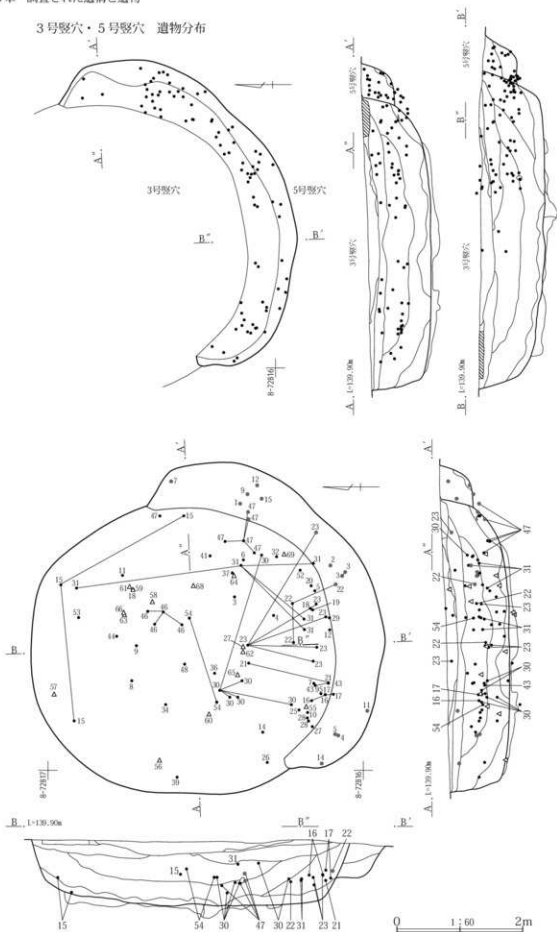
3号竪穴 遺物分布



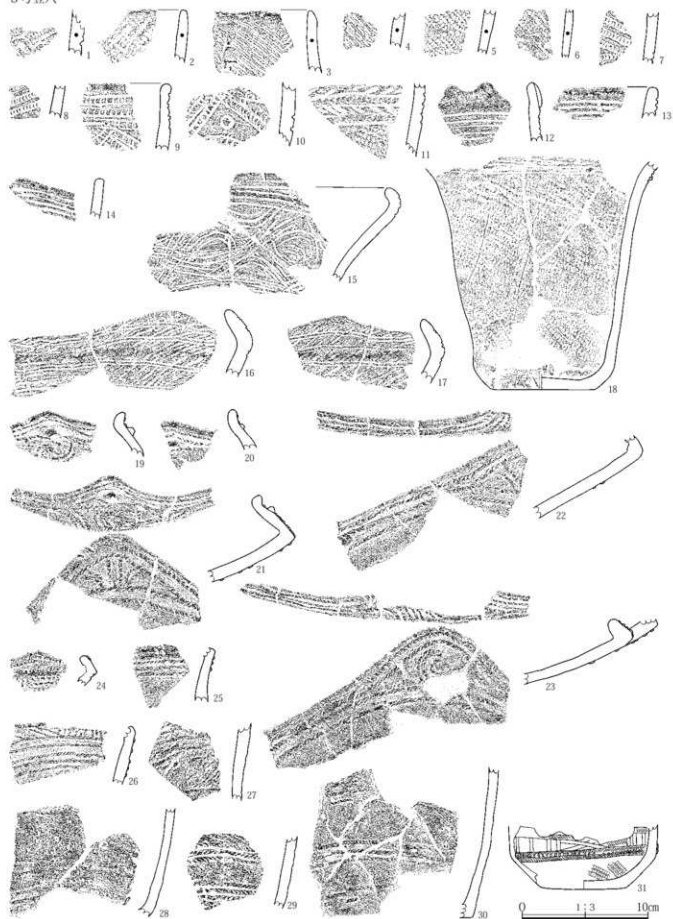
0 1:60 2m

第80图 3号・5号竪穴(2)

3号竪穴・5号竪穴 遺物分布

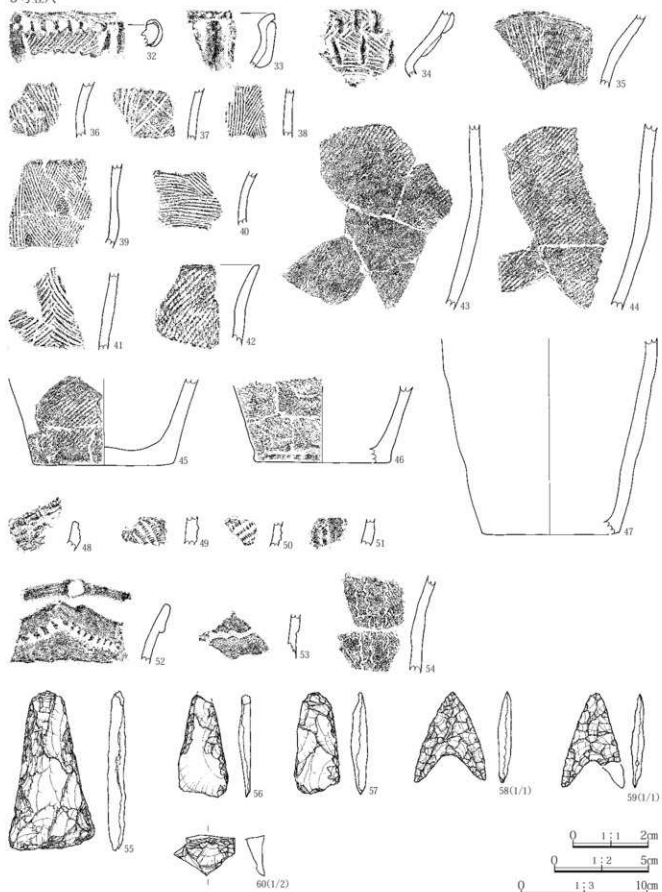


第81図 3号・5号竪穴(3)



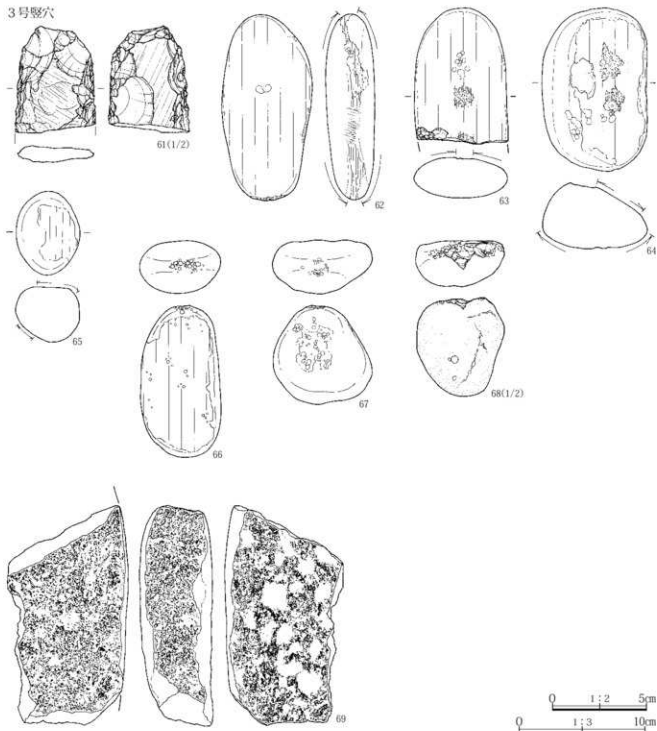
第82図 3号・5号竪穴の出土遺物(1)

3号竪穴



第83図 3号・5号竪穴の出土遺物(2)

3号整穴



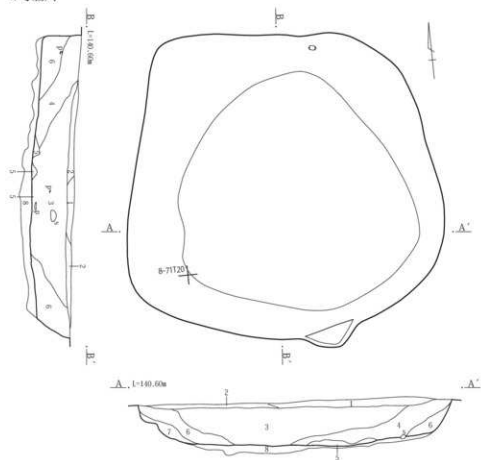
第84図 3号・5号整穴の出土遺物(3)

5号竪穴

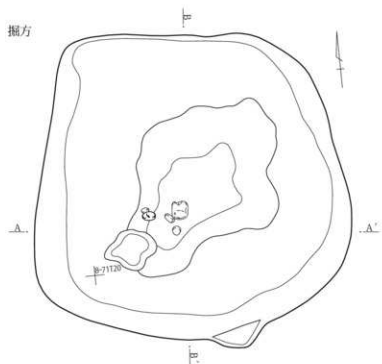


第85図 3号・5号竪穴の出土遺物(4)

4号竪穴



掘方

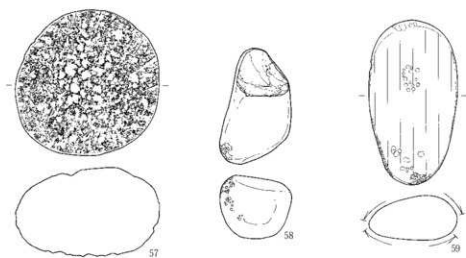
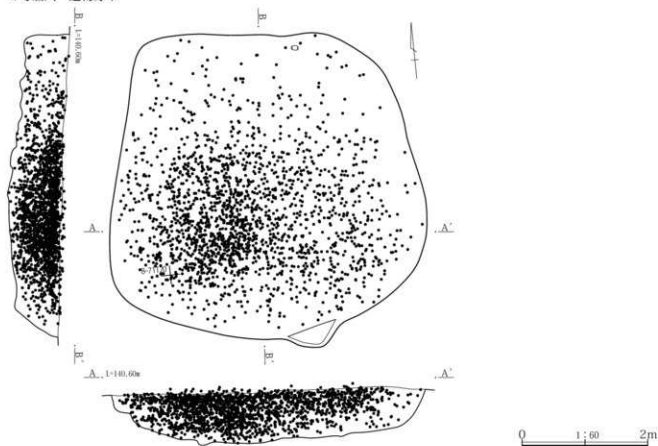


- 1 暗褐色火山灰土。黑色火山灰土まじり。(1～7は竪穴埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗褐色火山灰土。径50～200mmの暗灰褐～黄褐色火山灰土ブロックを多く含むが、ブロックの濃密は不均一で塊状の堆積状態を呈する。
- 4 黄褐色火山灰土。径20～40mm大の暗灰～黄褐色火山灰土ブロックを多く含む。
- 5 黄褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 6 黄褐色火山灰土。暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 7 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 8 暗褐色火山灰土。径50～200mm大の暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(掘方埋土)

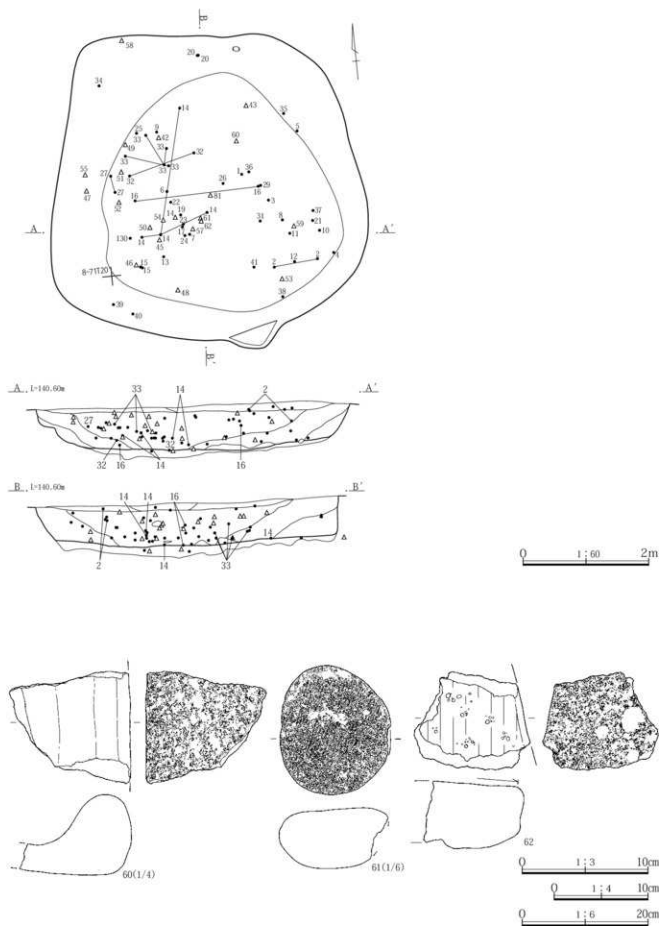
0 1:60 2m

第86図 4号竪穴

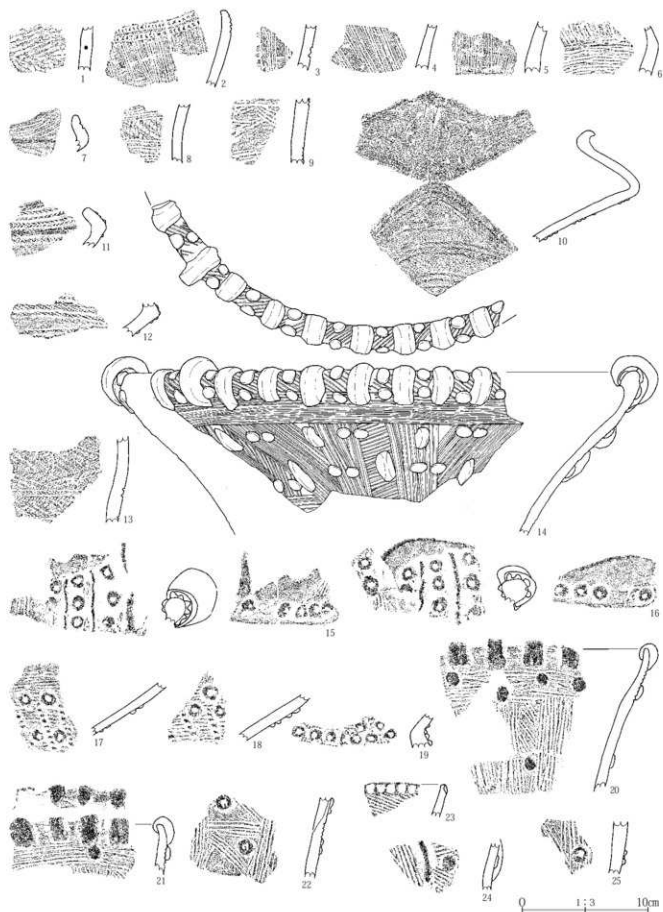
4号竪穴 遺物分布



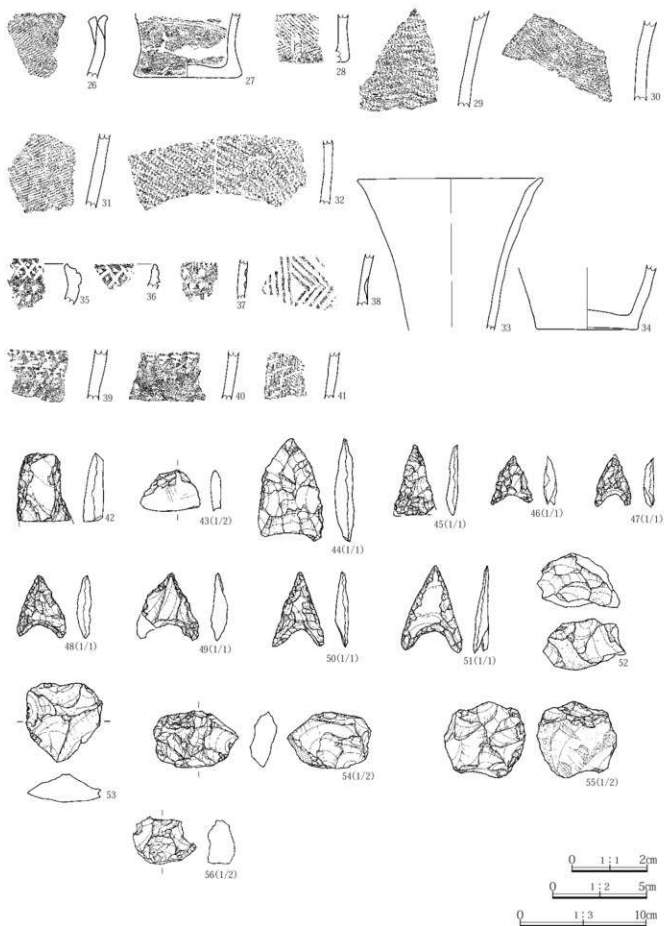
第87図 4号竪穴と出土遺物(1)



第88图 4号竪穴と出土遺物(2)



第89図 4号竪穴の出土遺物(1)



第90図 4号竪穴の出土遺物(2)

第4節 古墳

1号古墳 (第91・92図、Pl. 27-1～5・22、203・204頁)
グリッド 7-80区B-E-7-10

周辺の遺構 周辺9～10mの範囲に竪穴住居はなく孤立して存在する。17号竪穴住居は9m、5号・7号竪穴住居は10mの距離に位置する。また1号・2号竪穴住居は17～19mの距離に位置しており、これらの竪穴住居群は、古墳を取り囲むように分布しており、墳丘を意識して構築された可能性が高い。

検出状況 調査前の調査区の現況は畑地であり、古墳の存在を示すような微地形の高まりなどは確認できなかった。1号古墳周辺の地盤標高は139.72mで、耕作土の層厚は18cm、平安時代末に形成された1d層の下底は地表から50cm下位にあることから、古墳の墳丘は耕作等によって大部分が削られていたと考えられる。

形状と規模 遺構確認面では周堀と主体部の土坑のみが検出され、墳丘盛土はまったく残されていない。周堀の内側の長軸方位と主体部の主軸方位は一致しており、整った周堀の内側の輪郭からも方形を意識して古墳を構築していることは明らかである。確認面での周堀内側の形は、歪んだ正方形に近い長方形を呈する。主体部と周堀内側の長軸は、N50°Wで、周堀内側は北西方向に長軸を呈し、長径は9.75m、短径は9.36mである。

周堀 周堀は残存状態が良好な北東部と北西部で遺構確認面の最大の上幅が2.30～2.96m、溝底の下幅は0.48～0.76m、深さは0.66～0.78mである。周堀外側の平面形状に凹凸があるのに対して、内側の形状は方形の区画が整っている。また、周堀の遺構確認面での形状が三日月形を呈する南西部の周堀は、遺構確認面の最大の上幅が1.86～3.23m、溝の下幅は0.50～0.86m、深さは0.55～0.79mである。歪んだ楕円形を呈する南東部の周堀は、遺構確認面の最大の上幅が2.30～2.35m、溝の下幅は1.65～1.72m、深さは0.35～0.46mで、周堀底の幅が広く歪んだ楕円形の箱形の形状を呈する。

周堀埋土 下位より黄灰色火山灰土ブロックを含む黒褐色火山灰土、暗褐色火山灰土、As-CやHr-FAの軽石を多く含む黒褐色火山灰土の順で成層している。埋土は壁側から溝中央に向かって緩く傾きながら成層し、軽石を含

む黒褐色土が周堀の中央部を埋めている。

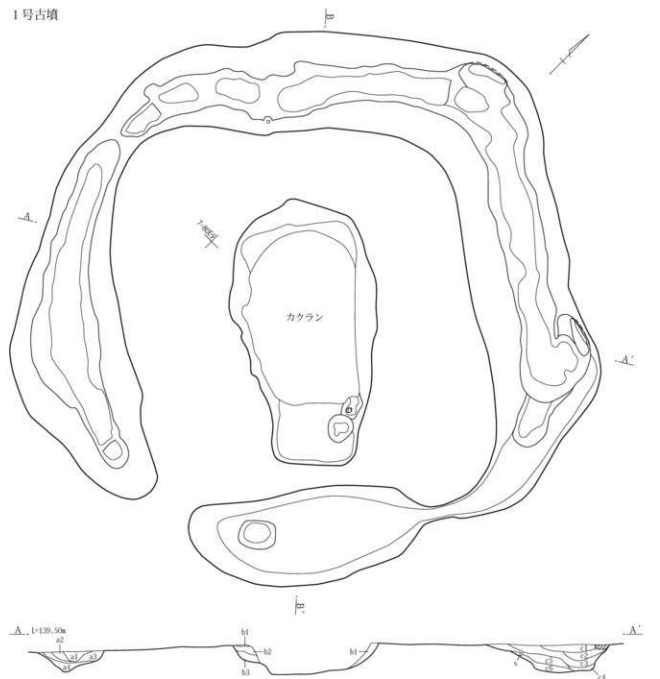
主体部 周堀内側のほぼ中央に位置し、周堀内側縁間は、北東側が2.52～3.19m、南西側が2.94～3.58mである。主体部の長軸方向である北西側は2.22～2.37m、南東側は0.58mと短い。主体部は歪んだ長方形を呈する土坑で、石室の掘方であると考えられる。周堀内側と接近した主体部の南東側が前庭部にあたる可能性がある。主体部の長径は6.75m、短径は2.28～3.91m、深さ0.44mである。主体部中央の長径は4.58m、短径は2.82mにあたる方形の範囲が土壌攪乱を受けて失われている。この範囲は主体部の形状に近似している。

埋土 黄褐色火山灰土ブロックを含む黒褐色火山灰土の互層からなる。埋土には灰色軽石粒が少し含まれる。

遺物 周堀の埋土から土師器の杯(1・2・3)の破片や須恵器の杯(4・5・6)や椀(7・8・9)の破片が出土した。

時代 埋土から出土した土師器は7世紀末～8世紀初頭、須恵器は9世紀の年代を示す。このことから周堀の埋没は7世紀末以前に遡る可能性が高く、古墳は7世紀代に構築された可能性がある。

1号古墳



- a1 黄褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(a1～a4は古墳周埋土)
- a2 暗黄褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- a3 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。径20mm大の風化火山灰土ブロックを含む。
- a4 暗褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。径10～20mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。
- b1 暗褐色火山灰土。径10～30mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(b1・b2・b3は古墳主体部の掘方土)
- b2 黒～暗褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。径5～30mm大の黄灰色

- 風化火山灰土ブロックを含む。
- b3 暗褐色火山灰土。径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- c1 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。風化火山灰土まじり。(c1～c6は古墳周埋土)
- c2 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- c3 暗褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。底部には径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- c4 黄褐色火山灰土。20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。基質は褐色火山灰土。
- c5 黒則～灰褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- c6 黄褐色火山灰土。径10mm大の風化火山灰土ブロックを含む。

0 1:100 5m

第91図 1号古墳

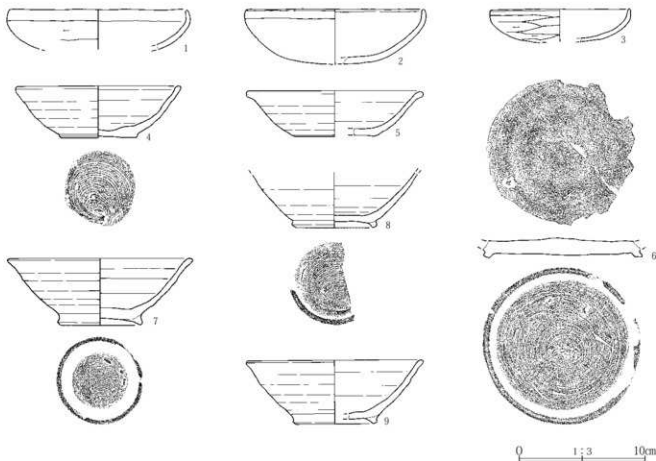
第3章 調査された遺構と遺物



- a1 黒褐色火山灰土。径1～20mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。風化火山灰土まじり。(a1～a5は古墳周堀埋土)
- a2 黒～黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石を少量含む。
- a3 黄褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。
- a4 黄褐色火山灰土。径10～20mm大の風化火山灰土ブロックを多く含む。
- a5 暗褐色火山灰土。径10～20mm大の風化火山灰土ブロックや黒色土ブロックを多く含む。
- b1 褐色火山灰土。(b1・b2・b3は古墳主体部の掘方埋土)

- b2 黄褐色火山灰土。径10～20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックや暗灰色火山灰土ブロックを含む。
- b3 黄褐色火山灰土。径10～20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。基質は暗灰色火山灰土。
- c1 褐色火山灰土。灰色軽石(As-C, Hr-FA)を少量含む。風化火山灰土まじり。(c1・c2・c3は古墳周堀埋土)
- c2 黒褐色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- c3 黄褐色火山灰土。径5～10mm大の風化火山灰土ブロックを含む。

0 1:100 5m



第92図 1号古墳と出土遺物

第5節 道

1号道(第93図、PL. 28-1・52、204頁)

グリッド 7-80区J-M-9・10

主軸方位 N78°E

周辺の遺構 8号竪穴住居とは1mの至近距離にある。6号竪穴住居とは4mの距離にある。竪穴住居の主軸方位と遺構の長軸方位が近似するのは、7号・17号竪穴住居である。1号道の走行方向である北東-南西方向の延長部には同時代の竪穴住居が見られないことから、周辺の竪穴住居は1号道を意識して構築された可能性がある。

形状と規模 北東東方向に長軸を有する2条の溝からなる道状遺構である。溝間の内側は、2.43～2.60m、溝間の外側は3.93～4.27mで平行である。南側の溝の長さは16.40m、上幅は0.88～1.00m、下幅は0.13～0.37m、深さ0.31～0.42mで、溝の底は凹凸があるが、ほぼ水平である。北側の溝の長さは15.15m、上幅は0.53～0.67m、下幅は0.15～0.27m、深さ0.20～0.49mで、溝の底は凹凸があるが、ほぼ水平である。

埋土 As-CやHr-FAの灰色軽石を含む暗灰色火山灰土が溝を埋め、底面には黒色火山灰土の薄層が見られる。

道路面 遺構確認面ではⅢ～Ⅳ層の境界付近で道路を構築した面を確認したが、硬化面などは検出されなかった。南側の溝の埋土から土師器の杯(1)や甕(4)の破片が出土した。北側の溝の底22cm上からは完形の須恵器の椀(3)や12cm上からは杯(2)の破片が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

第6節 溝

1号溝(第94図、PL. 28-2)

グリッド 8-72区D・E-14・15

主軸方位 N62°E

重複 なし

周辺の遺構 73号・74号・75号土坑とは5mの距離にある。周辺にある遺構で主軸方位が近似するものはない。

形状と規模 全長は6.40mで東北東から西南西へ走り、調査区外へ延びている。検出された上下幅は0.30

～1.37m、深さ0.07～0.43mである。東端と西端の底面比高差は0.74mで西に向かって勾配が認められる。溝の断面形状は浅い皿状を呈する。

埋土 暗灰色火山灰土の互層からなる。埋土に水流の痕跡を示す堆積物は認められないが、調査区西側の谷に向かって排水するための溝である可能性がある。

時代 出土遺物がなく、埋土に年代を示すテフラも混入していないため時代は不明である。

2号溝(第94図、PL. 28-3)

グリッド 8-71区N・O-15・16

主軸方位 N2°W

重複 3号溝とほぼ同時期の遺構である可能性が高い。

周辺の遺構 121号・122号土坑とは3mの距離にある。周辺にある遺構で主軸方位が近似するものはない。

形状と規模 全長は1.8mで南北方向に走行し、3号溝と合流している。北端は現代の耕作により失われており、断片的にしか分布しない。検出された上下幅は1.35～1.56m、深さ0.20mである。分布が断片的なため勾配は不明であるが、地形的には北から南に流れる溝であると想定される。溝の断面形状は浅い皿状を呈する。

埋土 灰色軽石を少量含む暗灰色火山灰土の互層からなる。埋土に水流の痕跡を示す堆積物は認められないが、3号溝に排水するための溝である可能性がある。

時代 出土遺物がなく、埋土にはHr-FAの軽石が混入し、As-Bの軽石粒が含まれないため時代は古代の可能性はある。

3号溝(第94図、PL. 28-4)

グリッド 8-71区E-T-15・8-72区A-15

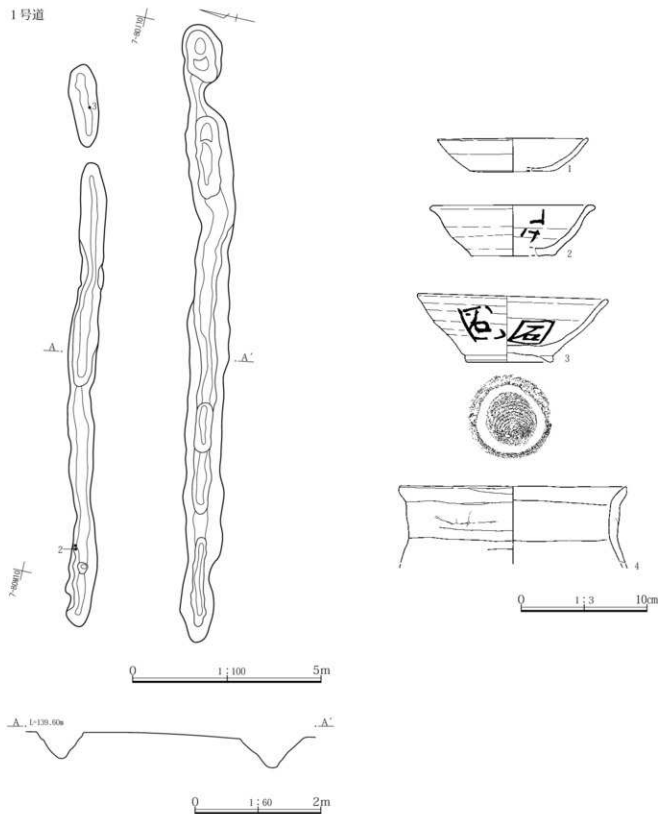
主軸方位 N89°E

重複 2号溝とほぼ同時期の遺構である可能性が高い。123号土坑を切るのので、土坑よりも新しい。

周辺の遺構 至近距離に土坑群や竪穴住居が検出されるが、重複はないので遺構群の分布を規制する土地の境界の役割を持つ溝である可能性がある。

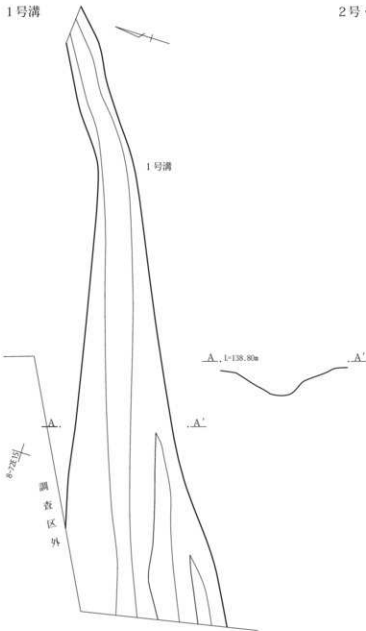
形状と規模 全長は75.04mで東西に方向に走行し、2号溝と合流している。東端は現代の耕作により失われている。検出された上下幅は1.17～1.50m、深さ0.03～0.21mである。東端と西端の底面比高差は0.36mで西に

1号道

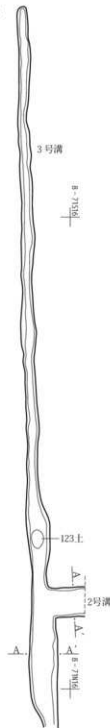


第93図 1号道と出土遺物

1号溝



2号・3号溝



2号溝

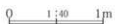


- 1 灰褐色火山灰土。径20～50mm大の灰色火山灰土ブロックを含む。(1・2・3は埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。灰色軽石を少量含む。
- 3 暗黄褐色火山灰土。黄褐色火山灰土ブロックを含む。

3号溝



- 1 暗灰色火山灰土。(1・2は埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含む。



第94図 1号・2号・3号溝

第3章 調査された遺構と遺物

向かって勾配が認められる。溝の断面形状は浅い皿状を呈する。

埋土 灰色軽石を含む暗灰色火山灰土の互層からなる。埋土に水流の痕跡を示す堆積物は認められない。2号溝とともに排水や土地の区画を示すための溝である可能性がある。

時代 出土遺物がなく、埋土にはHr-FAの軽石が混入し、As-Bの軽石粒が含まれないため時代は古代の可能性はある。

4号溝(第95図、PL.28-5~6、204頁)

グリッド 7~80区T-15・16

主軸方位 N 6°E

重複 なし

周辺の遺構 43号土坑に5mの距離にある。

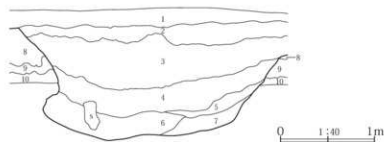
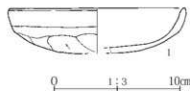
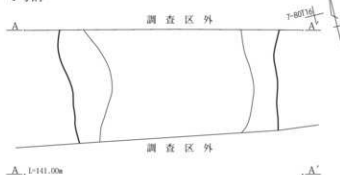
形状と規模 全長は1.20mで東北東から西南西へ走行し、北側は調査区外へ延び南側は5m未満で殲滅していると考えられる。検出された上下幅は2.12~2.34m、深さ0.36~0.59mである。北端と南端の底面比高差は0.23mで南に向かって19%の急な勾配が認められる。溝の断面形状は歪んだ椀形状を呈する。

埋土 黒色~暗灰色火山灰土が緩く傾いて、谷を覆いながら成層している。埋土に水流の痕跡を示す堆積物は認められないことや、南側に急勾配の傾斜を持ち5m未満の延長内で殲滅することから溝状の土坑である可能性が高い。

遺物 埋土から土師器の杯(1)の破片が出土した。

時代 奈良時代8世紀中頃。

4号溝



- 1 灰色耕作土。Ia層
- 2 黒褐色火山灰土。灰色軽石を含む。(2~7は埋土)
- 3 暗褐色火山灰土。
- 4 黒褐色火山灰土。灰色軽石が点在。
- 5 暗褐色火山灰土。
- 6 黒褐色~暗褐色火山灰土。風化火山灰土ブロックを含む。
- 7 暗褐色火山灰土。
- 8 黒褐色火山灰土。灰色軽石(Hr-FAやAs-C)を含む。II層
- 9 暗褐色火山灰土。9~10はIII層
- 10 暗灰色火山灰土。
- 11 暗黄灰色火山灰土。IV層

第95図 4号溝と出土遺物

第7節 井戸

1号井戸(第96図、Pl. 27・7・27・8・52、204頁)

グリッド 7-80区J・K-12・13

周辺の遺構 8号竪穴住居とは5m、9号竪穴住居とは6mの距離にあり、9号竪穴住居の南壁の延長上に井戸の北端が接し、8号竪穴住居のほぼ真北に位置する。

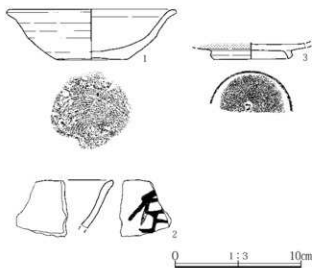
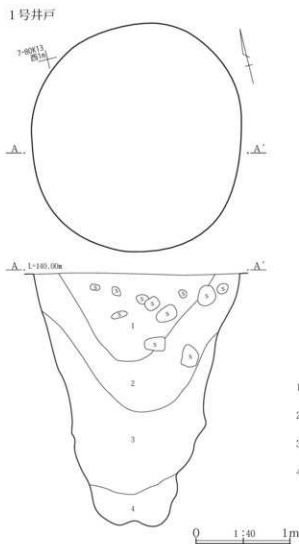
形状と規模 検出平面は少し歪んだ円形を呈し、断面形状は円筒形で検出面付近が上部に広がる深鉢形に似た形である。長径は2.43m、短径は2.24m、深さ2.66mで、たち割調査を行い未完掘である。井戸の底は中部ローム層と泥炭堆積物に達しており、その境界にある湧水帯で

掘止めにしたものと考えられる。

埋土 暗灰色火山灰土の互層からなる。埋土の上部は、人頭大の安山岩垂円礫を含む黒色火山灰土からなり、As-CやHr-FAの灰色軽石を多く含む。中部は灰褐色風化火山灰土ブロックを含む暗灰褐色火山灰土からなり上位は垂円礫や灰色軽石を含む火山灰土である。下部は、暗灰色砂質火山灰土でシルト質である。埋土から出土した安山岩垂円礫は、長径10～28cmで埋土の中央部に多く出土している。

遺物 埋土から須恵器の杯(1)、椀(2)や灰釉陶器の皿(3)の破片が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。



- 1 黒～暗灰色軽石まじり火山灰土。As-CやHr-FAの灰色軽石を多く含む。径20～50cmの垂円礫を含む。(1～4は埋土)
- 2 暗灰～灰褐色火山灰土。As-CやHr-FAの灰色軽石を含む。径50cm大の垂円礫を含む。
- 3 暗灰褐色礫まじり火山灰土。径20cm大の垂円礫や径5～10cm大の黄灰褐色風化火山灰土ブロックを含む。
- 4 暗灰色砂質土。

第96図 1号井戸と出土遺物

第8節 土坑

1号土坑(第97図、Pl. 29-1)

グリッド 7-80区M-14

周辺の遺構 1号~4号土坑は、9号・10号竪穴住居の南西に分布し、半径4mの範囲に広がる。

主軸方位 N4°E

形状と規模 南北方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.16m、短径は0.85m、深さは0.44mである。

埋土 暗灰色火山灰土の互層からなり、灰色軽石粒が点在する。埋土の上部は黄灰褐色火山灰土のブロックを含む。

時代 埋土にAs-CやHr-FA起源の灰色軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

2号土坑(第97図、Pl. 29-2、204頁)

グリッド 7-80区N-13

周辺の遺構 1号~4号土坑は、9号・10号竪穴住居の南西に分布し、半径4mの範囲に広がる。

主軸方位 N85°W

形状と規模 東西方向に長軸を有する隅の丸い歪んだ長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は1.08m、短径は0.83m、深さは0.16mである。

埋土 主に黄灰褐色火山灰土からなり、Hr-FAの白色軽石を含む。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)の破片が出土した。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であり、遺物から古墳時代後期から平安時代に帰属すると考えられる。

3号土坑(第97図、Pl. 29-3)

グリッド 7-80区N-13

周辺の遺構 1号~4号土坑は、9号・10号竪穴住居の南西に分布し、半径4mの範囲に広がる。

形状と規模 東西方向に長軸を有する楕円形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は0.83m、短径は0.75m、深さは0.14mである。

埋土 下位より黄灰色火山灰土、軽石を含む黄褐色火山

灰土と暗褐色火山灰土からなり、Hr-FAの白色軽石を含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

4号土坑(第97図、Pl. 29-4)

グリッド 7-80区N-12

周辺の遺構 1号~4号土坑は、9号・10号竪穴住居の南西に分布し、半径4mの範囲に広がる。

形状と規模 円形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は0.91m、短径は0.86m、深さは0.27mである。

埋土 下位より黄褐色火山灰土、暗褐色火山灰土からなり、Hr-FAの白色軽石を含む。下底に直径30cm大の椀褐色焼土ブロックを含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

5号土坑(第97図、Pl. 29-5・52、204頁)

グリッド 7-80区O・P-13

周辺の遺構 1号~4号土坑の西に位置し、3号土坑からは3mの距離にある。主軸方位は、9号竪穴住居に近似する。

主軸方位 N85°W

形状と規模 東西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は3.25m、短径は1.40m、深さは0.49mである。

埋土 下位より暗灰色火山灰土、軽石を多く含む暗褐色~黒褐色火山灰土からなり、As-CやHr-FAの白色軽石を多く含むことから、埋土はII層相当に比定される。

遺物 須恵器の杯(1)が底から27cm、鉄滓(3)が29cm上から、埋土からは須恵器の杯(2)の破片が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

6号土坑(第97図、Pl. 29-6)

グリッド 8-71区D-14・15

周辺の遺構 周辺10mの範囲に遺構はなく、孤立して存在する。

主軸方位 N2°E

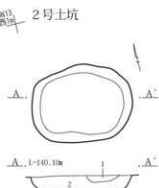
形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、北側は調査区外にある。断面形状は箱形を呈する。長径は1.72

1号土坑

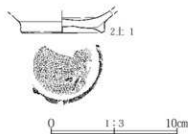


- 1 黒褐色火山灰土。径1～10mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。風化火山灰土まじり。(1・2は埋土)
- 2 褐色火山灰土。少量の灰色軽石を含む。

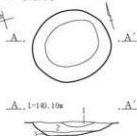
2号土坑



- 1 暗灰色細粒火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2は埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。径5mmの灰色軽石を含む。

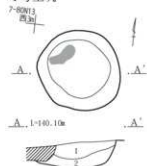


3号土坑



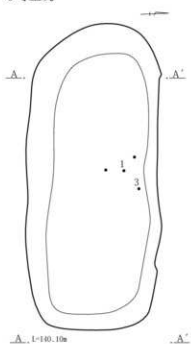
- 1 暗灰色細粒火山灰土。径1～2mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2・3は埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石を含む。
- 3 黄灰色火山灰土。

4号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2は埋土)
- 2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。径5mmの灰色軽石を含む。

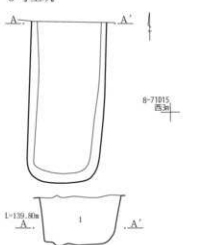
5号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石(As-C, Hr-FA)を含む。(1・2・3は埋土)
- 2 黒褐色火山灰土。径1～5mmの灰色軽石を含む。径100mm大の暗灰色火山灰土ブロックを含む。
- 3 暗灰色火山灰土。径5mm大の風化火山灰土粒を含む。



6号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。灰色軽石が点在する。



第97図 1号～6号土坑と2号・5号土坑の出土遺物

第3章 調査された遺構と遺物

m+、短径は0.80m、深さ0.51mである。

埋土 北壁の地層断面の観察では、土坑はⅡ層とⅢ層の層理面から掘り込まれている。埋土は軽石少量を含む暗灰色火山灰土からなり、As-CやHr-FAの軽石を含むことからⅡ層相当に比定される。

時代 埋土に含まれるテフラから古墳時代以降で平安時代までの時代に帰属する可能性がある。

7号土坑(第98図、PL. 29-7)

グリッド 8-71区F-12

周辺の遺構 19号土坑の北東に位置し、2mの距離にある。

主軸方位 N7°E

形状と規模 南北方向に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は4.17m、短径は0.66m、深さ0.14mである。

埋土 黄灰色火山灰土のブロックや軽石を含む暗灰色火山灰土からなる。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

8号土坑(第98図、PL. 29-8)

グリッド 8-71区G-14・15

周辺の遺構 3号溝と13号土坑の間に位置し、2～3mの距離にある。

主軸方位 N4°E

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は2.95m、短径は1.00m、深さ0.17mである。

埋土 黄灰色風化火山灰土のブロックを含む暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

9号土坑(第98図、PL. 29-9)

グリッド 8-71区J・K-14

周辺の遺構 132号土坑の東北東に位置し、3mの距離にある。

主軸方位 N10°E

形状と規模 南北方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.08m、短径は0.76m、

深さ0.30mである。

埋土 黄灰色火山灰土ブロックを含む暗褐色火山灰土と暗灰色火山灰土により成層している。下位のブロックを含む土壌は、人為的に埋積された可能性もある。

時代 時代は不明である。

10号土坑(第98図、PL. 29-10)

グリッド 8-71区L・M-12

周辺の遺構 調査区の南西部にあたる東西65m、南北12mの範囲には10号土坑に形状が近似した複数の短冊状の土坑が検出されている。これらの土坑群は東西方向や南北方向の主軸方位を有しており、相互に関係を有する可能性のある遺構群として扱う。これらは7号・10号・11号・12号・14号・19号・21号・22号・29号～35号・119号・120号土坑であり、以後は短冊形土坑群と仮称する。

主軸方位 EW

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.42m、短径は0.80m、深さ0.26mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり塊状無層理の層相を呈し、灰色軽石を含まない。

時代 時代は不明である。

11号土坑(第98図、PL. 29-11)

グリッド 8-71区M-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、10号・14号土坑に近い。

主軸方位 N3°W

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.14m、短径は0.69m、深さ0.31mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石や下底付近に黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

時代 時代は不明である。

12号土坑(第98図、PL. 29-12)

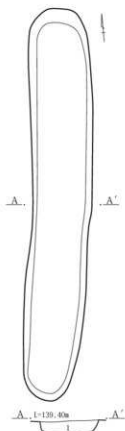
グリッド 8-71区N・O-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、14号・30号土坑に近い。

主軸方位 N82°W

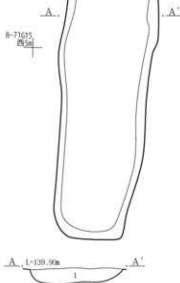
7号土坑

φ-7113
西5m



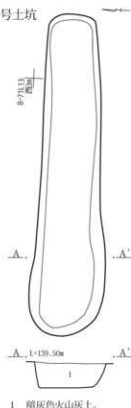
- 1 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含み、径10mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

8号土坑



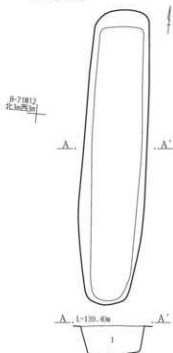
- 1 暗灰色火山灰土。径20mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

10号土坑



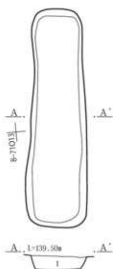
- 1 暗灰色火山灰土。

11号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含み、径10mm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを下底に含む。

12号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径10mm大の黄褐色火山灰土ブロックを含む。

9号土坑



- 1 暗灰色細粒火山灰土の上層と暗褐色火山灰土の下層からなる。下層には径20～30mm大の黄褐色火山灰土ブロックを多く含む。

0 1:40 1m

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い箱形を呈する。長径は2.32m、短径は0.65m、深さ0.15mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石や黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

時代 時代は不明である。

13号土坑(第99図、PL. 29-13)

グリッド 8-71区G・H-13・14

周辺の遺構 8号土坑の南に位置し、2mの距離にある。

主軸方位 N3°E

形状と規模 南北に長軸を有する歪んだ円形を呈し、断面形状は半月形の上部と柱状の下部からなる。長径は1.07m、短径は0.88m、深さ0.34mである。

埋土 成層した黄灰色風化火山灰土ブロックや灰色軽石を含む暗灰色火山灰土からなり、火山灰土のブロックは不淘汰である。成層した埋土は最下底のピットを埋めた黒褐色火山灰土を覆っており、人為的に埋められた土壌である可能性がある。土坑埋土は、柱穴の掘方又は柱痕を抜き取り後の埋め土の可能性もある。

柱穴 土坑底に2基のピットが検出された。ピットは南側が長径は37cm、短径は24cm、深さ73cmである。北側が長径は38cm、短径は30cm、深さ71cmである。

遺物 埋土から近世の時期に属する国産施軸陶器の小片が出土している。

時代 埋土に近世の陶器片を含むことから近世以降である。

14号土坑(第99図、PL. 29-14)

グリッド 8-71区M・N-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、11号・12号土坑に近い。

主軸方位 N88°E

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.05m、短径は0.62m、深さ0.33mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、暗褐色～黄褐色火山灰土ブロックを多く含み、不淘汰である。埋土は人為的に埋められた可能性がある。

時代 時代は不明である。

15号・16号土坑(第99図)

グリッド 8-71区M-14・15

重複 15号土坑は16号土坑の埋土を切るが、境界面は極めて不明瞭でほぼ同時と考えられる。15号・16号土坑は18号土坑に切られるので、18号土坑より古い。

周辺の遺構 調査区の西部中央にあたる、3号溝南側の東西21m、南北9mの範囲には15号土坑をはじめとして形状や大きさが異なる土坑が複数検出されている。これらの土坑は3号溝から6mほどの範囲から検出され東西方向に分布している。これらの土坑は3号溝の南側に位置し、短冊形土坑群とも平行して分布することから、相互に関係を有する可能性のある遺構群として扱う。これらは15号～18号・23号～28号・41号・117号・118号土坑であり、以後は3号溝南土坑群と仮称する。なお、本土坑群の16号土坑からは近世の陶器片が、23号・26号・27号土坑からは近現代の陶磁器片が出土している。このことから3号溝南土坑群の時代は近世～近現代の時期になる可能性が高い。

主軸方位 N3°E

形状と規模 15号・16号土坑とも南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。15号土坑は、長径は3.38m、短径は0.83m、深さ0.30mである。16号土坑は、西側が15号土坑により失われているが、長径は4.26m、短径は0.40m、深さ0.28mである。

埋土 15号・16号土坑の埋土は暗灰色火山灰土からなり、15号土坑埋土には灰色軽石の粒が含まれる。

遺物 16号土坑の埋土から近世の時期に属する国産施軸陶器の小片が出土している。

時代 埋土に近世の陶器片を含むことから近世以降である。

17号土坑(第99図)

グリッド 8-71区L・M-14・15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、15号・16号土坑に1mの至近距離にある。

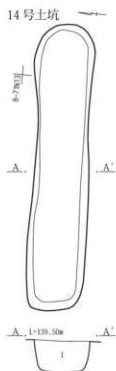
主軸方位 N84°W

形状と規模 東西に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は鉢形を呈する。長径は0.98m、短径は0.79m、深さ0.32mである。

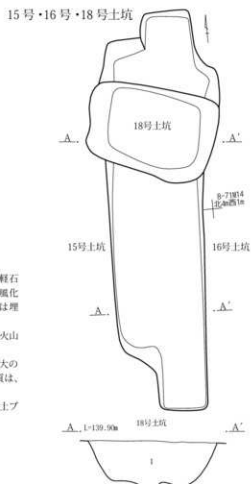
埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石の粒が含まれ



- 1 暗灰色火山灰土。径2～10mm灰色軽石(As-C、Bt-FA)を多く含む。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。(1～4は埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。径10mm黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。
- 3 灰褐色火山灰土ブロック。径150mm大の風化火山灰土ブロックからなり基質は、暗灰色火山灰土。
- 4 黒褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。



- 1 暗灰色火山灰土。径10～20mm大の暗灰～黄褐色火山灰土ブロックを多く含む。



- 1 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含む。

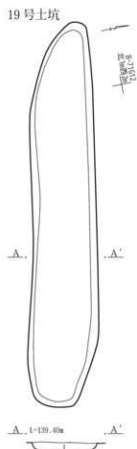


- 1 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含む。(15号土坑埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。(16号土坑埋土)

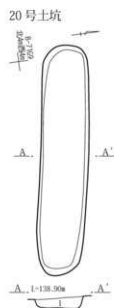
8-71815
西1m



- 1 径5～20mm黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。



- 1 暗灰色砂質火山灰土。径2mm大の灰色軽石を多く含む。基質は粗粒の火山灰質の土壌である。



- 1 暗灰色砂質火山灰土。灰色軽石を含む。基質は粗粒の火山灰質の土壌である。

0 1:40 1m

第99図 13号～20号土坑

る。

時代 埋土にBr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

18号土坑(第99図)

グリッド 8-71区M-14・15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、17号土坑は1mの至近距離にある。

主軸方位 N75°W

重複 18号土坑は15号・16号土坑を切るので、15号・16号土坑より新しい。

形状と規模 北西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は下底が凹凸を呈する半月形を呈する。長径は1.37m、短径は0.92m、深さ0.43mである。

埋土 暗灰色細粒火山灰土からなり、黄灰色風化火山灰土ブロックを下半部を含む。

時代 近世以降の時期に帰属する15号・16号土坑よりも新しいので、近世以降の時期に帰属するが、時代は不明である。

19号土坑(第99図、PL.29-15)

グリッド 8-71区F・G-11・12

周辺の遺構 7号土坑の南西に位置し、2mの距離にある。

主軸方位 N76°W

形状と規模 北西方向に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は3.99m、短径は0.74m、深さ0.89mである。

埋土 暗灰色砂質火山灰土からなり、基質は暗灰色粗粒火山灰からなる。

時代 As-B起源の火山灰土からなり、1c層相当の埋土である。遺構の帰属する時代は、平安時代以降である。

20号土坑(第99図、PL.30-1)

グリッド 8-71区G-9

周辺の遺構 21号竪穴住居の南東に位置し、2mの至近距離にある。

主軸方位 N79°W

形状と規模 東西方向に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は2.44m、短

径は0.51m、深さ0.12mである。

埋土 暗灰色砂質火山灰土からなり、基質は暗灰色粗粒火山灰からなる。

時代 As-B起源の火山灰土からなり、1c層相当の埋土である。遺構の帰属する時代は、平安時代以降である。

21号土坑(第100図、PL.30-2)

グリッド 8-71区H-11

周辺の遺構 21号竪穴住居及び1号・2号竪穴の中間に位置し、2~4mの距離にある。

主軸方位 N9°E

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は1.91m、短径は0.55m、深さ0.08mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、基質はやや粗粒火山灰が多い。1c層相当の埋土である可能性がある

時代 遺構の時代は不明である。

22号土坑(第100図、PL.30-3・52、204頁)

グリッド 8-71区K-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、10号土坑に近い。

主軸方位 N4°E

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.41m、短径は0.60m、深さ0.28mである。

埋土 灰色軽石を含む暗灰色火山灰土からなり、黄褐色火山灰土ブロックを下底を含む。

遺物 埋土から近世の時期に属する国産施釉陶器の小片や鉄釘(1・2)2点が出土している。

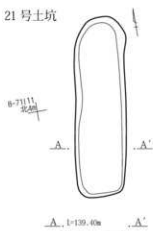
時代 埋土に近世の陶器片を含むことから近世以降である。

23号土坑(第100図、PL.30-4・52、204頁)

グリッド 8-71区L-14・15

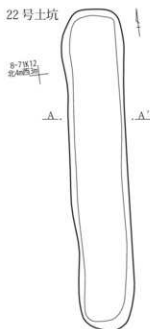
周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、24号・25号土坑は1mの至近距離にある。後述する24号~28号土坑は土坑底面が凹凸に富み、大振りな工具痕とも想定されるように波打っている。これらの土坑は、火山灰土のブロックを多く含む層相の共通

21号土坑



1 暗灰色火山灰土。黄褐色火山灰土ブロックを含む。

22号土坑



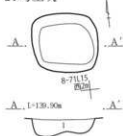
1 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含み、径10～50mm大の黄灰色火山灰土ブロックを含む。

23号土坑



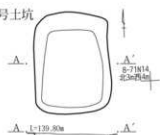
1 暗灰色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

24号土坑



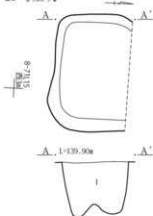
1 暗灰色火山灰土。下底に黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

27号土坑



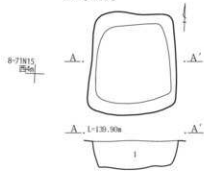
1 暗褐色火山灰土。径30mm大の暗灰色火山灰土ブロックを含む。

25号土坑



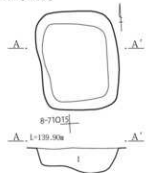
1 暗灰色火山灰土。径10～50mm、最大100mmの黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。

26号土坑



1 暗褐色火山灰土。径10～30mmの暗灰～黄褐色火山灰土ブロックを多く含む。

28号土坑



1 暗灰色火山灰土。径20mm大の暗灰～黄褐色火山灰土ブロックを含む。



0 1:2 5m

0 1:40 1m

第100図 21号～28号土坑と22号・23号土坑の出土遺物

性もみられるので、成因を同じくする土坑群である可能性はある。

形状と規模 不定形に近い方形を呈し、断面形状は下底が凹凸を呈する半月形である。長径は2.00m、短径は1.18m、深さ0.31mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。下底のIV～V層との境界面はシャープである。

遺物 埋土から鉄釘(1)や近現代の時期に属する陶磁器の小片が出土している。

時代 出土遺物から近現代である。

24号土坑(第100図、PL.30-5)

グリッド 8-71区L-15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、23号・25号土坑は1mの至近距離にある。

形状と規模 歪んだ正方形に近い長方形を呈し、断面形状は下底が凹凸を呈する歪んだ半月形である。長径は0.70m、短径は0.63m、深さ0.15mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、黄灰色風化火山灰土ブロックを少し含む。下底のIV層との境界面はシャープである。

時代 時代は不明である。

25号土坑(第100図、PL.30-6)

グリッド 8-71区L-15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、23号・24号土坑は1mの至近距離にある。

主軸方位 N S

形状と規模 東西に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は下底が凹凸に富む箱形を呈する。土坑の北壁は現代の耕作により失われている。長径は1.26m、短径は0.80m、深さ0.55mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、直径3～10cm大の黄灰色風化火山灰土ブロックを含むが不淘汰である。埋土は人為的に埋積された可能性がある。

時代 時代は不明である。

26号土坑(第100図、PL.30-7)

グリッド 8-71区N-14・15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、27号・28号土坑は2mの距離にある。

主軸方位 N 3°W

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.09m、短径は0.92m、深さ0.30mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、直径3cm大の暗褐色～黄褐色火山灰土ブロックを上部に含む。埋土は人為的に埋積された可能性がある。

遺物 埋土から近現代の時期に属する陶磁器の小片が出土している。

時代 出土遺物から近現代である。

27号土坑(第100図、PL.30-8)

グリッド 8-71区N・O-14

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、26号・28号土坑は1～2mの至近距離にある。

主軸方位 N 3°E

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は下底が凹凸に富む箱形を呈する。長径は1.08m、短径は0.80m、深さ0.23mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、直径2cm大の黒褐色～黄褐色火山灰土ブロックを含む。埋土は人為的に埋積された可能性がある。

遺物 埋土から近代の時期に属する陶磁器の小片が出土している。

時代 埋土に近代の陶磁器片を含むことから近代以降である。

28号土坑(第100図、PL.30-9)

グリッド 8-71区N・O-15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、26号・27号土坑は1～2mの至近距離にある。

主軸方位 N S

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は下底が東側に傾斜する鉢形を呈する。長径は1.05m、短径は0.85m、深さ0.26mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、直径1～2cm大の黒褐

色～黄褐色火山灰土ブロックを含む。下底には黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。埋土は人為的に埋積された可能性がある。

時代 時代は不明である。

29号土坑(第101図、PL.30-10)

グリッド 8-71区O-12

重複 29号土坑は30号土坑を切るの、30号土坑より新しい。

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、12号・32号土坑に近い。

主軸方位 N13°E

形状と規模 南北方向に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状はU字形を呈する。長径は1.89m、短径は0.41m、深さ0.23mである。

埋土 灰色軽石まじり暗灰色火山灰土ブロックを含む灰褐色火山灰土からなる。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含む火山灰土ブロックを含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

30号土坑(第101図、PL.30-10)

グリッド 8-71区O・P-12

重複 30号土坑は29号土坑に切られるの、29号土坑より古い。

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、12号・32号土坑に近い。

主軸方位 N85°E

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は2.70m、短径は0.76m、深さ0.13mである。

埋土 灰色軽石を含む灰褐色火山灰土からなる。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

31号土坑(第101図、PL.30-11)

グリッド 8-71区P-11・12

重複 31号土坑は32号土坑を切るの、32号土坑より新しい。

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、33号土坑に近い。

主軸方位 N1°E

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状はU字形を呈する。長径は3.05m、短径は0.64m、深さ0.29mである。

埋土 直径8cm大の暗灰色～黄褐色火山灰土ブロックからなり基質は褐色火山灰土である。埋土に含まれるブロックは不淘汰で、人為的に埋積された可能性がある。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含む32号土坑より新しいので、土坑は古墳時代以降であるが、時代は不明である。

32号土坑(第101図、PL.30-11)

グリッド 8-71区P-11・12

重複 32号土坑は31号土坑に切られるの、31号土坑より古い。

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、33号土坑に近い。

主軸方位 N7°W

形状と規模 南北に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は3.05m、短径は0.64m、深さ0.29mである。

埋土 灰色軽石を含む暗黄褐色細粒火山灰土からなる。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

33号土坑(第101図、PL.30-12)

グリッド 8-71区P-11

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、31号・32号土坑に近く、31号土坑の長軸方向に延伸する。

主軸方位 N5°E

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は鉢形を呈する。長径は3.62m、短径は0.60m、深さ0.30mである。

埋土 灰色軽石を含む灰褐色火山灰土からなる。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

34号土坑(第101図、PL.30-13)

グリッド 8-71区Q-11・12・13

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑

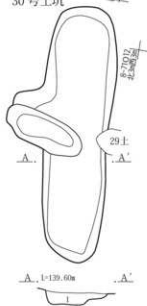
第3章 調査された遺構と遺物

29号土坑



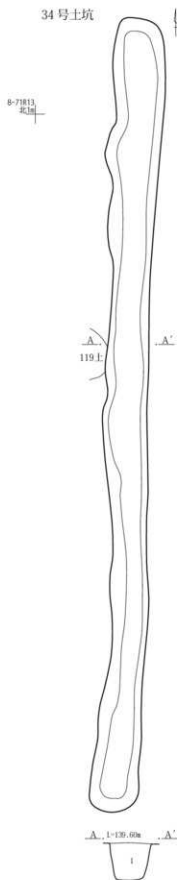
- 1 灰褐色火山灰土。径10～30mm大の暗灰～黄褐色火山灰土ブロックを含む。

30号土坑



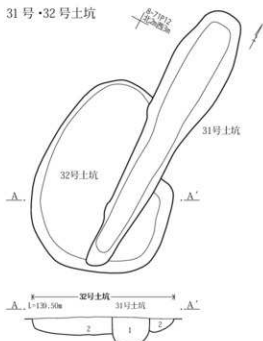
- 1 黄灰褐色砂質火山灰土。灰色軽石を含む。

34号土坑



- 1 黄褐色火山灰土。黄褐色風化火山灰土ブロックを含む。

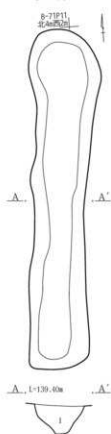
31号・32号土坑



- 1 黄褐色火山灰土のブロック土。径80mm大の暗灰～黄褐色火山灰土ブロックからなり基質は褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。(31号土坑埋土)
2 暗黄褐色火山灰土。灰色軽石や黄褐色風化火山灰土まじり。(32号土坑埋土)

0 1:40 1m

33号土坑



- 1 灰褐色火山灰土。

第101図 29号～34号土坑

群の一部で、35号・119号土坑に近い。

主軸方位 N2°E

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は8.42m、短径は0.55m、深さ0.39mであり、調査区で検出された短冊形土坑の中で長径が最大である。

埋土 黄褐色火山灰土ブロックからなり基質は暗黄褐色火山灰土である。埋土に含まれるブロックは不淘汰で、人為的に埋積された可能性がある。

遺物 埋土から鉄製品が出土した。

時代 時代は不明である。

35号土坑(第102図、PL.30-14)

グリッド 8-71区Q-13

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、34号土坑の長軸方向に延伸する位置に存在する。

形状と規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は1.03m、短径は0.90m、深さ0.16mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、黄灰色火山灰土ブロックを少量含む。

時代 時代は不明である。

36号土坑(第102図、PL.30-15)

グリッド 8-71区R・S-13

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、120号土坑に近い。

主軸方位 N24°E

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ隅の丸い方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は1.03m、短径は0.90m、深さ0.16mである。

埋土 埋土は黄褐色火山灰土の下部と暗灰色火山灰土の上部からなり、成層している。暗灰色火山灰土には灰色軽石を少量含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

37号土坑(第102図、PL.31-1)

グリッド 8-72区A-13

周辺の遺構 38号土坑に1mの至近距離に位置するが、周辺に遺構はなく孤立して存在している。

形状と規模 円形を呈し、断面形状は半月形を呈する。柱痕跡は検出されなかったので柱穴ではなく土坑とした。長径は0.33m、短径は0.31m、深さ0.11mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

38号土坑(第102図、PL.31-2)

グリッド 8-72区A-13

周辺の遺構 37号土坑に1mの至近距離に位置するが、それ以外に周辺には遺構がなく、孤立して存在している。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は0.93m、短径は0.75m、深さ0.17mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、黄褐色火山灰土ブロックを多く含む。

時代 時代は不明である。

39号土坑(第102図、PL.52、204頁)

グリッド 8-71区E-16・17

周辺の遺構 40号土坑に1mの至近距離に位置するが、それ以外に周辺には遺構がなく、孤立して存在している。

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、北側は調査区外に存在する。断面形状は箱形を呈する。長径は2.62m、短径は0.83m、深さ0.42mである。

埋土 北壁の地層断面の観察により埋土は、表土の耕作土とII b層の層理面から掘り込まれ、耕作土に似た灰褐色火山灰土からなり、黄灰色火山灰土ブロックを含む。

遺物 埋土から薄板状の鉄製品(1)が出土した。

時代 層相が耕作土に近似しており1層に相当する可能性が高いことから平安時代末以降の可能性がある。

40号土坑(第102図、PL.31-3)

グリッド 8-71区F-16

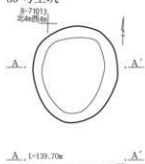
周辺の遺構 39号土坑に1mの至近距離に位置するが、周辺に遺構はなく孤立して存在している。

形状と規模 円形を呈し、断面形状は非対称な半月形を呈する。長径は0.53m、短径は0.48m、深さ0.17mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、塊状無層理の層相を呈する。

第3章 調査された遺構と遺物

35号土坑



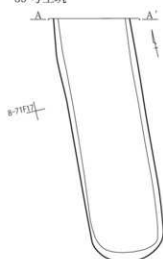
1 暗灰色火山灰土。下底に黄灰色風化火山灰土ブロックが点在。

36号土坑



1 暗褐色火山灰土。(1・2は埋土)
2 黄褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。

39号土坑



1 黄褐色火山灰土。黄灰色火山灰土ブロックを少量含む。

37号土坑



1 暗灰色火山灰土。

38号土坑



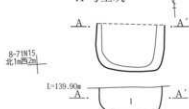
1 暗灰色火山灰土。径10mm黄灰色火山灰土ブロックを含む。

40号土坑



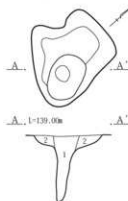
1 暗灰色火山灰土。砂まじり。

41号土坑



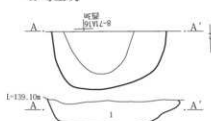
1 黄褐色火山灰土。

42号土坑



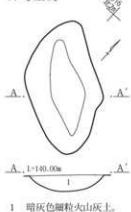
1 暗灰色細粒火山灰土。(1・2は埋土)
2 黒色細粒火山灰土。灰色軽石や黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。

43号土坑



1 暗灰色火山灰土。径2mm大の灰色軽石を含む。

44号土坑



1 暗灰色細粒火山灰土。



第102図 35号～44号土坑と39号土坑の出土遺物

時代 時代は不明である。

41号土坑(第102図)

グリッド 8-71区N-15

周辺の遺構 調査区の西部から検出された3号溝南土坑群の一部で、26号土坑に近い。

形状と規模 南北に長軸を有する可能性がある長方形を呈し、北側は現代の耕作によって失われている。断面形状は箱形を呈し、検出された最大の長径は0.50m+、短径は0.71m、深さ0.30mである。

埋土 黄褐色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

42号土坑(第102図, PL.31-4)

グリッド 8-71区E-10

周辺の遺構 51号土坑の北西に位置し、6mの距離にある。

形状と規模 不定形の浅い窪み状を呈し、断面形状は浅い皿形の上部と柱穴状の下部からなる。長径は1.05m、短径は0.92m、深さ0.10mである。

埋土 灰色軽石を含む暗灰色細粒火山灰土からなり、ピットを埋めた暗灰色細粒火山灰土が埋土を切っている。土坑埋土は、柱穴の掘方の可能性がある。

柱穴 土坑底にピットが検出された。ピットは長径は50cm、短径は35cm、深さ68cmである。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

43号土坑(第102図)

グリッド 8-71区A-16

周辺の遺構 44号土坑に東10mの距離に位置するが、周辺に遺構はなく孤立して存在している。

形状と規模 隅の丸い方形を呈していると考えられるが南側は調査区外にある。断面形状は浅い皿形からなる。長径は1.22m、短径は0.62m+、深さ0.22mである。

埋土 灰色軽石を含む暗灰色細粒火山灰土からなり、黄褐色火山灰土ブロックを含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

44号土坑(第102図, PL.31-5)

グリッド 8-71区C・D-16

周辺の遺構 43号土坑に西10mの距離に位置するが、周辺に遺構はなく孤立して存在している。

形状と規模 北西方向に長軸を有する歪んだ菱形を呈し、断面形状は浅い半月形を呈する。長径は1.42m、短径は0.80m、深さ0.17mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を含むⅡ層が埋土を被覆する。

時代 Ⅱ層とⅢ層の層理面から掘り込まれ、As-Cを含まないことから古墳時代以前と考えられるが、時代は不明である。

45号土坑(第103図, PL.31-6)

グリッド 8-71区H-17

周辺の遺構 22号竪穴住居に北西1mの至近距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い箱形を呈する。長径は2.23m、短径は0.68m、深さ0.10mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を少量、暗灰色や黄灰色火山灰土ブロックを含む。

時代 時代は不明である。

46号土坑(第103図)

グリッド 8-71区I-17

周辺の遺構 23号竪穴住居に北東1mの至近距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は浅い箱形を呈する。長径は0.77m、短径は0.47m、深さ0.10mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石や黒褐色火山灰土ブロックを含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

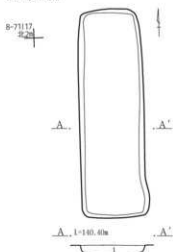
47号土坑(第103図, PL.31-7)

グリッド 8-71区J-18

周辺の遺構 24号竪穴住居に南東2mの距離に位置する。

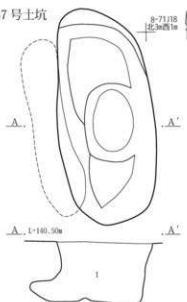
第3章 調査された遺構と遺物

45号土坑



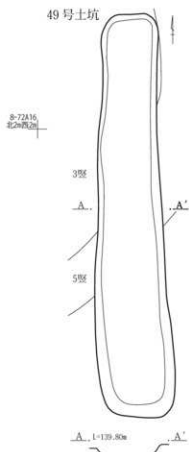
1 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含む。

47号土坑

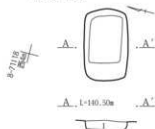


1 暗灰～黄褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰ブロックを含む。

49号土坑

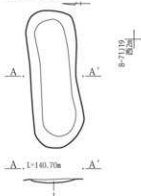


46号土坑



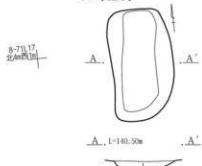
1 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含み、径10mm大の黒褐色火山灰土上ブロックを含む。

48号土坑



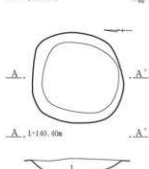
1 暗灰色火山灰土。

52号土坑



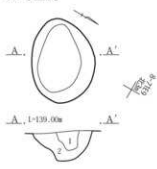
1 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含む。

50号土坑



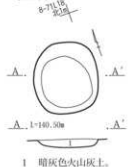
1 暗灰色火山灰土。灰色軽石を含み、径10～30mmの暗灰～黒色火山灰土ブロックを含む。

51号土坑



1 暗灰色砂質火山灰土。粗粒砂サイズの灰色軽石を多く含み、基質は火山灰質の土壌。(1・2は埋土)
2 暗黄灰色火山灰土。下底は風化火山灰土まじり。

53号土坑



1 暗灰色火山灰土。



第103図 45号～53号土坑

形状と規模 南北方向に長軸を有する歪んだ方形を呈し、断面形状は西側に横穴状に潜り込む、靴状形を呈する。長径は2.32m、短径は1.04m、深さ0.65mである。

埋土 西側の横穴に成層した暗灰色～黄褐色火山灰土の埋土が埋めるような構造を呈するが、調査途上に壁が崩壊したため詳細な記録は残せなかった。風倒木の地層断面にも類似する形状や構造を呈するが、遺構の性格は不明である。

時代 時代は不明である。

48号土坑(第103図、PL.31-8)

グリッド 8-71区J-19

周辺の遺構 24号竪穴住居に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 東西に長軸を有する長方形を呈し、断面形状はごく浅い皿形を呈する。長径は1.47m、短径は0.54m、深さ0.03mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

49号土坑(第103図、PL.31-9)

グリッド 8-72区A-15・16

重複 49号土坑は3号・5号竪穴を切るので、竪穴より新しい。

周辺の遺構 3号溝や125号土坑に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は4.28m、短径は0.77m、深さ0.13mである。

埋土 暗灰色細粒火山灰土からなる。

遺物 埋土から近世の時期に属する国産施釉陶器の小片が出土している。

時代 埋土に近世の陶器片を含むことから近世以降である。

50号土坑(第103図、PL.31-10)

グリッド 8-71区J-16

周辺の遺構 23号竪穴住居に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 歪んだ正方形を呈し、断面形状は浅い皿形

を呈する。長径は0.98m、短径は0.96m、深さ0.18mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を含み暗灰色～黒色火山灰土ブロックを多く含むことから人為的に埋められた可能性がある。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

51号土坑(第103図、PL.31-11)

グリッド 8-71区D・E-9

周辺の遺構 20号竪穴住居に4mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は0.90m、短径は0.67m、深さ0.30mである。

埋土 暗灰色火山灰土と暗黄灰色火山灰土からなり、暗灰色火山灰土は灰色軽石粒を含む。

時代 埋土にAs-Bの軽石を含むことから平安時代末以降であるが、時代は不明である。

52号土坑(第103図、PL.31-12)

グリッド 8-71区K・L-17

周辺の遺構 26号竪穴住居や53号土坑に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する歪んだ長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は1.19m、短径は0.66m、深さ0.10mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

53号土坑(第103図、PL.31-13)

グリッド 8-71区K・L-18

周辺の遺構 52号・54号土坑に1mの至近距離に位置する。

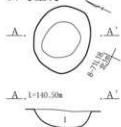
形状と規模 隅の丸い正方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は0.76m、短径は0.69m、深さ0.09mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

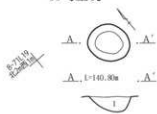
第3章 調査された遺構と遺物

54号土坑



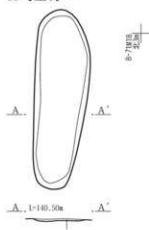
1 暗灰～黄褐色火山灰上。細粒の灰色軽石を含む。

55号土坑



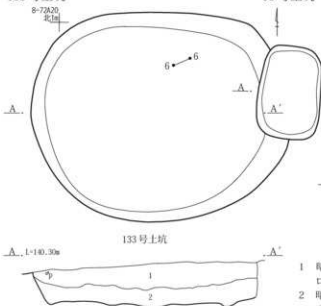
1 暗灰色火山灰上。灰色軽石を多く含む。径50～100mm大の黄灰色風化火山灰上ブロックを含む。

56号土坑



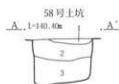
1 暗灰色火山灰上。

133号土坑



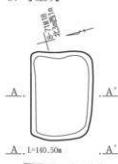
1 黄褐色火山灰上。(1・2は埋土)
2 暗灰褐色風化火山灰上。

58号土坑

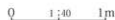


1 暗灰色火山灰上。黄灰色風化火山灰上ブロックを含む(1・2・3は埋土)
2 暗灰色火山灰上。灰色軽石を含み、径20mmの黄灰色風化火山灰上ブロックを含む
3 暗灰褐色火山灰上。径20～50mmの黄灰色風化火山灰上ブロックを含む。

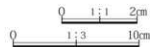
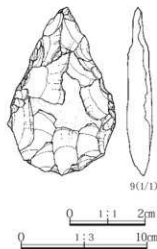
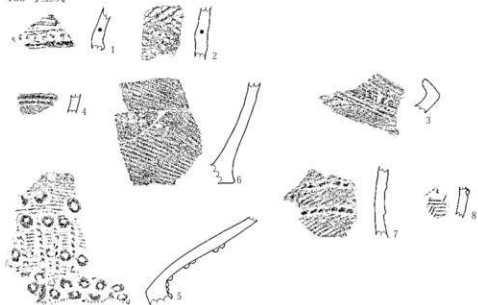
57号土坑



1 暗灰色火山灰上。



133号土坑



第104図 54号～58号土坑・133号土坑と出土遺物

54号土坑(第104図、PL.31-14)

グリッド 8-71区L-18

周辺の遺構 53号土坑に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は0.69m、短径は0.59m、深さ0.19mである。

埋土 暗灰色～黄灰色火山灰土からなり、灰褐色火山灰土には細粒の灰色軽石を多く含むが、それぞれの埋土はブロック状を呈する。

時代 埋土にAs-Bの軽石を含むことから平安時代末以降であるが、時代は不明である。

55号土坑(第104図、PL.31-15)

グリッド 8-71区L-19

周辺の遺構 49号土坑の西7mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は非対称の半月形を呈する。長径は0.45m、短径は0.39m、深さ0.16mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を多く含むがブロック状を呈する。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

56号土坑(第104図、PL.32-1)

グリッド 8-71区L・M-18

周辺の遺構 57号土坑に1mの距離に位置する。

形状と規模 東西に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.92m、

短径は0.58m、深さ0.03mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

57号土坑(第104図、PL.32-2)

グリッド 8-71区M-18

周辺の遺構 56号土坑に1mの距離に位置する。

形状と規模 東西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は0.93m、短径は0.65m、深さ0.03mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

58号土坑(第104図)

グリッド 8-71区T-19・20

重複 58号土坑は133号土坑を切るの、133号土坑より新しい。

周辺の遺構 4号竪穴に2mの距離に位置する。

形状と規模 南北方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は0.99m、短径は0.67m、深さ0.49mである。

埋土 暗灰色火山灰土の互層からなり黄灰色火山灰土ブロックを含む。

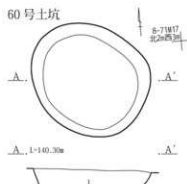
時代 時代は不明である。

59号土坑(第105図、PL.32-3)

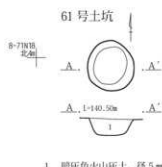
グリッド 8-71区M-17



1 暗灰色細粒火山灰土。径10mm暗灰色火山灰土ブロックを含む。



1 暗灰色火山灰土。径50mm大の暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。



1 暗灰色火山灰土。径5mm大の灰色軽石を含む。

第105図 59号・60号・61号土坑

0 1:40 1m

周辺の遺構 60号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 北西方向に長軸を有する楕円形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は0.66m、短径は0.44m、深さ0.21mである。

埋土 埋土は成層した暗灰色火山灰土からなり、下部は黄灰色火山灰土ブロックを含む。

時代 時代は不明である。

60号土坑(第105図、PL.32-4)

グリッド 8-71区M-17

周辺の遺構 59号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は1.30m、短径は1.13m、深さ0.28mである。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含むことから人為的に埋められた可能性がある。

時代 時代は不明である。

61号土坑(第105図、PL.32-5)

グリッド 8-71区M-18

周辺の遺構 57号・62号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 円形を呈し、断面形状は半月形を呈する。直径は0.51m、深さ0.18mである。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

62号土坑(第106図、PL.32-6)

グリッド 8-71区N-18

周辺の遺構 61号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.70m、短径は1.16m、深さ0.09mである。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、灰褐色火山灰土ブロックを含む。

時代 時代は不明である。

63号土坑(第106図、PL.32-7)

グリッド 8-71区N-16

周辺の遺構 3号溝、60号土坑に4mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は皿形を呈する。長径は0.59m、短径は0.52m、深さ0.12mである。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石や大きな灰褐色火山灰土ブロックを含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

64号土坑(第106図)

グリッド 8-72区B・C-20

周辺の遺構 28号竪穴住居に1m以内の至近距離に位置し、同時存在はない。

形状と規模 東西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は5.50m、短径は1.74m、深さ0.25mであり、調査区で最大規模の方形土坑である。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石が点在する。壁際には黄褐色火山灰土がブロック状に堆積する。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

65号土坑(第106図、PL.32-8)

グリッド 8-71区Q・R-19

周辺の遺構 126号・130号土坑に3mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.52m、短径は0.97m、深さ0.04mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

66号土坑(第106図、PL.32-9)

グリッド 8-71区Q-17

周辺の遺構 67号土坑に4mの距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有し、北側が隅の丸い方形、南側は楕円形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.80m、短径は1.41m、深さ0.06mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

67号土坑(第106図、PL.32-10)

グリッド 8-71区Q-18

周辺の遺構 126号土坑に1m以内の至近距離に位置し、

62号土坑



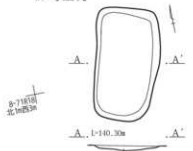
1 暗灰色火山灰土。下底に黒色細粒火山灰土ブロックを含む。

63号土坑



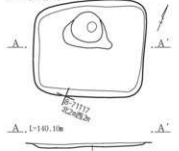
1 暗灰色火山灰土。径100mmの灰褐色火山灰土ブロックを含む。

67号土坑



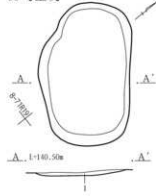
1 暗灰色火山灰土。黄褐色火山灰土まじり。

69号土坑



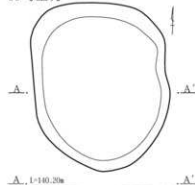
1 黒褐色火山灰土。黄褐色火山灰土ブロックまじり。

65号土坑



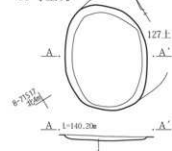
1 暗灰色火山灰土。

66号土坑



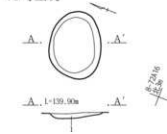
1 暗灰色火山灰土。

68号土坑



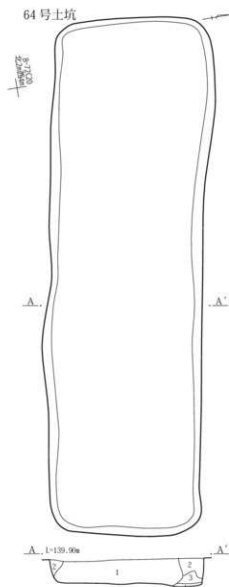
1 暗灰色火山灰土。

70号土坑



1 暗灰色火山灰土。粉状のシルト質細粒火山灰まじり。

64号土坑



1 暗灰色火山灰土。灰色軽石が点在。(1~4は埋土)
2 黄褐色火山灰土。暗灰色火山灰土ブロックを含み、風化火山灰土まじり。
3 暗灰色火山灰土。
4 黄褐色火山灰土。暗灰色火山灰土まじり。

第106図 62号~70号土坑

0 1:40 1m

第3章 調査された遺構と遺物

66号土坑に4mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.20m、短径は0.68m、深さ0.05mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

68号土坑(第106図、PL.32-11)

グリッド 8-71区R-17

重複 68号土坑は127号土坑を切るの、127号土坑より新しい。

周辺の遺構 126号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.13m、短径は0.87m、深さ0.04mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

69号土坑(第106図、PL.32-12)

グリッド 8-71区T-17

周辺の遺構 3号竪穴に5mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は1.18m、短径は1.04m、深さ0.03mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなる。

時代 時代は不明である。

70号土坑(第106図、PL.32-13)

グリッド 8-71区T-16・72区A-16

周辺の遺構 3号竪穴に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 東西方向に長軸を有する楕円形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形を呈する。長径は0.70m、短径は0.55m、深さ0.04mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、粉状の火山灰まじりの層相を呈する。

時代 時代は不明である。

71号土坑(第107図、PL.32-14)

グリッド 8-72区B-19・20

周辺の遺構 64号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.39m、短径は0.89m、深さ0.58mである。

埋土 下部は暗灰色火山灰土の互層からなり、上部は黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む暗灰色火山灰土の互層からなる。上部の埋土は人為的に埋められた可能性が高い。

時代 時代は不明である。

72号土坑(第107図)

グリッド 8-71区Q・R-20

周辺の遺構 130号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 長方形を呈し、北側が調査区外にある。断面形状は箱形を呈する。長径は1.42m、検出された最大の短径は0.79m+、深さ0.55mである。

埋土 北壁の地層断面の観察では、埋土は1a層と1b層の層理面から掘り込まれており、黄灰色火山灰土ブロックを含む暗灰褐色火山灰土の互層からなる。

時代 As-Bを含む1d層より上位の層位にあるので、平安時代末以降と考えられるが、時代は不明である。

73号土坑(第107図、PL.32-15)

グリッド 8-72区C-16

周辺の遺構 74号土坑に6mの距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.99m、短径は0.91m、深さ0.47mである。

埋土 黄褐色火山灰土のブロック土からなる。径0.5～5cm、最大10cmの黄灰色風化火山灰土、黄褐色火山灰土、暗灰色火山灰土のブロックからなり横方向の分級がみられる。基質は黄褐色火山灰土に壁側ほど暗灰色土のブロックが多い。埋土は人為的な埋め土である可能性が極めて高い。

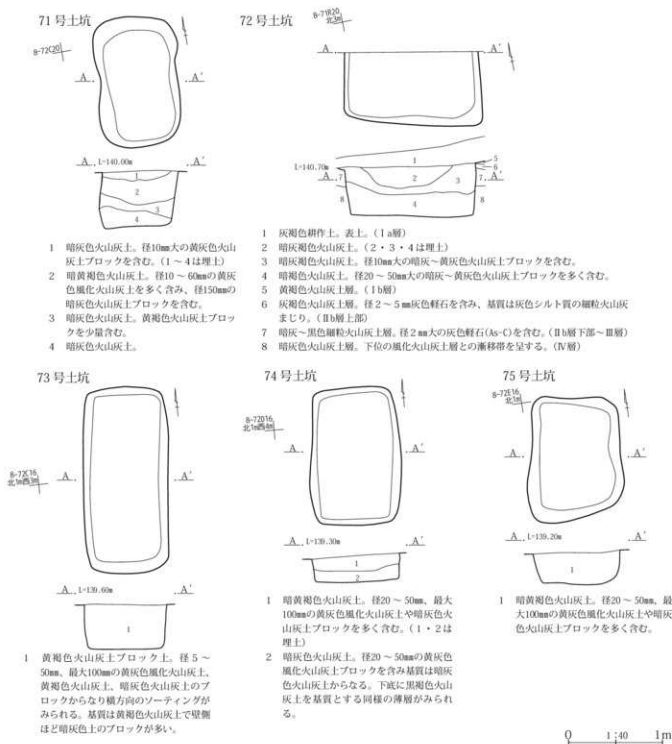
時代 時代は不明である。

74号土坑(第107図、PL.33-1)

グリッド 8-72区D-15・16

周辺の遺構 73号土坑に6mの距離に位置し、75号土坑に1m以内の至近距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形



第107図 71号～75号土坑

状は箱形を呈する。長径は1.47m、短径は0.97m、深さ0.28mである。

埋土 黄褐色～暗黄灰色火山灰土のブロック土が成層する。径2～5cm、最大10cmの黄灰色風化火山灰土ブロックからなり、基底には黒褐色火山灰土の薄層が検出された。埋土は人為的な埋め土である可能性が極めて高い。

遺物 埋土から近世の時期に属する国産施釉陶器の小片

が出土している。

時代 埋土に近世の陶器片を含むことから近世以降である。

75号土坑(第107図, PL. 33-2)

グリッド 8-72区D・E-15・16

周辺の遺構 74号土坑に1m以内の至近距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は1.30m、短径は0.93m、深さ0.34mである。

埋土 暗黄褐色火山灰土からなる。径2～5cm、最大10cmの黄灰色～暗灰色火山灰土ブロックを多く含み、基底には黒褐色火山灰土の薄層が検出された。埋土は人為的な埋め土である可能性が極めて高い。

時代 時代は不明である。

76号～111号・113号～116号・121号・122号・123号土坑
(第108・109・110図、第4表、PL.33-3～34-4)

グリッド 8-71区O・P-18・19、N-18、O-17、O・P-15・16

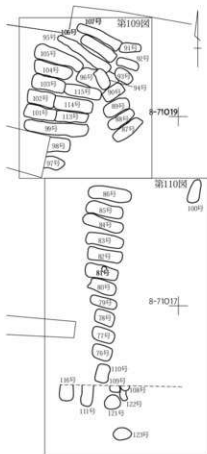
遺構の重複と配置 調査区の北西部にあたる東西10m、南北23mの範囲には76号土坑に形状が近似した複数の隅の丸い長方形の土坑が検出されている。これらの土坑群は東西方向の主軸方位を有しており、埋土に多量の河川

礫を含むといった特徴がみられることから、同時に構築され、時間差のある可能性がある遺構群として扱う。これらの土坑を礫土坑群と仮称し、重複関係のある配列をA～Dと仮称する。

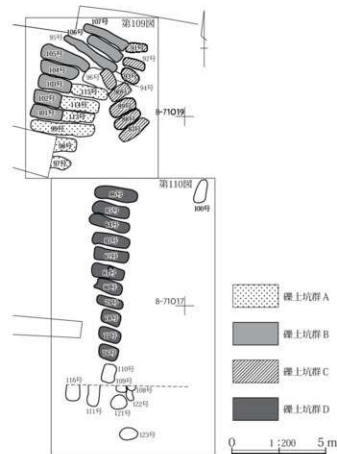
礫土坑群Aは97号～99号・113号・114号・115号土坑からなり、東北東方向に配列し115号土坑は96号土坑を切っている。礫土坑群Bは95号、101号～107号土坑からなり、礫土坑群Aと同様に東北東方向の配列を有し、礫土坑群Aを切っている。礫土坑群Cは東北東方向に配列する91号～94号土坑と北西方向に配列する87号～90号土坑からなり、91号・94号土坑は、礫土坑群Bの95号や107号土坑を切るのので、礫土坑群AとBの配列の中で最も新しい。礫土坑群Dは76号～86号土坑からなり、礫土坑群A～Cの南部に南北方向に配列しているが、土坑の重複はみられない。

形状と規模 ほとんどの土坑が東西方向に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。121

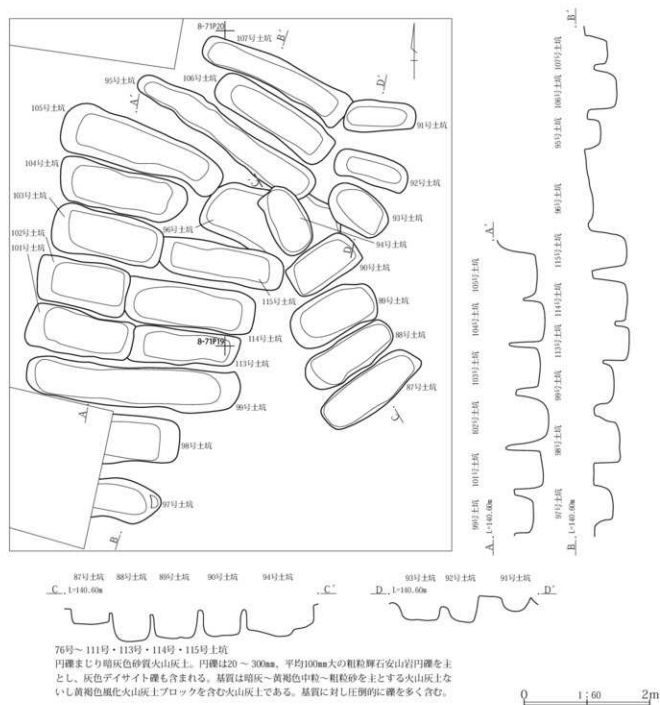
礫土坑群



礫土坑群



第108図 76号～111号・113号～116号・121号・122号・123号土坑(1)

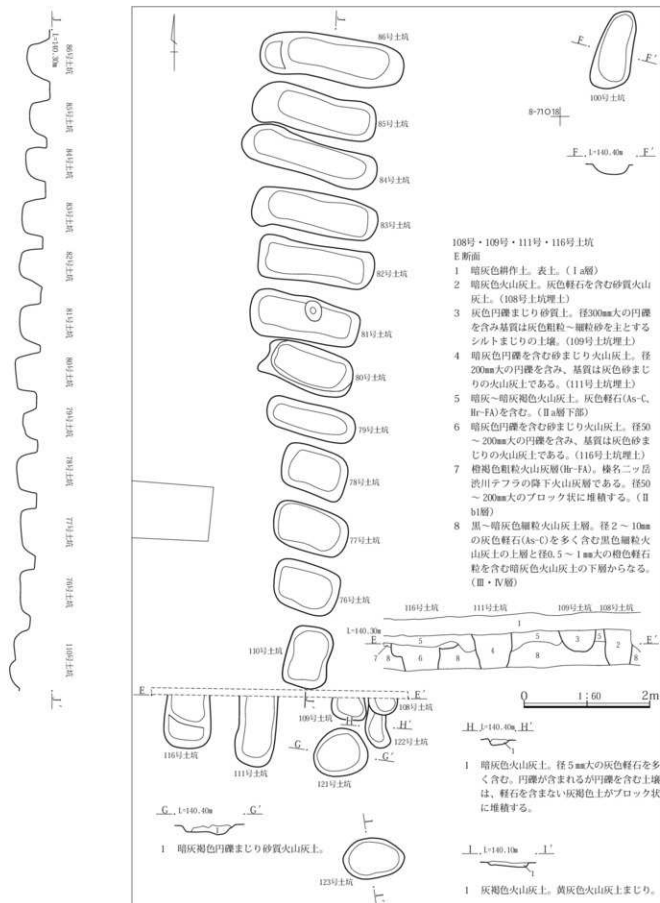


第109図 76号～111号・113号～116号・121号・122号・123号土坑(2)

号～123号は楕円形を呈する。それぞれの土坑の計測値を第4表に示す。

埋土 埋土は円～亜円礫まじり暗灰色砂質火山灰土からなる。108号・109号や111号・116号土坑の地層断面の観察では、埋土は表土であるIa層とIb層の層界面から掘り込まれており、Ib層中には土坑にみられる礫と同様の円～亜円礫が含まれていることから、Ib層を起源とする堆積物である可能性が高い。また116号土坑はIb

層とIIb層の層界面から掘り込まれているが、埋土に砂質土が多い特徴があるが礫を含む一連の土坑である。埋土に含まれる円～亜円礫は直径2～30cm、平均10cm大の灰色～淡紫灰色粗粒輝石安山岩を主とし、灰色デイサイト礫も少量含まれる。基質は暗灰～黄褐色中粒～粗粒砂を主とする砂質土で不淘汰である。ほとんどの土坑の埋土が砂質土であるが、95号土坑の埋土下部は、黄褐色風化火山灰土ブロックを少量含む火山灰土がみられる。



第110図 76号～111号・113号～116号・121号・122号・123号土坑(3)

埋土は基質に対し圧倒的に礫を多く含むといった特徴を有し、ほとんどが礫支持の堆積を示している。78号土坑や80号土坑では直径30cm大の礫を多く含む基底部の埋土と基質に砂を多く含むやや小振りの円礫からなる上部の埋土に成層する。85号土坑は逆に上部に30cm大の円礫が多い。埋土は礫の堆積様式から礫の廃棄や埋設などを目的とした人為的な埋め土であると断定できる。

遺物 77号・84号・93号土坑の埋土から近世の時期に属する国産施軸陶器の小片が、89号土坑の埋土から近世の時期に属する国産施軸陶器と在地系焙烙の鍋の小片が、90号土坑からは近世の時期に属する国産磁器の小片が、101号土坑の埋土から近世の時期に属する国産施軸陶器と国産磁器の小片が出土している。

時代 埋土に近世の陶磁器片等を含むことから近世以降である。

117号・118号土坑(第111図、PL.34-1、205頁)

グリッド 8-71区K-15

重複 117号土坑は118号土坑の埋土を切るため、118号よりも117号土坑が新しい。

周辺の遺構 調査区の西部中央に位置する3号溝南土坑群の一部で3号溝や23号土坑に3mの距離に位置する。

主軸方位 117号土坑はN86°W、118号土坑はE Wである。

形状と規模 117号・118号土坑とも東西に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。117号土坑は、長径は1.30m、短径は0.77m、深さは0.37mである。118号土坑は、北東側が117号土坑により失われているが、長径は2.02m、短径は0.50m、深さは0.20mである。

埋土 117号・118号土坑の埋土は暗灰色～暗灰褐色火山灰土からなり、黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。

遺物 118号土坑の埋土から鉄製鎌(1)や近現代の時期に帰属する陶磁器の小片が出土した。

時代 117号・118号土坑は、出土遺物と重複関係から近現代である。

119号土坑(第111図)

グリッド 8-71区Q・R-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、34号土坑に1m以内の至近距離に位置する。

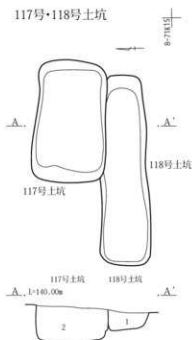
主軸方位 E W

第4表 礫土坑群の計測値 (単位:m)

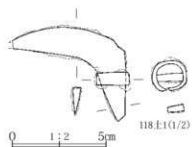
配列	土坑名	主軸方位	長径	短径	深さ
D	76	N74°W	1.05	0.76	0.20
D	77	N71°W	1.23	0.72	0.24
D	78	N74°W	1.06	0.72	0.32
D	79	N76°W	1.45	0.54	0.22
D	80	N70°W	1.40	0.70	0.39
D	81	N79°W	1.78	0.72	0.33
D	82	N81°W	1.86	0.61	0.37
D	83	N78°W	2.01	0.65	0.36
D	84	N74°W	2.21	0.57	0.32
D	85	N76°W	1.98	0.62	0.32
D	86	N81°W	2.30	0.74	0.37
C	87	N53°E	1.76	0.64	0.20
C	88	N56°E	1.57	0.60	0.49
C	89	N65°E	1.45	0.74	0.45
C	90	N56°E	1.19	0.63	0.41
C	91	N89°W	1.14	0.52	0.24
C	92	N72°W	1.21	0.48	0.40
C	93	N52°W	1.04	0.67	0.33
C	94	N25°W	1.14	0.64	0.43
B	95	N57°W	3.27	0.56	0.27
	96	N74°W	2.16	0.90	0.11
A	97	N84°W	1.06+	0.68	0.31
A	98	N86°W	1.15+	0.78	0.41
A	99	N85°W	3.44	0.72	0.32
	100	N17°E	1.30	0.62	0.16
B	101	N78°W	1.70	0.72	0.50
B	102	N80°W	1.48	0.80	0.68
B	103	N76°W	1.80	0.72	0.52
B	104	N76°W	2.09	0.68	0.62
B	105	N68°W	2.72	0.77	0.58
B	106	N55°W	2.09	0.57	0.52
B	107	N62°W	2.51	0.46	0.36
	108	N1°E	0.26+	0.45	0.57
	109	N1°E	0.35+	0.52	0.32
	110	N14°E	0.99	0.68	0.23
	111	N5°E	1.15+	0.60	0.54
A	113	N85°W	1.70	0.58	0.57
A	114	N82°W	2.09	0.72	0.53
A	115	N81°W	1.99	0.60	0.58
	116	NS	0.86+	0.76	0.42
	121	N56°E	0.85	0.76	0.14
	122	N1°W	0.56+	0.32	0.10
	123	N87°E	0.99	0.65	0.07

第3章 調査された遺構と遺物

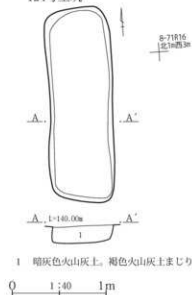
117号・118号土坑



- 1 暗灰色火山灰土。径50～80mm黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(117号土坑埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。径20～80mm暗灰色火山灰土や黄灰色風化火山灰土ブロックを多く含む。(118号土坑埋土)

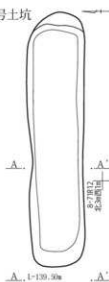


124号土坑



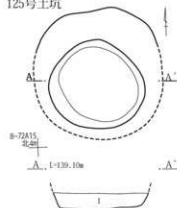
- 1 暗灰色火山灰土。褐色火山灰土まじり。

119号土坑

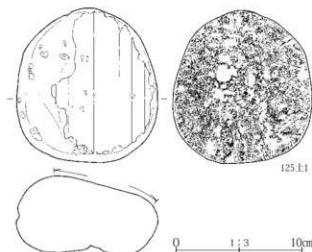


- 1 黄褐色火山灰土。径20～50mm黄灰色火山灰土ブロックを含む。基質は暗灰色砂質火山灰土。(1・2は埋土)
- 2 暗灰色火山灰土。砂質火山灰土を多く含む火山灰土。

125号土坑



- 1 暗灰色～暗褐色風化火山灰土。径10～50mm大の暗灰色火山灰土ブロックに土壌化作用を受けている。



第111図 117号・119号・120号・124号土坑及び118号・125号土坑と出土遺物

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は2.70m、短径は0.61m、深さ0.27mである。

埋土 埋土は黄灰色火山灰土ブロックを多く含む黄褐色火山灰土の上部と塊状無層理の暗灰色細粒火山灰土の下部からなり、成層している。埋土は人為的に埋められた可能性が高い。

時代 時代は不明である。

120号土坑(第111図)

グリッド 8-71区R・S-12

周辺の遺構 調査区の南西部から検出された短冊形土坑群の一部で、119号土坑に2mの距離に位置する。

主軸方位 E-W

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.20m、短径は0.65m、深さ0.31mである。

埋土 埋土は黄灰色火山灰土ブロックを多く含む黄褐色火山灰土の上部と塊状無層理の暗灰色細粒火山灰土の下部からなり、成層している。埋土は119号土坑の層相と共通しており、これらの土坑埋土は人為的に埋められた可能性が高い。

時代 時代は不明である。

124号土坑(第111図、PL.34-5)

グリッド 8-71区R-15・16

周辺の遺構 3号溝に2mの距離に位置する。

主軸方位 N1°E

形状と規模 南北に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は2.06m、短径は0.70m、深さ0.18mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、褐色火山灰土まじりである。

時代 時代は不明である。

125号土坑(第111図、PL.34-6・7、204頁)

グリッド 8-71区T-15・16

周辺の遺構 3号溝、49号土坑に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 円形を呈し、断面形状は円柱形を呈する。

直径は1.44m、検出された深さ0.16m+であるが、断面からの推定では深さは1.50mに近く、上部に開いた深鉢形の形状を呈すると考えられ、陥し穴の可能性が高い。

埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、褐色火山灰土ブロックを多く含む。埋土はIV層相当と考えられ、遺構確認面ではIII層に覆われている。

遺物 埋土から磨石(1)が出土した。

時代 時代は不明であるが、層序や埋土の層相、磨石の出土から縄文時代の可能性が高い。

126号土坑(第112図、PL.34-8・9)

グリッド 8-71区R-18

周辺の遺構 67号土坑に1m以内の至近距離に位置する。

主軸方位 N56°W

形状と規模 北西方向に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は1.95m、短径は1.64m、深さ0.25mである。

埋土 埋土は黄灰褐色火山灰土からなり、IV層相当と考えられる。

時代 時代は不明であるが、埋土の層相から縄文時代の可能性がある。

127号土坑(第112図、PL.34-10・11)

グリッド 8-71区R-17

重複 127号土坑は68号土坑に切られるので、68号土坑より古い。

周辺の遺構 126号土坑に2mの距離に位置する。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は非対称のV字形を呈する。長径は1.25m、短径は1.14m、深さ0.41mである。

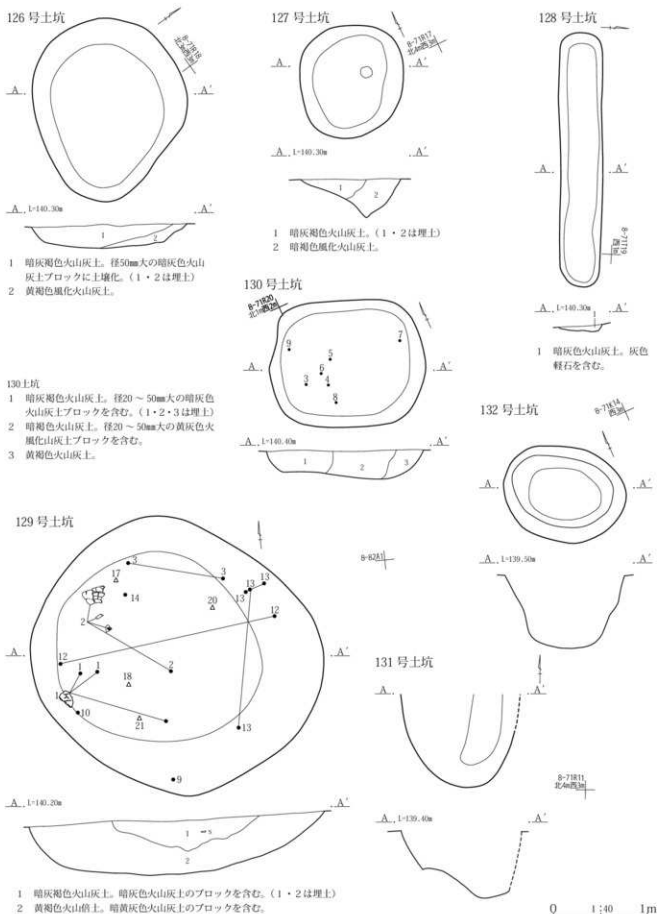
埋土 埋土は黄灰褐色火山灰土と暗灰色火山灰土からなり、西側に傾斜して成層している。埋土はIV層相当と考えられるが、遺構の境界は不明瞭で風倒木底の可能性もある。

時代 時代は不明であるが、埋土の層相から縄文時代の可能性がある。

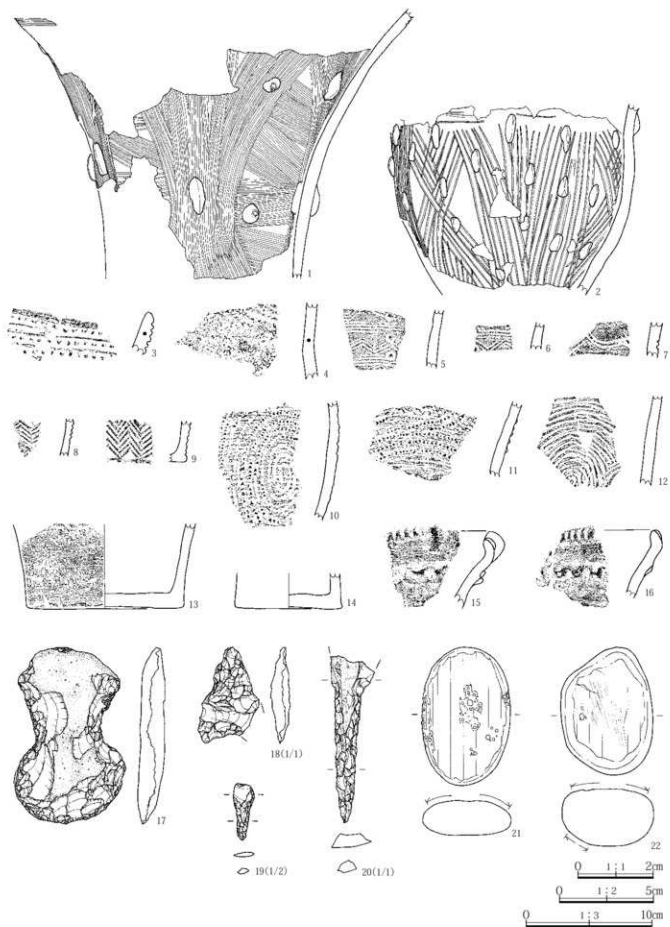
128号土坑(第112図、PL.34-12)

グリッド 8-71区T-18

第3章 調査された遺構と遺物



第112図 126号～132号土坑



第113図 129号土坑の出土遺物

第3章 調査された遺構と遺物



第114図 130号・134号土坑の出土遺物

周辺の遺構 113号土坑に4mの距離に位置し、孤立して存在する。

主軸方位 N88°E

形状と規模 東西に長軸を有する短冊状の長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は2.69m、短径は0.46m、深さ0.06mである。

埋土 暗灰色火山灰土からなり、灰色軽石を含む。

時代 埋土にHr-FAの軽石を含むことから古墳時代以降であるが、時代は不明である。

129号土坑(第112・113図、34-13・34-14・52・53、205頁)

グリッド 8-72区A-20・82区A-1

周辺の遺構 28号竪穴住居に2mの距離に位置するので同時存在はない。

形状と規模 北東方向に長軸を有する歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は2.97m、短径は2.37m、深さ0.58mである。

埋土 埋土は暗灰褐色火山灰土の上部と暗褐色火山灰土の下部からなり、竪穴の中央に傾斜して成層している。埋土は黄灰色風化火山灰土ブロックを含みIV層相当と考えられるが性格不明の土坑状遺構である。

遺物 出土した土器片は、細片からなるが縄文時代前期の有尾式(3・4)や諸磯式(1・2・5~14)を主体とする。底から3cmに石鏝(18)、7cm上から石錐(20)が出土し、埋土からは打製石斧(17)や磨石(21・22)が出土した。特筆すべきは諸磯c式の深鉢(1)の出土で、埋土から出土した5点と136号土坑、4号竪穴、3号・5号竪穴から出土した細片が13点が接合している。このような土器片の遺構間の接合は、遺構の距離が25m余り離れているので自然営力によって移動して、個別に堆積した蓋然性は極めて低く、一定の時間幅の中で同時に存在していた遺構であると考えることが可能である。

時代 縄文時代前期後半。

130号土坑(第112・114図、PL.34-15・35-1・35-2・53、205・206頁)

グリッド 8-71区R-19・20

周辺の遺構 4号竪穴に4mの距離に位置する。

形状と規模 北西方向に長軸を有する歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長径は1.64m、

短径は1.34m、深さ0.30mである。

埋土 埋土は暗灰褐色～黄褐色火山灰土からなり、土坑の西側に向かってブロック状に傾斜して成層している。埋土は黄灰色風化火山灰土ブロックを含みIV層相当と考えられるが性格不明の土坑状遺構である。

遺物 出土した土器片(1~5)は、細片からなるが縄文時代前期の諸磯a式～b式を主体とする。

時代 縄文時代前期後半。

131号土坑(第112図、PL.35-3)

グリッド 8-71区R-11

周辺の遺構 120号土坑に4mの距離に位置する。

形状と規模 南北に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、北側は完掘後に記録がなされなかった。断面形状は非対称な半月形を呈する。長径は0.98m+、短径は1.26m、深さ0.71mである。

埋土 埋土は暗灰褐色～黄褐色火山灰土からなり、土坑の底部からブロック状に垂直に傾斜して成層している。埋土は黄灰色風化火山灰土ブロックを含みIV層相当と考えられるが典型的な風倒木の地層断面を示す。

時代 時代は不明であるが、埋土の層相から縄文時代の可能性がある。

132号土坑(第112図、PL.35-4)

グリッド 8-71区K-13

周辺の遺構 9号土坑に3mの距離に位置する。

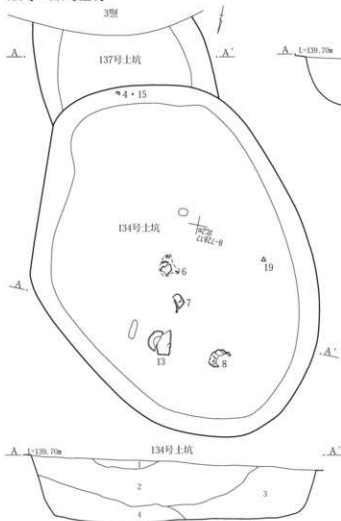
形状と規模 北西方向に長軸を有する楕円形を呈し、断面形状は上部が開いた深鉢形を呈する。長径は1.28m、短径は1.02m、深さ0.76mである。

埋土 埋土は暗灰色細粒火山灰土と暗灰色～黄褐色火山灰土からなり、竪穴の底部からブロック状に垂直に傾斜して成層している。埋土の周辺は黄灰色風化火山灰土がブロック状を呈し遺構壁に漸移しており遺構は完掘していない。埋土はIII層の黒色細粒火山灰土をブロック状に含む。これらはIII～IV層相当と考えられ、風倒木底の地層断面を示すものと考えられる。

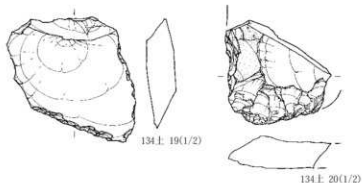
時代 時代は不明であるが、埋土の層相から縄文時代の可能性がある。

第3章 調査された遺構と遺物

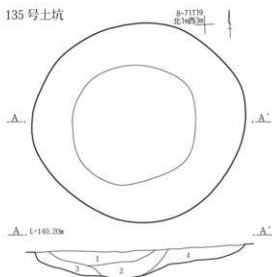
134号・137号土坑



- 1 黄褐色火山灰土。(1~4は埋土)
- 2 暗灰~暗灰褐色火山灰土。暗灰色火山灰土のブロックを含む。
- 3 暗灰褐色火山灰土。
- 4 黒褐色火山灰土。

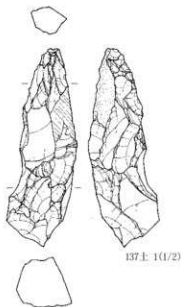


1 暗灰色火山灰土。



- 1 暗灰褐色火山灰土。(1~4は埋土)
- 2 暗褐色火山灰土。風化火山灰土まじり。
- 3 暗褐色火山灰土。黄灰色風化火山灰土ブロックを含む。
- 4 暗灰褐色火山灰土。径100mm大の暗灰色火山灰土ブロックを含む。

0 1:40 1m



0 1:2 5cm

第115図 135号土坑・134号・137号土坑と出土遺物

133号土坑(第104図、PL. 35-5・35-6・52、206頁)

グリッド 8-71区T-19・20・72区A-19・20

重複 133号土坑は58号土坑に切られるので、58号土坑より古い。

周辺の遺構 4号竪穴に2mの距離に位置する。

形状と規模 東西方向に長軸を有する歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は2.76m、短径は2.23m、深さ0.46mである。

埋土 埋土は黄褐色～暗灰褐色火山灰土からなり、黄灰色火山灰土ブロックを含み、ほぼ水平に成層して竪穴を埋めている。

遺物 出土した土器片(1～6)は細片からなり、縄文時代前期の有尾式や諸磯式を主体とする。埋土からは石鏝(9)が出土した。

時代 縄文時代前期。

134号土坑(第115図、PL. 35-7・35-8・53、207・208頁)

グリッド 8-72区A・B-17

重複 134号土坑は、137号土坑の埋土を切るので137号土坑より新しい。

周辺の遺構 3号竪穴に近接して位置する。

形状と規模 北西方向に長軸を有する楕円形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長径は3.98m、短径は2.85m、深さ0.67mである。

埋土 埋土は黒褐色～黄褐色火山灰土からなり、土坑の底部からブロック状に成層している。埋土はⅢ層の黒色細粒火山灰土をブロック状に含む、Ⅲ～Ⅳ層相当と考えられる。

遺物 出土した土器片は、細片からなり縄文時代前期の黒浜・有尾式(4～12・14)や有尾式(1・2・3)からなり諸磯式の土器(13・15～18)を含む。底から8cm上に頁岩製の削器(19)が出土した。

時代 縄文時代前期前半の可能性ある。

135号土坑(第115図、PL. 35-9・35-10)

グリッド 8-71区T-18・19

重複 135号土坑は、128号土坑の埋土に切られるので128号土坑より古い。

周辺の遺構 133号土坑に3mの距離に位置する。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形を

呈する。長径は2.28m、短径は2.10m、深さ0.28mである。

埋土 埋土は黄褐色火山灰土の互層からなり、竪穴の底部からにレンズ状に成層している。埋土はⅣ層相当と考えられる。

時代 時代は不明であるが、埋土の層相から縄文時代の可能性がある。

136号土坑(第116図、PL. 35-11・35-12・35-13・54、208頁)

グリッド 8-72区A・B-20

周辺の遺構 28号竪穴住居や129号土坑に1mの至近距離に位置する。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は2.30m、短径は2.29m、深さ0.38mである。

埋土 埋土は暗灰色～黄褐色火山灰土からなり、風化火山灰土ブロックを含み成層している。埋土はⅣ層相当と考えられる。埋土からは長径14～40cmの垂円礫が数点出土しているが、これらは底から29～36cm上から出土している。

遺物 出土した土器片は、細片からなり縄文時代前期の有尾式や黒浜・有尾式、諸磯式からなる。底から2cm上から石鏝(12)が出土し、埋土中から削器(13)、磨石(14)、多孔石(15)が出土した。

時代 縄文時代前期。

137号土坑(第115図、PL. 54、208頁)

グリッド 8-72区A・B-17

重複 137号土坑は、134号土坑の埋土に切られるので134号土坑より古い。

形状と規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は皿形を呈する。長径は1.82m、深さ0.42mである。

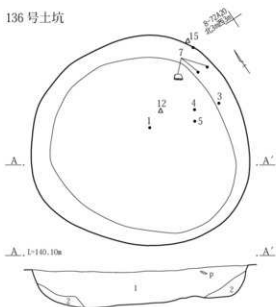
埋土 埋土は暗灰色火山灰土からなり、Ⅳ層相当と考えられる。

遺物 埋土から尖頭状石器(1)が出土した。

時代 縄文時代。

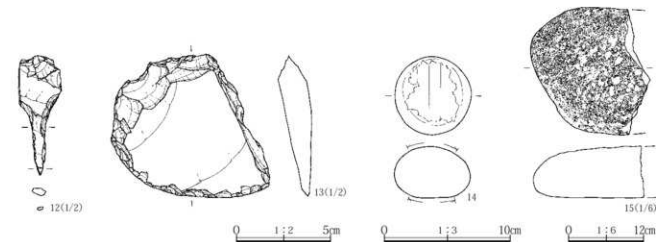
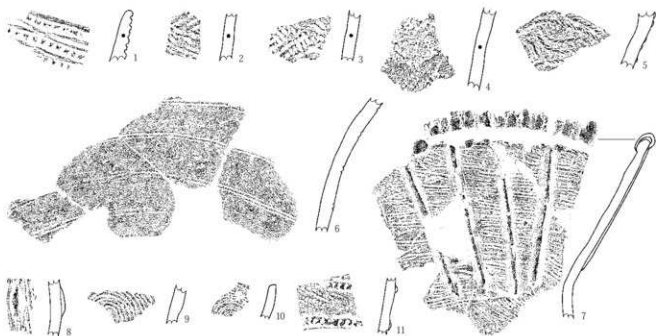
第3章 調査された遺構と遺物

136号土坑



- 1 暗褐色火山灰土。径50～100mmの風化火山灰土ブロックを含む。(1・2は埋土)
 2 黄褐色火山灰土。

0 1:40 1m



第116図 136号土坑と出土遺物

第9節 旧石器調査グリッド

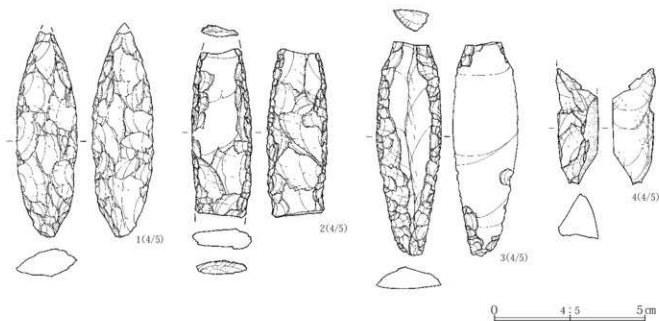
(第117・118図, PL. 36-1~4・54, 208頁)

旧石器時代の遺物包含層の存在を確かめるために、包含層の範囲確認調査を実施した。調査区において10m間隔で調査溝を設定し、上部ローム層最上部に相当するV層から中部ローム層の最上部にあたるXIV層まで人力で掘削し、遺物の出土を確認した。

遺物包含層の範囲確認調査では、8-71区M-17グリッドに設定した調査溝から旧石器時代の剥片が出土したので、調査範囲を拡張し東西南北5mの範囲の発掘調査を実施した。

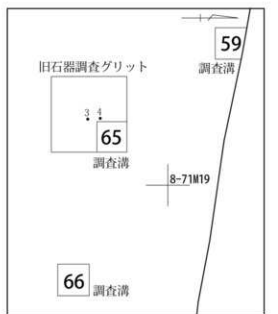
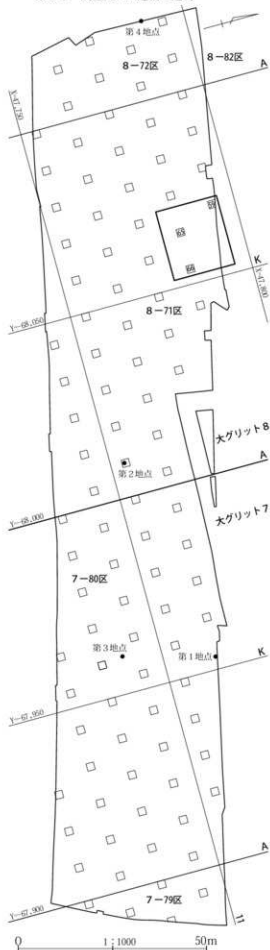
出土した遺物は、旧石器時代の石器が2点で、内訳は硬質頁岩製の削器(3)と剥片(4)である。出土層位はVI層で、上部ローム層の浅間大窪沢テフラを含有する風化火山灰土である。遺物が出土した地層は、大窪沢テフラの放射年代から推定された較正年代に換算した推定年代で20.0~19.0千年前に相当し、酸素同位体ステージ2(MIS 2)の後半にあたる最終氷期の寒冷期に相当するものと考えられる。また、同層準の上部ローム層からは、東に隣接する上細井中島遺跡でも旧石器時代の剥片が出土している。

なお、8-71区P-19グリッドのII~III層に相当する縄文時代遺物包含層から頁岩製の尖頭器(1)が、表土から尖頭器の可能性のある石器(2)が出土した。



第117図 遺構外から出土した旧石器と旧石器調査グリッドの出土遺物

第3章 調査された遺構と遺物



層序区分	層厚 (cm)	土層名	層相
黒色土 (漸移帯)	19	IV	暗灰色火山灰土で黒色土と上部ローム層の漸移帯。軟質で母材は風化火山灰土。 ←縄文時代前期遺物包含層
	16	V	黄灰色風化火山灰土。黄灰色軽石(As-YP)を含む。
上	11	VI	黄灰色風化火山灰土。青灰色岩片を含む黄灰色軽石(As-Okp)が点在する。 ←旧石器出土層準
	34	VII	黄灰褐色風化火山灰土。鉱物粒が多い粉状の層相を呈する。
ロ	13	VIII	黄褐色風化火山灰土。橙褐色軽石(As-BP3)を含む。
	9	IX	黄褐色風化火山灰土。橙褐色軽石(As-BP2)がブロック状に堆積。
ム	10	X	暗灰褐色風化火山灰土。
	16	XI	灰褐色軽石層(As-BP1)。
	13+	XII	暗灰褐色風化火山灰土。

第118図 旧石器調査グリッド

第10節 遺構以外で出土した遺物

(第119～126図、PL.54-60、209～215頁)

表土やⅢ層などから出土した遺構外の掲載した遺物は、縄文土器片が175点、縄文時代の石器が43点、古墳時代以降の土器片が4点、銭貨が1点、石製品が1点で、合計は224点ある。

出土した縄文時代の土器は主に細片からなり、器種はすべて深鉢の破片である。これらは縄文時代早期の条痕文系の土器(1)や縄文時代前期前半の有尾式(2～6)、黒浜式(7～9)黒浜式～有尾式(10～35)などであり、これに外来系の大木2a式(36・37)などの土器が含まれる。これらの土器片は直径が5～15cm大の破片から構成される。

遺構外から出土した遺物で点数が多いものは縄文時代前期後半の時期に相当する土器群であり、これらの土器は検出された縄文時代の遺構群の時期に相当するものであると考えられる。

これらには諸磯a式(38～49)、諸磯b式(50～95)、諸磯c式(96～113)、前期末葉の土器(114～147)に外来系の浮島式(148)、興津式(149～155)、大木式(156・157)などが含まれる。

特に諸磯b式の深鉢(50)は口径が19.5cm、推定した高さが21cmに及び残存率が比較的高い土器であるが、接合した複数の破片は、8-71区A-16、72区のQ・R-15、Q・S-16、T-20グリッドからの出土である。これらのグリッドは南北30m東西25mの範囲にあるため、個々の遺物片は広い範囲に分散したものが接合したことになり、特異な例と考えられる。

縄文時代中期では五領ヶ台式(157～160)、加曾利E2～3式(163～173)や後期の堀之内2式(174・175)などが出土した。

縄文時代の石器や石製品は打製石斧(176～1186)や磨製石斧(187・188)などの土掘り具や伐採具が出土した。磨製石斧(188)は結晶片岩の定角式小形磨製石斧の破片である。

また石鏃(189～197)などの狩猟具は頁岩、チャート等の堆積岩や黒曜石、安山岩などの火山岩を利用している。なお石匙(198・199)や石錐(200・201)などの加工具

や凹石(208～211)や磨石(212～215)、台石(217・218)などの製粉具が出土し、縄文時代前期から中期の典型的な石器や石製品の出土品の様相を呈している。

古墳時代以降の土器類では、灰釉陶器の皿や椀(219・220)や須恵器の椀(221・222)の破片など出土し、報告書に掲載した遺構外遺物の点数は極めて少ない。

金属器や石製品では銭貨の寛永通宝(223)や砥沢石製の砥石(224)である。

なお、遺構や遺構外から出土した報告書の本文中に図や写真を掲載しなかった出土遺物は遺構別に第5表に示した。これらは土器の総重量が50kgに及び、土坑から出土した遺物では近世の国産施釉陶器や国産磁器の破片、近現代の陶磁器片などである。

また遺構から出土した土器類では、大型製品からなる土器の破片が最も多く、須恵器の小型製品、大型製品の出土量がこれに次いでいる。これらは土細井嶋山遺跡の集落の主体をなす竪穴住居から多くの土器類が出土しており、土器器の煮沸具や須恵器の食膳具や貯蔵具などの破片がその主要な出土遺物量のもとになるものと考えられる。

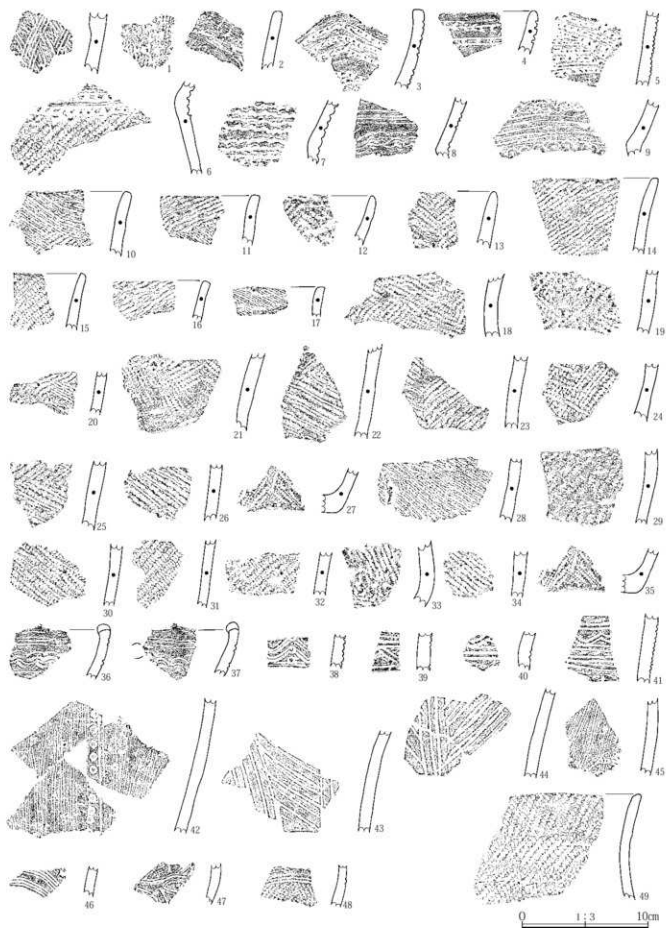
なお灰釉陶器の出土量は、規模の大きな竪穴住居である9号竪穴住居から突出した量が出土していることが明らかである。

第3章 調査された遺構と遺物

第5表 図や写真を掲載しなかった出土遺物の数量

遺構番号	遺構種	近世				在地区別・遺	在地区別	在地区その他	近現代			時期不詳	
		中・小型製品	中・大型製品	同産物類	同産物類				瓦	陶磁器	土器類	土器類	瓦
12	住居			3									
1	古墳			1									
13	土坑			2									
16	土坑			2									
22	土坑			2									
23	土坑								1				
26	土坑								1				
27	土坑			1					1				
49	土坑			1									
74	土坑			1									
77	土坑			1									
84	土坑			1									
89	土坑			1		1							4
90	土坑		1	1									
101	土坑		1	1									
118	土坑								2				
1	溝		1	2									
2	堀六		7	10					2	3	4	3	2
調査道			29	69	3	12							
瓦土									37	6			

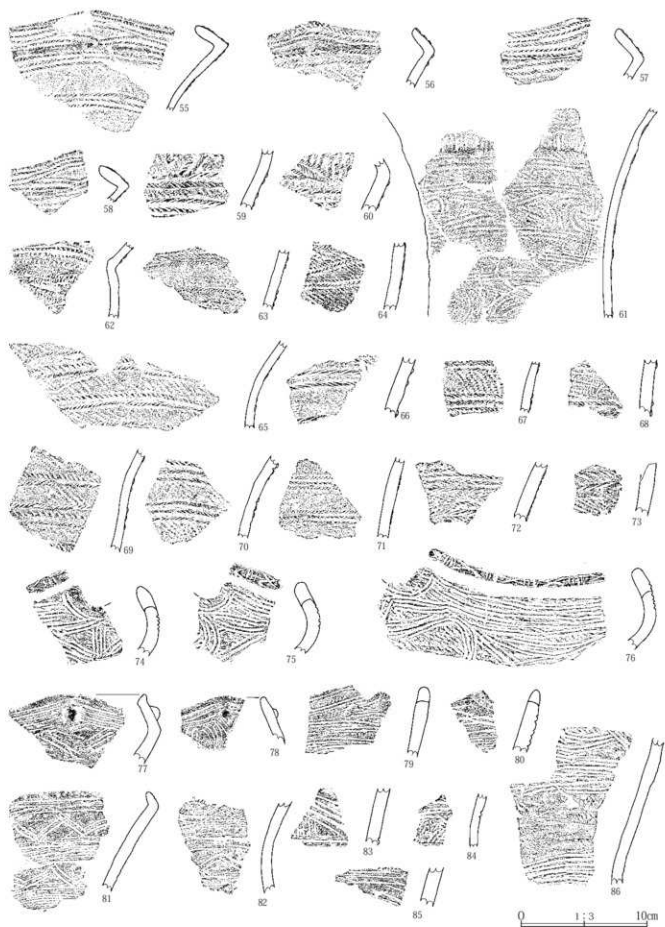
遺構番号	遺構種	土器類				瓦				陶磁器				近世 在地区 別・遺	時期不詳
		小型製品	中・小型製品	大型製品	不明	小型製品	中・小型製品	大型製品	不明	瓦・遺	磁器	不明	土器類		
1	住居	150	0	471	182	264	0	234	0	0	0	0	0	0	
2	住居	98	0	123	11	76	0	0	0	0	0	0	0	0	
3	住居	69	0	85	282	8	0	0	0	0	0	0	0	0	
4	住居	8	0	430	234	296	0	76	0	0	26	0	0	0	
5	住居	4	0	874	153	9	0	5	0	0	0	0	0	0	
6	住居	130	0	1194	637	192	0	161	0	9	0	0	0	0	
7	住居	42	0	275	13	9	0	16	0	0	0	0	0	0	
8	住居	118	0	2316	2244	610	0	162	0	11	34	0	0	0	
9	住居	245	0	3008	1183	2141	0	581	0	137	37	1	0	0	
10	住居	99	0	1704	1256	381	0	48	3	9	78	0	0	0	
11	住居	2	0	176	154	120	0	3	0	0	0	0	0	0	
12	住居	49	0	538	337	85	0	38	0	0	0	0	0	0	
13	住居	18	0	206	66	83	0	0	0	0	0	0	0	0	
14	住居	23	0	637	176	185	0	0	0	0	0	0	0	0	
15	住居	24	0	762	216	251	0	0	0	0	0	0	0	0	
16	住居	4	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	
17	住居	29	83	1524	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
18	住居	44	0	577	79	220	0	922	0	11	0	0	0	0	
19	住居	0	0	13	2	0	0	12	0	0	0	0	0	0	
18-19	住居	27	0	142	141	145	0	75	0	29	24	0	0	0	
20	住居	6	0	51	18	56	0	0	0	0	0	0	0	0	
21	住居	3	0	1282	472	271	0	303	0	0	0	2	0	0	
22	住居	69	0	623	275	148	0	298	0	0	0	0	0	0	
23	住居	30	0	457	350	244	0	0	0	0	0	0	0	0	
24	住居	4	0	63	37	29	0	0	0	0	0	0	0	0	
25	住居	13	0	700	305	147	0	3	0	0	0	0	0	0	
26	住居	55	0	233	147	121	0	0	0	0	0	0	0	0	
27	住居	15	0	805	110	142	0	545	2	4	0	0	0	0	
28	住居	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
30	住居	23	0	492	0	11	6	0	0	0	0	0	0	0	
1	古墳	34	0	0	0	41	0	36	23	0	0	0	0	0	
1	井口	29	0	73	24	285	0	478	0	17	0	0	0	0	
2	土坑	12	0	23	36	60	0	29	0	0	0	0	0	0	
3	土坑	12	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
4	土坑	0	0	7	18	0	0	26	0	0	0	0	0	0	
5	土坑	32	0	175	0	0	0	47	0	4	0	0	0	0	
10	土坑	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	土坑	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
13	土坑	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
22	土坑	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
24	土坑	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
29	土坑	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
46	土坑	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
58	土坑	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
71	土坑	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	
84	土坑	0	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	
85	土坑	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
86	土坑	0	0	84	0	0	0	58	0	0	0	0	0	0	
88	土坑	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
90	土坑	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
100	土坑	0	0	0	0	0	0	113	0	0	0	0	0	0	
102	土坑	0	0	4	0	0	0	21	0	0	0	0	0	0	
116	土坑	0	0	0	0	0	0	105	0	0	0	0	0	0	
118	土坑	0	0	0	3	18	0	0	0	0	0	0	0	0	
129	土坑	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
134	土坑	0	0	20	0	2	0	24	0	0	0	0	0	0	
136	土坑	0	0	47	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
137	土坑	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
1	堀六	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	
4	溝	0	0	0	41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
1	溝	20	0	197	73	48	0	46	0	0	0	0	0	0	
1	溝	0	0	0	64	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	溝	16	0	141	64	33	0	64	0	0	0	0	0	0	
3	溝	0	0	16	13	0	0	75	0	0	0	0	0	0	
1	調査道	11	11	146	96	52	8	97	8	7	0	1	3	8	
瓦土・表層	152	0	945	2065	1301	0	1113	0	44	35	7	0	0	0	
計	1,703	83	22,697	11,660	8,116	8	5,949	83	274	250	10	0	0	0	
遺物	土器類	36,143	g		銅器類	14,156	g		鉄物陶器	534	g				
調査道	古代土器	90,831	g												



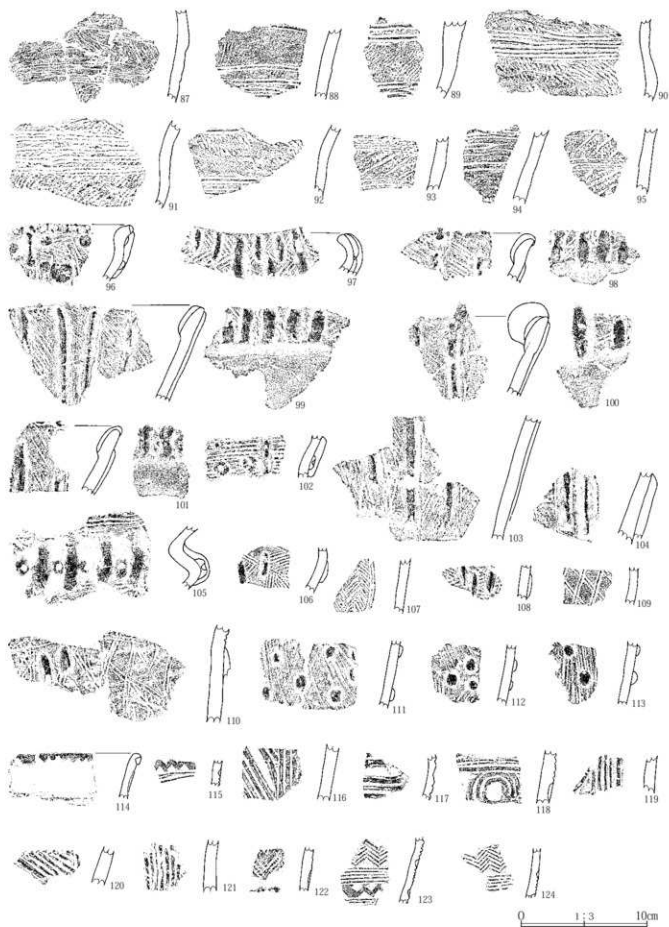
第119図 遺構外で出土した遺物(1)



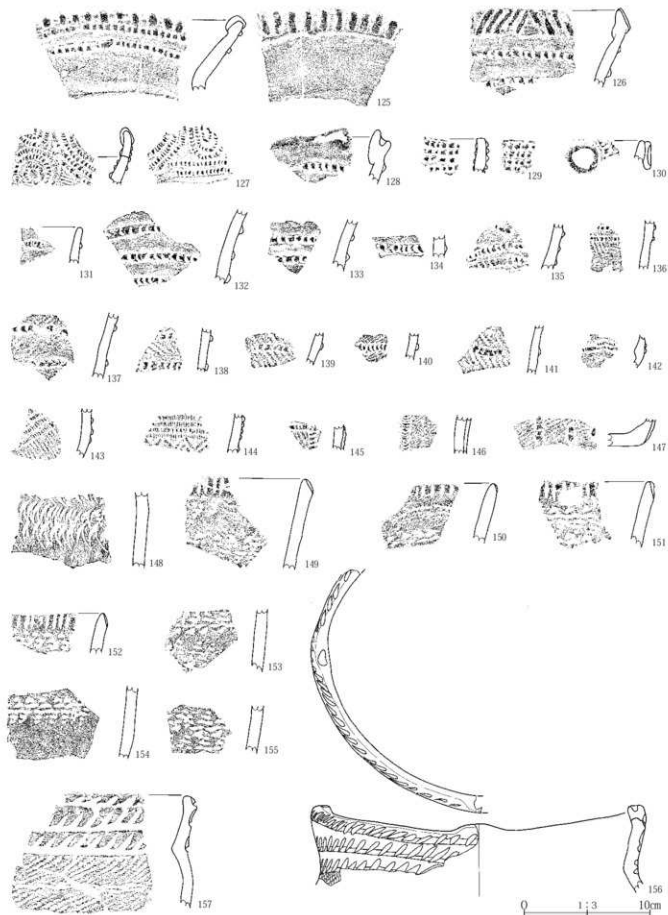
第120図 遺構外で出土した遺物(2)



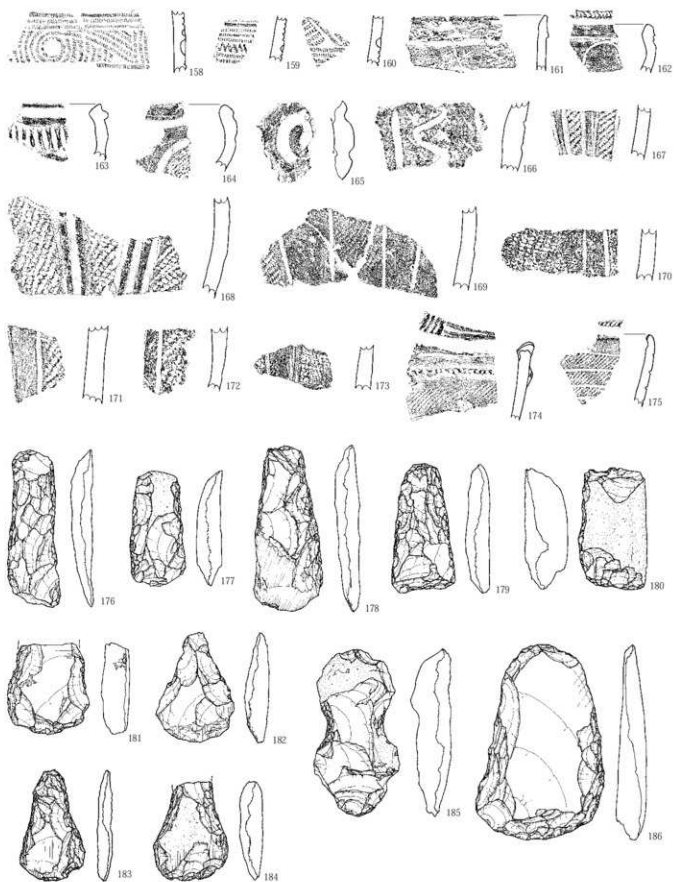
第121図 遺構外で出土した遺物(3)



第122図 遺構外で出土した遺物(4)

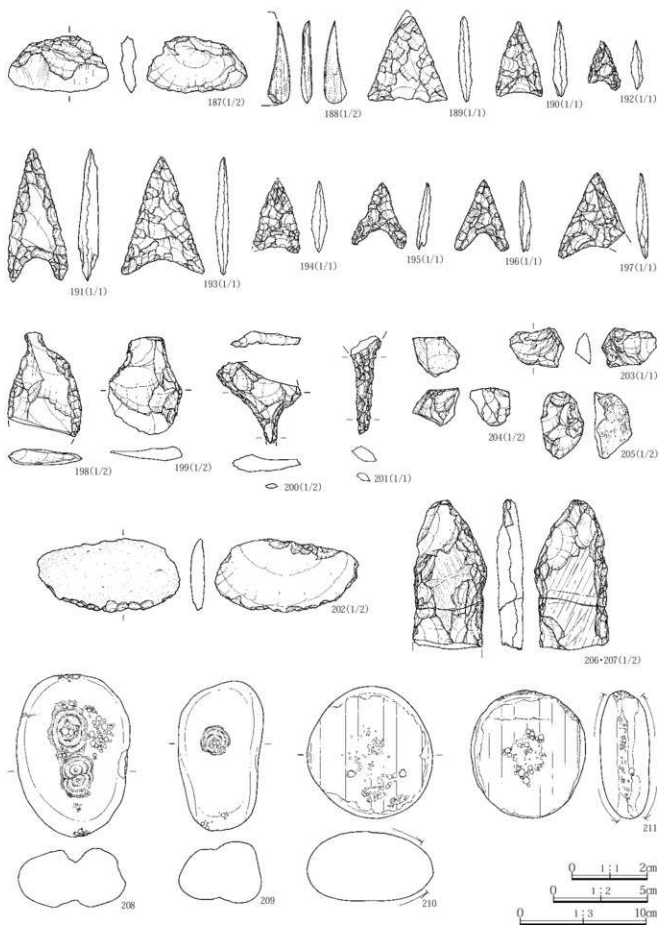


第123図 遺構外で出土した遺物(5)



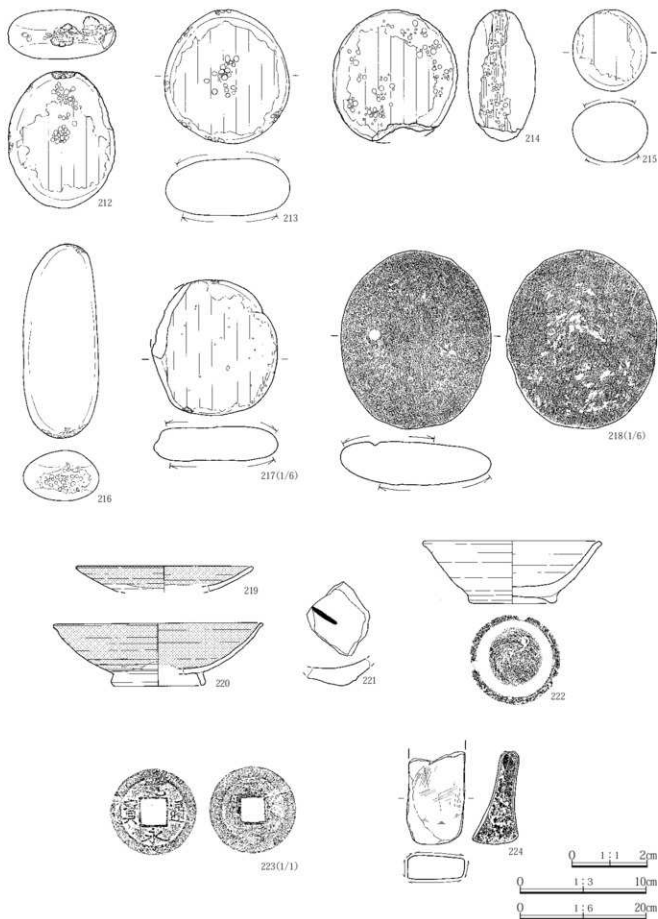
0 1:3 10cm

第124図 遺構外で出土した遺物(6)



第125図 遺構外で出土した遺物(7)

第3章 調査された遺構と遺物



第126図 遺構外で出土した遺物(8)

第4章 自然科学分析による遺跡の理解

第1節 地層とテフラ

(1) テフラ分析の目的

関東地方北西部に位置する前橋市とその周辺には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで火山灰層の調査を行い、テフラを対比することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などについて検討することが可能である。

上細井峠山遺跡で地質調査を実施して地層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料を対象にテフラ分析を行って、地層の層序や層位さらに年代に関する資料を検討することにした。これらの地層の調査及びテフラ分析は火山灰考古学研究所に委託して実施した。

調査区で調査の対象となった地点は、次の3地点であり、模式層序の標識地は第1及び第3地点である。

第1地点(第118・127図、PL.36-5)

グリッド 7-80区K-13

第2地点(第118・128図)

グリッド 7-71区B-11

第3地点(第118・128図、PL.36-6)

グリッド 7-80区M-8

(2) 調査区の層序

上細井峠山遺跡の模式的な層序が明らかになった標識地の第1地点の層序について下位の地層より特徴を述べ(第127図)。

最下層からは若干青みがかった灰色岩片を多く含む灰色泥炭堆積物からなり層厚10cm以上、礫の最大径32mmである。本層はXV層に相当する。

若干青みがかった灰色岩片を多く含む暗灰褐色土層は、層厚19cm、石質岩片の最大径は26mmである。本層はXVI層に相当する。

その上位は、炭化物を多く含む灰褐色土層からなり層厚14cmである。黄褐色軽石層は層厚7cmで軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mmである。黄褐色軽石および灰色土ブロック混じり灰褐色土層は層厚14cmで、軽石の最大径3mmであり、これらの地層はXVII層に相当する。

暗褐色土層は層厚17cmでXVIII層である。乳白色の風化した軽石層は層厚21cmで軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径3mmを呈し、XIX層に相当する。

灰褐色土層は層厚9cmでXX層に、黒灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層は層厚10cmで軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径3mmである。黄灰色砂質土層は層厚4cmでこれらはXX層に相当する。

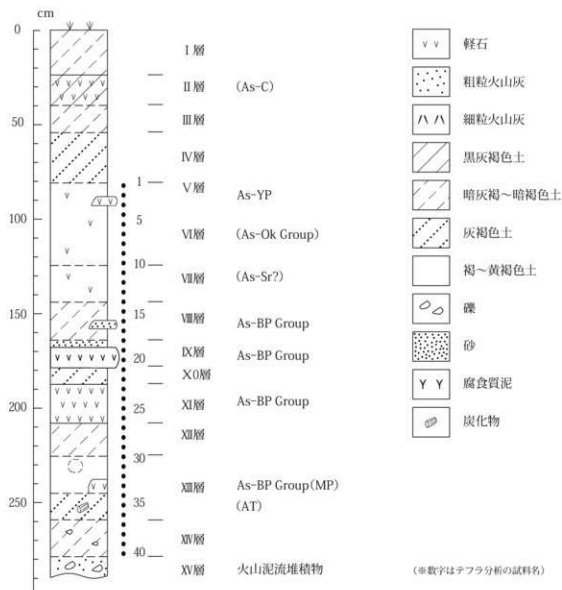
暗褐色土層は層厚6cm、黄色粗粒火山灰層は層厚3cm、暗褐色土層は層厚10cmでこれらはXXI層に相当する。

黄色細粒軽石を多く含む褐色土層は、層厚19cmで軽石の最大径5mmを呈しXXII層に相当する。比較的粗粒の黄色軽石混じり褐色土層は層厚30cmで軽石の最大径は14mmでXXIII層に相当する。

黄色粗粒軽石層は層厚4cmで軽石の最大径9mm、石質岩片の最大径2mmである。その上位には褐色土層が層厚8cmであり、これらはXXIV層に相当する。

さらに、その上位には、下位より黄色軽石を少量含む灰褐色土層が層厚27cm、軽石の最大径9mmを呈しXXV層に相当する。暗灰褐色土層は層厚14cmでXXVI層に、黄白色軽石に富む黒褐色土層は層厚16cmで軽石の最大径は12mmを呈しXXVII層に相当する。暗灰褐色砂質土層は層厚24cmでI層が認められる。これらのうち、II層に多く含まれている黄白色軽石は比較的発泡が良く、層位や岩相から浅間Cテフラに由来すると考えられる。

第2地点の層序は以下のとおりである(第128図)。下位より暗褐色土層からなり層厚4cm以上、成層したテフラ層で、層厚6cm、炭化物混じり灰褐色土層は層厚4cm、成層したテフラ層は層厚8.6cm、暗褐色土層は層厚



第127図 第1地点(7-80区K-13)の柱状図

14cm、黒灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層は層厚11cmで軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mmが認められる。

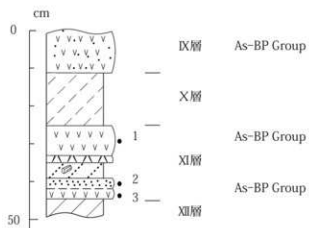
これらの地層のうち、下位の成層したテフラ層は、細粒の黄白色軽石層で層厚3cm、軽石の最大径3mm、石質岩片の最大径2mmと灰白色粗粒火山灰層の層厚3cmからなる。一方、上位の成層したテフラ層は、桃色細粒火山灰層で層厚0.6cmと、乳白色風化細粒軽石層で層厚8cm、軽石の最大径2mmからなる。

第3地点の層序は以下のとおりである(第128図)。下位より灰色砂層からなり、層厚50cm以上、黒泥層は層厚32cm、成層したテフラ層は層厚3cm、砂混じり暗灰色泥層は層厚3cm、基底部に層厚8cmの灰色砂層をもつ灰色砂質泥流堆積物は層厚126cm、礫の最大径263mmである。

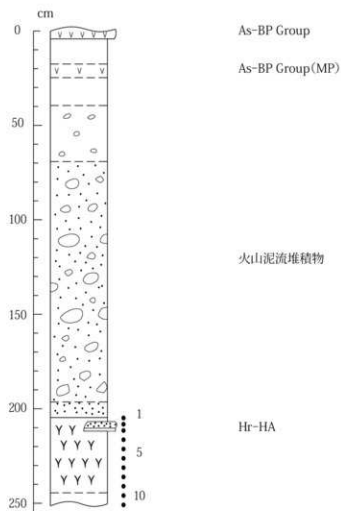
また上位には青みがかった灰色岩片が多い灰褐色土が層厚29cm、若干色調が暗い褐色土層は層厚15cm、黄褐色軽石を含み若干色調が暗い灰褐色土は層厚7cmで軽石の最大径6mm、わずかに色調が暗い褐色土が層厚14cmなど認められる。

(3)テフラ検出分析の方法と結果

テフラの検出を目的とする分析試料と分析方法について述べる。土層断面において、テフラ層ごとまたは地層ごとに層界をまたがないよう基本的に5cmごとに設定採取された試料のうち、第1地点と第3地点の14試料を対象に、テフラ粒子の相対的な特徴を把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。



第2地点の柱状図
(※数字はテフラ分析の試料名)



第3地点の柱状図
(※数字はテフラ分析の試料名)

第128図 第2地点(7-71区B-11)・第3地点(7-80区M-8)の柱状図

第4章 自然科学分析による遺跡の理解

はじめに、試料12gを秤量する。次に超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去する。試料は80℃で恒温乾燥させ、実体顕微鏡下、テフラ粒子の量や色調などを観察する。

テフラ検出分析の結果を第6表に示す。第1地点では、試料36と32に無色透明のバブルウォール型ガラスが比較的多く含まれている。また、試料8から試料5にかけて、分厚い中間型や軽石型の火山ガラスが比較的多い。火山ガラスの色調は、灰色、白色、無色透明である。一方、第3地点の試料3には、白色の軽石やその細粒物である白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の最大径は7.6mmで、最大径が3.2mmに達する石質岩片も認められる。また、斑晶には角閃石や斜方輝石が含まれている。

(4) 考察

調査区で最下位の地層が認められた第3地点では、成層したテフラ層とその上位の火山泥流堆積物を検出した。成層したテフラ層については、層相や含まれるテフラ粒子の特徴から、榛名火山から噴出した榛名八崎火山灰[Hr-HA] (新井1989)と考えられる。

第1地点の試料36 (X層基底付近)で多く出現しはじ

める無色透明のバブルウォール型火山ガラスについては、その特徴から南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰[AT] (町田・新井1976)に由来すると考えられる。したがって、その降灰層率は試料36付近と推定される。

同じX層でその上位に濃集する黄褐色軽石(試料33)は、ATのすぐ上位にあることや、特徴的な色調などから、浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石(新井1962)の中の最下部の室田軽石(森山1971)と考えられる。第2地点においては2層認められるXI層中のテフラ層、IX層下部の軽石層、VIII層中の粗粒火山灰層は、層相から浅間板鼻褐色軽石を構成する降下テフラ層と考えられる。

VI層中に含まれる粗粒の黄色軽石は、層位や岩相から、浅間大窪沢第1軽石[As-0kp1]および浅間大窪沢第2軽石[As-0kp2] (中沢ほか1984)に由来すると思われる。なお、VIII層中に多く含まれる黄色細粒軽石は、その層位や色調から浅間白糸軽石[As-SP] (町田ほか1984)に由来する可能性がある。

VI層最上部にある粗粒の黄色軽石層は、その層相や層位などから浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石[As-YP] (新井1962)の下部(主体部)と上部にそれぞれ同定される可能性が高い。

第6表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
第1地点	3				*	jm	白
	5				**	nd, jm	灰、白
	7				**	nd, jm	灰、白、透明
	8				**	nd, jm	灰、白、透明
	11				*	jm, nd	白、灰
	13				*	jm, nd	白、灰
	15				*	jm, nd	灰、白、透明
	28				*	jm/bw	灰、透明
	30				*	jm, bw	灰、透明
	32				**	bw	透明
	36				**	bw	透明
	38				*	jm	白
	40				*	jm	白
第3地点	3	*	白	7.6	**	jm	白

***: とくに多い, **: 多い, *: 中程度, *: 少ない, 最大径の単位は, mm, bw: バブルウォール型, nd: 中間型, jm: 軽石型

第2節 テフラの放射性炭素年代

(1) テフラの年代測定の目的

上細井嶺山遺跡で地質調査を実施して地層やテフラの記載を行うとともに、テフラの前後から採取した炭化物試料を対象にAMS法による放射性炭素年代測定を行って、遺跡に堆積した地層の層序やテフラの年代を検討することにした。これらの年代測定分析は、試料採取を火山灰考古学研究所に、年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託して実施した。

(2) 試料の処理及び年代測定の方法

放射性炭素年代測定の対象試料は、第2地点(118図・128図)から採取し、XI層から出土した浅間板鼻褐色テフラ層[As-BP1]中の炭化物(2-1:IAAA-92853、2-2:IAAA-92854)とXII層から出土した炭化物(3:IAAA-92855、4:IAAA-92856)の合計4点であり、いずれも上部ローム層中に挟在するテフラの中から採取した。

年代測定試料の化学処理の工程は以下のとおりである。試料は、メス・ピンセットを使い、根や土等の表面的な不純物を取り除く。その後、酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA:Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では80℃の1Nの塩酸を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では80℃の1Nの水酸化ナトリウム水溶液を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では80℃の1Nの塩酸を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用した。

化学処理を終えた試料は、酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱した。その後、液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで試料から二酸化炭素(CO₂)を精製する。精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

試料から作成したグラファイトを内径1mmのカソード

に詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着して測定を行った。

放射性炭素年代測定の機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 95DH-2)を使用した。測定は、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HoXII)を標準試料とし、バックグラウンド試料の測定も同時に実施した。

放射性炭素年代値の算出方法は以下のとおりである。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiverand Polach1977)。14C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}C$ によって補正された値である。14C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}C/^{12}C$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。

暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al.2004)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995;Bronk Ramsey 2001;Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

(3)測定結果

XI層[As-BP1]から出土した炭化物の14C年代は、2-1が22390±100yrBP、2-2が22640±100yrBPである。これらは、おおむね近接した年代値となった。XII層出土炭

化物の14C年代は、3が23130±100yrBP、4が23000±100yrBPである(第7・8表)。誤差(±1σ)の範囲で値が重なり合い、近い年代を示している。4点とも後期旧石器時代に相当する年代値で、炭素含有率はおおよそ40%を超え、化学処理や測定上の問題は認められない。

第7表 放射性炭素年代の測定結果

測定番号	層位	試料形態	処理方法	δ 13C (‰)(AMS)		δ 13C補正あり			
						Libby Age(yrBP)		pMC(%)	
						値	誤差	値	誤差
IAA-92853	XI	炭化物	AaA	-25.44	± 0.71	22,390	± 100	6.16	± 0.07
IAA-92854	XI	炭化物	AaA	-26.11	± 0.58	22,640	± 100	5.97	± 0.07
IAA-92855	XI	炭化物	AaA	-25.64	± 0.75	23,130	± 100	5.62	± 0.07
IAA-92856	XI	炭化物	AaA	-24.48	± 0.63	23,000	± 100	5.71	± 0.07

第8表 放射性炭素年代の暦年較正年代

測定番号	δ 13C補正なし				暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	値	誤差	pMC (%)			
IAA-92853	22,390	± 90	6.16	± 0.07	22,385 ± 93	20539BC-20345BC (68.2%) *	20629BC-20254BC (95.4%) *
IAA-92854	22,660	± 100	5.96	± 0.07	22,641 ± 99	20782BC-20588BC (68.2%) *	20887BC-20499BC (95.4%) *
IAA-92855	23,140	± 100	5.61	± 0.07	23,127 ± 99	21271BC-21074BC (68.2%) *	21375BC-20886BC (95.4%) *
IAA-92856	22,990	± 100	5.72	± 0.07	22,998 ± 102	21155BC-20956BC (68.2%) *	21256BC-20851BC (95.4%) *

第3節 1号竪穴住居から出土した炭化材の放射性炭素年代

(1)炭化材の年代測定の目的

1号竪穴住居の床面からはまとめて炭化材が出土し、貯蔵穴周辺からは多くの遺物が出土した。採取した炭化物試料を対象にAMS法による放射性炭素年代測定を行った。竪穴住居の床面に残された遺物の年代を検討することにした。炭化材の放射性炭素年代の測定は、株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

(2)試料の処理及び年代測定の方法

試料は、最外年輪の残る試料を2点選び、測定した試料の情報や試料の処理は第9表に示す。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

(3)測定結果

第10表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比

(δ 13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、第129図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

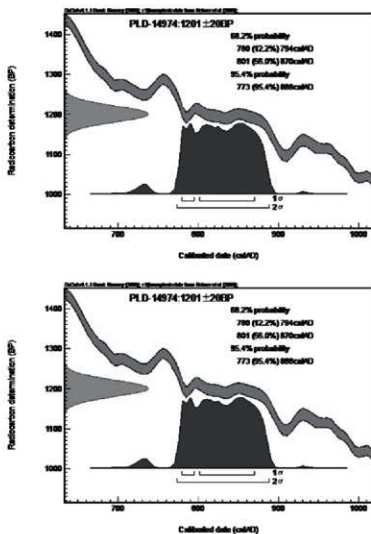
14C年代の暦年較正には0xCal14.1(較正曲線データ:INTCAL09)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する

第9表 測定試料及び処理

測定番号	遺構	試料番号	種類	性状	状態	前処理
PLD-14974	1号竪穴住居	No. 1	クワ(6年輪)	最外年輪	wet	超音波洗浄・酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)
PLD-14975	1号竪穴住居	No. 2	クワ(10年輪)	最外年輪	wet	超音波洗浄・酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1%, 塩酸:1.2%)

第10表 放射性炭素年代測定値及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14 C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14 C年代を暦年に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-14974 試料 No. 1	-24.48 \pm 0.21	1201 \pm 20	1200 \pm 20	780AD (12.2%) 794AD 801AD (56.0%) 870AD	773AD (95.4%) 888AD
PLD-14975 試料 No. 2	-24.48 \pm 0.20	1226 \pm 21	1225 \pm 20	722AD (13.4%) 741AD 770AD (41.4%) 825AD 841AD (13.5%) 862AD	694AD (1.4%) 701AD 708AD (20.8%) 748AD 766AD (73.2%) 881AD



第129図 暦年校正図

68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代正曲線を示す。

1号竪穴住居から出土した炭化材2点について測定・暦年代校正した結果、1号竪穴住居から出土した炭化材の試料No.1(PLD-14974)は、1σ暦年代範囲において780-794 calAD(12.2%)および801-870 calAD(56.0%)、2σ暦年代範囲において773-888 calAD(95.4%)であった。確率の高い年代範囲に注目すると2σ暦年代範囲において8世紀後半～9世紀後半である。

また、炭化材No.2(PLD-14975)は、1σ暦年代範囲において722-741 calAD(13.4%)と770-825 calAD(41.4%)および841-862 calAD(13.5%)、2σ暦年代範囲において694-701 calAD(1.4%)と708-748 calAD(20.8%)および766-881 calAD(73.2%)であった。確率の高い年代範囲に注目すると2σ暦年代範囲において8世紀後半～9世紀後半である。

該当する時期における校正曲線は、8世紀後半～9世紀後半にかけて平坦部であり(第129図)、校正された炭化材の年代範囲は広い範囲であった。このことから、年代範囲を十分絞り込むことは困難であり、概ね8世紀後半～9世紀後半の時期に相当する。なお、単一炭化材試料から複数点を採取し、ウィグルマッチングを検討したが、いずれの炭化材も10年輪以内であったため断念した。

第4節 プラント・オパール分析

(1) プラント・オパール分析の目的

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山1984、杉山2000)。

上細井嶺山遺跡の西側の谷は、隣接する山王・柴道跡に連続することから遺跡西端の地層が生産域として水田

や畠として利用された可能性が出てきた。今回は、プラント・オパール分析による水田跡の探査を目的に分析を行った。

(2) 試料とプラント・オパール分析の方法

分析試料は、第4地点(72区E-19)の壁面から採取した試料1～5の計5点である。試料1～3はIc～Id層に相当する茶褐色～赤褐色土である。試料4と5はIIb1層～IIa層に相当する黒褐色～赤褐色土である。

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原1976)を用いて、以下の手順で行った。試料は105℃で24時間乾燥(絶乾)する。試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)する。試料を電気炉で灰化法(550℃・6時間)によって脱有機物処理を施す。処理の済んだ試料は、超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散を行い、沈底法によって20μm以下の微粒子を除去した。得られた粒子を封入剤(オイキット)中に分散してプレバートを作成した。

プレバートの検鏡及び計数と同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山2000)。

(3) 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行った。分析結果を第11表および第130図に示す。

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネ

のプラント・オパールが試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準をおよそ3,000個/gとして検討を行った。

その結果、今回分析を実施したすべての試料からイネが検出された。このうち、試料1で密度が2,900個/g、試料2では3,200個/g、試料4では4,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの地層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。試料3と試料5では密度が2,000個/gおよび700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、地層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)などがあるが、これらの分類群は今回分析したいずれの試料からも検出されなかった。

第11表 プラント・オパール分析結果

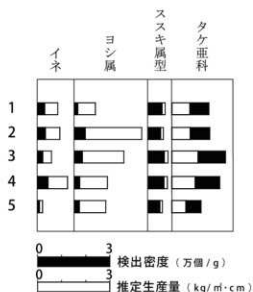
検出密度 (単位: ×100個/g)		試料				
分類群	学名	1	2	3	4	5
イネ	<i>Oryza sativa</i>	29	32	20	43	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	45	33	22	21
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	57	51	67	65	48
タケ亜科	Bambusoideae	157	160	226	202	123

推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出						
	1	2	3	4	5	
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.84	0.94	0.59	1.28	0.20
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.90	2.83	2.10	1.37	1.30
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.71	0.64	0.82	0.81	0.59
タケ亜科	Bambusoideae	0.76	0.77	1.09	0.97	0.59

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。今回分析した試料にみられる、おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢であり、タケ亜科(おもにネザサ節型)やススキ属型も比較的多くなっている。

以上のことから、各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには竹笹類やススキ属などが生育していたと考えられる。

プラント・オパール分析の結果、試料1、試料2、試料4ではイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、試料3、試料5でも稲作が行われていた可能性が認められた。各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。



第130図 プラント・オパール分析結果

第5節 1号竪穴住居から出土した炭化材の樹種

(1) 炭化材の樹種同定の目的

1号竪穴住居の床面の埋土中から出土した炭化材1点の樹種同定を行い、竪穴住居の部材などに使用された樹木の種類を特定し、当時の植物利用について検討する資料とすることを目的とした。なお、樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託して実施したが、同じ試料を用いてAMS法による放射性炭素年代測定も実施した。

(2) 樹種同定の方法

竪穴住居埋土から出土した炭化材試料は、手割りあるいはカッターナイフを用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を作製した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-5900LV型)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

(3) 樹種同定の結果

樹種同定の結果、試料の炭化材はブナ科のクリであった。年代測定に用いた試料はNo. 1、No. 2ともにクリであった。以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

環孔材で、大型の道管が2~3列集まり年輪界に並ぶ。晩材部では角張った小道管が火災状に配列している。軸方向柔組織は短接線状に配列する。道管の穿孔は主に単一で、放射組織は単列同性である。

樹種同定を行った炭化材は、平安時代の1号竪穴住居から出土した一括取上げの炭化材である。試料は半径5cm以下のやや大型の破片で、比較的量は多い。同定した炭化材は、比較的大きなものを実体顕微鏡で複数観察した結果、すべてクリであった。これらの炭化材は、年輪数は10年程度と少なく、成長の早い木材であった。

クリは、温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材質は耐朽性・耐湿性に優れ保存性が高い。建築・家具・器具・土木など多用途に利用されるが、産出状況は不明であるが、炭化材の形状から建築部材の一部と考えられる。

第6節 自然科学分析の成果と発掘調査からの評価

(1) 地層とテフラ

上細井蛭山遺跡で検出された地層やテフラを明らかにするため地質調査を実施した。遺跡が立地する白川扇状地は、土石流堆積物からなる扇状地堆積物が認められ、様名八崎テフラや始良Tnテフラの降下層準以上の上部ローム層に被覆されている(早田1990)。

扇状地の扇頂に位置する小暮東新山遺跡では輝石安山岩の巨礫を含む泥流堆積物が認められ、浅間室田テフラの降下層準以上の上部ローム層に被覆されている(群馬県教育委員会2011)。また東田之口遺跡(当事業団2011)では、As-BPとAs-0kの間に層位がある礫層を含む水成堆積物が上部ローム層の間に認められる。

これらの扇状地堆積物は上部ローム層に被覆される白川扇状地最上部の堆積面を広域に形成している可能性が高い。こうした堆積物の層序や分布を解明することは、白川扇状地に分布する遺跡の立地条件や変遷を理解する手がかりになるものと考えられる。

今回の発掘調査では第3地点の調査坑において泥流堆積物の下位より様名八崎火山灰(新井1989・竹本1985の三原田輝石)が検出され、1地点のXII層基底付近に始良Tnテフラの降灰層準が認められた。これらのことから上細井蛭山遺跡が位置する白川扇状地扇端を構成する泥流堆積物は中部ローム層上部に層位があることが明らかである。

今後は山頂カルデラで形成された火山活動と白川扇状地を構成する泥流堆積物の起源や分布並びに旧石器時代の遺跡分布を明らかにする必要があるものと考えられる。

(2) テフラの放射性炭素年代

テフラに含まれる炭化物の放射性炭素年代を測定した。遺跡周辺の白川扇状地は上部ローム層に被覆される泥流堆積物で最終の広域な堆積面を形成している可能性がある。小暮東新山遺跡では扇状地堆積物を被覆する上部ローム層の最下底から浅間室田テフラが検出されている(株式会社古環境研究所2011)。この堆積物は岩相から上細井蛭山遺跡で検出された泥流堆積物と同じ起源であると考えられるが、小暮東新山遺跡の標高は370mで扇

状地頂頂に位置しており、最終氷期の寒冷期には扇状地堆積物上の裸地化が著しかったと考えられる。こうしたことから、上部ローム層下半部に挟在する浅間火山起源のテフラの正確な年代を明らかにすることは、扇状地内の古植生復元や遺跡の変遷を考える上で重要である。

XI層[As-BP1]から出土した炭化物の放射性炭素年代は、試料2-1が22390±100yrBP、試料2-2が22640±100yrBPである。これらの試料は、おおむね近接した年代値となった。XII層出土炭化物の放射性炭素年代は、試料3が23130±100yrBP、試料4が23000±100yrBPであり、誤差(±1σ)の範囲で値が重なりあって近い年代を示している。

これらの0xCalv4.1校正プログラムを使用した2σ暦年代範囲は、試料2-1が20629～20254BC(95.4%)、試料2-2が20887～20499BC(95.4%)、試料3が21375～20986BC(95.4%)、試料4が21256～20851BC(95.4%)であり、従来考えられている浅間板鼻褐色テフラの年代値27～23.0千年(開口はか2011)(矢口2011)に矛盾しない。またこの時期はMIS 2のISナンバー3と2の間にある最寒冷期に相当すると考えられる。

(3) 1号竪穴住居から出土した炭化材の放射性炭素年代

1号竪穴住居から出土した炭化材2点から放射性炭素年代が得られたので、較正年代と出土した遺物から想定される竪穴住居の相対年代を検討した。

炭化材の試料No. 1は、1σ暦年代範囲において780-794 calAD(12.2%)および801-870 calAD(56.0%)、確率の高い年代範囲に注目すると1σ暦年代範囲において9世紀Ⅰ～Ⅲ四半期の年代幅である。

炭化材No. 2(PLD-14975)は、1σ暦年代範囲において722-741calAD(13.4%)と770-825calAD(41.4%)および841-862calAD(13.5%)であった。試料No. 1と重なる年代幅は780-794calADと841-862calADで8世紀Ⅳと9世紀Ⅱ～Ⅲ四半期である。

2σの暦年代範囲に該当する時期における較正曲線は、8世紀後半～9世紀後半にかけて平坦部で、較正された炭化材の年代範囲はやや広い範囲であった。これは概ね8世紀後半～9世紀後半の時期に相当し、出土遺物の考古学的な相対年代である9世紀後半代の年代値と矛盾しない。

(4) プラント・オパール分析

プラント・オパール分析の結果、As-B上位の1c～1d層に相当する試料1と試料2、Hr-FA上位のHb 1層～Hb 2層に相当する試料4からイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと考えられた。また試料3と試料5でも稲作が行われていた可能性が認められた。

これらのイネのプラント・オパールが検出された層厚は、榛名二ツ岳浅間川テフラの上位から浅間Bテフラの上位の谷底堆積物であり、これらは古墳時代後期～中世の時期に帰属する堆積物であると考えられる。この時期は周辺の山王・柴遺跡群や上細井山遺跡で集落が営まれていた時期に相当する。分析の結果は谷上流域で水田が営まれたか、調査区縁辺の小規模な谷でヨシ属が生育するような湿地環境を利用して水田稲作が継続的に行われていた可能性が示唆される。

(5) 1号竪穴住居から出土した炭化材の樹種

1号竪穴住居から出土した炭化材の樹種はクリである。住居の床面付近から出土した炭化材は、床面が埋没する過程で焼失して炭化しており、廃棄された住居が人為的に焼失を受けたもので、炭化材のほとんどは出土状況から竪穴住居の建築材と考えられる。

クリは、温帯から暖帯に分布する落葉樹で、材質は耐朽性や耐湿性に優れており古墳時代から古代の集落では建築材や家具、木製品に多く利用される。関東地方北部における古代の竪穴住居から出土した樹種はコナラやクヌギに次いでクリが多い。群馬県安中市の愛宕山遺跡4号竪穴住居からは9世紀初頭の炭化材が豊富に出土し、建築材や木製品からクリが量的に多く検出されている(植田2001)。

群馬県は日本列島中央の内陸地域に位置し、太平洋岸や日本海側の多雪地域に比べ降水量が比較的少なく温暖で冬は乾燥した気候学的特徴がある。このため火山山麓や丘陵の里山にはコナラやクヌギなどの広葉樹林が広がり、人為的に植生を管理して形成されるスギやヒノキなどの樹林に対して優位な植生を保っている。こうした古代の森林環境を背景とした里山を持つ赤城山麓の集落では、クリが主要な建築材であったのかも知れない。

第5章 調査成果のまとめ

第1節 旧石器時代から縄文時代の遺跡

赤城南麓の白川扇状地扇端に位置する上細井蛭山遺跡では、他の赤城南麓地域にくらべて旧石器から縄文時代の遺構密度はやや低かったと考えられる。上細井蛭山遺跡で認められた旧石器人類の痕跡は浅間大窪沢テフラの降灰層帯にあたる上部ローム層上半部で、群馬県の旧石器編年ではIV期の上半部(関口ほか2011)に相当する。

隣接する上細井中島遺跡でも同層準から旧石器時代の剥片が出土している。また遺跡の西にある山王・柴遺跡の扇状地縁には泥流丘からなる円頂丘が存在し、旧石器時代に人類が移動する際には、当時の利根川左岸のランドマークになっていた可能性がある。

縄文時代の遺構や遺物は、早期の条痕文系土器の破片が出土しているが微量である。当遺跡から土坑や竪穴、竪穴住居からなる本格的な集落が検出されるのは縄文時代前期前半から中葉の黒浜式から前期後半の諸磯式土器が含まれる遺構群の時期に相当する。

上細井蛭山遺跡に隣接する東隣の上細井中島遺跡は、観音川右岸の台地上から縄文時代早期後半の遺構群と縄文時代中期後半の集落と観音川の洪水堆積物が検出されている。また西隣の山王・柴遺跡群では縄文時代前期と中期の土器が出土し、旧石器時代から縄文時代の赤城白川の埋没河道が認められた引切塚遺跡でも早期後半の遺構群や洪水堆積物が検出されている。上細井蛭山遺跡で検出された縄文時代の遺構群は前期前半から後半であり、遺物包含層の主体も縄文時代前期から中期の時期に相当する。これらは、赤城南麓の火山麓扇状地の扇端に集落が急増する時期にあたり、遺構及び遺物包含層の年代幅と周辺の集落遺跡の形成期は調和的である。

第2節 古墳時代から平安時代の遺跡

上細井蛭山遺跡では弥生時代から古墳時代前半の集落が未検出であり、本格的な農耕集落の形成は古墳時代後期以降と考えられる。

遺跡が位置する赤城南麓の扇状地扇端の台地には、古墳時代後期から平安時代の集落遺跡が広い範囲に分布

し、芳賀団地遺跡群のような大規模な発掘調査によって古代集落の全体像が明らかになった遺跡や5世紀から7世紀にかけての継続的な集落である東田之口遺跡などの事例もみられる。上武道路建設に伴う発掘調査では、「地形条件に無作為な一定の幅で地域社会の変化を線状に把握できる可能性がある」といった特徴がある。調査範囲は、農耕集落の何らかの質的な変遷を反映したものではないかと考えられる(第131図)。

上細井蛭山遺跡の調査範囲では、6世紀後半から7世紀前半に2棟の竪穴住居(7号住・17号住)が構築された。この2棟はN64～65°Eの主軸方位を持って正方形に近い形状を有することから、6世紀から7世紀にかけて継続的に構築され、あるいは同時存在した住居の可能性もある。1号古墳は7世紀代に築造された終末期古墳と考えられ、これらの住居の年代幅かその後築造された可能性がある。2棟の竪穴住居と古墳が呈する方形の辺の方位は他の遺構が南北性の傾向を持つのに対して異なる特徴を示すが、これは遺構群の同時代性を示す傍証なのかも知れない。

8世紀前半に2棟の竪穴住居(2号住・3号住)が構築された。この2棟はN73～75°Wの主軸方位を持って正方形に近い形状を有すると推定されることから、8世紀前半に継続的に構築されたか、同時に並んで構築された住居の可能性もある。9世紀には調査範囲の東部に1号道が構築される。道は15mの長さで残存しているが延長方向には遺構が分布しない。これは当時存在していた1号古墳の墳丘や9世紀中頃以降の遺構群が道を意識して構築されたものである可能性が推定できる。1号道の側溝にあたる溝から9世紀後半代の遺物が出土しており、この頃から道の側溝が埋まりはじめたのであろう。

上細井蛭山遺跡の発掘調査で特筆されるのは、9世紀中頃から急増する竪穴住居群の存在である。9世紀後半から10世紀前半にかけて25棟の竪穴住居が構築されており、これらは正方形や正方形に近い竪穴住居と長方形の竪穴住居や床面積が17～28㎡に及ぶ比較的大きな竪穴住居と9～14㎡程度の規模の小さな竪穴住居に大別されるようにみえる。

これらの竪穴住居は遺構が残りにくい平地式住居を伴って集落を形成していた可能性があるが、当地における9世紀後半の竪穴住居の変遷についていくつかの観察点を以下に述べる。

9世紀中頃の1号道の構築に伴って大小2棟の竪穴住居の組み合わせで3系統の住居群が構築された。なお、この大小の組み合わせは建物の同時性が証明されていないので、時間幅を持って構築に時期差がある建物群(例えば世帯の家族が増えたことによる増築等)である可能性は否定しない。

これらは正方形の竪穴住居の大小2棟からなるI-1群(11住と12住)と長方形の竪穴住居の大小2棟からなるII-a-1群(8住と15住)とII-b-1群(6住と13住)である。特にII-a群とII-b群の竪穴住居は1号道を軸にして南北に向き合っている様にも見えるが、道を意識した立地か否かは不明である。これらの住居群の他に単独で正方形の23住と長方形の20住が構築されているが、両住居とも規模の小さな竪穴住居である。

9世紀後半も同様に大小2棟の竪穴住居の組み合わせで2系統の住居群が構築されている。これらは正方形の竪穴住居の大小2棟からなるI-2群(9住と10住)と長方形の竪穴住居の大小2棟からなるII-b-2群(14住と4住)である。I-2群の竪穴住居は1m以内の距離で接しており同時存在の可能性は低いが、連続する時間幅での存在はあり得るだろう。これには9世紀中頃のI-1群の竪穴住居が3m以内の至近距離で接していることから同様に推定され、これらの住居群には接近して住居を構築する必然性を認めておく必要が指摘できよう。またII-b-1群とII-b-2群の竪穴住居は東西方向に大小の竪穴住居が同一組み合わせで並ぶ位置関係にある。

9世紀後半の竪穴住居はこれらの住居群の他に正方形の1住と5住や21住と30住及び長方形の25住と26住などが構築されているが、規模の小さな竪穴住居である。

集落に見られる大小の竪穴住居の組み合わせは、同時期に大小の竪穴住居が存在したのか、時間幅を持って構築に時期差がある建物群なのか同時性を示す遺物の遺構間接合等の資料が得られていないため不明点が多い。

後者の場合は農地の開発に伴って世帯の構成人数が増えたことによる増築や改築の可能性が考えられる。また前者の大小の竪穴住居の組み合わせが同時に存在する場

合、それらを世代間の棲み分け。例えば大家族の中の若い世帯や引退した老世帯が小さな竪穴住居の主体であると考えることや、世帯を構える前の青年男性の棲み分け。例えば若者宿のような民俗例で世帯を持たない青年男性が小さな竪穴住居の主体と考えること。もしくは大小の竪穴住居が経済的な階層差を示す家族の居住形態と考えることなどが可能である。

竪穴住居の大小を棲み分けの差であると検証するためには住居から年齢差や社会的文化的な性のありようといった意味の「ジェンダー」を示す遺物の出土例を示すことが必要である。また、経済的な階層差は竪穴住居の規模や大きさに表されている可能性もあるが、威信財の有無や生産手段に関する遺物の定量的な検討が必要である。このような観点から竪穴住居の性格について検討を行う必要があるものと考えられる。

上細井山遺跡に限らずこのような竪穴住居群の変遷は小神明勝沢遺跡や小神明富士塚遺跡でも同様の変化が読み取れる。赤城山の南麓では古墳時代後期に開始した小規模集落が、ほぼ間断なく奈良時代の8世紀中頃まで継続したが8世紀後半から9世紀前半に減少する傾向が顕著である。このような動向は集落遺跡が立地する扇状地上の平坦面や生産域が存在する谷地や扇状地下の低地の遺跡変遷との関係で理解すべきであり、今後は拠点の中核集落の盛衰との関連性が注目される。

文献

- 新井房夫1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 pp.1-75.
 新井房夫1971「前橋市の地形・地質」『前橋市史』1 pp.8-86.
 新井房夫1989「テフラの同定」『勝保沢中山遺跡(2)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業調査報告書第87集 pp.265-266.
 Bronk Ramsey C. 1995Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCalProgram, Radiocarbon37 (2), 425-430.
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon43 (2A), 355-363.
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon43 (2A), 381-389.
 藤原宏志1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の埋蔵体標本と定年分析法―」『考古学と自然科学』9 pp.15-26.
 藤原宏志・杉山直二1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―」『考古学と自然科学』17 pp.73-85.
 株式会社古墳研究所2011「附属自然科学分析」『小藤東山遺跡』pp.273-302.
 笠懸野岩宿文化資料館編1993『群馬の岩宿時代』27P.
 Koga, S (1984) Geology and petrology of Akagi Volcano, Gunma Prefecture, Japan. Sci. Rep. Inst. Geosci. Univ. Tsukuba, sec. B.5 pp.1-67.
 町田洋・新井房夫1976「広域に分布する火山灰―始良Tn火山灰の発見とその意義―」『科学』46 pp.339-347.
 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫1984「テフラと日本

1号窯穴住居(第13・14図 PL.37)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	カマド 理土	1/4	口 底 12.4 8.0	高 3.2 細砂粒・角四石/ 良好/赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、内面は撫で。底部型押し。	
2	須恵器 椀	床面直上	完形	口 底 14.4 7.0	高 5.4 6.3 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	口縁部外面に保付着
3	須恵器 椀	床面直上	完形	口 底 14.2 6.5	高 5.5 6.0 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	口縁部整形(右回転) 高台は付け高台。	体部外面に保付着 (文字不明)・底部厚塗
4	須恵器 椀	床面から 7cm上	完形	口 底 14.4 7.1	高 5.3 6.5 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄褐色	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	体部外面に垂書 (文字不明)・体部外面吸炭
5	須恵器 椀	床面から 19cm上	完形	口 底 14.8 7.0	高 5.7 6.6 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	内面の一部吸炭
6	須恵器 椀	床面から 5cm上	完形	口 底 14.1 6.7	高 5.2 6.7 細砂粒・粗砂粒・ 片岩/酸化塩/橙	口縁部整形(右回転) 高台は、底部回転系切り後のやや雑な付け高台。	器面厚塗・磨回か
7	須恵器 椀	床面直上	口縁一部欠	口 底 14.4 6.3	高 5.6 6.0 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	体部内面に保付着
8	須恵器 椀	床面直上	口縁一部欠	口 底 14.2 7.5	高 5.3 6.9 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/黄褐色	口縁部整形(右回転) 高台は、底部回転系切り後の付け高台。	足込み部に垂ね 焼き痕
9	須恵器 椀	床面直上	口縁一部欠	口 底 14.2 6.9	高 5.7 6.2 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	体部外面に保付着
10	須恵器 椀	床面から 18cm上	4/5	口 底 14.8 7.0	高 5.4 6.5 細砂粒・粗砂粒・ 片岩・雲母/酸化 塩/灰黄褐色	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	外面に帯状に 保付着・磨回か
11	須恵器 椀	床面から 11cm上	2/3	口 底 13.4 7.0	高 5.1 6.2 細砂粒・粗砂粒・ 片岩・雲母/酸化 塩/にぶい黄橙	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	内外面に保付着
12	須恵器 椀	床面から 20cm上	口縁部欠損	口 底 6.6 6.0	高 6.0 細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元塩/灰赤 りーブ	口縁部整形(右回転) 高台は、底部回転系切り後の付け高台。	足込み部に垂ね 焼き痕・口縁部 全周欠損
13	須恵器 椀	カマド 理土	体部～底部	口 底 7.7 6.6	高 6.8 5.8 細砂粒/還元塩/灰 黄褐色	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の雑な付け高台。
14	須恵器 椀	カマド 理土	体部～底部	口 底 10.7 10.8	高 10.8 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転) 高台は丁車な付け高台で、外面に強い撫でを施す。	
15	須恵器 蓋	床面直上	口縁欠	口 底 10.7 10.8	高 10.8 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転) 高台は丁車な付け高台で、外面に強い撫でを施す。	
16	須恵器 鉢	床面直上	胴部片	口 底 10.7 10.8	高 10.8 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	叩き整形。外面は平行叩き。内面の当て貝、素文。	胴部内面に保付着

1号窯穴住居(第14図 PL.37)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要
17	鉄製品 鋳造製品	理土	ほぼ完形	長さ8.6 幅3.8 厚さ0.4 重さ18.02	一端は指状に広がり刃状に薄くなる。反対側は断面4角形のまま細くなり基状を呈するが縁や側状の構造は見られない。	

1号窯穴住居(第14図 PL.37)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
18	石製品 砥石	床面直上	砥沢石	(12.4)	3.0	(1.6)	81.1	切り砥石	三面使用。裏面側には凹凸の激しい折り取り面が残る。裏面側は被熱割れているが、磨盤後に生じたものか。	

2号窯穴住居(第16図 PL.37)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面直上	完形	口 底 13.0 3.0	高 3.3 細砂粒・角四石/ 軽石/良好/にぶい 黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削りて、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	内面の厚塗面着
2	土師器 杯	床面から 6cm上	3/4	口 底 11.4 3.4	高 3.4 細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	器面厚塗
3	土師器 杯	床面直上	1/4	口 底 12.4	高 3.4 細砂粒・角四石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削りて、間に撫での部分を残す。内面は撫で。	外面に輪積り痕
4	土師器 杯	床面から 40cm上	口縁～底部片	口 底 13.8	高 3.4 細砂粒・軽石/良 好/にぶい赤褐色	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
5	土師器 皿	理土	口縁～体部片	口 底 15.6	高 3.0 細砂粒・角四石/ 軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。	内面の厚塗面着
6	須恵器 蓋	床面直上	完形	口 底 15.0	高 3.0 5.0 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	口縁部整形(右回転)天井部外面に回転へら削り。掴みは内面に垂ね焼きによる変色	
7	須恵器 杯	床面から 18cm上	1/4	口 底 15.4	高 4.0 10.6 細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/暗緑灰	口縁部整形(左回転)高台は底部回転へら削り後、体部下端及び底部に強い撫でを施して掘出した削りだし高台。	

2号窯穴住居(第16図 PL.37)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要
8	鉄製品 釘	理土	破片	長さ2.4 幅0.25 厚さ0.3 重さ1.49	断面4角形でやや細くなりながら、むしろのように「く」の字状に曲がる。反対側は劣化後に破損した。	

遺物観察表

3号塚(住居(第16図 PL.38))

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 皿	貯蔵穴 底面から 15cm上	3/4	口 15.4 高 4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	器面厚減・粉っぽい素地
2	須恵器 蓋	床面から 26cm上	完形	口 15.4 高 3.4 輪 3.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)天井部外面に回転へら削り。掴みは楕円状。	楕円か
3	須恵器 杯	床面から 8cm上	1/2	口 12.0 高 8.0 底 8.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)底部回転へら起こし後、手持ちへら削り。	
4	土師器 甕	貯蔵穴 底面直上 床面から 12cm上が接 合	1/3	口 19.8 高 5.2 底 5.2	細砂粒・粗砂粒/ 軽石/良好/ぶい 赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのへら削り。内面は撫で。	胴部内面下に接合痕・口縁部外面に輪積痕・胴部外面に保付首
5	土師器 甕	貯蔵穴 底面直上 床面直上が 接合	口縁～胴部	口 22.7	細砂粒・粗砂粒/ 角閃石・軽石/良 好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り。内面は横のへら撫で。	胴部外面に輪積痕
6	土師器 甕	貯蔵穴直上 とカマド使 用面直上が 接合	口縁～胴部片	口 21.8	細砂粒・角閃石/ 良好/赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのへら削り。内面は撫で。	

4号塚(住居(第19図 PL.38))

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	カマド 掘方 理土上接合	1/2	口 12.8 高 6.4 底 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/褐灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整	器面厚減
2	須恵器 椀	床面から 31cm上	体部～底部	底 6.7 高 6.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/ぶい黄 橙	ロクロ整形(左回転か) 高台は底部回転系切り後の雑な付け高台。	器面厚減
3	須恵器 椀	掘方直上	体部～底部片	底 7.2 台 6.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の雑な貼り付け。	高台端部に重むきによる鈿
4	須恵器 椀	貯蔵穴 底面から 16cm上	体部～底部片	底 6.4 台 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り後の雑な付け高台。	高台の一部は貼り付け部から剥落。
5	須恵器 理土	口縁～体部	口 12.8 底 6.0	細砂粒・雲母/ 酸化焰/明黄褐	ロクロ整形(右回転)	内面変戻	
6	土師器 台付甕	掘方理土	台部	台 8.8	細砂粒/良好/ぶい赤褐	脚部は横撫で。	
7	土師器 理土	口縁～胴部	口 20.6	細砂粒・粗砂粒/ 角閃石・軽石/良 好/ぶい黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面はへら削り。内面は撫で。	器面厚減	

5号塚(住居(第19図 PL.38))

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面直上	口縁～部欠	口 14.4 高 7.4 底 7.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/ぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転か) 高台は底部回転系切り後のやや雑な付け高台。	器面の厚減面著
2	土師器 甕	カマド 理土	口縁～胴部片	口 20.6	細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/黒褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横～縦のへら削り。内面は横のへら撫で。	
3	土師器 甕	床面直上 カマド 使用面直上 が接合	口縁～胴部片	口 18.8	細砂粒・粗砂粒/ 角閃石/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのへら削り。内面は横のへら撫で。	胴部内面下に接合痕・胴部外面に輪積痕
4	土師器 甕	カマド 理土	口縁～胴部片	口 20.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横撫で。口唇部外面に凹線を添わせる。胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら撫で。	
5	土師器 甕	カマド 使用面直上	口縁～胴部	口 20.8	細砂粒・粗砂粒/ 角閃石・軽石/良 好/ぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り。内面は横のへら撫で。	胴部内面に輪積痕

5号塚(住居(第19図 PL.38))

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	胎上/焼成/色調	特徴・状態	摘要
6	鉄製品 紡錘車	床面直上	紡輪の1/5を欠く	長さ5.5 幅5.5 厚さ0.3 重さ28.08		紡輪のみではぼ円形を呈する。現状断面ではやや中央部が厚くなるが、内部が中空になっており錆化による変形と見られる。	

6号塚(住居(第23図 PL.38))

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面直上	1/2	口 11.6 高 8.2 底 8.2	3.0 細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/ぶい 黄褐	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で。内面は撫で。底部は手持ちへら削り。	
2	土師器 杯	掘方理土	1/3	口 14.8	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	器面厚減
3	土師器 杯	掘方理土	口縁～体部	口 14.0	細砂粒/良好/ぶい 黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
4	土師器 杯	床面から 10cm上	口縁～底部	口 12.7 底 9.2	細砂粒・軽石/良 好/ぶい黄褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で。内面も撫で。底部は手持ちへら削り。	口縁部～体部外面に保付首

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
5	須恵器 杯	床面直上	1/2	口 12.1 底 6.4	高 3.5 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	
6	須恵器 杯	床面から 10cm上	1/3	口 13.5 底 7.0	高 3.4 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	内面擦れ・体部 外面に重ね焼き による変色
7	須恵器 杯	理上	1/3	口 13.7 底 6.0	高 4.2 細砂粒/還元焰/灰 黄褐色	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	
8	須恵器 杯	理上	底部	底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	
9	須恵器 椀	床面から 20cm上	1/4	口 14.0 底 7.2	高 5.3 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台 で、一部貼り付け部から剥落。	器面摩滅
10	須恵器 椀	床面直上	体部～底部	底 7.4	台 7.0 細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台で、一部は貼り付け部から剥落。	器面摩滅
11	須恵器 椀	カマド 使用面から 38cm上	1/2	口 18.6 底 9.0	高 9.1 細砂粒/還元焰/灰 9.0 白	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。	内外面のロクロ 整形痕が顕著
12	灰釉陶器 壺	理上	胴部～底部	口 11.0	台 11.2 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転か)高台は付け高台。胴部外面下半は回 転へう削り。	底部に施釉
13	土師器 甕	煙道直上	口縁～胴部	口 21.6	細砂粒・角四石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへう削り、内面は撫で。	
14	土師器 甕	理上	口縁～胴部	口 20.8	細砂粒・角四石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面はへう削り、内面は撫で。	

6号壱穴住居(第23図 PL.38)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要
15	鉄製品 釘	理上	破片	長さ2.2 幅0.25 厚さ0.64 重さ 0.64	断面4角の釘先端のみで頭部分の形状は不明。	
16	銅製品 鏡か	床面直上	破片	長さ4.8 幅2.9 厚さ0.25 重さ 7.66	右側の現存する輪郭部分は緑状にわずかに厚くなる。その 内側には文様が残り鏡の破片と見られる。左側の断面は波 打つように折れ曲がり、大きな外力により破損し、その後 に錆化した様子が窺われる。	

7号壱穴住居(第25図 PL.39)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	理上	口縁～底部	口 16.8	細砂粒・軽石/良 好/灰褐色	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	口縁部外面の一部と内面喫炭
2	土師器 高杯	床面直上	脚部		脚部外面はへう撫で、内面は雑な撫で。		
3	土師器 甕	床面直上 カマド使用 面直上が接 合	胴部～底部	底 7.0	細砂粒・角四石・ 軽石/にぶい赤褐	胴部外面はへう撫で、内面は撫で。	外面に剥離・内 面摩滅

8号壱穴住居(第27・28図 PL.39)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	理上	口縁～底部	口 11.0 底 7.6	高 3.0 細砂粒・角四石・ 軽石/良好/にぶい 赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は撫で、内面は撫で、底部は手 持ちへう削り。	
2	須恵器 椀	貯蔵穴 底面から 7cm上	1/2	口 14.5 底 7.4	高 4.8 細砂粒・粗砂粒・ 雲母/還元焰/にぶ い黄褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。	内面摩滅
3	須恵器 椀	煙道直上	1/2	口 15.0 底 7.2	高 5.0 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	6.2 ロクロ整形(左回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。	内面やや摩滅
4	須恵器 椀	床面から 14cm上	2/3	口 13.4 底 6.4	高 3.9 細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/にぶ い赤褐	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	縁回か
5	須恵器 椀	床面から 6cm上	1/2	口 14.6 底 6.8	高 5.5 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	6.2 ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台 で、一部貼り付け部から剥落。	器面摩滅
6	須恵器 杯	カマド 使用面から 9cm上	1/4	口 12.6 底 6.4	高 4.0 細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	
7	須恵器 杯	理上	1/4	口 13.8 底 5.8	細砂粒・軽石/還 元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明) 底部は回転糸切り無調整	煙し焼成
8	須恵器 椀	理上	口縁～体部	口 13.8	細砂粒・軽石/酸 化焰/オリーブ黒	ロクロ整形(右回転)	内外面喫炭・煙し 焼成か
9	須恵器 椀	床面から 10cm上	1/4	口 14.2 底 7.0	高 5.4 細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰黄褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。	底部付近に細かな へう
10	須恵器 椀	床面直上	1/4	口 15.4 底 5.6	高 4.8 細砂粒・軽石/還 元焰/灰白	6.2 ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。	足込み部に重ね 焼きによる変色
11	須恵器 椀	理上	口縁～体部	口 13.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転か)	
12	須恵器 椀	カマド 理上	口縁～体部	口 13.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)	器面摩滅
13	須恵器 椀	理上	口縁片		細砂粒/還元焰/濁 灰	ロクロ整形(回転方向不明)	体部外面に墨書 (文字不明)

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
14	灰釉陶器 椀	理土	体部～底部	底 6.6 台 6.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付け高台。施釉は刷毛掛けか。	見込み部に重ね焼き痕
15	須恵器 壺	理土	体部～底部	底 10.0 台 9.4	細砂粒/還元焰/灰黄褐	胴部下半外面は回転ヘラ削り。高台は付け高台	内面にわずかに自然輪
16	土師器 台付甕	理土	脚部		脚 8.0	細砂粒/良好/にぶい黄褐	脚部横撫で。
17	土師器 椀	カマド 理土	口縁～胴部片	口 19.2	細砂粒・角四石・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	胴部外面に輪轆み痕
18	土師器 椀	床面から 7cm上	口縁～胴部	口 19.2	細砂粒・角四石・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は撫で。	胴部外面に輪轆み痕
19	土師器 甕	理土	口縁～胴部	口 19.6	細砂粒・角四石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	胴部外面に輪轆み痕・口縁部内面に煤付着
20	土師器 甕	理土	口縁～胴部	口 19.6	細砂粒・角四石・軽石/良好/にぶい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	口縁部外面は吸炭
8号穴(住居(第28図 PL.39))							
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)		特徴・状態	摘要
21	埴形陶器 洋灰	床面から 21cm上	1/4	長さ4.3 幅4.9 厚さ3.5 重さ65.8g		小型。洋灰かやや密。断面の色調が光沢のある灰褐色。鉄部が内在し表面が錆化している。下面に細かい木炭灰。	
22	埴形陶器 洋灰	床面から 10cm上	ほぼ定形	長さ6.8 幅4.4 厚さ2.6 重さ75.8g		二段気味。小型。洋灰が粗。上面左側部に羽口の頸部の溶指が見られる。鉄部が内在し表面が錆化。	
9号穴(住居(第31・32図 PL.39・40))							
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯(灯明 か)	床面直上	口縁一部欠	口 13.5 高 3.2 底 6.2	3.2 細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	口縁部内外面に炭化付着・器面厚減
2	須恵器 杯	理土	口縁～底部	口 12.6 高 3.9 底 6.0	3.9 細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	器面厚減
3	須恵器 杯	掘方理土	1/4	口 12.3 高 3.6 底 6.0	3.6 細砂粒・粗砂粒/還元焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	器面厚減・口縁部内外面を除き吸炭
4	須恵器 杯	カマド 使用面から 21cm上	口縁一部欠	口 13.0 高 3.9 底 6.8	3.9 細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	
5	須恵器 椀	床面から 16cm上	口縁一部欠	口 14.2 高 5.9 底 8.0 7.3	5.9 細砂粒・粗砂粒/還元焰/にぶい黄橙	7.3 ロクロ整形(右回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	内面厚減
6	須恵器 椀	床面から 31cm上	2/3	口 14.4 高 5.9 底 7.2 7.2	5.9 細砂粒・粗砂粒・軽石/還元焰/灰白	7.2 ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	見込み部に重ね焼きによる変色
7	須恵器 椀	床面直上	2/3	口 16.6 高 5.7 底 7.2 6.8	5.7 細砂粒・粗砂粒・軽石/還元焰/にぶい黄橙	6.8 ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台で、一部貼り付け部から脱落。	器面厚減
8	須恵器 椀	貯蔵穴 理土	口縁～体部	口 14.8	細砂粒・雲母/還元焰/灰オリーブ	ロクロ整形(回転方向不明)	器面厚減・内外面の一部吸炭
9	須恵器 椀	掘方理土	口縁～体部	口 13.8	細砂粒・粗砂粒・角四石/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
10	須恵器 椀	理土	口縁～体部片	口 14.2	細砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)	体部外面に墨書・文字不明
11	灰釉陶器 椀	掘方理土と 理土が接合	口縁～体部片	口 18.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明) 体部下端は回転ヘラ削り。施釉は刷毛掛けか。	東濃か
12	灰釉陶器 椀	貯蔵穴 底面直上 床面直上 が接合	3/4	口 14.6 高 4.0 底 7.6 7.6	4.0 細砂粒/還元焰/灰黄褐	7.6 ロクロ整形(右回転)高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付け高台。施釉は刷毛掛け。	見込み部に重ね焼き痕・高台接合部は重ね焼きによる変色・光ヶ丘1号窯式
13	灰釉陶器 椀	理土	口縁～底部片	口 12.7 高 3.8 底 5.7 5.2	3.8 細砂粒/還元焰/灰	5.2 ロクロ整形(右回転)高台は三日月高台で付け高台。体部下半は回転ヘラ削り。施釉は刷毛掛けか。	
14	灰釉陶器 椀	掘方理土	体部～底部片	底 7.2 台 7.0	7.0 細砂粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転か)高台は三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付け高台。施釉技法は不明。	見込み部に重ね焼き痕・東濃か
15	須恵器 壺	カマド 使用面から 26cm上	胴部～胴部片		細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明) 胴部外面中に斜めの撫で。	
16	須恵器 壺	掘方理土	口縁片	口 14.8	細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
17	土師器 甕	掘方理土と 理土が接合	口縁～胴部	口 20.6	細砂粒・角四石・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り。内面は横のヘラ撫で。	胴部外面に輪轆み痕
18	土師器 甕	理土	口縁～胴部	口 18.8	細砂粒・角四石/良好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	
19	土師器 甕	カマド 使用面直上	口縁～胴部片	口 17.7	細砂粒・角四石/良好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。内面は撫で。	
20	土師器 甕	理土	口縁～胴部	口 19.8	細砂粒・粗砂粒・角四石・軽石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのヘラ削り。内面は	胴部外面に輪轆み痕

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
21	須恵器 碗	掘方直上	破片		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	二面傾と考えられる破片で碗面を含む上面は撫で、側面及び下面はヘラ削り。脚は4ヶ所と考えられ、残存する1ヶ所も欠損。	残存する碗面の厚成は見られない。

9号壱六住居(第32図 PL.39・40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	胎土/焼成/色調	成形・状態	摘要
22	鉄製品 不明	床面から 31cm上	破片	長さ11.0 幅0.6 厚さ0.7 重さ 18.09		断面4角形、一端は某状に細くなるが明確な間をもたない、もう一端は破損。	
23	鉄製品 刀子	理土	破片	長さ9.0 幅0.8 厚さ0.3 重さ 6.31		両端とも欠損。断面3角形で破片のなかほど鈍角に尖を有する。	
24	鉄製品 不明	カマド 理土	破片	長さ2.6 幅2.6 厚さ0.2 重さ 2.31		不定3角形の薄い鉄板状破片一辺がやや弧を描く。跡跡車の紡輪破片の可能性もあるが断面が錆化して不明瞭。	
25	椀形鍛冶 滓	床面から 17cm上	1/2	長さ5.2 幅6.3 厚さ2.6 重さ 95.99		小型、薄型。ほぼ鉄部。左側部に滓が存在する。滓の付着と形状から椀形滓としたが鉄塊系遺物の可能性がある。	
26	椀形鍛冶 滓	床面から 25cm上	ほぼ完形	長さ8.5 幅6.3 厚さ3.8 重さ 191.83		26と27が接合。大型。滓質はやや密。鉄部は広く内在し、表面が錆化している。上面左側部に羽口の頸部の溶指が見られる。下面は酸化土砂に厚く覆われているが一部に硝床上の付着が見られる。	
27	椀形鍛冶 滓	床面から 32cm上	2/3	長さ4.3 幅3.7 厚さ1.9 重さ 39.01		滓質はやや密。鉄部が内在し表面が錆化している。上面中央に直径1cmほどの鉄塊がみられる。左側部に羽口の頸部の溶指が見られる。	

10号壱六住居(第34図 PL.40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	理土	口縁～体部片	口 11.8	細砂粒・軽石/良好にふい赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は横な撫で、内面は撫で。底部は手持ちヘラ削り。	
2	須恵器 耳皿	床面直上	完形	口 8.4 高 2.2 底 4.6	細砂粒/還元焰/ふい黄褐色	口縁部は横撫で。底部は回転糸切り無調整	内面やや厚成
3	須恵器 椀	床面から 8cm上	1/2	口 16.4 高 5.9 底 7.4 台 7.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/ふい黄褐色	口縁部は横撫で。高台は底部回転糸切り後の付け高台。	器面厚成・内面 吸込
4	須恵器 椀	理土	1/3	口 13.6 高 4.9 底 7.0 台 5.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/オリーブ 黒	口縁部は横撫で。高台は底部回転糸切り後の横な付け高台。	器面厚成・口縁 部を除く内面 吸込
5	須恵器 椀	床面直上	口縁～底部片	口 14.8 底 6.8	細砂粒・角閃石/ 還元焰/ふい黄褐色	口縁部は横撫で。高台は底部回転糸切り後の付け高台で、貼り付け部から剥落	
6	灰輪陶器 耳皿	床面から 11cm上	底部	底 6.0 台 5.7	細砂粒/還元焰/灰 白	口縁部は横撫で。高台は底部回転ヘラ削り後の付け高台。	内面に厚く灰輪
7	灰輪陶器 椀	床面直上	口縁～体部片	口 18.6	細砂粒/還元焰/灰 白	口縁部は横撫で。器部外面は回転ヘラ削り。灰輪は刷毛掛けか。	釉の発色不良
8	灰輪陶器 壺	理土	体部～底部	底 9.4 台 9.2	細砂粒/還元焰/ふい 赤褐色	口縁部は横撫で。高台は角高台状で、底部回転糸切り後の付け高台。	残存分の釉の発 色不良
9	須恵器 長頸壺	理土	口縁片	口 11.6	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄褐色	口縁部は横撫で。口縁部外面に2条の門線を巡らせる。	器面厚成・器胎 内酸化
10	須恵器 壺	理土	胴部片	口 19.6	細砂粒/還元焰/灰 白	口縁部は横撫で。胴部内外面は撫で。	内外面にハゼ・ 内面ハゼ顕著・ 器胎内面酸化
11	土師器 壺	床面直上	口縁～胴部	口 19.6	細砂粒・角閃石/ 軽石/良好にふい 赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部外面に輪積 み皿・胴部外面 中に粘土付着
12	土師器 壺	理土	口縁～胴部片	口 21.4	細砂粒・軽石/良好にふい 赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は撫で。	口縁部外面に輪 積み皿

11号壱六住居(第36図 PL.40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	床面直上	口縁一部欠	口 12.5 高 3.6 底 6.3	細砂粒・粗砂粒・ 片岩・雲母/酸化 焰/ふい黄褐色	口縁部は横撫で。底部は回転糸切り無調整	底部厚成・内外 面吸込・藤岡か
2	須恵器 椀	理土	口縁～底部片	口 14.6 高 4.6 底 6.4 台 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/濁灰	口縁部は横撫で。高台は底部回転糸切り後のやや横な付け高台。	底部に墨書。文 字不明
3	須恵器 椀	床面直上	口縁～底部片	口 15.6 底 6.8	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/明 濁灰	口縁部は横撫で。高台は底部回転糸切り後の付け高台で、貼り付け部から剥落。	器面厚成・藤岡 か
4	須恵器 椀	理土	口縁～体部片	口 13.6	細砂粒・片岩/還 元焰/灰	口縁部は横撫で。	藤岡か
5	土師器 壺	カマド 理土	口縁片	口 22.8	細砂粒・角閃石/ 良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部外面に輪積 み皿

11号壱六住居(第36図 PL.40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	胎土/焼成/色調	成形・状態	摘要
6	鉄製品 不明	理土	破片	長さ4.0 幅0.4 厚さ0.4 重さ 2.44		角釘または某状の破片。断面4角形で徐々に細くなり端部で1.5mmほどになる。もう一端は破損し全体形状は不明。	

遺物観察表

12号壑穴住居(第38図 PL.40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	貯蔵穴 理上	口縁~体部	口 12.0 底 8.1	細砂粒・角四石/ 良好/赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、内面は撫で。	
2	須恵器 杯	貯蔵穴 底面から 10cm上	体部~底部	底 5.7	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	体部外面の一部 喫炭
3	須恵器 椀	貯蔵穴 底面直上	1/4	口 14.6	細砂粒・粗砂粒・ 雲母/還元焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(回転方向不明)	
4	土師器 台付甕	貯蔵穴 底面から 27cm上	台部	台 9.5	細砂粒/良好/灰黄 褐色	脚端部は横撫で。	
5	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 35cm上	口縁~胴部	口 18.8	細砂粒・角四石/ 軽石/良好/にぶ い赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	口縁部外面及び 胴部内面に輪積 み痕
6	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 35cm上	口縁~胴部片	口 18.2	細砂粒・角四石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	口縁部外面に輪 積痕
7	土師器 甕	床面から 7cm下	口縁~胴部	口 18.8	細砂粒・角四石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めヘラ削り、内面は撫で。	

12号壑穴住居(第38図 PL.40)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	胎土/焼成/色調	特徴・状態	摘要
8	鉄製品 不明	貯蔵穴底面 から27cm上	茶から3cm程で 破損	長さ7.0 輪径0.8 厚さ0.3 重さ 6.97		断面が長方形の鉄製品で一方の端部4.5cmに広葉藤材の大丸が残存する。同等の形態はみられず。断面は長方形のままもう一方の端部で破損錆出し全体形状は不明。途中一か所でZ字状に折れ曲がる。これは錆化時の変形と考えられる。	

13号壑穴住居(第38図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	カマド 使用面から 16cm上	口縁~底部片	口 14.8 高 5.0 底 7.4 台 6.6	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰黄 褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は付け高台。	器面厚減・縁面 凹
2	須恵器 椀	床面から 15cm上	1/2	口 14.8 高 5.2 底 7.0 台 6.0	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	器面厚減

14号壑穴住居(第41図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	四溝 底面から 9cm上	1/3	口 11.8 高 6.0 底 6.0	細砂粒・雲母/良 好/橙	口縁部は横撫で。体部外面下半は斜めのヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	口縁部~体部外 面に付着面
2	須恵器 杯	カマド 使用面から 9cm上	1/4	口 13.0 高 3.5 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	
3	須恵器 椀	床面直上	口縁~体部片	口 15.6	細砂粒・軽石/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
4	須恵器 椀	貯蔵穴 底面から 11cm上	口縁~体部片	口 14.6	細砂粒・雲母/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
5	須恵器 椀	床面直上	口縁~体部片	口 13.2	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)	内面喫炭
6	灰輪陶器 理上	体部~底部片	底 6.2 台 6.8	6.8	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(回転方向不明) 高台は角高台で底部回転ヘラ削り後の貼り付け。内面のみ厚く施釉。	黒黒14号窯式 に属する
7	土師器 台付甕	四溝 底面から 9cm上	胴部~台部片	台 9.6	細砂粒・角四石/ 良好/明赤褐色	胴部内面はヘラ撫で、脚部は横撫で。	
8	土師器 甕	カマド使用 面から11cm 上	口縁~体部片	口 19.8	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横~斜め~縦のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部外面の整形 粗雑で、内面に 輪積み痕

15号壑穴住居(第41・42図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	カマド 使用面から 8cm上	1/4	口 12.8 高 3.5 底 7.0	6.6 白	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、部分的に押正、内面は撫で。底部は雑な手持ちヘラ削り、中央に型割を残す。	
2	須恵器 皿	カマド 使用面から 21cm上	4/5	口 12.7 高 2.7 底 7.0 台 6.6	2.7 白	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	体部外面は厚減・ 底部に赤色の 付着物。朱黒か 褐色
3	須恵器 杯	理上	1/4	口 13.2 高 3.9 底 6.0	3.9 白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	内面に黒色の付 着物
4	須恵器 椀	床面から 7cm上	3/4	口 14.5 高 5.8 底 7.1 台 6.9	5.8 白	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	器物の歪み顕著
5	須恵器 椀	床面直上	1/3	口 14.6 高 4.7 底 7.3 台 7.2	4.7 白	ロクロ整形(回転方向不明) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
6	須恵器 椀	床面から 4cm下	1/2	口 14.6	細砂粒・粗砂粒/ 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)	器面摩滅・縁凹 か
7	須恵器 椀	埋土	体部～底部片	底 7.2 台 8.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	
8	土師器 甕	カマド 使用面から 8cm上	1/4	口 19.4	細砂粒・角四石・ 軽石/良好/ぶい 黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り、内面は撫で。	胴部内面下位に 接合痕・胴部外 面に燻付着
9	土師器 甕	カマド 使用面から 20cm上	口縁～胴部	口 20.6	細砂粒・角四石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り、内面は横の 頭撫で。	胴部外面に輪積 み痕

15号惣六住居(第41図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
10	打製石斧	床面から 24cm	黒色頁岩	8.7	5.7	1.7	73.7	撥型	完成状態。刃部摩耗が著しい。右側縁のエッジが鋭く摩耗するのに対し、左側縁のエッジはシャープである。	

16号惣六住居(第43図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	埋土	体部～底部片	底 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整。	
2	須恵器 椀	床面から 14cm上	1/3	口 12.2 高 5.2 底 5.7 台 4.8	細砂粒・角四石・ 軽石/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の雑な付け高台。	器面摩滅
3	灰輪陶器 皿(転用 器)	床面直上	1/2	口 14.4 高 3.3 底 6.8 台 6.5	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転か)高台は三日月高台で、底部回転へ ら削り後の付け高台。軸筋は刷毛掛けか。	見込み部平滑・ 軸の発色なし

17号惣六住居(第46・47図 PL.41)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 20cm上	1/3	口 12.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面はへら撫で。	口縁部外面～内 面は漆塗りか
2	土師器 杯	床面から 8cm上	1/4	口 12.8 高 3.8	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/ぶい黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	口縁部外面～内 面は漆塗りか
3	土師器 杯	床面直上	1/4	口 12.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	口縁部内外面に 細かなハゼ
4	土師器 杯	床面から 22cm上	口縁～体部片	口 13.6	細砂粒・角四石・ 軽石/良好/黒褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
5	土師器 高杯	床面から 6cm上	脚部	脚部	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/ぶい黄褐	脚部外面は縦、内面は横のへら削り。	
6	土師器 甕	床面直上	胴部～底部	底 5.4	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/明 赤褐	胴部外面はへら削り、内面はへら撫で。	胴部内面の粗れと 剥離顕著
7	土師器 甕	床面直上	口縁～胴部	口 19.6	細砂粒・軽石/良 好/ぶい黄褐	口縁部は横撫で。胴部外面は縦のへら削り、内面は撫で。	胴部外面に粘土 付着
8	土師器 甕	床面直上 周溝 底面から3cm 土が埋合	胴部～底部	底 8.0	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/明赤褐	胴部外面はへら撫で。	内面の剥離顕 著・胴部無面に 黒痕
9	須恵器 土釜か	埋土 1号土坑埋 土が埋合	口縁～胴部片	口 21.0	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/還元焰/赤褐	ロクロ整形か	内面の摩滅顕著

18号・19号惣六住居(第49・50・51図 PL.41・42)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	1/4	口 11.8	細砂粒・粗砂粒・ 角四石・軽石/良 好/赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、内面は撫で。	体部外面に黒痕
2	土師器 杯	埋土	口縁～体部片	口 14.6	細砂粒・角四石・ 軽石/良好/ぶい 黄褐	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
3	須恵器 杯	床面から 3cm下	完形	口 13.0 高 3.9 底 5.4	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/還元焰/灰黄 褐	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整	体部外面に輪積 み痕・縁凹か
4	須恵器 杯	カマド 使用面から 6cm上	1/4	口 13.2 高 4.1 底 6.4	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整	
5	須恵器 杯	カマド 使用面直上	1/4	口 15.4 高 5.6 底 7.4	細砂粒/還元焰/ぶ い黄褐	ロクロ整形(回転方向不明) 底部は回転系切り無調整	器面の摩滅顕著
6	須恵器 椀	カマド 使用面から 10cm上	口縁～体部片	口 16.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(回転方向不明)	器面内面に燻付 着
7	須恵器 椀	カマド 使用面から 21cm上	2/3	底 6.8 台 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の雑な付け高台。	高台変形

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
8	須恵器 椀(明かり)	床面から 11cm上	口縁～体部片	口	14.6		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形(右回転か)	口縁部内外面に 炭化物付着・器 面厚減
9	須恵器 鉢	カマド 使用面直上	口縁～胴部片	口	20.2		細砂粒・粗砂粒・ 輝石/還元塩/ふい 黄橙	ロクロ整形(回転方向不明)	器面厚減・胴部 内外面の一部酸 化
10	土師器 小型甕	カマド 使用面直上	口縁～胴部片	口	12.0		細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/ふい 赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め～縦のへら削り、内面は斜めのへら撫で。	
11	土師器 甕	床面直上 カマド 使用面直上 が接合	口縁～胴部片	口	19.6		細砂粒・粗砂粒・ 輝石・軽石/良好/ 明赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横～縦のへら削り、内面は撫で。	胴部内面下位に 接合痕・口縁部 内外面に保付着
12	土師器 甕	床面直上 カマド 使用面直上 が接合	1/3	口 底	16.8 4.2	高 25.5	細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め～縦のへら削り、内面は撫で。	胴部内面下位に 接合痕・胴部外 面に輪積み痕
13	土師器 甕	カマド 使用面直上	口縁～胴部片	口	18.2		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/良 好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め～縦のへら削り、内面は横のへら撫で。	胴部内面下位に 接合痕・胴部外 面に輪積み痕
14	土師器 甕	カマド 使用面から 10cm上	口縁～胴部	口	21.8		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/ふい 赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り、内面は横のへら撫で。	胴部外面に輪積 み痕
15	土師器 甕	カマド 使用面から 10cm上	口縁～胴部片	口	21.0		細砂粒・角閃石/ 良好/ふい黄褐色	口縁部横撫で、口唇部外面に凹線を巡らせる。胴部外面は横のへら削り、内面は横のへら撫で。	胴部内面に保 付着
16	土師器 甕	カマド 使用面直上	胴部～底部	底	3.6		細砂粒・粗砂粒・ 軽石/良好/橙	胴部外面は横～縦のへら削り、内面は撫で。底部はへら削り。	胴部内面中位に 接合痕の肥厚が 認められる。
17	須恵器 甕	埋土	口縁片				細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	胴部外面にへら描きの波状文	
18	須恵器 羽釜	カマド 使用面直上	1/2	口	21.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/橙	ロクロ整形(右回転か)胴部外面下端は斜めのへら削り。	内外面のロクロ 整形痕は顕著

21号竪穴住居(第52図 PL.43)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 甕	床面から 10cm上	胴部～底部片	底	14.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形。胴部内外面は撫で。	
2	土師器 甕	床面直上	口縁～胴部	口	20.6		細砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め～縦のへら削り、内面は撫で。	胴部内面下位に 接合痕・口縁部 ～胴部の一部に 保付着

21号竪穴住居(第52図 PL.43)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
3	石製品 盃石	床面から 7cm上	溶結凝灰岩	19.4	9.3	4.9	965.1	扁平碟	土壇側小口部に敲打痕・衝撃剥離痕、下端側小口部に最打痕がある。	

21号竪穴住居(第55・56図 PL.43・44)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面から 6cm上と2cm 下が接合	2/3	口 底	15.4 6.1		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台で、貼り付け部から剥落。	底部に剥離
2	須恵器 椀	床面から 11cm上	1/3	口 底	14.4 6.6	高 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形(左回転か) 高台は底部回転系切り後の雑な付け高台。	高台変形
3	須恵器 椀	2号土坑 底面から 12cm上	1/4	口 底	15.6 8.0		細砂粒/還元塩/灰	ロクロ整形(回転方向不明)	器面厚減・体部 変形
4	須恵器 椀	カマド 使用面から 7cm上	体部～底部片	底	7.2	6.6	細砂粒・雲母/還 元塩/ふい黄橙	ロクロ整形(右回転)高台は底部回転系切り後の付け高台で、接地区に凹線を巡る。	見込み部に重ね 焼き痕
5	須恵器 椀	床面から 8cm下	口縁～体部片	口	12.6		細砂粒/還元塩/灰 白	ロクロ整形(回転方向不明)高台は付け高台。	
6	灰輪陶器 甕	床面から 7cm上	口縁部欠	底	7.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転か)高台は、胴部下半及び底部回転へら削り後の付け高台。	輪は底部～高台 接地区に及ぶ
7	土師器 台付甕	床面直上	台部欠	口 底	12.9 4.5		細砂粒・雲母/良 好/ふい黄橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのへら削り、内面は撫で。	胴部内面下位に 接合痕・胴部外 面に輪積み痕・ 胴部外面中位に 粘土付着・下半 に保付着

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
8	土師器 台付甕	貯蔵穴(底面) 直上 2号土坑底 面から13cm 上 カマド使用 面直上が接 合	口縁~胴部	口	12.0	細砂粒・角四石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横~縦のへら削り。内面は横 の撫で。		
9	土師器 台付甕	貯蔵穴(底面) 22cm上 床面直上 カマド使用 面直上が接 合	胴部~台部	底	4.9	9.0	細砂粒・角四石/ 良好/にふい黄橙	胴部外面は斜めのへら削り。内面はへら撫で。脚部撫で。	
10	土師器 甕	2号土坑 底面から 18cm上	胴部~底部片	底	3.4		細砂粒・角四石/ 良好/橙	胴部外面は縦のへら削り。	胴部内面の剥離 面著
11	土師器 甕	床面から 5cm下	口縁~胴部	口	18.7		細砂粒・軽石・ 軽石/良好/にふい黄 橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め~縦のへら削り。内面は横 のへら撫で。	胴部内面下位に 接合痕
12	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 19cm上	口縁~胴部	口	20.0		細砂粒・角四石/ 軽石/良好/明赤 橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り。内面は撫で。	口縁部外面に輪 積み痕・頸部外 面に粘土付着
13	土師器 甕	カマド使用 面から11cm 上 側方直上が 接合	口縁~胴部	口	19.4		細砂粒・軽石/良 好/にふい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め~縦のへら削り。内面は 撫で。	胴部内面下位に 接合痕
14	土師器 甕	床面から 5cm下 貯蔵穴 底面から 21cm上が接 合	口縁~胴部	口	19.6		細砂粒・雲母/良 好/にふい橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横~斜めのへら削り。内面は 横のへら撫で。	
15	土師器 甕	カマド 使用面直上	口縁~胴部	口	20.6		細砂粒・粗砂粒・ 角四石/良好/明赤 橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のへら削り。内面は横のへ ら撫で。	
16	須恵器 甕	カマド 使用面から 7cm上	胴部~底部片	底	16.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	胴部外面は横のカキ目。内面は撫で。	底部ハゼ

21号塚六住居(第569図 PL.44)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)		特徴・状態	摘要
17	鉄製品 不明	床面から 19cm上	一部欠損	長さ10.0 幅0.6	厚さ0.5 重さ 11.8g	断面4角形の鉄製品で一端は断面4角のまま徐々に細くなり とがる。途中に同等の形態は有しない。反対側は劣化後破 損し全体形状は不明。	
18	鉄製品 不明	床面から 5cm上	ほぼ完形	長さ16.0 幅1.0	厚さ0.4 重さ 23.4	断面4角の鉄製品で先端部は鬚状に薄くなる。某との境に は棘状の突起を内側に有する。某はやや細くなりながら断 面4角形を維持し、端部はややとがる。	
19	鉄製品 鏝	床面から 2cm上	鉄鏝はほぼ完形	長さ18.8 幅3.4	厚さ11 重さ 27.7g	帯状の鉄鏝で幅部は細くしながら僅かな段をへて某に移 行する。某は矢柄内に鋳化が進み板ばね状態に破損する。 接合はできないがX線写真から位置を推定し図化した。矢 柄は錆化し、非常に良い状態で残存する。矢柄は直径11 ~8.5mmで長さ13cm程が残存し、基部端部に非常に細い紐 が巻かれている(紐直径0.15mm程度で断面やや楕円形で わずかに左捻りがかかる。これを1mm間に5本ほどのビッチで 巻いている)。矢柄の材質は断面構造等からタケ科の籐竹 の仲間と見られる。	
20	鉄製品 不明	床面から 13cm上	ほぼ完形	長さ17.0 幅1.5	厚さ0.6 重さ 54.16	断面4角の鉄製品で先端部はカマスコ切先状になるが刃部を 有しない。某との境には帯状の段を内側に有する。某はや や細くなりながら断面4角形を維持し端部もとがらない。	
21	鉄製品 不明	埋土	ほぼ完形	長さ2.7 幅0.6	厚さ0.4 重さ 6.8	幅0.6~3mm厚さ3~2mmの帯状の鉄製品で、残存する柄状の 木質部(広葉樹散孔材の加工木。残存は少なくとも木取は不明 をぐるりと輪状に覆っている。	
22	鉄製品 不明	埋土	破片	長さ3.1 幅0.5	厚さ0.4 重さ 1.91	断面4角形の某状鉄製品で劣化後破損する。直接接合する 遺物はなく、詳細不明。	
23	鉄洋	床面から 4cm上		長さ6.5 幅5.2	厚さ5.8 重さ 106.53	ほぼ鉄部。一部に洋の付着が見られる。	

22号塚六住居(第590図 PL.44)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	須恵器 杯	床面直上	2/3	口 底	12.8 5.6	高 3.9	細砂粒・雲母/還 元焰/オリーブ黒	口クロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	焼し焼成
2	須恵器 杯	床面から 6cm上	1/4	口 底	12.8 5.2	高 3.8	細砂粒/還元焰/ にふい黄橙	口クロ整形(右回転)底部は回転糸切り無調整	
3	須恵器 椀	床面直上	体部~底部片	底	6.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	口クロ整形(右回転)高台は底部回転糸切り後の付け高台 で、貼り付け部から剥離。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
4	灰釉陶器 小瓶	床面から 11cm上	頸部～体部片				細砂粒/還元塩/灰 オリーブ	ロクロ整形(回転方向不明)	釉の発色良好・ 束遺か	
5	土師器 甕	床面直上	1/2	□	18.8		細砂粒・軽石/良 好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面上半は横～斜め、下半は縦のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部内面下位に 接合痕・頸部外 面に輪積み痕	
6	土師器 甕	床面から 16cm上 カマド使用 面から30cm 上	口縁～胴部	□	18.4		細砂粒/良好/ぶ い/橙	口縁部は横撫で。胴部外面上位は横、中位から下位は縦のヘラ削り、内面は撫で。	頸部外面に輪積 み痕	
7	土師器 甕	カマド 使用面から 35cm上	口縁～胴部片	□	18.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り。		
8	土師器 甕	カマド 使用面から 9cm上	口縁～胴部片	□	19.8		細砂粒・角四石/ 良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部内面下位に 接合痕	
9	土師器 甕	理上	口縁～胴部	□	21.8		細砂粒・雲母/良 好/ぶい/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は撫で。	口縁部外面に輪 積み痕顕著	
10	土師器 甕	2号土坑 底面直上 床面から 8cm上が接 合	体部～底部片	底	3.6		細砂粒/良好/ぶ い/橙	胴部外面は縦のヘラ削り、底部はヘラ削り。内面は撫で。		
11	土師器 甕	カマド 使用面から 26cm上	胴部～底部片	底	4.9		細砂粒・角四石/ 良好/ぶい/赤褐	胴部外面は縦のヘラ削り、内面は撫で。		
12	須恵器 甕	床面から 7cm上	胴部片				細砂粒/還元塩/灰 明赤	円錐形。外面は平行叩き、内面の当て具、青海波文。		
22号窯穴住居(第59図 PL.44)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
13	石製品 煎石	床面から 16cm上	砂岩	(9.5)		5.1	5.4	398.9	柱状襷	上端側小口部に敲打痕がある。
23号窯穴住居(第61図 PL.44)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	須恵器 杯(打明か)	貯蔵穴 底面から 12cm上	完形	□ 底	12.6 6.4	高 3.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整	口縁部内面に 3ヶ所油留付 着・体部外面に 煤付着	
2	須恵器 杯	床面から 19cm上	1/3	□ 底	13.4 7.0	高 3.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整		
3	須恵器 椀	1号土坑 底面から 8cm上	口縁一部欠	□ 底	14.7 7.2	高 5.7 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰黄褐	ロクロ整形(回転方向不明)高台は丁寧な付け高台。	器面摩減・体部 内面に煤付着	
4	須恵器 甕	床面から 14cm上	口縁～体部片	□	13.8		細砂粒・雲母/還 元塩/ぶい/黄橙	ロクロ整形(右回転か)		
5	土師器 台付甕	1号土坑底 面直上 貯蔵穴底面 直上が接合	口縁～胴部	□	11.2		細砂粒・角四石/ 軽石/良好/ぶい/ 赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横～縦のヘラ削り、内面は撫で。		
6	土師器 甕	床面から 6cm上	口縁～胴部	□	18.6		細砂粒・軽石/良 好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面上半は横、下半は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	口縁部外面に輪 積み痕	
7	土師器 甕	カマド 使用面から 15cm上	口縁～胴部	□	18.8		細砂粒・角四石/ 軽石/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部内外面に煤 付着	
23号窯穴住居(第61図 PL.44)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)			特徴・状態	摘要		
8	鉄滓	床面直上		長さ5.1	幅7.6	厚さ4.2	重さ 154.26	ほぼ鉄部。左側部に窪みが見られる。直径2.6cm幅1.4cm、2.2cm幅1.4cmの比較的大型の木炭痕が見られ製錬滓の可能性がある。		
24号窯穴住居(第63図 PL.44・45)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	土師器 杯	床面から 15cm上	1/2	□	12.7		細砂粒・軽石/良 好/ぶい/赤褐	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、内面は撫で。底部周辺は手持ちヘラ削り。	底部中央に型肌 痕	
2	須恵器 椀	床面から 20cm上	1/3	□ 底	13.8 6.4	高 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰オリーブ	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	内面やや摩減	
3	土師器 台付甕	理上	台部片	台	8.6		細砂粒・角四石/ 良好/橙	脚端部は横撫で。		
4	土師器 小型甕	床面直上	口縁～胴部	□	11.6		細砂粒・角四石/ 良好/ぶい/赤褐	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は撫で。	器面摩減	
5	土師器 甕	カマド 使用面から 9cm上	口縁～胴部	□	18.1		細砂粒・雲母/良 好/ぶい/橙	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	頸部外面に輪積 み痕	

25号惣六住居(第65図 PL.45)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	床面直上	口縁～底部片	底 6.6	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/黄	ロクロ整形(右回転)底部は回転系切り無調整	器面厚減著
2	須恵器 椀か	埋土	口縁～体部片	口 12.6	細砂粒/還元塩/灰	ロクロ整形(回転方向不明)	内外面に保付着・体部内面剥離
3	須恵器 椀	床面直上	口縁～体部片	口 13.6	細砂粒/還元塩/に ぶい/黄	ロクロ整形(回転方向不明)	器面厚減
4	土師器 甕	煙道直上	口縁～胴部片	口 18.6	細砂粒・軽石/良 好/にぶい	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り後、縦の粗い撫で、内面は撫で。	胴部内面中位に接合痕
5	土師器 甕	煙道直上 床面から 9cm上が接 合	口縁～胴部	口 19.6	細砂粒・角閃石/ 良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は横～斜めのヘラ削り、内面は斜めのヘラ撫で。	胴部内面中位に接合痕・頸部と口縁部外面に輪積み痕
6	土師器 甕	カマド 使用面直上 床面から 6cm上が接 合	口縁～胴部	口 19.0	細砂粒・角閃石/ 良好/にぶい/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は斜め～縦のヘラ削り、内面は撫で。	胴部内面中位に接合痕と輪積み痕・胴部外面に粘土付着
7	土師器 甕	床面から 12cm上	口縁～胴部	口 19.5	細砂粒・角閃石/ 良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は横～縦のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部内面中位に接合痕
8	土師器 甕	煙道直上	口縁～胴部片	口 18.8	細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は斜めのヘラ撫で。	
9	土師器 甕	煙道直上	口縁～胴部片	口 19.8	細砂粒・角閃石/ 軽石/良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は撫で。	
10	土師器 甕	床面直上	口縁～胴部	口 18.7	細砂粒/良好/にぶ い/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面はヘラ削り。	口縁部外面に保付着

26号惣六住居(第67図 PL.45)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	カマド 使用面から 7cm上	2/3	口 14.6 高 底 7.6 4.0	細砂粒/酸化塩/ にぶい/黄	ロクロ整形(右回転) 底部回転系切り後、周辺を回転ヘラ削り。	体部外面は剥離
2	須恵器 椀か	床面直上	口縁～体部	口 15.7	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
3	須恵器 椀か	床面直上	口縁～体部	口 14.7	細砂粒/還元塩/灰	ロクロ整形(右回転)	器面厚減
4	土師器 甕	カマド 埋土	口縁～胴部	口 20.6	細砂粒・角閃石/ 良好/明赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は横のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	頸部外面に輪積み痕
5	土師器 甕	床面から 16cm上	口縁～胴部片	口 19.0	細砂粒・軽石/良 好/にぶい/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面は斜めのヘラ削り、内面は撫で。	頸部外面に輪積み痕

27号惣六住居(第68・70図 PL.45)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面直上	口縁一部欠	口 13.9 高 底 7.1 台 5.2	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の遺な付け高台。	高台変形
2	須恵器 椀	床面直上	3/4	口 14.4 高 底 6.8 台 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/浅黄	ロクロ整形(右回転)高台は、底部回転系切り後の遺な付け高台。	器面厚減
3	須恵器 椀	床面直上	3/4	口 14.0 高 底 6.9 台 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/黄褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	口縁部内外面に炭化物付着・内外面にハゼ
4	須恵器 椀	床面直上 貯蔵穴 底面から 17cm上が接 合	2/3 (高台欠)	口 13.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/褐色	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台で、貼り付け部から剥離。	
5	須恵器 椀	埋土	口縁～体部片	口 12.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰	ロクロ整形(回転方向不明)	
6	須恵器 椀	床面から 21cm上	体部～底部	底 6.8 台 5.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/にぶい/黄 粗	ロクロ整形(右回転)か 高台は底部回転系切り後の付け高台。	器面厚減
7	灰釉陶器 皿	床面から 6cm上	3/4	口 13.3 高 底 6.4 台 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)高台はやや崩れた三日月高台で、底部回転ヘラ削り後の付け高台。胎土は刷毛掛け。	見込み部に重む 焼き痕・光ヶ丘 1号式か
8	須恵器 甕	カマド 使用面直上	口縁～胴部片	口 16.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元塩/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)	内外面の剥離顯著
9	土師器 甕	カマド使用 面直上 煙道直上 床面直上 貯蔵穴底面 から10cm上 が接合	4/5	口 19.6 高 底 5.2 26.9	細砂粒・角閃石/ 良好/粗	口縁部は横撫で。胴部外面は横～縦のヘラ削り、内面は撫で。	胴部内面中位に接合痕、外面に保付着・頸部外面に輪積み痕
10	土師器 甕	床面直上 カマド使用 面直上が接 合	口縁～胴部	口 19.2	細砂粒・軽石/良 好/赤褐色	口縁部は横撫で。胴部外面上半は斜め、下半は縦のヘラ削り、内面は横のヘラ撫で。	胴部内面中位に接合痕

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
11	土師器 甕	カマド使用 面上直上 燗道直上 床面直上 貯蔵穴底面 から2cm上 が接合	口縁～胴部片	口 19.6		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石・軽石/良 好/明赤褐色	口縁部は横線で。胴部外面は横～斜めのへう削り、内面は横のへう削り。	胴部内面下位に 接合痕・頸部外 面に輪積痕
12	土師器 甕	カマド使用 面上直上 床面から 7cm上 貯蔵穴底面 から6cm上 が接合	口縁～胴部	口 17.2		細砂粒・角閃石・ 軽石/にふい赤褐色	口縁部は横線で。胴部外面は横～縦のへう削り、内面は横のへう削り。	胴部内面下位に 接合痕・頸部外 面に輪積み痕
13	土師器 甕	床面直上	口縁～胴部	口 19.4		細砂粒・粗砂粒・ 角閃石/良好/赤褐色	口縁部は横線で。胴部外面は斜めへう削り、内面は横のへう削り。	頸部外面に輪積 み痕

27号窯穴住居(第70図 PL.46)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
14	石製品 磨石	床面直上	粗粒輝石安山岩	14.4	7.0	4.7	713.3	棒状塊	土曜小口部に敲打・衝刺的磨痕、下端に敲打痕がある。	

28号窯穴住居(第73図 PL.46・47)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	床から44cm上 と調査面一括 の2点が接合	口縁部片	織維	黄	良好	3と同一個体。内反ぎみの平口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条並らせ、口縁部文様に数条の平行沈線で菱形文を描く。頸部の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を数条並らせて文様帯を区画する。	有尾式
2	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	織維	黄	良好	平口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条並らせる。	有尾式
3	縄文土器 深鉢	床から77cm上	胴部片	織維	黄	良好	1と同一個体。内反ぎみの平口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条並らせる。口縁部文様に数条の平行沈線で菱形文を描く。	有尾式
4	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	織維	灰黄	ふつつ	口縁部文様に数条の爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等を描く。	有尾式
5	縄文土器 深鉢	床から20cm上	胴部片	織維	灰黄	ふつつ	口縁部文様に数条の爪形刺突をもつ平行沈線で菱形文等を描く。	有尾式
6	縄文土器 深鉢	床から42cm上	口縁部片	織維	暗灰黄	ふつつ	胴部にRの縄文を施す。	黒浜・有尾式
7	縄文土器 深鉢	床から16cm上	胴部片	織維	灰黄	ふつつ	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
8	縄文土器 深鉢	床から67cm上	胴部片	織維	黄橙	ふつつ	胴部にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
9	縄文土器 深鉢	床から40cm上	胴部片	織維	橙	ふつつ	胴部にL Rの縄文を施す。	黒浜・有尾式
10	縄文土器 深鉢	床から96cm上	胴部片	織維	橙	ふつつ	胴部にRの附加条(Rの1本附加)の縄文を施す。	黒浜・有尾式
11	縄文土器 深鉢	床から49cm、 53cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂	暗灰褐	ふつつ	屈曲して内反する緩い波状口縁の口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を並らせ、屈曲下の頸部にも浮線文を並らせる。	諸磯b式
12	縄文土器 深鉢	床から39cm上	口縁部片	粗砂	橙	ふつつ	屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状となり、波頂下に瘤状の貼付文を有し、口縁下に数条の刺突列を並らせ、靴先部に刺突列で弧状の文様を描く。	諸磯b式
13	縄文土器 深鉢	床から58cm上	胴部片	粗砂、 粗織維	橙	ふつつ	胴部に数条の刻みをもつ浮線文と刺突列を並らせる。	諸磯b式
14	縄文土器 深鉢	床から79cm上	胴部片	粗砂	暗灰褐	ふつつ	15と同一個体。胴部に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
15	縄文土器 深鉢	床から48cm上	胴部片	粗砂	暗灰褐	ふつつ	14と同一個体。胴部に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
16	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐	ふつつ	17・18と同一個体。胴部に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
17	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐	ふつつ	16・18と同一個体。胴部に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
18	縄文土器 深鉢	床から62cm上	胴部片	粗砂	暗褐	ふつつ	16・17と同一個体。胴部に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
19	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐	ふつつ	胴部に数条の平行沈線を並らせる。	諸磯b式
20	縄文土器 深鉢	床から75cm上	胴部片	粗砂	橙	良好	胴部に数条の平行沈線を並らせる。	諸磯b式
21	縄文土器 深鉢	床から31cm上	口縁部片	粗砂	暗褐	ふつつ	平口縁の口縁直下に刺突を並らせ、胴部に瘤位および瘤歯状の沈線を描き、円形貼付文を配する。	諸磯c式
22	縄文土器 深鉢	床から74cm上	胴部片	粗砂	黄褐	ふつつ	屈曲して膨らむ頸部に横位矢羽根状の沈線を描き、円形貼付文と大ききめな靴先貼付文を配する。	諸磯c式
23	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	橙	良好	胴部に条線を描き、以下に条線で曲線的な文様を描き、2個単位の小きな円形貼付文を配する。	諸磯c式

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
24	縄文土器 深鉢	床から61cm上	胴部片	粗砂、 細礫	暗橙	ふつう	胴部に斜位の沈線を描き、円形貼付文を配する。	諸磯c式
25	縄文土器 深鉢	床から56cm、 60cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂、 細礫	黄黒	良好	波状口縁の口縁下に平行沈線を数条巡らせ、口縁部文様に平行沈線で渦巻き状の文様を描く。	諸磯c式
26	縄文土器 深鉢	床から61cm上	胴部片	粗砂、 細礫	暗橙	良好	口縁部文様に平行沈線で渦巻き状の文様を描く。	諸磯c式
27	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗黒	ふつう	口縁部文様に平行沈線で渦巻き状の文様を描き、渦巻きの中心に小さな円形貼付文を配する。	諸磯c式
28	縄文土器 深鉢	床から83cm上	胴部片	粗砂、 細礫	黒黄	良好	口縁部文様に平行沈線で渦巻き状の文様を描き、その下端を横位の沈線を巡らせて区画する。	諸磯c式
29	縄文土器 深鉢	床から53cm上 と埋土上の2点が 接合	胴部片	粗砂、 細礫	暗黒	ふつう	29～33は同一個体。口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線で渦巻き状の文様を描き、その下端を横位の爪形刺突沈線を巡らせて口縁部文様を区画する。以下の胴部には横位および縦位の爪形刺突沈線で文様を区画する。	諸磯c式
30	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	29～33は同一個体。口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線で渦巻き状の文様を描く。	諸磯c式
31	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	暗黒	ふつう	29～33は同一個体。口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線で渦巻き状の文様を描き、その下端を横位の爪形刺突沈線を巡らせて口縁部文様を区画する。	諸磯c式
32	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	29～33は同一個体。胴部に横位および縦位の爪形刺突沈線で文様を区画する。	諸磯c式
33	縄文土器 深鉢	床から72cm上	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	29～33は同一個体。胴部に横位および縦位の爪形刺突沈線で文様を区画する。	諸磯c式
34	縄文土器 深鉢	床から43cm、 7cm上の2点が 接合	胴部片	粗砂	橙	ふつう	34～35は同一個体。口縁部文様に結節線文で波状ないし横位に連続する弧状の文様を描き、その下端を結節線文を巡らせて区画する。以下の胴部には結節線文を重下させる。地文にR Lの縄文を施す。	前期未葉
35	縄文土器 深鉢	床から15cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつう	34～35は同一個体。胴部に結節線文を重下させ、地文にR Lの縄文を施す。	前期未葉
36	縄文土器 深鉢	床から13cm、 11cm、11cm上 と埋土上の4点が 接合	胴～底部片	粗砂	橙	ふつう	34～35は同一個体。胴部に結節線文を重下させ、地文にR Lの縄文を施す。高さ(11.5)cm、底径12.6cm。	前期未葉
37	縄文土器 深鉢	床から40cm上	口縁部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。平口縁の口唇に結節線が回り、裂きをもつ四角状の突起と隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内を結節線が沿うように連続する。頸部文様帯は単状線で波状文を横位に施す。	阿玉台式
38	縄文土器 深鉢	床から85cm、 57cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。平口縁の口唇に結節線が回り、裂きをもつ四角状の突起と隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内を結節線が沿うように連続する。	阿玉台式
39	縄文土器 深鉢	床から57cm、 27cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。平口縁の口唇に結節線が回り、裂きをもつ四角状の突起と隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内を結節線が沿うように連続する。頸部文様帯は弧状の結節線と波状文を横位に施す。	阿玉台式
40	縄文土器 深鉢	床から86cm上	胴部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。頸部と胴部は断面三角の隆帯で区画され、X字状の小突起を有する。胴部文様はY字状の隆帯を重下させ、隆帯に沿った結節線を施す。	阿玉台式
41	縄文土器 深鉢	床から42cm上	胴部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。頸部と胴部は断面三角の隆帯で区画され、胴部文様はY字状の隆帯を重下させ、隆帯に沿った結節線を施す。	阿玉台式
42	縄文土器 深鉢	床から74cm上	胴部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗黒橙	良好	37～43は同一個体。胴部に断面三角の隆帯を波状に重下させる。	阿玉台式
43	縄文土器 深鉢	床から44cm上	胴部片	粗砂、 細礫、 雲母	暗橙	良好	37～43は同一個体。胴部に断面三角の隆帯を波状に重下させる。	阿玉台式

28) 野沢7住居(第72回 PL.46)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
44	石鏡	床面から 39cm上	黒曜石	(2.3)	1.4	0.5	1.4	凹基無茎鏡	未製品。加工状態は粗く、製作途中で石鏡の製作を放棄している。遊跡内製作の石鏡の典型。	
45	石鏡	床面から 51cm上	黒曜石	(1.4)	(1.3)	0.3	0.3	凹基無茎鏡	完成状態。裏面側に素材を残す。加工は丁寧だが、先端を僅か欠損する。	
46	石鏡	床面から 13cm上	黒色頁岩	(3.4)	(1.0)	0.4	1.3	小形剥片	表裏面とも稜角線を厚く加工する。「鏡面部」の作出は特に意図されていない。	
47	阿石	床面から 10cm上	粗粒輝石安山岩	9.9	8.9	5.2	569.9	楕円鏡	背面側に敲打・摩耗痕がある。右側縁は敲打され、平坦化している。	
48	阿石	床面直上	粗粒輝石安山岩	10.2	7.9	4.4	428.5	楕円鏡	表裏面とも敲打痕がある。背面側には稜があり、稜上に漏斗状の孔が穿たれる。	
49	阿石	床面から 12cm上	粗粒輝石安山岩	36.6	30.9	7.7	12600.0	扁平鏡	表裏面とも摩耗するほか、強い敲打痕がある。左側縁の裏面側に被熱痕が広がる。	

遺物観察表

30号壱六住居(第76図 PL.47)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値		胎上/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	土師器 土	床面から 6cm上	口縁～体部	口	11.7	細砂粒・角閃石・ 軽石/良好/赤褐色	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫でて、部分的に押圧、 内面は撫で。	器面厚減	
2	黒色土器 上	床面から 6cm上	2/3	口	14.5 7.6	高台 6.4 2.2	細砂粒・角閃石/ 酸化塩/ぶい・黄 褐色	口縁部整形(右回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。内面はヘラ磨き後、黒色処理。	底部の一部吸炭
3	須恵器 杯	埋土	口縁～底部片	口	12.4 5.8	高 3.5	細砂粒・粗砂粒/ 酸化塩/濁灰	口縁部整形(右回転か)底部は回転糸切り無調整	内面吸炭
4	須恵器 杯	床面から 6cm上	2/4 (高台欠)	口	14.2 6.8	高台 4.8 6.8	細砂粒/酸化塩/濁 灰	口縁部整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高 台。貼り付け部から剥落。	体部外面は吸炭し 光沢あり
5	床輪陶器 検	カマド 使用面直上	2/3	口	13.7 7.2	高台 4.7 6.9	粗砂粒/還元塩/灰 白	口縁部整形(右回転)高台は三日月高台で、底部回転ヘラ 削り後の付け高台。體部外面は回転ヘラ削り。施軸は刷毛掛 け。	光ヶ丘1号窯式 か
6	土師器 甕	床面直上	胴部～底部片	底	3.9		細砂粒・角閃石/ 良好/ぶい・黄褐色	胴部外面は縦のヘラ削り、内面は撫で。	胴部外面に粘土 付着

30号壱六住居(第76図 PL.47)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)				特徴・状態	摘要
7	鉄製品 鑑	床面直上	ほぼ完形	長さ	幅	厚さ	重さ	大型の鉄鏡。三角形の根は内側の割裂りに大きくえぐられ 縁を持たずに両側面に段を持ち茎へと続く。茎は10.5cmと 長く、断面4角形で徐々に細くなりながらも4角形を維持し、 端部で1mmほどになる。茎には木質・矢柄の痕跡は見られ ない。	

30号壱六住居(第76図 PL.47)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
8	石製品 砥石	床面から 4cm上	砥沢石	(6.8)	(4.6)	(3.6)	133.2	切り砥石	四面使用。背面側中央に幅広の深い研磨痕がある。 良く使い込まれているが、左側面には 整形痕が見える。	

1号壱六(第77図 PL.47)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
1	石鏡	埋土	黒色頁岩	1.5	1.1	0.3	0.4	凹基無茎蓋	完成状態。石器基部を大きく挟り込む。小形 だが、押圧跡を前面に施す。	
2	石鏡	埋土	チャート	2.5	1.8	0.5	1.3	凹基無茎蓋	完成状態。基部を深く挟り込み、小さな返し か内側に付く。	
3	凹石	床面から 12cm	石英閃緑岩	11.3	7.9	3.8	535.5	扁平楕円體	表裏面とも最打・摩耗痕がある。裡面は荒れ ているが、熟熱によるものか不明。	

3号5号壱六(3号壱六)(第82-85図 PL.47～50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎上	色調	焼成	成形・整形の特徴		摘要
1	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	織織	暗褐色	ふつ	口縁部文様にコンパス文様を横位に施す。地文に0段多条のL Rの 縄文を施す。	黒浜式	
2	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	織織	暗褐色	ふつ	平口縁の口縁以下にL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式	
3	縄文土器 深鉢	床から22cm上	胴部片	織織	橙	良好	平口縁の口縁以下にRの附加条(Rの2本附加)の縄文を施す。	黒浜・有尾式	
4	縄文土器 深鉢	床から91cm上	胴部片	織織	橙	ふつ	胴部にRの附加条(Rの2本附加)の縄文を施す。	黒浜・有尾式	
5	縄文土器 深鉢	床から32cm上	胴部片	織織	暗褐色	ふつ	胴部にR Lの縄文を施す。	黒浜・有尾式	
6	縄文土器 深鉢	床から51cm上	胴部片	織織	暗褐色	ふつ	胴部にR Lの附加条(Rの2本附加)の縄文を施す。	黒浜・有尾式	
7	縄文土器 深鉢	床から59cm上	胴部片	粗砂	橙	良好	口縁部文様に爪形刺突をもつ細い平行沈線で文様を描く。	諸磯a式	
8	縄文土器 深鉢	床から3cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつ	口縁部文様に爪形刺突をもつ細い平行沈線で文様を描く。	諸磯a式	
9	縄文土器 深鉢	床から39cm上	口縁部片	粗砂・ 細織	暗褐色	ふつ	平口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を3条並せ、口縁部文 様に同様な爪形平行沈線で歯状等の文様を描く。	諸磯b式	
10	縄文土器 深鉢	床から47cm上	胴部片	粗砂・ 細織	暗褐色	ふつ	口縁部文様に爪形刺突をもつ平行沈線を3条単位として曲線的な文 様を描き、文様の隙間に内形刺突を配する。	諸磯b式	
11	縄文土器 深鉢	床から50cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつ	口縁部文様の下端に爪形刺突をもつ平行沈線と刻み単位として 横位に並らせて文様帯を区画し、以下の胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯b式	
12	縄文土器 深鉢	床から58cm上	口縁部片	粗砂・ 細織	暗褐色	ふつ	小突起を有する平口縁の口縁下に横位の平行沈線を数条並らせる。	諸磯b式	
13	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	粗砂・ 細織	暗褐色	ふつ	平口縁の口縁下に横位の平行沈線を数条並らせる。	諸磯b式	
14	縄文土器 深鉢	床から54cm上	口縁部片	粗砂	橙	ふつ	波状口縁の口縁下に横位の平行沈線を数条並らせる。	諸磯b式	
15	縄文土器 深鉢	床から20cm、 43cm、49cm上 の3点が接合	口縁部片	粗砂・ 細織	暗褐色	ふつ	屈曲して内反する平口縁の口縁下に平行沈線を数条並らせ、口縁部 文様に平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯b式	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
16	縄文土器 深鉢	床から49cm上 の2点が接合	口縁部片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつう	17と同一個体。屈曲して内反する鋭い波状口縁の口縁下に平行沈線 を2条並らせ、屈曲下にも平行沈線を数段並らせる。地文にL Rの 縄文を施す。	諸磯b式
17	縄文土器 深鉢	床から50cm、 44cm上の2点 が接合	口縁部片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつう	16と同一個体。屈曲して内反する鋭い波状口縁の口縁下に平行沈線 を2条並らせ、屈曲下にも平行沈線を数段並らせる。地文にL Rの 縄文を施す。	諸磯b式
18	縄文土器 深鉢	床から102cm、 90cm、3cm、 60cm、56cm上 の5点 が接合	胴～底部片	粗砂、 砂礫	褐色	ふつう	口縁部文様下に横位の平行沈線を並らせて文様帯区画し、以下の胴 部にR Lの縄文を施す。高さ(16.6) cm、底径6.5cm。	諸磯b式
19	縄文土器 深鉢	床から48cm上	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	19～23は同一個体。屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状 となり、波頭下に瘤状の足付文を有し、口縁下に数条の刻みをもつ 浮線文を並らせ、靴先部に同様の浮線文で入り組み状の文様を描く。	諸磯b式
20	縄文土器 深鉢	床から71cm上	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	19～23は同一個体。屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状 となり、波頭下に瘤状の足付文を有し、口縁下に数条の刻みをもつ 浮線文を並らせ、靴先部に同様の浮線文で入り組み状の文様を描く。	諸磯b式
21	縄文土器 深鉢	床直上と床から 41cm上 が接合	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	19～23は同一個体。屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状 となり、波頭下に瘤状の足付文を有し、口縁下に数条の刻みをもつ 浮線文を並らせ、靴先部に同様の浮線文で入り組み状の文様を描く。 屈曲下には数条の刻みをもつ浮線文を数段並らせる。波頭部下に縦位 および弧状の文様を描く。	諸磯b式
22	縄文土器 深鉢	床から53cm、 38cm上と5 繋ぎの床から 56cm上の3点 が接合	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	19～23は同一個体。屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状 となり、口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を並らせ、靴先部に同様の 浮線文で曲線的な文様を描く。屈曲下には数条の刻みをもつ浮線 文を数段並らせ、波頭部下に曲線的な文様を描く。	諸磯b式
23	縄文土器 深鉢	床から93cm、 45cm、49cm、 34cm、29cm上 と5繋ぎの床 から93cm上の 96 点 が接合	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	19～23は同一個体。屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状 となり、口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を並らせ、靴先部に同様の 浮線文で曲線的な文様を描く。屈曲下には数条の刻みをもつ浮線 文を数段並らせ、波頭部下に入り組み状の文様を描く。	諸磯b式
24	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつう	屈曲して内反する鋭い波状口縁の口縁下に数条の刻みをもつ浮線 文を並らせ、屈曲下に数条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
25	縄文土器 深鉢	床から44cm上	口縁部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつう	屈曲する口縁の屈曲下に3条の刻みをもつ浮線文を並らせる。	諸磯b式
26	縄文土器 深鉢	床から40cm上	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	屈曲して内反する口縁部に刻みをもつ浮線文で曲線的な文様を描 き、屈曲下に同様な浮線文を横位に並らせる。	諸磯b式
27	縄文土器 深鉢	床から61cm上	胴部片	粗砂、 細礫	灰黄	ふつう	胴部に浮線文を横位に数段並らせる。	諸磯b式
28	縄文土器 深鉢	床から47cm上 が2点接合	胴部下位片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつう	胴部に浮線文を横位に数段並らせる。	諸磯b式
29	縄文土器 深鉢	床から46cm上	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文と刺突列を横位に3本単位で数段並らせる。	諸磯b式
30	縄文土器 深鉢	床から45cm、 36cm、37cm、 20cm、63cm、 48cm上の6点 が接合	胴～底部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に3本単位で数段並らせる。	諸磯b式
31	縄文土器 深鉢	床から66cm、 41cm、36cm、 43cm、49cm上 の5点 が接合	胴下位～底 部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文と刺突列を横位に2本単位で並らせて文様 帯を区画し、区画内に浮線文で縦位およびX字状の文様を描く。底 部付近にはR Lの縄文を疎らに施す。高さ(3.8) cm、底径6.7cm。	諸磯b式
32	縄文土器 深鉢	床から60cm上	口縁部片	粗砂	暗褐色	ふつう	朝顔状に開く平口縁の口端部が有段となり、有段部に横位矢羽根状 の沈線を描いて大きな足付文を配し、口唇および段部に刺突列を 並らせる。	諸磯c式
33	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	平口縁の口唇に刺突列を並らせ、口縁下に斜位の沈線と縦長貼付 文を配する。	諸磯c式
34	縄文土器 深鉢	床から16cm上	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	朝顔状に開く口縁部に横位矢羽根状の沈線と数条の平行沈線を並ら せ、大小の縦長貼付文を配する。	諸磯c式
35	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	胴部に縦位条線で区画し、弧状の条線ないし縦位扇面状の文様を描 く。	諸磯c式
36	縄文土器 深鉢	床から67cm上	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	胴部に縦位条線で区画し、弧状ないし斜位の条線で文様を描く。	諸磯c式
37	縄文土器 深鉢	床から48cm上	胴部片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつう	胴部に弧状の条線で区画し、区画内に沈線で格子状の文様を描く。	諸磯c式
38	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	39と同一個体。胴部に縦位条線で区画し、弧状の条線および縦位扇 面状の文様を描く。	諸磯c式
39	縄文土器 深鉢	床から49cm上	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	38と同一個体。胴部に縦位条線で区画し、弧状の条線および縦位扇 面状の文様を描く。	諸磯c式
40	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつう	胴部に弧状の文様をもち、胴部下端に横位の条線を並らせる。	諸磯c式
41	縄文土器 深鉢	床から58cm上	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	口縁部文様に平行沈線で渦巻状等の曲線的な文様を描く。	前羽末葉
42	縄文土器 深鉢	床から47cm上	口縁部片	粗砂	褐色	ふつう	平口縁の口縁下に縦線帯の帯いLの縄文を施す。	諸磯式

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
43	縄文上部 深鉢	床から40cm, 57cm上の2点が 接合	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	胴部にL Rの縄文を施す。	諸磯式
44	縄文上部 深鉢	床から9cm上	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	胴部にL Rの縄文を施す。	諸磯式
45	縄文上部 深鉢	床から38cm上	胴下位～底 部片	粗砂	褐色	ふつ	胴部にL Rの縄文を施す。底径14.5cm。	諸磯式
46	縄文上部 深鉢	床から21cm, 16cm, 9cm上の 3点が接合	胴下位～底 部片	粗砂	褐色	ふつ	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯式
47	縄文上部 深鉢	床から32cm, 41cm, 35cm上 と5壺穴の床 から51cm, 40cm上の3点が 接合	胴下位～底 部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部にR Lの縄文を施し、底部付近は無文。	諸磯式
48	縄文上部 深鉢	床から55cm上	口縁部片	粗砂	褐色	良好	僅かに屈曲する波状口縁の口縁下に結節線文を数条施す。	前期未集
49	縄文上部 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	褐色	良好	50と同一個体。胴部に3条の結節線文で弧状の文様を描き、地文にR Lの縄文を施す。	前期未集
50	縄文上部 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	褐色	良好	49と同一個体。胴部に3条の結節線文で弧状の文様を描き、地文にR Lの縄文を施す。	前期未集
51	縄文上部 深鉢	床から45cm上	胴部片	粗砂	褐色	良好	胴部に結節線文を重下させる。	前期未集
52	縄文上部 深鉢	床から87cm上	口縁部片	粗砂、 黒色粒、 輝石	灰黄褐色	ふつ	波状口縁の波頂部が双直頂で、口縁部が有段となる段部に刺突を施す。	阿玉台式
53	縄文上部 深鉢	床から70cm上	胴部片	粗砂、 細礫、 輝石	灰白	ふつ	胴部に甲冑線で鋸歯状の文様を横位に施す。	阿玉台式
54	縄文上部 深鉢	床から45cm, 58cm上の2点が 接合	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	胴部に結節縄文を縦位に施す。	五箇ヶ台式

3号・5号壺穴(3号壺穴)(第83～85図 PL.49・50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	概要
55	打製石斧	床面から 36cm上	細粒輝石安山岩	12.6	6.8	1.6	111.4	撥型	完成状態。刃部は全体的に摩耗しているが、左辺側の刃部摩耗が著しい。右辺側の刃部再生が先行したことが分かる。
56	打製石斧	床面から 7cm上	黒色頁岩	(8.1)	3.9	1	27.1	短冊型	完成状態。エッジはシャープで、摩耗等は見られない。石屑としては小形で、実用具が判断が難しい。
57	打製石斧	床面から 48cm上	頁岩	8	3.6	1.3	35.4	短冊型	未製品。右側縁の加工は石斧そのものである。左側縁には未加工のエッジが残る。
58	石鏃	床面から 62cm上	黒色頁岩	2.4	1.9	0.3	1.1	凹基無茎鏃	完成状態。石器基部を大きく取り込む。加工は丁寧で、石鏃としての完成度は高い。
59	石鏃	床面から 96cm上	黒曜石	2.5	(1.6)	0.3	0.6	凹基無茎鏃	完成状態。右辺側「返し部」を欠損する。押圧測驗が全面を覆い、石鏃としての完成度は高い。
60	石核	床面から 18cm上	石英	2.2	3.2	1.0	5.5	剥片	上端の広い剥離面から小形剥片を剥離する。
61	削器?	床面から 65cm上	チャート	(5.7)	4.3	0.9	29.0	板状剥片	縦理面で割れた板状剥片の内側縁を粗く加工する。加工は胴体中央まで達したのももあり、面的だが現状では尖頭器類とするは難しい。
62	磨石	床面から 8cm上	細粒輝石安山岩	14.7	7.1	3.8	596.3	扁平棒状磨	表裏面・両側面に摩耗痕がある。特に内側縁の摩耗は顕著で、縦条痕が伴う。
63	凹石	床面から 7cm下	粗粒輝石安山岩	(10.8)	7.4	3.3	433.4	扁平楕円磨	表裏面とも最打・摩耗痕がある。下部部を欠損する。
64	凹石	床面から 22cm上	粗粒輝石安山岩	12.9	8.2	5.0	728.9	楕円磨	表裏面とも最打・摩耗痕がある。背面側に鋭熱刺痕がある。
65	磨石	床面から 46cm上	粗粒輝石安山岩	6.6	5.1	4.3	172.4	楕円磨	表裏面とも鋭く摩耗するほか、摩耗痕は側面にも及ぶ。
66	磨石	床面から 5cm下	粗粒輝石安山岩	11.9	6.4	4.2	503.6	扁平楕円磨	表裏面とも摩耗するほか、小口部に最打痕がある。
67	敲石	床面から 38cm上	粗粒輝石安山岩	7.8	7.9	4.2	295.9	楕円磨	背面側平坦面・小口部に最打痕が残る。
68	敲石	床面から 17cm上	石英	5.2	4.7	2.5	78.2	楕円磨	上端側小口部に最打痕・衝撃刺痕面が集中する。石英が縄文期敲石として用いられることはまれ。希少。
69	多孔石	床面から 39cm上	粗粒輝石安山岩	(17.4)	(9.5)	5.5	773.2	板状鏃	石材が粗く不揃だが、背面側・右側面は摩耗するよう見える。裏面側には漏斗状の孔多数を穿つ。

3号・5号整穴(5号整穴)(第82～85図 PL.49)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	床から49cm上	口縁部片	織羅	黄橙	ふつう	平口縁の口縁以下にLとRの附加条(Rの2本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
3	縄文土器 深鉢	床から53cm上 の2点が接合	胴部片	織羅	暗褐	ふつう	胴部にO段多条のL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
2	縄文土器 深鉢	床から62cm上	胴部片	織羅	暗褐	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	黒沢・有尾式
4	縄文土器 深鉢	床から53cm上	胴部片	粗 砂、 細羅	暗褐	ふつう	胴部に平行沈線を数段巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
5	縄文土器 深鉢	床から48cm上	胴部片	粗砂	暗褐	ふつう	胴部に平行沈線巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
6	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐	ふつう	胴部に横位の条線を巡らせる。	諸磯b式
7	縄文土器 深鉢	床から98cm上	胴部片	粗 砂、 細羅	灰黄	ふつう	屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状となり、波頂下に瘤状の貼付文を有し、口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を巡らせ、靴先部に浮線文で入り組み状の文様を描く。	諸磯b式
8	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	黄橙	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に巡らせる。	諸磯b式
9	縄文土器 深鉢	床から58cm上	胴部片	粗砂	暗褐	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に数条巡らせる。	諸磯b式
10	縄文土器 深鉢	床面80cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に数条の刻みをもつ浮線文と刺突列で曲線的な文様を描く。	諸磯b式
11	縄文土器 深鉢	床から83cm上	口縁部片	粗砂	褐橙	良好	波状口縁の口縁下に結節浮線文を数条巡らせる。	前期未葉
12	縄文土器 深鉢	床から64cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に結節浮線文を横位・斜位に施す。	前期未葉
13	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	黄橙	ふつう	地文にLの縄文が施され、結節浮線文を横位に付ける。	前期未葉
14	縄文土器 深鉢	床から80cm上	口縁部片	粗 砂、 細羅	褐橙	ふつう	口端部が直立する平口縁の口唇部に刻みを巡らせ、瘤状の貼付文を配し、口縁下に刺突列をもつ隆帯を巡らせる。	前期未葉
15	縄文土器 深鉢	床から84cm上	胴部片	粗 砂、 細 羅、 卵石	灰白	ふつう	胴部に単沈線と銀歯状の文様を横位に施す。	阿玉台式

3号・5号整穴(5号整穴)(第85図 PL.49・50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
16	打製石斧	床面から 82cm上	黒色頁岩	(7.7)	4.5	1.6	61.2	短冊型	完成状態。表裏面とも対部摩耗する。器体上半を欠いており、撻形については不明。	
17	打製石斧	床面から 70cm上	細粒輝石安山岩	(6.0)	4.2	1.4	40.4	短冊型	完成状態。両側縁が弱く摩耗する。刃部加工は形状を整える程度だが、エッジはシャープである。	
18	磨石	床面から 36cm上	粗粒輝石安山岩	11.7	7.4	4.9	609.9	柱状礫	背面側に敲打・摩耗痕がある。	
19	敲石	床面から 57cm上	粗粒輝石安山岩	7.1	6.9	4.9	273.1	楕円礫	背面側平坦面に敲打痕がある。	
20	多孔石	床面から 39cm上	粗粒輝石安山岩	32.7	25.2	15.3	16500.0	楕円礫	表裏面とも漏斗状の孔多数を穿つ。	

4号整穴(第87～90図 PL.50・51)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	床から19cm上	胴部片	織羅	黄橙	ふつう	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
2	縄文土器 深鉢	床から63cm、 57cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂	橙	良好	内反ぎみの波状口縁の口唇に刻みをもち、口縁下に爪形刺突をもつ細い平行沈線を2条巡らせ、以下に細い条線を縦位に施す。	諸磯a式
3	縄文土器 深鉢	床から61cm上	胴部片	粗砂	褐橙	良好	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、区画間に細い条線を縦位に施す。	諸磯a式
4	縄文土器 深鉢	床から17cm上	胴部片	粗砂	褐橙	良好	口縁部文様に細い条線を斜位に施す。	諸磯a式
5	縄文土器 深鉢	床から63cm上	胴部片	粗砂	褐橙	良好	口縁部文様に細い条線を縦位に施す。	諸磯a式
6	縄文土器 深鉢	床から4cm上	口縁部片	粗砂	暗褐	ふつう	僅かに屈曲する平口縁の口縁下に縦位の平行沈線を巡らせ、以下に横位の平行沈線を条線状に巡らせる。	諸磯b式
7	縄文土器 深鉢	床から3cm上	口縁部片	粗砂	褐橙	ふつう	屈曲する波状口縁の口縁下に平行沈線を数条巡らせる。	諸磯b式
8	縄文土器 深鉢	床から11cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部に細い条線を横位に数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
9	縄文土器 深鉢	床から28cm上	胴部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に平行沈線を横位に数段巡らせて文様部区画し、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
10	縄文土器 深鉢	床から14cm上	口縁部片	粗砂、 砂礫	暗黄褐	ふつう	屈曲して内反する波状口縁の波頭部が靴先状となり、波頂部が取面を意匠した突起状となる。口縁下に数条の刺突列を巡らせ、靴先部に刺突列で曲線的な文様を描く。屈曲下には3条の刻みをもつ浮線文を数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
11	縄文土器 深鉢	床から25cm上	口縁部片	粗 砂、 砂礫	黄褐	ふつう	屈曲する細い波状口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が走り、屈曲下に浮線文を横位に巡らせる。	諸磯b式

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	現存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
12	縄文土器 深鉢	床から50cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	黄褐色	ふつう	屈曲する口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が走り、屈曲下に浮線c式 線文を横位に巡らせるが浮線文上にもR Lの縄文が施される。	諸磯c式
13	縄文土器 深鉢	床から19cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部に2ないし3条の刻みをもつ浮線文および刺突を横位に巡らせて 文様帯区画し、区画内に同様な浮線文および刺突で変状や曲線的 な文様を描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯c式
14	縄文土器 深鉢	床から25cm、 21cm、17cm、 6cm上の4点が 接合	口縁部片	粗砂、 砂礫	橙	良好	朝顔状に開く平口縁の口縁裏面が有段となり、口縁部の裏面から表面 にかけて横位の矢羽根条線が施され、同時に裏面から表面にか けて4単位の大形貼付文、大きな縦位の貼付文とその間に円形貼 付文を横位に配する。口縁部に斜位の浮線文を施し、細長い棒状貼付 文を縦位に配する。口縁下には横位の平行浮線を条線状に巡らせて 文様帯区画し、以下の胴部に条線で縦位および筋線状の文様を区画 し、区画内に縦位の矢羽根状浮線を描く。さらに、縦長貼付文と円 形貼付文を配する。	諸磯c式
15	縄文土器 深鉢	床から34cm上 の2点が接合	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	15～19と133号土坑5は同一個体。朝顔状に大きく開く平口縁の口 縁部に目立たず大きな貼付文を施すように配し、その間に刺突 をもつ円形貼付文を縦位に配する。口縁部の地文には縦位の平行浮 線が施され、口縁裏面には刺突をもつ円形貼付文を横位に巡らせる。	諸磯c式
16	縄文土器 深鉢	床から38cm、 6cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	15～19と133号土坑5は同一個体。朝顔状に大きく開く平口縁の口 縁部に目立たず大きな貼付文を施すように配し、その間に刺突 をもつ円形貼付文を縦位に配する。口縁部の地文には縦位の平行浮 線が施され、口縁裏面には刺突をもつ円形貼付文を横位に巡らせる。	諸磯c式
17	縄文土器 深鉢	床から12cm上 と埋土	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	15～19と133号土坑5は同一個体。朝顔状に大きく開く口縁部には 地文に横位の平行浮線が条線状に走り、上部に刺突をもつ円形貼付 文を横位に1段巡らせ、下部は縦位の結節浮線文とその間に刺突を もつ円形貼付文を横位に配する。頸部は屈曲し、屈曲部の地文に縦 位の平行浮線を施し、刺突をもつ円形貼付文と縦長貼付文を配する。	諸磯c式
18	縄文土器 深鉢	床から25cm上	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	15～19と133号土坑5は同一個体。朝顔状に大きく開く口縁部には 地文に横位の平行浮線が条線状に走り、上部に刺突をもつ円形貼付 文を横位に1段巡らせ、下部は縦位の結節浮線文とその間に刺突を もつ円形貼付文を横位に配する。	諸磯c式
19	縄文土器 深鉢	床から17cm上	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	15～19と133号土坑5は同一個体。朝顔状に大きく開く口縁部には 地文に横位の平行浮線が条線状に走り、上部に刺突をもつ円形貼付 文を横位に1段巡らせ、下部は縦位の結節浮線文とその間に刺突を もつ円形貼付文を横位に配する。	諸磯c式
20	縄文土器 深鉢	床から53cm、 51cm上の2点が 接合	口縁部片	粗砂、 砂礫	暗黄	ふつう	21と同一個体。平口縁の口唇に裏面から表面にかけて大きな貼付 文を巡るように配し、口縁下に横位の条線帯を巡らせる。胴部には 縦位条線帯で区画し、弧状の条線と斜位浮線で文様を描く。さらに、 口縁以下には円形貼付文を配する。	諸磯c式
21	縄文土器 深鉢	床から29cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	暗黄	ふつう	20と同一個体。平口縁の口唇に裏面から表面にかけて大きな貼付 文を巡るように配し、口縁下に横位の条線帯を巡らせて、円形貼付文 を配する。	諸磯c式
22	縄文土器 深鉢	床から17cm上	口縁部片	粗砂、 砂礫	黒褐色	ふつう	胴部に縦位条線帯で区画し、弧状の条線および縦位筋線状の文様を描 き、刺突をもつ円形貼付文を配する。	諸磯c式
23	縄文土器 深鉢	床から19cm上	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	平口縁の口縁直下に刺突列を巡らせ、口縁部に斜位の条線帯を施す。	諸磯c式
24	縄文土器 深鉢	床から49cm上	胴部片	粗砂	褐色	良好	胴部に縦位および筋線状の浮線を施し、縦長貼付文と円形貼付文を	諸磯c式
25	縄文土器 深鉢	床から34cm上	口縁部片	粗砂	黄褐色	良好	胴部に縦位および筋線状の浮線を施し、刺突をもつ円形貼付文を配	諸磯c式
26	縄文土器 深鉢	床面直上	胴下位～底 部片	粗砂	褐色	ふつう	輪花状となる平口縁の口縁以下にLの縄文を施す。	諸磯c式
27	縄文土器 深鉢	床から33cm上 が2点接合	胴下位～底 部片	粗砂、 砂礫	暗褐色	ふつう	胴部下端付近に横位の平行浮線を巡らせる。	諸磯c式
28	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	暗褐色	ふつう	胴部下端に横位矢羽根状の条線を巡らせる。	諸磯c式
29	縄文土器 深鉢	床から25cm上	胴部片	粗砂	灰褐色	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯c式
30	縄文土器 深鉢	床から17cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯c式
31	縄文土器 深鉢	床から45cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部にLの縄文を施す。	諸磯c式
32	縄文土器 深鉢	床から13cm、 9cm上の2点が 接合	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯c式
33	縄文土器 深鉢	床から25cm、 28cm、17cm、 39cm上の5点 が接合	胴下位～底 部片	粗砂	黄褐色	良好	平口縁で無文。	諸磯c式
34	縄文土器 深鉢	床から17cm上	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	ふつう	胴部下端は無文。	諸磯c式
35	縄文土器 深鉢	床から68cm上	口縁部片	粗砂	褐色	良好	36・37と同一個体。やや内反する平口縁の口縁直下に浮線を格子状 に施して変形文を描き、その変形文に刺突を加える。屈曲下の口縁 下には刺突列を数段巡らせる。	前期末葉
36	縄文土器 深鉢	床から48cm上	胴部片	粗砂	褐色	良好	35・37と同一個体。やや内反する平口縁の口縁直下に浮線を格子状 に施して変形文を描き、その変形文に刺突を加える。	前期末葉
37	縄文土器 深鉢	床から66cm上	胴部片	粗砂	褐色	良好	35・36と同一個体。胴部に横位の刻み列をもち、その下に刺突列を 数段巡らせる。	前期末葉

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
38	縄文土器 深鉢	床から57cm上	口縁部片	粗砂	褐緑	良好	胴部に縦線が縦位・斜位に文様を描き、印刻を施す。	前期末葉
39	縄文土器 深鉢	床から36cm上	胴部片	粗砂	褐緑	良好	胴部に放射肋のある二枚目でロッキングによる貝殻版文を数段造	興津式
40	縄文土器 深鉢	床から42cm上	口縁部片	粗砂	黄緑	ふつつ	胴部に放射肋のある二枚目でロッキングによる貝殻版文を巡らせる。	興津式
41	縄文土器 深鉢	床から46cm上	胴部片	粗砂	褐緑	ふつつ	胴部に放射肋のある二枚目でロッキングによる貝殻版文を数段造	興津式

4号竪穴(第87・88・90回 PL.50・51)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	概要
42	打製石斧	床面から 52cm上	黒色頁岩	(5.4)	4.3	1.6	41.6	短冊型	未製品? 頭部破片であり、刃部摩耗等の属性は不明。残存部のエッジはシャープで、未製品と推定。	
43	磨製石斧	床面から 58cm上	変玄武岩	(2.2)	(3.2)	(0.5)	4.1	乳房状	刃部再生に伴う調整割片。	
44	石磯	床面直上	黒曜石	2.7	1.7	0.5	2.3	門基無茎磯	完成状態。黒曜石製石磯としては大形の部類に入る。先端が平らで、鋭利状を呈す。	
45	石磯	床面から 16cm上	黒曜石	1.9	(1.1)	0.3	0.4	平基無茎磯	完成状態。右側縁先端が強く折れ、対称性に欠ける。右辺の返し部を欠損する。	
46	石磯	床面から 59cm上	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.3	門基無茎磯	完成状態? 押し廻し部を欠損する。加工状態は粗い。	
47	石磯	床面から 43cm上	黒曜石	1.3	1.0	0.3	0.2	門基無茎磯	完成状態? 側縁加工は厚く、形状を整える程度。基部を深く抉り込む。	
48	石磯	床面から 28cm上	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.6	門基無茎磯	完成状態? 裏面側に素材面を残し、横断面は強く反る。加工状態は粗く、粗雑な印象を受ける。	
49	石磯	床面から 52cm上	黒曜石	1.7	(1.5)	0.5	0.7	門基無茎磯	未製品。側縁のみ厚く加工して、石器を作出する。加工初期に「返し部」を欠損して、製作を放棄している。	
50	石磯	床面から 55cm上	黒色頁岩	2.0	1.4	0.3	0.6	門基無茎磯	完成状態。加工は周辺に限られ、表裏面とも素材面を大きく残す。	
51	石磯	床面から 41cm上	黒色安山岩	2.3	1.6	0.3	0.8	門基無茎磯	完成状態。加工は浅く周辺加工に止まり、表裏面とも未加工の素材面を大きく残す。	
52	石核	床面から 32cm上	黒色頁岩	4.1	6.5	4.2	106.5	分割磯?	打面転移を頻りに繰り返して、小形割片を剥離する。	
53	石核	床面から 14cm上	黒色安山岩	6.2	6.1	2.4	80.6	剥片	求心的に打点を移動させ、小形幅広剥片を剥離する。	
54	石核	床面から 37cm上	チャート	3.0	4.5	1.0	15.6	幅広剥片	表裏面でも小形割片を剥離する。	
55	石核	床面から 51cm上	珪質頁岩	4.0	4.3	1.1	23.8	剥片	小形剥片を求心状に剥離。石材は黒色に光沢を帯び、頁質石材の部類に入る。	
56	石核	床面から 40cm上	黒曜石	2.5	3.4	1.4	11.2	分割磯?	小形剥片を剥離する。石核消費の最終段階にある。	
57	凹石	床面から 3cm下	粗粒輝石安山岩	11.6	11.3	7.0	1013.3	楕円磯	表裏面とも敲打・摩耗痕がある。	
58	敲石	床面から 44cm上	変質安山岩	9.1	5.7	5.2	320.0	柱状磯	上端側小口部は敲打され、大きく破損するほか、下端側小口部に敲打痕が著しい。	
59	磨石	床面から 19cm上	粗粒輝石安山岩	13.0	7.0	3.5	493.8	扁平楕円磯	表裏面とも敲打・摩耗痕がある。左辺側下端には著しい敲打痕があり、平坦面が形成されている。	
60	石皿	床面から 18cm上	粗粒輝石安山岩	(11.7)	(12.8)	(8.5)	1225.7	有縁	機能部は深く、激しく使い込まれている。裏面側に漏斗状の孔を穿つ。側縁は整形。	
61	台石	床面から 33cm上	粗粒輝石安山岩	20.4	17.4	9.5	3704.5	楕円磯	背面側平坦面が摩耗するほか、弱い敲打痕がある。	
62	多孔石	床面から 17cm上	粗粒輝石安山岩	(7.7)	(9.2)	(5.3)	483.5	板状磯	背面側平坦面に敲打・摩耗痕があるほか、裏面側面に漏斗状の孔を穿つ。	

1号古墳(第92回 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
1	土師器 杯	四配埋土	口縁一底部片	口 14.0	粗砂粒・角四石/軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
2	土師器 杯	四配埋土	口縁一底部片	口 14.0 高 4.3	粗砂粒・角四石/良好/橙	口縁部は横撫で。内面は撫で。	内面摩滅・外面のハズレ著
3	土師器 杯	四配埋土	口縁一底部片	口 11.0 高 2.6	粗砂粒・軽石/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちへら削り。内面は撫で。	
4	須恵器 杯	四配埋土	2/3	口 12.6 高 6.0	4.1 粗砂粒・粗砂粒/軽石/還元灰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整	
5	須恵器 杯	四配埋土	口縁一底部片	口 13.6 高 6.8	3.6 粗砂粒・粗砂粒/還元灰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転系切り無調整	
6	須恵器 杯か	四配埋土	底部片	台 11.5	粗砂粒・粗砂粒/還元灰/灰白	ロクロ整形(右回転) 高台は角高台状で、底部回転へら削り後の付け高台。	
7	須恵器 碗	四配埋土	1/3	口 14.3 高 6.6	5.2 粗砂粒・粗砂粒/還元灰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	見込み部に重む焼きによる変色

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
8	須恵器 椀	四脚埋土	体部～底部片	底 6.0 台 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台で、一部貼り付け部から剥離。				
9	須恵器 椀	四脚埋土	口縁～底部片	口 13.8 高 6.5 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。				
1号墳(第93号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
1	土師器 杯	埋土	口縁～底部片	口 11.8 高 7.0 底 2.6	細砂粒・角四石/ 軽石/良好/ふい 黄褐色	口縁部は横撫で。体部外面は雑な撫で、内面は撫で。底部は手持ちへう削り。				
2	須恵器 杯	側溝底面か ら12cm上	1/4	口 12.4 高 6.7 底 6.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	体部内面に筆書(文字不明)			
3	須恵器 椀	側溝底面か ら22cm上	完形	口 14.7 高 6.9 底 6.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転か) 高台は底部回転糸切り後の付け高台で、一部は貼り付け部から剥離。	体部内面に口石の筆書、一部焼成			
4	土師器 甕	埋土	口縁～胴部片	口 17.8	細砂粒・角四石/ 良好/橙	口縁部は横撫で。胴部外面はへう削り。	胴部外面に輪積み痕			
4号墳(第95号)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
1	土師器 杯	埋土	底部1/2欠	口 13.6 高 3.5 底 3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、間に撫での部分を残す。底部は手持ちへう削り。内面は丁寧な撫で。				
1号井戸(第96号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
1	須恵器 杯	埋土	1/2	口 13.0 高 6.0 底 4.0	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	底部にハゼ			
2	須恵器 杯	埋土	口縁片		細砂粒・角四石/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)	体部外面に筆書(文字不明)・器面摩滅			
3	灰輪陶器 皿	埋土	底部	底 6.4 台 5.8	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形(回転方向不明)高台は三日月高台で、丁寧な付け高台。胎軸は刷毛掛けか。	東遺			
2号土坑(第97号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
1	須恵器 椀	埋土	体部～底部片	底 6.8 台 6.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転) 高台は底部回転糸切り後の付け高台。	器面やや厚減			
5号土坑(第97号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要			
1	須恵器 杯	底面から 27cm上	2/3	口 13.0 高 6.0 底 3.8	細砂粒・雲母/ 還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	体部外面に筆書(文字不明)・器面摩滅			
2	須恵器 杯	埋土	体部～底部片	底 6.0	細砂粒・片岩/ 還元焰/ふい/黄橙	ロクロ整形(右回転) 底部は回転糸切り無調整。	内面摩滅・藤岡か			
5号土坑(第97号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要				
3	鉄滓	底から29cm		長さ5.1 幅3.8 厚さ1.5 重さ51.39	平板状。					
22号土坑(第100号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要				
1	鉄製品 不明	埋土	ほぼ完形	長さ2.2 幅1.2 厚さ0.3 重さ0.97	断面4角で「く」の字に曲がる釘と見られるが、頭等の構造は見られず詳細は不明。					
2	鉄製品 釘	埋土	ほぼ完形	長さ3.2 幅0.5 厚さ0.4 重さ1.1	断面4角の角釘と見られる。先から1cm付近で緩やかに曲がる。頭部は破損したのか?形状不明。					
23号土坑(第100号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要				
1	鉄製品 釘	埋土	ほぼ完形	長さ3.8 幅2.3 厚さ0.3 重さ5.18	端部から先まで断面はほぼ円形の釘でコ字状に曲がる。端部は単純に切断されたような形で終わる。					
39号土坑(第102号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要				
1	薄板状鉄 製品	埋土	ほぼ完形	長さ2.8 幅3.5 厚さ0.5 重さ3.95	形状は不定角形を呈し相対する2辺に内側へ0.5から1cmの折り返しが見られる。					
118号土坑(第111号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)	特徴・状態	摘要				
1	鉄製品	埋土	ほぼ完形	長さ6.2 幅5.0 厚さ1.7 重さ18.36	小型の右利き用鎌。刃から茎にかけて直角に近い角度で曲がる。茎は幅広くこれに接する形ではばきか錆付く。茎端に孔は無く急に幅を減じて終わる。端部を細くしてループ状に折り曲げたものが破損した可能性もある。					
125号土坑(第118号 PL.52)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
1	磨石	埋土	粗粒輝石安山岩	12.3	11.1	6.4	885.8	楕円盤	表面面とも摩耗するほか、裏面側に漏斗状の孔を穿つ。	

129号土坑(第113図 PL.52・53)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	底から22cm, 12cm, 13cm, 8cm上と埋土。 136号土坑底から 41cmと埋土。 4号壺穴の床から 66cm, 67cm, 69cm, 66cm上 と埋土。5号 壺穴の床から 72cm上の土器 片13点が接合	胴部片	粗砂、 細礫	暗黄	ふつう	朝顔状に開く口縁の口縁下に横位の平行沈線と条線状に巡らせて文様帯区画し、以下の胴部に条線で縦位および紡錘状の文様を区画し、区画内に横位・斜位の沈線を描く。さらに、縦長貼付文と刺突をもつ円形貼付文を配する。	諸磯c式
2	縄文土器 深鉢	底から15cm, 18cm上、埋土の 3の点が接合	胴部片	粗砂	褐橙	良好	胴部に条線で縦位および紡錘状の文様を区画し、区画内に縦位の矢羽根状沈線を描き、縦長貼付文を配する。	諸磯c式
3	縄文土器 深鉢	底から23cm, 32cm上の2の点が 接合	口縁部片	繊維	黄	良好	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせる。	有尾式
4	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	繊維	橙	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	黒浜・有尾式
5	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	褐橙	ふつう	口縁部文様に4条の平行沈線と波状沈線を数段巡らせる。円形刺突を縦位に配する。	諸磯a式
6	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	橙	ふつう	口縁部文様に4条の平行沈線と波状沈線を巡らせる。円形刺突を縦位に配する。	諸磯a式
7	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	褐橙	ふつう	口縁部文様に平行沈線で波状文を横位に巡らせる。	諸磯a式
8	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	橙	良好	胴部に沈線で縦位矢羽根状の文様を描き、文様の隙間に三角印刺突を施す。	前期末葉
9	縄文土器 深鉢	底から33cm上	胴下部～底 部片	粗砂	黄橙	ふつう	胴部下端に沈線で縦位矢羽根状の文様を描き、文様の隙間に三角印刺突を施す。	前期末葉
10	縄文土器 深鉢	底から20cm上	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	胴部に結節浮線文で縦向き状の文様を描き、地文に横位の平行沈線を施す。	諸磯c式
11	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	胴部に結節浮線文で横位・斜位の文様を描き、地文に縦位の平行沈線を施す。	諸磯c式
12	縄文土器 深鉢	底から26cm, 42cm上、埋土の 3の点が接合	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	口縁部文様に平行沈線で渦巻き状の文様を描く。	諸磯c式
13	縄文土器 深鉢	底から59cm, 55cm, 47cm, 59cm上の4点が 接合	胴下部～底 部片	粗砂	橙	良好	胴部下端にR Lの縄文を施す。	諸磯式
14	縄文土器 深鉢	底から13cm上	胴下部～底 部片	粗砂	黄橙	ふつう	胴部下端は無文。	諸磯式
15	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	口縁部が直立する平口縁の口唇部に爪形刺突を巡らせて、瘤状の貼付文を配し、口縁下に刺突痕をもつ隆帯を巡らせる。	前期末葉
16	縄文土器 深鉢	埋土	口縁部片	粗砂、 細礫	橙	ふつう	口縁部が直立する平口縁の口唇部に爪形刺突を巡らせて、口縁下に刺突痕をもつ隆帯を巡らせる。	前期末葉

129号土坑(第113図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
17	打製石斧	底から40cm	黒色頁岩	13.9	8.8	2.2	272.0	分銅型	完成状態。エッジは比較的新鮮だが、刃部が弱く摩耗。	
18	石鏝	底から3cm	黒曜石	2.5	(1.6)	0.5	1.3	円錐無茎器	未製品。左側縁下の剥離が右側縁側に抜け破損。	
19	石鏝	埋土	黒色安山岩	3.0	1.1	0.4	1.1	小形剥片	風化して不明瞭だが、先端部エッジは弱く摩耗しているように見える。「握み部」は未加工。	
20	石鏝	底から7cm	黒曜石	(4.4)	(1.1)	0.5	1.4	縦長剥片	機能部縁側のエッジはシャープで、使用されているか不明瞭。「握み部」を欠損する。	
21	磨石	底から44cm	粗粒輝石安山岩	10.8	6.9	2.8	282.5	扁平楕円型	背面側に敲打・摩耗痕が広がるほか、内側縁に敲打痕がある。	
22	磨石	埋土	粗粒輝石安山岩	10.0	7.3	4.5	444.6	楕円型	表裏面に摩耗痕が広がる。背面側摩擦部には線条痕が伴う。	

130号土坑(第114図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	褐橙	良好	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、区画間に縦い条線を施す。	諸磯a式
2	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂、 石英	褐橙	良好	胴部下下に縦い平行沈線で木の葉文を描き、その下に同様の平行沈線を巡らせて文様帯を区画する。木の葉文内に地文の縄文が残り、胴部下端の地文はR Lの縄文を施す。	諸磯a式
3	縄文土器 深鉢	底から11cm	胴部片	粗砂、 白色砂	橙	ふつう	胴部に平行沈線を4条巡らせて区画し、区画内に斜位等の文様を描く。地文にはR Lの縄文を施す。	諸磯b式
4	縄文土器 深鉢	底から16cm	胴部片	粗砂、 細礫	暗黄	ふつう	胴部に3条の渦巻きをもつ浮線文を横位に数段巡らせる。	諸磯b式

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
5	縄文土器 深鉢	底直上	銅部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
6	縄文土器 深鉢	底から11cm	銅部片	粗砂、 細砂	灰黄	ふつう	胴部にLの縄文を施す。	諸磯式
7	縄文土器 深鉢	底から17cm	銅部片	粗砂	褐橙	良好	胴部に比線で縦位・斜位に文様を描き、印刻を施す。	前期未葉
8	縄文土器 深鉢	底から13cm	銅部片	粗砂	褐橙	ふつう	胴部に比線で縦位・横位に文様を描く。	前期未葉
9	縄文土器 深鉢	底から15cm	銅部片	粗砂	暗褐	ふつう	地文にLの縄文が施され、結節浮線文を縦位に付ける。	前期未葉

133号土坑(第104図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	黄	ふつう	頸部の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせて文様帯区画し、口縁部文様に平行沈線で文様を描く。	有尾式
2	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	黄橙	ふつう	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	有尾式
3	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	粗砂	暗褐	ふつう	屈曲して内反する緩い波状口縁の口縁下に数条の刻みをもつ浮線文を巡らせ、屈曲下の頸部にも浮線文を巡らせる。	諸磯b式
4	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に数条の刻みをもつ浮線文と刺突列を巡らせる。	諸磯b式
5	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	粗砂	黄橙	ふつう	4号型(15～19と同一個体。朝顔状に大きく開く口縁部には地文に横位の平行沈線が条線状に走り、上部に刺突をもつ円形貼付文を横位に1段巡らせ、下部は縦位の結節浮線文とその間に刺突をもつ円形貼付文を横位に配する。頸部は屈曲し、屈曲部の地文に縦位の平行沈線を描き、刺突をもつ円形貼付文と縦長貼付文を配する。	諸磯c式
6	縄文土器 深鉢	底から3cm、 6cm上、理土の 3点が接合	胴下位～底 部片	粗砂	褐橙	ふつう	胴部下半にR Lの縄文を施す。	諸磯式
7	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	粗砂	暗褐	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期未葉
8	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	粗砂	橙	良好	胴部に比線で縦位矢羽根状の文様を描き、文様の隙間に三角印刻を施す。	前期未葉

133号土坑(第104図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
9	石磯	理土	黒色頁岩	4.5	2.9	0.6	7.9	円基磯?	完成状態? 裏面側基部を除き薄い刺突を周辺に施す。鋭い先端を作出しようとしたことは確実だが、サイズの大きく、未製品としての可能性も否定できない。	

134号土坑(第114図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	織羅	橙	良好	波状口縁の口縁下に平行沈線を数条巡らせる。	有尾式
2	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	織羅	褐橙	ふつう	平口縁の口縁下に平行沈線を数条巡らせる。	有尾式
3	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	暗褐	ふつう	口縁部文様に平行沈線を数段巡らせる。	有尾式
4	縄文土器 深鉢	底から3cm	銅部片	織羅	橙	ふつう	頸部の括れ部に平行沈線を数条巡らせて文様帯区画し、以下の胴部にLの縄文を施す。	黒浜・有尾式
5	縄文土器 深鉢	理土	口縁部片	織羅	黒褐	ふつう	平口縁の口縁以下にL RとR Lによる羽状縄文を施す。口縁下に補修孔をもつ。	黒浜・有尾式
6	縄文土器 深鉢	底から2cm	銅部片	織羅	褐橙	ふつう	8と同一個体。平口縁の口縁以下にRの縄文を施す。	黒浜・有尾式
7	縄文土器 深鉢	底から9cm	口縁部片	織羅	褐橙	ふつう	平口縁の口縁以下にR Lの縄文を施す。	黒浜・有尾式
8	縄文土器 深鉢	底から6cm	銅部片	織羅	褐橙	ふつう	6と同一個体。胴部にRの縄文を施す。	黒浜・有尾式
9	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	橙	ふつう	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
10	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	黄橙	ふつう	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
11	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	黄橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
12	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	織羅	灰橙	ふつう	14と同一個体。胴部にR Lの縄文を施す。	黒浜・有尾式
13	縄文土器 深鉢	底から6cm	胴～底部片	織羅	褐橙	良好	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。口径11.8cm。	諸磯c式
14	縄文土器 深鉢	理土	胴下位～底 部片	織羅	灰橙	ふつう	12と同一個体。胴部にR Lの縄文を施す。	黒浜・有尾式
15	縄文土器 深鉢	底から3cm	銅部片	粗砂	褐橙	良好	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に数段巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
16	縄文土器 深鉢	理土	銅部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に横位矢羽根状の沈線を描き、小粒なボタン状貼付文を配する。	諸磯c式

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
17	縄文土器 深鉢	埋土	胴部片	粗砂	褐色	良好	胴部に繊維束の粗いLの縄文を施す。	諸磯a式
18	縄文土器	埋土	胴下位～底 部片	粗砂	橙	ふつつ	胴部にR Lの縄文を施す。	諸磯式

134号土坑(第115図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
19	削器	底から8cm	黒色頁岩	6.5	6.7	1.4	64.1	幅広割片	割片端部の加工は連続的で、直線状刃部を形成する。右側縁部の加工は微細で粗く、連続性はない。	
20	打製石斧 ?	埋土	黒色頁岩	(5.6)	(5.5)	2.0	56.1	不明	完成状態? 表裏面とも刃部摩耗がある。刃部破片で、形状等詳細は不明。	

136号土坑(第116図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	底から19cm	口縁部片	繊維	黄	良好	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせる。	有尾式
2	縄文土器	埋土	胴部片	繊維	黄褐色	ふつつ	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
3	縄文土器	底から29cm	胴部片	繊維	黄褐色	ふつつ	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒浜・有尾式
4	縄文土器	底から14cm	胴部片	繊維	橙	ふつつ	胴部にL Rの縄文を施す。	黒浜・有尾式
5	縄文土器	底から9cm	胴部片	粗砂	灰黄	良好	屈曲して内反する波状口縁の屈曲下にも刻みをもつ浮線文を巡らせ、曲線的な文様を描く。	諸磯b式
6	縄文土器	埋土	胴部片	粗砂、 繊維	橙	ふつつ	胴部に平行沈線を数段巡らせる。	諸磯b式
7	縄文土器	底から23cm、 32cm、34cm上、 埋土の4点が接 合	口縁部片	粗砂	橙	良好	新顔状に開く平口縁の口縁部に斜位の平行沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。口縁部裏面は有段となり、口唇部から裏面にかけて大粒の貼付文および縦長の貼付文を施す。	諸磯c式
8	縄文土器	埋土	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	胴部に斜位沈線を施し、ボタン状貼付文を配する。	諸磯c式
9	縄文土器	埋土	胴部片	粗砂	褐黄褐色	ふつつ	胴部に平行沈線で渦状の文様を描く。	前期末葉
10	縄文土器	埋土	胴部片	粗砂	褐色	良好	波状口縁の口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線で渦状の文様を描く。	前期末葉
11	縄文土器	埋土	胴部片	粗砂	黄褐色	良好	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉

136号土坑(第116図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
12	石鏝	底から2cm	黒色頁岩	6.4	2.3	0.6	6.3	小形割片	小形割片の内側縁を加工して機能部を作出する。先端の左側縁側に稜面を残す。エッジはシャープである。	
13	削器	埋土	黒色頁岩	7.5	8.4	1.2	118.5	大形幅広割片	割片端部を浅く加工して弧状刃部を作出、エッジは弱く摩耗する。打面側加工は粗く、エッジはシャープである。	
14	磨石	埋土	粗粒輝石安山岩	6.1	6.0	4.0	218.9	楕円礫	表裏面に摩耗痕が広がる。側縁の打痕は見られない。	
15	多孔石	底から37cm	粗粒輝石安山岩	(20.2)	19.0	8.0	3769.8	扁平礫	背面部に漏斗状の孔を複数、裏面部に孔1を穿つ。被熱してひび割れている。	

137号土坑(第115図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
1	尖頭状石 器	埋土	黒色頁岩	10.4	3.7	3.1	96.4	厚型割片	断面三角形状を呈す。加工が粗く、その加工意図は不明だが、機能部を意図した割縁が先端に集中する。	

旧石器調査券P(第117図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
1	尖頭器	P-19調査面 一括目～III 層	黒色頁岩	(6.8)	2.0	0.9	11.8	木葉形	細身で、見た目は風化して粗雑だが、面的加工が全面的に施され、仕上がり具合は良好な部類に入る。	旧石器
2	尖頭器?	調査区一括 表土	黒色頁岩	(5.6)	2.0	0.7	9.5	柳葉形	上下両端を欠損する。加工は階段状割縁に近く、周辺加工に止まる。	旧石器
3	削器	VI層	硬質頁岩	(7.1)	2.2	0.7	12.2	石刃	背面部の内側縁を加工して、やや厚い刃部を作出する。刃部加工の段階で、上下両端を欠損する。	旧石器
4	割片	VI層	黒色頁岩	(3.8)	(1.4)	1.5	5.8	小形割片	石核消費の初期段階に割られた割片。割縁時に打面側が弾け飛んでいる。背面部内側縁に稜面を残す。	旧石器

遺物観察表

遺物外から出土した遺物(第119～126図 PL.54・60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
1	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	橙	良好	胴部の表裏面に斜位の条痕が施される。	条痕文系
2	縄文土器 深鉢	77号土壇埋土	口縁部片	織維	暗褐	ふつう	波状口縁の口縁下に帯状工具による縦位の連点状突起帯が施される。	有尾式
3	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	灰黄	良好	波状口縁の口縁下に数条の爪形突起をもつ平行沈線を施す。口縁部文様に同様の爪形平行沈線で菱形文等を施す。	有尾式
4	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	織維	灰黄	良好	口縁部文様に数条の爪形突起をもつ平行沈線で菱形文等を施す。	有尾式
5	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	黄橙	ふつう	口縁部文様に数条の爪形突起をもつ平行沈線で菱形文等を施す。	有尾式
6	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	黄橙	ふつう	頸部の括れ部に数条の爪形突起をもつ平行沈線を施す。以下の胴部にL Rの縄文を施す。	有尾式
7	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	灰黄	ふつう	口縁部文様に横位のコンパス文を数条施す。	黒沢式
8	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	橙	ふつう	口縁部文様に横位の平行沈線を施す。頸部の括れ部にコンパス文を施す。	黒沢式
9	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	橙	ふつう	口縁部文様に横位の平行沈線とコンパス文を施す。頸部の括れ部にコンパス文を施す。	黒沢式
10	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	橙	ふつう	平口縁の口縁以下にLとRの附加条(Lの2本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
11	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	黄橙	ふつう	平口縁の口縁以下にL RとRの附加条(Lの2本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
12	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	織維	暗褐	ふつう	平口縁の口縁以下にL Rと0段多条のR Lによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
13	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	織維	黄橙	ふつう	平口縁の口縁以下にR LとL R・0段多条のL Rによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
14	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	暗褐	ふつう	平口縁の口縁以下にLの縄文を施す。	黒沢・有尾式
15	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	黄橙	良好	平口縁の口縁以下にL Rの縄文を施す。	黒沢・有尾式
16	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	暗褐	ふつう	平口縁の口縁以下にLの縄文を施す。	黒沢・有尾式
17	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	織維	黄橙	ふつう	平口縁の口縁以下にRの附加条(Lの2本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
18	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部に0段多条のL Rと0段多条のR Lによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
19	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	ふつう	胴部に0段多条のL RとR Lによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
20	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部にLとRによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
21	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	橙	ふつう	胴部にR LとL Rによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
22	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
23	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	灰黄褐	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
24	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
25	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
26	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)の縄文を施す。	黒沢・有尾式
27	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	ふつう	胴部にL Rの附加条(Lの1本附加)の縄文を施す。	黒沢・有尾式
28	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの2本附加)の縄文を施す。	黒沢・有尾式
29	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	橙	ふつう	胴部に0段多条のL Rの縄文を施す。	黒沢・有尾式
30	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	黄橙	ふつう	胴部にR Lの縄文を施す。	黒沢・有尾式
31	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	良好	胴部に0段多条のL Rの縄文を施す。	黒沢・有尾式
32	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	ふつう	胴部に0段多条のL Rの縄文を施す。	黒沢・有尾式
33	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	ふつう	胴部にRとLによる羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
34	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	織維	暗褐	ふつう	胴部にRの縄文を施す。	黒沢・有尾式
35	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	織維	橙	ふつう	胴部にR Lの附加条(Rの1本附加)とL Rの附加条(Lの1本附加)による羽状縄文を施す。	黒沢・有尾式
36	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	織維	黄橙	ふつう	37と同一個体。内径さみの平口縁で、小突起をもつ。口縁下に4本歯の帯状工具で縦位沈線とコンパス文を数段施す。	黒沢・有尾式

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
37	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	織物	褐色	ふつ	36と同一個体。内反ぎみの平口縁で、小突起をもつ。口縁下に4本歯の櫛状工具で横波沈線とコンパス文を数段巡らせる。また、口縁下に焼成前となる径1cm前後の孔を有しており、注口器となる可能性をもつ。	大木2 a 式
38	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、横位の平行沈線と波状文を横位に巡らせる。	諸磯 a 式
39	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	口縁部文様に横位の平行沈線と波状文を横位に巡らせる。	諸磯 a 式
40	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	口縁部文様に横位の平行沈線と波状文を横位に巡らせる。	諸磯 a 式
41	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	口縁部文様に横位の平行沈線と波状文を横位に数段巡らせる。	諸磯 a 式
42	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	良好	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、区画間に細い染線を横位に施す。	諸磯 a 式
43	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄	良好	44と同一個体。口縁部文様に縦位の平行沈線で区画し、区画間に斜位の平行沈線を施す。	諸磯 a 式
44	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄	良好	43と同一個体。口縁部文様に縦位の平行沈線で区画し、区画間に斜位の平行沈線を施す。	諸磯 a 式
45	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、区画間に細い染線を横位に施す。爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描く。	諸磯 a 式
46	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	口縁部文様に縦位の円形刺突を配して区画し、4本歯の条帯で弧状の文様を描く。	諸磯 a 式
47	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつ	口縁部文様に3本歯の条帯で弧状の文様を描く。	諸磯 a 式
48	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 石英	褐色	良好	胴部下平に細い平行沈線で木の葉文を描き、その下に同様の平行沈線を巡らせて文様帯を区画する。胴部下端にR Lの縄文を施す。	諸磯 a 式
49	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	褐色	良好	平口縁の口縁以下にL Rの縄文を施す。	諸磯 a 式
50	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁～胴部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	内反する平口縁に4単位での「字状陰帯を有し、口唇に浮線文で縦位とX字状の文様を交互に巡らせる。口縁下には刻みをもつ浮線を4条巡らせ、口縁部文様に同様の浮線文での「字状」入り組み状・波状等の曲線的な文様を横位に描き、その下端および以下の胴部に同様の浮線文2ないし3条を横位に数段巡らせる。地文にはL Rの縄文を施す。口径19.5cm、高さ(21.0)cm。接合した破片の1点が3号整穴から出土。	諸磯 b 式
51	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	内反する縦い波状口縁の口縁下に刻みをもつ浮線を4条巡らせ、口縁部文様に同様の浮線文での「字状」等の曲線的な文様を横位に描き、その下端および以下の胴部に同様の浮線文を横位に数段巡らせる。地文にはR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式
52	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 砂礫	褐色	良好	内反する波状口縁の波面部分が突起状となり、波面下に断面を意匠した3個の櫛状指付文を有し、口縁下に数条の刻みをもつ浮線を巡らせ、断面意匠下に刻みをもつ浮線と弧状の文様を描く。	諸磯 b 式
53	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	内反する口縁の口縁下に刻みをもつ浮線を4条巡らせ、口縁部文様に同様の浮線文で曲線的な文様を横位に描き、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式
54	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	灰黄	良好	屈曲して内反する波状口縁の波面部分が靴先状となり、靴先部に刻みをもつ浮線文で入り組み状の文様を描く。	諸磯 b 式
55	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	灰褐色	ふつ	58と同一個体。口縁部が屈曲する小波状口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が4条巡り、波面下には葉状の文様が構成される。屈曲下に3条の同様な浮線文を横位に数段巡らせる。	諸磯 b 式
56	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	黄褐色	良好	口縁部が屈曲する小波状口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が3条巡り、屈曲下に同様な浮線文を横位に巡らせる。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式
57	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	灰褐色	ふつ	口縁部が屈曲する小波状口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が3条巡り、屈曲下に浮線文を横位に巡らせるが浮線文上にもR Lの縄文が施される。	諸磯 b 式
58	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	灰褐色	ふつ	55と同一個体。口縁部が屈曲する小波状口縁の口縁下に刻みをもつ細い浮線文が4条巡り、波面下には葉状の文様が構成される。口縁下に同様な浮線文を横位に巡らせる。	諸磯 b 式
59	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	屈曲して内反する口縁部に刻みをもつ浮線文で曲線的な文様を描き、屈曲下に同様な浮線文を横位に巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式
60	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	屈曲して内反する口縁部に刻みをもつ浮線文で曲線的な文様を描き、屈曲下に同様な浮線文を横位に巡らせる。	諸磯 b 式
61	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	黄褐色	ふつ	胴部上に僅かな段をもち、段部には数本単位の縦位の浮線文を巡らせ、以下の胴部に2ないし3条の刻みをもつ細い浮線文および刺突を横位に巡らせて文様帯を区画し、区画内に同様な浮線文および刺突が入り組み状等の曲線的な文様を横位に描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式
62	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	胴部が括れ、胴部上平には爪形刺突をもつ浮線文が横位に巡り、括れ部および胴部下平には爪形刺突が数段巡る。	諸磯 b 式
63	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部に3条の刻みをもつ細い浮線文を横位に巡らせる。	諸磯 b 式
64	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部に3条の刻みをもつ細い浮線文および刺突を横位に巡らせて文様帯を区画し、区画内に同様な浮線文および刺突で曲線的な文様を横位に描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯 b 式

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
65	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	胴部に2ないし3条の刻みをもつ浮線文を横位に巡らせ、地文にRの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
66	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	橙	良好	頸部に刻みをもつ浮線文を数段巡らせる。	諸磯b式
67	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	70と同一個体。胴部に3条の刻みをもつ細い浮線文および刺突を横位に巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
68	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	褐色	ふつ	頸部に刻みをもつ浮線文を数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
69	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗黄	ふつ	胴部に2ないし3条の刻みをもつ浮線文を横位に巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
70	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	67と同一個体。胴部に3条の刻みをもつ浮線文および刺突を横位に巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
71	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	黄緑	ふつ	胴部に3条の刻みをもつ細い浮線文を横位に巡らせる。	諸磯b式
72	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	黄緑	ふつ	胴部に数条の刻みをもつ隆帯を横位に巡らせる。	諸磯b式
73	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄緑	ふつ	頸部に刻みをもつ浮線文を数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
74	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	橙	良好	74～76は同一個体。内反する波状口縁の波頂部が平円状に挟めるような双頂となり、口縁には刻みで区画し、区画内に波線でX字状の文様を描く。口縁下には平行沈線が数条走り、波頂下に曲線的な文様を描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
75	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂、 細礫	橙	良好	74～76は同一個体。内反する波状口縁の波頂部が平円状に挟めるような双頂となり、口縁には刻みで区画し、区画内に波線でX字状の文様を描く。口縁下には平行沈線が数条走り、波頂下に曲線的な文様を描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
76	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	74～76は同一個体。内反する波状口縁の波頂部が平円状に挟めるような双頂となり、口縁には刻みで区画し、区画内に波線でX字状の文様を描く。口縁下には平行沈線が数条走り、波頂下に曲線的な文様を描く。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
77	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂、 細礫	黄緑	ふつ	口縁部が短曲する鋭い波状口縁の波頂下に瘤状の貼付文を有し、口縁下に平行沈線が走り、口縁部文様に平行沈線で断面文等を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
78	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	褐色	ふつ	口縁部が短曲する鋭い波状口縁の波頂下に瘤状の貼付文を有し、口縁下に平行沈線が走り、波頂下に曲線的な文様を描く。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
79	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	波状口縁の波頂部が双頂直となり、口縁下に平行沈線が数条走る。	諸磯b式
80	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	波状口縁の波頂部が双頂直となり、口縁下に平行沈線が数条走る。	諸磯b式
81	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	口縁部が短曲する平口縁の口縁下に平行沈線が走り、口縁部文様に平行沈線で断面文と横位平行沈線を数段巡らせる。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
82	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂、 細礫	黄緑	ふつ	口縁部文様に平行沈線で断面文と横位平行沈線を数段巡らせる。	諸磯b式
83	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	暗褐色	ふつ	胴部に平行沈線が横位および曲線的な文様を描く。	諸磯b式
84	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	灰黄	ふつ	胴部に平行沈線を横位に巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
85	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	暗褐色	ふつ	胴部に平行沈線が横位および斜位の文様を描く。	諸磯b式
86	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	橙	良好	胴部に平行沈線で曲線的な文様を描き、横位平行沈線を数条単位で数段巡らせる。地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
87	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	良好	胴部に平行沈線で断面文と横位平行沈線を数段巡らせる。	諸磯b式
88	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にLの縄文を施す。	諸磯b式
89	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にLの縄文を施す。	諸磯b式
90	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	橙	良好	胴部に横位平行沈線を数条巡らせ、地文にRの縄文を施す。	諸磯b式
91	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	黒黄	ふつ	胴部に平行沈線で断面文と数条の横位平行沈線を巡らせ、地文にLの縄文を施す。	諸磯b式 Lの縄文を施す。
92	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	橙	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
93	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
94	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐色	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。	諸磯b式
95	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	褐色	ふつ	胴部に横位平行沈線を数段巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。	諸磯b式
96	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	黄黄	良好	平口縁の口縁直下に刺突を巡らせ、口縁部に縦長および円形貼付文を配し、地文に斜位・縦位の条線を施す。	諸磯c式 Lの縄文を施す。
97	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	褐色	良好	内反する平口縁の口縁部に大小の縦長貼付文を配し、地文に横位矢羽状の沈線を施す。	諸磯c式 Lの縄文を施す。
98	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	橙	良好	朝顔状に開く平口縁の口縁部に斜位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配す。口縁部裏面は有段となり、斜位沈線および縦長の貼付文を配す。	諸磯c式 Lの縄文を施す。

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
99	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 石英	橙	良好	朝顔状に開く平口縁の口縁部に斜位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。口縁部裏面は有段となり、斜位沈線および縦長の貼付文を配する。	諸議 c 式
100	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 石英	橙	良好	朝顔状に開く平口縁の口縁部に斜位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。口縁部裏面は有段となり、斜位沈線および縦長の貼付文、大型貼付文を配する。	諸議 c 式
101	縄文土器 深鉢	4号壙穴埋土	口縁部片	粗砂	橙	良好	朝顔状に開く平口縁の口縁部に斜位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。口縁部裏面は有段となり、斜位沈線および縦長の貼付文を配する。	諸議 c 式
102	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部破片	粗砂	黄褐	ふつう	口縁部に縦長および斜交を有する円形貼付文を配し、地文に横位の条線を施す。	諸議 c 式
103	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐橙	良好	朝顔状に開く口縁部に斜位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。	諸議 c 式
104	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗褐	良好	朝顔状に開く口縁部に斜位および縦位の沈線を施し、細長い棒状貼付文を縦長に配する。	諸議 c 式
105	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	黄褐	ふつう	朝顔状に開く口縁部に横位の条線を施し、屈曲して膨らむ頸部に横位矢羽根状の沈線をして斜交を有する円形および大きな縦長貼付文を交互に配する。	諸議 c 式
106	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	橙	良好	胴部に縦位の沈線を施し、縦長貼付文を配する。	諸議 c 式
107	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐	良好	胴部に比喩で紡錘状の文様を区画し、区画内に縦位の矢羽根状比喩を描く。	諸議 c 式
108	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	橙	良好	胴部に横位矢羽根状の沈線を施し、縦長貼付文を配する。	諸議 c 式
109	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐	ふつう	胴部に斜格子状に沈線を施す。	諸議 c 式
110	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 細礫	暗褐橙	良好	胴部に斜格子状に沈線を施し、縦長貼付文を配する。	諸議 c 式
111	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐	良好	胴部に斜位沈線を施し、ボタン状貼付文を配する。	諸議 c 式
112	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗褐	良好	胴部に斜位沈線を施し、ボタン状貼付文を配する。	諸議 c 式
113	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐	良好	胴部に縦位沈線を施し、ボタン状貼付文を配する。	諸議 c 式
114	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	褐橙	ふつう	平口縁の口縁直下に三角印刻を巡らせる。以下の口縁部文様は、器面剥落のため不明。	前期未葉
115	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐橙	良好	123・124と同一個体。胴部に横位の条線と三角印刻を施す。	前期未葉
116	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	ふつう	胴部に比喩で縦位・斜位に文様を描き、印刻を施す。	前期未葉
117	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	良好	胴部に比喩を横位に描き、印刻を施す。	前期未葉
118	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	ふつう	胴部に比喩で横位および同心円状の円文を描き、文様の隙間に印刻を施す。	前期未葉
119	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	ふつう	胴部に比喩で縦位・弧状に文様を描き、文様の隙間に印刻を施す。	前期未葉
120	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	ふつう	胴部に比喩で縦位・斜位に文様を描く。	前期未葉
121	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	ふつう	胴部に比喩で縦位に文様を描く。	前期未葉
122	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	橙	ふつう	胴部に結節浮線文で縦位矢羽根状の文様を描き、三角印刻を施す。	前期未葉
123	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	良好	115・124と同一個体。胴部に沈線で縦位矢羽根状の文様を描き、文様の隙間に三角印刻を施す。さらに横位沈線を数条巡らせて区画する。	前期未葉
124	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	橙	良好	115・123と同一個体。胴部に沈線で縦位矢羽根状の文様を描き、文様の隙間に三角印刻を施す。さらに横位沈線を数条巡らせて区画し、区画内に横位・上下の三角印刻で扇歯状の文様を描く。	前期未葉
125	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	黄橙	ふつう	平口縁の口端裏面が有段となり、口端の裏面から口唇部にかけて縦長の貼付文が付き、無文地の口縁部に結節浮線文が2条巡る。	前期未葉
126	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫	褐橙	良好	平口縁の口端裏面が有段となり、口唇直下に縦長貼付文を右下がりとして左下がりの斜位に付け、無文地の口縁部に結節浮線文が2条巡る。	前期未葉
127	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 細礫、 長石	褐橙	良好	波頂部が平となる成状口縁の口縁下に結節浮線文を数条巡らせ、波頂部の表裏面に3重の円文を結節浮線文で描く。地文には R L の縄文を施す。	前期未葉
128	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	褐橙	良好	平口縁の口端裏面が有段となり、口唇部に突起をもち、無文地の口縁部に結節浮線文が巡る。	前期未葉
129	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	橙	良好	平口縁の表裏面に数条の結節浮線文が巡る。	前期未葉
130	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	橙	良好	平口縁の口縁下に中央が凹む円形貼付文および斜位の結節浮線文が配される。	前期未葉
131	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	褐橙	良好	無文地に結節浮線文が巡る。	前期未葉
132	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐橙	良好	無文地に結節浮線文が巡る。	前期未葉

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
133	縄文土器 深鉢		胴部片	粗砂	褐褐色	良好	無文地に結節浮線文が巡る。	前期末葉
134	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐褐色	良好	無文地に結節浮線文が巡る。	前期末葉
135	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	無文地の上半に結節浮線文で蕨歯状の文様を描き、結節浮線文を2条並せて区画し、以下にR Lの縄文を施す。	前期末葉
136	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
137	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐褐色	良好	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
138	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
139	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
140	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	褐褐色	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
141	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文が巡る。	前期末葉
142	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	良好	平口縁の口端裏面が有段となり、口縁下に結節浮線文で蕨歯状の文様を描き、以下にR Lの縄文を施す。	前期末葉
143	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗黄褐色	良好	地文にR Lの縄文が施され、3条の結節浮線文が斜位に付く。	前期末葉
144	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐色	良好	結節浮線文が数条巡り、その下に結節浮線文で蕨歯状の文様を描き、地文にR Lの縄文を施す。	前期末葉
145	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	褐色	良好	地文にR Lの縄文が施され、結節浮線文を横・縦位に付ける。	前期末葉
146	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	褐褐色	良好	地文にLの縄文が施され、結節浮線文を縦位に付ける。	前期末葉
147	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	暗黄褐色	良好	地文にLの縄文が施され、結節浮線文を縦位に付ける。	前期末葉
148	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 白色粒	褐色	良好	ロッキングによる貝殻敷線文を数段巡らせる。	浮島式
149	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	暗黄褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、平口縁の口縁下に縦位刺突文を巡らせ、以下に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を数段巡らせる。	
150	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	黄褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、平口縁の口縁下に縦位刺突文を巡らせ、以下に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を数段巡らせる。	興津式
151	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	暗褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、平口縁の口縁下に縦位刺突文を巡らせ、以下に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を巡らせる。	興津式
152	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂	暗黄褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、平口縁の口縁下に縦位刺突文を巡らせ、以下に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を巡らせる。	興津式
153	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	黄褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、胴部に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を数段巡らせる。	興津式
154	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗黄褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、胴部に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を巡らせ、以下は無文。	興津式
155	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂	暗褐色	ふつう	149～155は同一個体の可能性をもつ、胴部に放射状のある二枚貝でロッキングによる貝殻敷線文を数段巡らせる。	興津式
156	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 白色粒	褐褐色	良好	157と同一個体。口縁の上面形がやや楕円となり、長軸方向が僅かに湾状を呈し、胴部が膨らむ器形。長軸方向の波頭部および短軸方向の口唇部に円形刺突を有し、口縁部文様に3段の斜位刺突部を巡らせ、以下の胴部にもL Rの縄文を施す。	大木式
157	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 白色粒	褐褐色	良好	156と同一個体。平口縁の口縁部に3段の斜位刺突部を巡らせ、以下の胴部にもL Rの縄文を施す。	大木式
158	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	良好	160と同一個体。胴部に細かい刻みをもつ平行沈線を横位に数条並らせて文様帯区画し、区画内に同様な刻み平行沈線で歯状の曲線的な文様を描き、鉄手の中心に円形の印刻、文様の周囲に三角状の印刻を施す。	五箇ヶ台式
159	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	暗褐色	良好	胴部に細かい刻みをもつ平行沈線を横位に数条並らせて文様帯区画し、区画内に三角印刻を上下から交互に施して蕨歯状の文様を描く。	五箇ヶ台式
160	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂	黄褐色	良好	158と同一個体。胴部に細かい刻みをもつ平行沈線を横位に数条並らせて文様帯区画し、区画内に同様な刻み平行沈線で曲線的な文様を描き、文様の周囲に三角状の印刻を施す。	五箇ヶ台式
161	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂、 砂礫、 雲母	暗褐色	良好	有段となる平口縁の口縁下に疎なる縄文を施す。	阿玉台式
162	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 砂礫、 雲母	褐色	良好	内反する平口縁の口唇に刻みを巡らせ、口縁下に結節沈線を巡らせる。口縁部文様に結節沈線で逆U字状の文様を描く。	阿玉台式
163	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 砂礫	暗褐色	ふつう	内反する平口縁の口縁下に隆帯で楕円等の文様を区画し、区画内に縦位沈線を充填する。	加曾利E 2式
164	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	口縁部片	粗砂、 砂礫	暗褐色	ふつう	内反する平口縁の口縁下に太い沈線で楕円等の文様を区画し、区画内にL Rの縄文を施す。	加曾利E 3式

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	概要
165	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂、 砂礫	黄褐色	ふつ	波状口縁となる段頂部で、渦巻き状の沈線をもつ。	加曾利E3式
166	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂、 砂礫	暗黄褐色	ふつ	胴部に沈線で蛇行懸垂文を描き、地文にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
167	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂、 砂礫	黄褐色	ふつ	胴部に沈線で懸垂文をもち、0段多条のR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
168	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	褐色	ふつ	胴部に隆帯と沈線で懸垂文を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
169	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	黄褐色	ふつ	胴部に沈線で懸垂文を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
170	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	褐色	ふつ	胴部に沈線で懸垂文を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
171	縄文土器 深鉢	表土	胴部片	粗砂、 砂礫	褐色	ふつ	胴部に沈線で懸垂文をもち、R Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
172	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	褐色	ふつ	胴部に沈線で懸垂文を描き、地文にR Lの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
173	縄文土器 深鉢	Ⅲ層	胴部片	粗砂、 砂礫	褐色	良好	胴部に沈線で懸垂文を描き、地文にL Rの縄文を縦位に施す。	加曾利E3式
174	縄文土器 深鉢	5号上墳埋土	口縁部片	粗砂	褐色	良好	突起をもつ平口縁の口唇に沈線を巡らせて、口唇下に1条の細い刻み隆帯を巡らせて8字状の刷付文をもつ。以下の胴部にはL Rの縄文が施され、沈線が巡る。	副之内2式
175	縄文土器 深鉢	表土	口縁部片	粗砂	黄褐色	良好	平口縁の口唇下に沈線を数段巡らせて区画し、区画内にL Rの縄文を施す。裏面口唇下に刻みを巡らせて、その下に太い沈線が巡る。	副之内2式

直轄から出土した遺物(第124～126頁, P. 59～60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	概要
176	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	(12.3)	4.1	1.8	89.3	短冊型	完成状態。風化して対部摩耗は明らかでないが、対部側の右側縁が輪端に薄く、対部再生を示唆している。	
177	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	(9.0)	4.3	2.0	97.4	短冊型	未製品? 体部下半を大きく欠損する。両側縁の形状は完成状態にあり、最終段階で破損したものであろう。	
178	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	13.1	5.5	2.0	154.6	短冊型	完成状態。対部摩耗が著しい。このほか、体部中央の磨研痕が密く広がる。	
179	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	10.2	4.9	2.0	120.0	短冊型	完成状態。体部に強い磨研痕がある。最終加工は対部にあり、明らかに対部再生を試みている。	
180	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	9.5	5.4	3.5	249.0	短冊型?	完成状態? 両側縁とも摩耗するのに対して、対部には器軸に並行する割離が並び、対部形状は丸型に近い。	
181	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	(7.2)	(6.4)	2.2	136.6	短冊型	完成状態。対部再生段階で破損したもので、体部上半を大きく欠損する。	
182	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	8.8	6.2	1.9	85.1	擲型?	完成状態。対部摩耗が表面にあり、これを側縁加工が切る。石斧としての側縁再生とするには無理があり、器軸転用を試みたものかもしれない。	
183	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	8.7	5.2	1.2	53.5	擲型	完成状態。表裏面とも対部摩耗する。この摩耗を切り、側縁加工が施されている。	
184	打製石斧	Ⅲ層	黒色頁岩	(7.8)	5.8	1.9	88.4	擲型	完成状態。対部摩耗が表面にあり、これを左側縁の加工が切る。この側縁加工により左右の対称性が崩れている点が特徴的である。両部側を破損する。	
185	打製石斧	表土	黒色頁岩	13.2	6.8	3.2	267.5	分銅型	未製品。両側縁の装首部のみ加工位置が利明するもので、その他の部分の加工は着手されていない。	
186	打製石斧?	表土	黒色頁岩	15.4	10.1	2.1	405.8	不明	裏面側に磨面を大きく残し、背面側のみ加工する。左辺側を除いて加工は丁寧で良く形が整う。石斧とするより大形器として理解すべきかもしれない。	
187	磨製石斧	Ⅲ層	変玄武岩	(3.0)	(5.3)	(1.0)	17.0	乳房状	打面側に小割離痕が弧状に並んだ対部調整割片。	
188	磨製石斧	Ⅲ層	雲母石英片岩	(4.4)	(1.2)	0.5	3.0	定向式	小形磨製石斧の右辺側破片。	
189	石磯	Ⅲ層	黒色頁岩	(2.3)	2.1	0.3	1.2	平基無基磯	完成状態。押圧割離が器体全面を覆い、全体として薄く仕上がっている。	
190	石磯	Ⅲ層	黒色安山岩	2.0	1.2	0.3	0.7	凹基無基磯	完成状態。石器基部を覆か挟り込み、両側に小さな返し部が付く。	
191	石磯	Ⅲ層	黒色安山岩	3.5	1.6	0.5	2.4	凹基無基磯	完成状態。角度の厚い両辺加工して器体を作出する。表裏面とも素材面を大きく残す。	
192	石磯	Ⅲ層	黒曜石	1.3	0.8	0.3	0.2	凹基無基磯	完成状態? 背面側両側縁の加工は厚く、形状を整えた程度で、「返し部」は対称性を欠く。	
193	石磯	Ⅲ層	黒色安山岩	3.1	2.2	0.3	1.6	凹基無基磯	完成状態。押圧割離が全面を覆い、薄く仕上がっている。石磯としての完成度は高い。	
194	石磯	Ⅲ層	チャート	1.9	1.2	0.4	0.6	凹基無基磯	完成状態。押圧割離が全面を覆い、優品の部類に入る。基部は浅く挟り込まれ、小さな「返し部」を付ける。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
195	石鏃	Ⅲ層	チャート	1.8	1.4	0.3	0.4	凹基無茎鏃	完成状態。細い身部に大きく開いた「返し」が付く。	
196	石鏃	Ⅲ層	黒色安山岩	1.9	1.4	0.3	0.5	凹基無茎鏃	完成状態。基部を大きく挟り込む。「返し部」は細く、棒状を呈する。	
197	石鏃	Ⅲ層	黒色安山岩	2.3	(1.8)	0.3	0.8	凹基無茎鏃	完成状態? 押圧剥離面が全面を覆い、薄く仕上がる。右辺側「返し部」を欠損する。	
198	石鏃	Ⅲ層	黒色頁岩	(5.6)	3.9	0.9	17.0	縦型	幅広剥片を横位に用い、周辺加工して刃部を作出する。「狭み部」は側縁をチッピングして細く作り出されている。	
199	石鏃?	Ⅲ層	黒色頁岩	5.2	3.9	1.0	16.3	縦型	打面側の両側縁をノッチ状に加工する。刃部は剥片のエッジを加工せず用いる。	
200	石鏃	Ⅲ層	黒色安山岩	(4.3)	4.5	1.0	10.0	幅広剥片	剥片の一端を両側から浅く加工して、薄い機能部を作出する。機能的に不安だが、エッジは鋭く磨耗する。	
201	石鏃	表土	チャート	(2.6)	(0.8)	0.4	0.5		先端・「狭み部」を欠損する。エッジはシャープで、磨耗は見られない。	
202	刮器	Ⅲ層	砂質頁岩	3.9	7.5	0.7	27.5	横長剥片	剥片の上下両端を粗く加工する。下端側が弧状に加工されており、これを刃部と捉えた。	
203	石核	Ⅲ層	黒曜石	2.0	2.8	0.8	5.2	小形剥片	背面側で小形剥片を剥離する。	
204	石核	Ⅲ層	黒曜石	2.0	2.4	2.1	8.9	板状剥片	上端側の風化剥離面を打面に小形剥片を剥離する。	
205	石核	Ⅲ層	チャート	3.5	2.2	1.9	14.6	分割鏃	小形剥片を剥離。石材は黒色に光沢を帯び良質。	
206	加工痕ある剥片	Ⅲ層	チャート	7.9	3.9	1.4	53.5	板状剥片	裏面側で割れた板状剥片の両側縁を浅く加工して、器体を作出する。加工意図は不明。	207と接合
207	加工痕ある剥片	Ⅲ層	チャート							206と接合
208	凹石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	12.7	9.1	4.6	585.6	扁平楕円鏃	表裏面とも漏斗状の孔2~3を穿つ。被熱して全面にススが附着。ヒビ割れている。	
209	凹石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	11.7	6.7	4.8	526.3	楕円鏃	表裏面とも漏斗状の孔1がある。	
210	凹石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	10.4	9.9	5.5	786.9	楕円鏃	表裏面とも磨打・磨耗痕がある。	
211	凹石	Ⅲ層	石英閃緑岩	10.1	9.0	4.0	543.3	扁平鏃	表裏面とも鏃中央付近に「ア」字状の磨打痕・磨耗痕がある。側縁は磨打・磨耗して平坦化している。	
212	磨石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	10.7	8.5	3.9	479.6	扁平楕円鏃	表裏面とも磨耗するほか、磨打痕がある。被熱して赤化している。	
213	磨石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	10.6	9.9	4.6	690.8	扁平楕円鏃	表裏面とも磨耗するほか、側縁に磨打痕がある。	
214	磨石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	10.4	9.7	5.3	651.9	扁平楕円鏃	表裏面とも磨打・磨耗痕がある。このほか、側面の磨打も著しい。	
215	磨石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	6.4	5.9	4.7	222.6	楕円鏃	表裏面とも強く磨耗する。磨耗痕は明瞭ではないが、打痕も散見され、磨石としての属性を備えている。	
216	磨石	Ⅲ層	ひん岩	15.4	5.9	3.7	562.3	棒状鏃	小口部両面に磨打痕がある。	
217	台石	Ⅲ層	石英閃緑岩	21.4	19.8	5.4	4006.2	扁平鏃	表裏面とも磨耗するほか、磨打痕がある。側縁には磨打痕が集中、激しく使い込まれていることが分かる。	
218	台石	Ⅲ層	粗粒輝石安山岩	28.0	23.6	6.8	7150.0	扁平鏃	表裏面とも磨耗する。背面側に漏斗状の孔1を穿ち、裏面側には磨打痕が著しい。	
遺構外の出上遺物(第126区 PL.60)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴		摘要
219	灰輪陶器 皿	表面採集	口縁一体部片	口	13.8		細砂粒/還元焰/灰白	口クロ整形(回転方向不明)施釉はつけ掛け。	束遺	
220	灰輪陶器 椀	表土	口縁-底部片	口 底	16.4 7.2	4.9 7.0	細砂粒/還元焰/灰白	口クロ整形(回転)高台は三日月高台で、丁単な付け高台。体部下端は回転ヘラ削り。施釉は刷毛掛け。	釉の発色不良・光々丘1号窯式か	
221	須恵器 椀	表土	底部片				細砂粒/還元焰/灰白	口クロ整形(回転方向不明) 高台は付け高台で、貼り付け部から剥落。	見込み部に墨書(文字不明)	
222	須恵器 椀	表土	1/2	口 底	13.8 7.2	4.9 6.0	細砂粒・粗砂粒/角閃石・軽石/還元焰/ぶい・黄緑	口クロ整形(右回転) 高台は底部回転系切り後の付け高台。	内外面磨減・見込み部に重ね焼きによる割離	
遺構外の出上遺物(第126区 PL.60)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位:cm・g)			特徴・状態		摘要	
223	銅製品 銭貨	調査面一括	ほぼ定形	長さ	2.327	幅	2.334	厚さ	0.117	費永通宝。錆化が進み表面の仕上げ痕跡等は不明。
遺構外の出上遺物(第126区 PL.60)										
番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ (g)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
224	石製品 砥石	表土	砥沢石	(7.3)	4.7	3.7	112.9	切り砥石	四面使用。よく使い込まれ、断面は糸巻状を呈する。	

写真図版



1 上空からみた上細井蟬山遺跡と赤城山麓緑(南西から)



2 上空からみた上細井蟬山遺跡と白川扇状地面(西から)



1 上空からみた調査区東部(南・上から)



2 上空からみた調査区東部(東・上から)



1 上空からみた調査区西部(南・上から)



2 上空からみた調査区西部(東・上から)



1 調査区東部の遺構群(東・上から)



2 調査区の遺構全景(南・真上から撮影して合成)



1 1号竪穴住居遺物及び炭化材の出土状況(西から)



2 1号竪穴住居の全景(西から)



3 1号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 1号竪穴住居の地層断面A(西から)



5 1号竪穴住居カマドの全景(西から)



6 1号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



7 1号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)



8 1号竪穴住居貯蔵穴遺物の出土状況(北から)



1 2号竪穴住居の全景(西から)



2 2号竪穴住居掘方の全景(西から)



3 2号竪穴住居の地層断面A(調査区北壁・南から)



4 2号竪穴住居カマドの全景(西から)



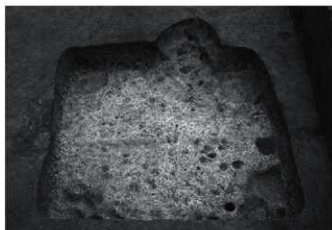
5 2号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



6 2号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



7 3号竪穴住居の全景(西から)



8 3号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 3号整穴住居の地層断面A(西から)



2 3号整穴住居カマドの全景(西から)



3 3号整穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 3号整穴住居貯蔵穴の全景(西から)



5 4号整穴住居の全景(西から)



6 4号整穴住居掘方の全景(西から)



7 4号整穴住居の地層断面A(西から)



8 4号整穴住居カマドの全景(西から)



1 4号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



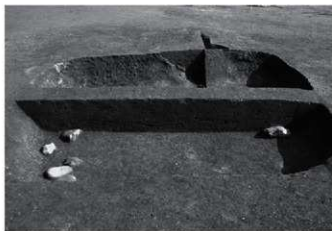
2 4号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



3 5号竪穴住居の全景(西から)



4 5号竪穴住居掘方の全景(西から)



5 5号竪穴住居の地層断面A(西から)



6 5号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 5号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



8 6号竪穴住居の全景(西から)



1 6号竪穴住居掘方の全景(西から)



2 6号竪穴住居の地層断面A(西から)



3 6号竪穴住居1号カマドの全景(西から)



4 6号竪穴住居2号カマドの全景(西から)



5 6号竪穴住居1号カマド掘方の全景(西から)



6 6号竪穴住居2号カマド掘方の全景(西から)



7 6号竪穴住居銅製品の出土状況



8 6号竪穴住居遺物の出土状況



1 7号竪穴住居の全景(南西から)



2 7号竪穴住居掘方の全景(南西から)



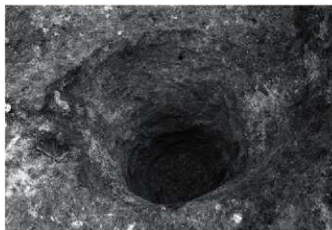
3 7号竪穴住居の地層断面A(南から)



4 7号竪穴住居カマドの全景(南西から)



5 7号竪穴住居カマド掘方の全景(南西から)



6 7号竪穴住居貯蔵穴の全景(南西から)



7 8号竪穴住居の全景(西から)



8 8号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 8号竪穴住居の地層断面A(西から)



2 8号竪穴住居カマドの全景(西から)



3 8号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 8号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



5 9号竪穴住居の全景(西から)



6 9号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 9号竪穴住居の地層断面B(南から)



8 9号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 9号竪穴住居カマ下掘方の調査状況(西から)



2 9号竪穴住居貯蔵穴の調査状況(西から)



3 9号竪穴住居掘方の地層断面A(西から)



4 10号竪穴住居の全景(西から)



5 10号竪穴住居掘方の全景(西から)



6 10号竪穴住居の地層断面A(北壁・南から)



7 11号竪穴住居の全景(西から)



8 11号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 11号竪穴住居カマドの全景(西から)



2 11号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



3 11号竪穴住居の地層断面A(西から)



4 12号竪穴住居の全景(西から)



5 12号竪穴住居掘方の全景(西から)



6 12号竪穴住居の地層断面A(西から)



7 12号竪穴住居カマドの全景(西から)



8 12号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 12号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



2 13号竪穴住居の全景(西から)



3 13号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 13号竪穴住居カマドの全景(西から)



5 14号竪穴住居の全景(西から)



6 14号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 14号竪穴住居の地層断面A(西から)



8 14号竪穴住居1号カマドの全景(西から)



1 14号竪穴住居2号カマドの全景(西から)



2 14号竪穴住居1号カマド掘方の全景(西から)



3 14号竪穴住居2号カマド掘方の全景(西から)



4 14号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



5 15号竪穴住居の全景(西から)



6 15号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 15号竪穴住居の地層断面A(西から)



8 15号竪穴住居カマドの全景(西から)



1 15号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



2 15号竪穴住居遺物の出土状況



3 16号竪穴住居の全景(西から)



4 16号竪穴住居掘方の全景(西から)



5 16号竪穴住居の地層断面A(西から)



6 16号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 16号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



8 16号竪穴住居遺物の出土状況



1 17号竪穴住居の全景(南西から)



2 17号竪穴住居掘方の全景(南西から)



3 17号竪穴住居の地層断面A(南から)



4 17号竪穴住居カマドの全景(南西から)



5 17号竪穴住居カマド掘方の全景(南西から)



6 17号竪穴住居カマドの地層断面J(南西から)



7 17号竪穴住居1号貯蔵穴の全景(南西から)



8 17号竪穴住居2号貯蔵穴の全景(北から)



1 18号竪穴住居の全景(西から)



2 18号竪穴住居掘方の全景(西から)



3 18号・19号竪穴住居の地層断面A(西から)



4 18号竪穴住居カマドの調査状況(北西から)



5 18号竪穴住居カマドの全景(西から)



6 18号竪穴住居カマド掘方の全景(北西から)



7 19号竪穴住居の全景(西から)



8 19号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 19号竪穴住居1号貯蔵穴の全景(西から)



2 19号竪穴住居2号貯蔵穴の全景(西から)



3 20号竪穴住居の全景(北から)



4 20号竪穴住居掘方の全景(北から)



5 20号竪穴住居の地層断面A(南壁・北から)



6 21号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



7 21号竪穴住居の全景(西から)



8 21号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 21号竪穴住居の地層断面B(北から)



2 21号竪穴住居カマドの全景(西から)



3 21号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 21号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



5 21号竪穴住居2号土坑の全景(西から)



6 22号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



7 22号竪穴住居の全景(西から)



8 22号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 22号竪穴住居の地層断面A(東から)



2 22号竪穴住居カマドの全景(西から)



3 22号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 23号竪穴住居の全景(西から)



5 23号竪穴住居掘方の全景(西から)



6 23号竪穴住居の地層断面A(東から)



7 23号竪穴住居カマドの全景(西から)



8 24号竪穴住居の全景(南から)



1 24号竪穴住居掘方の全景(南から)



2 24号竪穴住居の地層断面A(北壁・南から)



3 24号竪穴住居カマドの全景(西から)



4 25号竪穴住居の全景(西から)



5 25号竪穴住居掘方の全景(西から)



6 25号竪穴住居の地層断面A・B(南西から)



7 25号竪穴住居カマドの全景(西から)



8 26号竪穴住居の全景(西から)



1 26号竪穴住居の地層断面A(南西から)



2 26号竪穴住居カマドの全景(西から)



3 26号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 27号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



5 27号竪穴住居の全景(西から)



6 27号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 27号竪穴住居カマドの全景(西から)



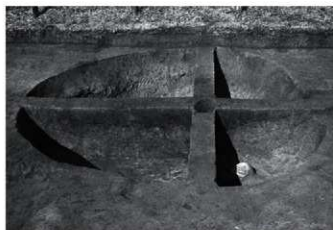
8 27号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 28号竪穴住居の全景(南西から)



2 28号竪穴住居掘方の全景(南から)



3 28号竪穴住居の地層断面A(南から)



4 29号竪穴住居の全景(西から)



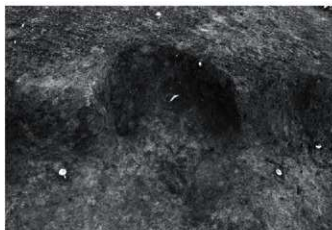
5 29号竪穴住居掘方の全景(西から)



6 29号竪穴住居の地層断面A(西から)



7 29号竪穴住居カマドの全景(西から)



8 29号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 30号竪穴住居の全景(西から)



2 30号竪穴住居掘方の全景(西から)



3 30号竪穴住居の地層断面B(南壁・北から)



4 30号竪穴住居カマダの全景(西から)



5 30号竪穴住居カマダ掘方の全景(西から)



6 1号竪穴の全景(東から)



7 2号竪穴の全景(東から)



8 2号竪穴の地層断面B(東から)



1 3号竪穴遺物の出土状況(北から)



2 5号竪穴遺物の出土状況(北西から)



3 3号竪穴の全景(南から)



4 5号竪穴の全景(北西から)



5 3号竪穴の地層断面A(南から)



6 4号竪穴遺物の出土状況(南から)



7 4号竪穴の全景(南から)



8 4号竪穴の地層断面A(南から)



1 1号古墳の全景(南西から)



2 1号古墳主体部の全景(南から)



3 1号古墳主体部の全景(北西から)



4 1号古墳周堀の全景(南東から)



5 1号古墳周堀の地層断面A(南から)



1 1号道の全景(西から)



2 1号溝の全景(西から)



3 2号溝の地層断面A(南から)



4 3号溝の全景(西から)



5 4号溝の調査風景・平成24年度(西から)



6 4号溝の全景(西から)



7 1号井戸の全景(未完掘・南から)



8 1号井戸の地層断面A(断ち割り・南から)



1 1号土坑の全景(南から)



2 2号土坑の全景(南から)



3 3号土坑の全景(南から)



4 4号土坑の全景(南から)



5 5号土坑の全景(南から)



6 6号土坑の全景(南から)



7 7号土坑の全景(東から)



8 8号土坑の全景(東から)



9 9号土坑の全景(南から)



10 10号土坑の全景(南から)



11 11号土坑の全景(西から)



12 12号土坑の全景(南から)



13 13号土坑の全景(南から)



14 14号土坑の全景(南から)



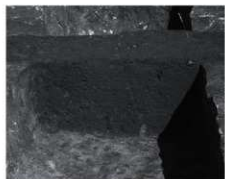
15 19号土坑の全景(南から)



1 20号土坑の全景(南から)



2 21号土坑の全景(東から)



3 22号土坑の地層断面A(南から)



4 23号土坑の全景(南から)



5 24号土坑の全景(南から)



6 25号土坑の全景(南から)



7 26号土坑の全景(南から)



8 27号土坑の全景(南から)



9 28号土坑の全景(南から)



10 29号・30号土坑の全景(西から)



11 31号・32号土坑の全景(西から)



12 33号土坑の全景(西から)



13 34号土坑の全景(西から)



14 35号土坑の全景(南から)



15 36号土坑の全景(南から)



1 37号土坑の全景(南から)



2 38号土坑の全景(南から)



3 40号土坑の全景(南から)



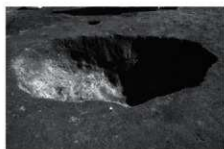
4 42号土坑の地層断面A(南東から)



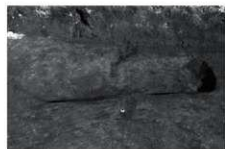
5 44号土坑の全景(南から)



6 45号土坑の全景(東から)



7 47号土坑の全景(西から)



8 48号土坑の全景(南から)



9 49号土坑の全景(西から)



10 50号土坑の全景(南から)



11 51号土坑の全景(南から)



12 52号土坑の全景(南から)



13 53号土坑の全景(南から)



14 54号土坑の全景(南から)



15 55号土坑の全景(南から)



1 56号土坑の全景(南から)



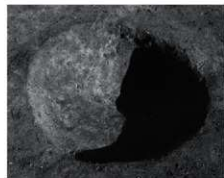
2 57号土坑の全景(南から)



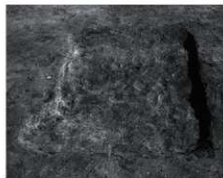
3 59号土坑の全景(南から)



4 60号土坑の全景(南から)



5 61号土坑の全景(南から)



6 62号土坑の全景(南西から)



7 63号土坑の全景(南から)



8 64号土坑の全景(南から)



9 66号土坑の全景(南から)



10 67号土坑の全景(南から)



11 68号土坑の全景(南から)



12 69号土坑の全景(南から)



13 70号土坑の全景(南から)



14 71号土坑の全景(南から)



15 73号土坑の全景(西から)



1 74号土坑の全景(西から)



2 75号土坑の全景(西から)



3 76号～79号土坑の検出状況(東から)



4 76号～80号土坑の全景(西から)



5 80号～83号土坑の検出状況(南東から)



6 84号・85号・86号土坑の検出状況(南東から)



7 87号～115号土坑の全景(南東から)



8 87号～90号土坑の検出状況(東から)



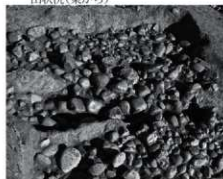
9 95号・105号・106号・107号土坑の検出状況(東から)



10 97号土坑の地層断面(東から)



11 97号・98号・99号土坑の検出状況(東から)



12 101号・102号・103号土坑の検出状況(南から)



13 106号土坑の地層断面(東から)



14 101号・102号・103号・113号・114号土坑の検出状況(西から)



15 116号土坑の地層断面E(北壁・南から)



1 117号・118号土坑の全景(南から)



2 121号土坑の全景(南から)



3 122号土坑の全景(南から)



4 123号土坑の全景(西から)



5 124号土坑の全景(南から)



6 125号土坑の全景(南から)



7 125号土坑の地層断面A(南から)



8 126号土坑の全景(南から)



9 126号土坑の地層断面A(南東から)



10 127号土坑の全景(南から)



11 127号土坑の地層断面A(南西から)



12 128号土坑の全景(東から)



13 129号土坑の全景(南から)



14 129号土坑の地層断面A(南から)



15 130号土坑の全景(南から)



1 130号土坑の地層断面A(南から)



2 131号土坑の全景(南から)



3 131号土坑の地層断面A(南から)



4 132号土坑の全景(北から)



5 133号土坑の全景(南から)



6 133号土坑の地層断面A(南から)



7 134号土坑の全景(北から)



8 134号土坑の地層断面A(北から)



9 135号土坑の全景(南から)



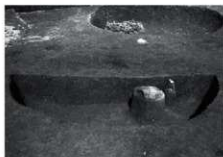
10 135号土坑の地層断面A(南から)



11 136号土坑の全景(南西から)



12 136号土坑遺物の出土状況(南西から)



13 136号土坑の地層断面A(南西から)



1 旧石器調査グリッドの発掘風景(南から)



2 旧石器調査グリッドの全景(南から)



3 旧石器調査グリッドの地層断面(南から)



4 旧石器調査グリッドから出土した遺物



5 調査区の地層断面・第1地点(南から)



6 調査区の地層断面・第3地点(南から)

1号竪穴住居



2号竪穴住居



3号竪穴住居



4号竪穴住居

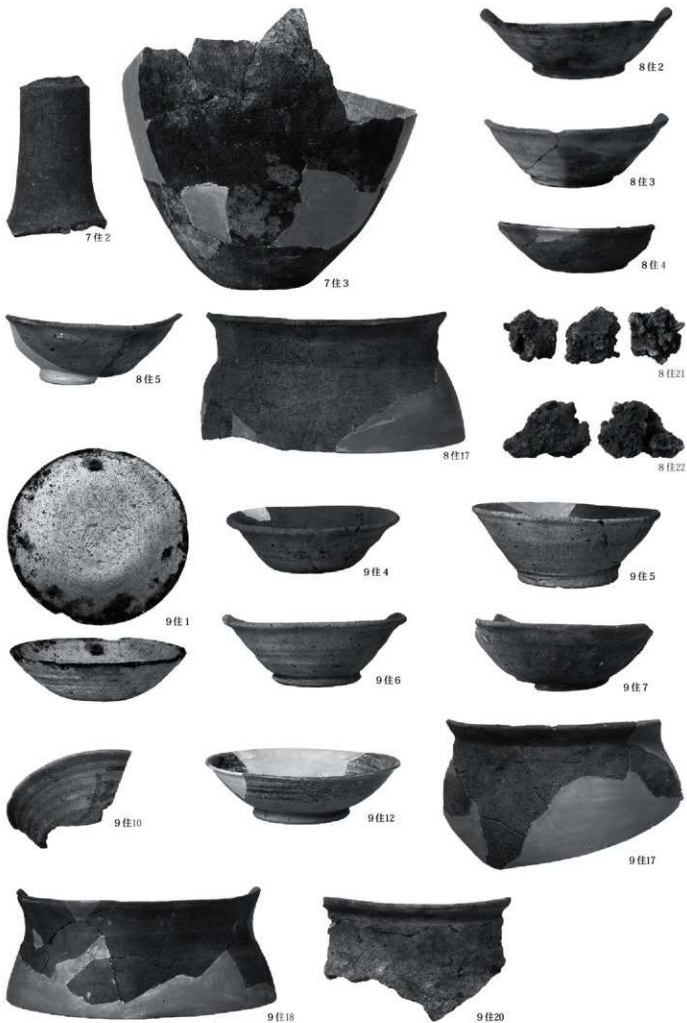


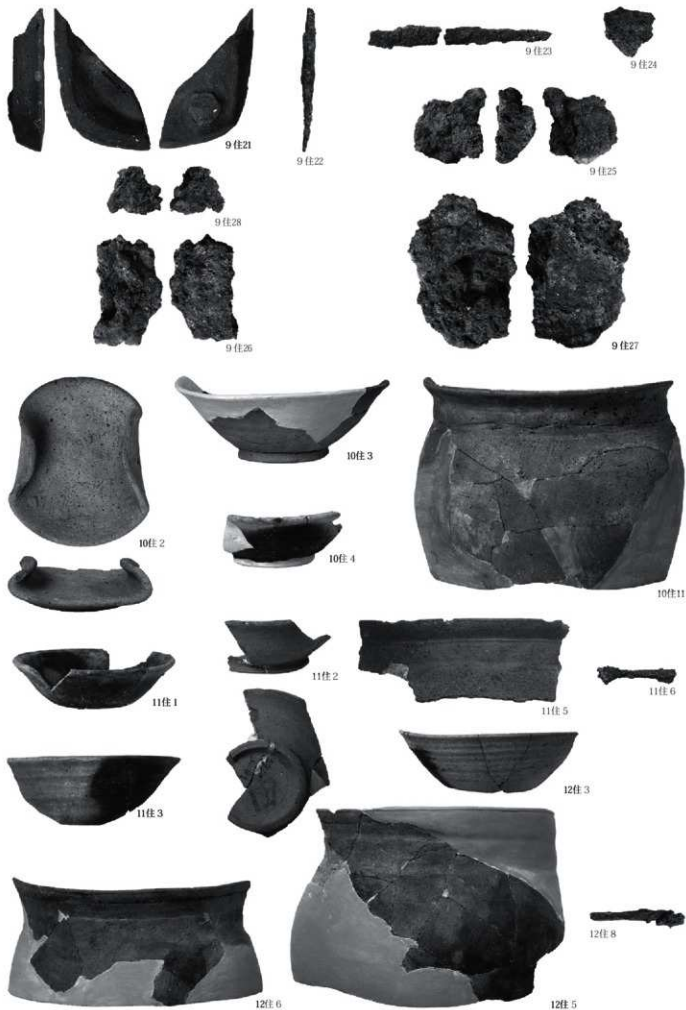
5号竪穴住居



6号竪穴住居









13住 1



14住 3



13住 2



15住 4



15住 5



15住 6



15住 10



15住 8



15住 2



16住 2



16住 3



17住 1



17住 2



17住 3



17住 6



17住 8



17住 7



19住 1



18住 7



18E3



18E4



18E5



18E8



18E9



18E11



18E12



18E13



18E14



18E16



18E18

20号竪穴住居



21号竪穴住居



21号竪穴住居



22号竪穴住居



23号竪穴住居



24号竪穴住居





24住 4



24住 5



25住 4



25住 5



25住 6



25住 7



26住 1



27住 1



27住 2



27住 3



27住 4



27住 7



27住 8



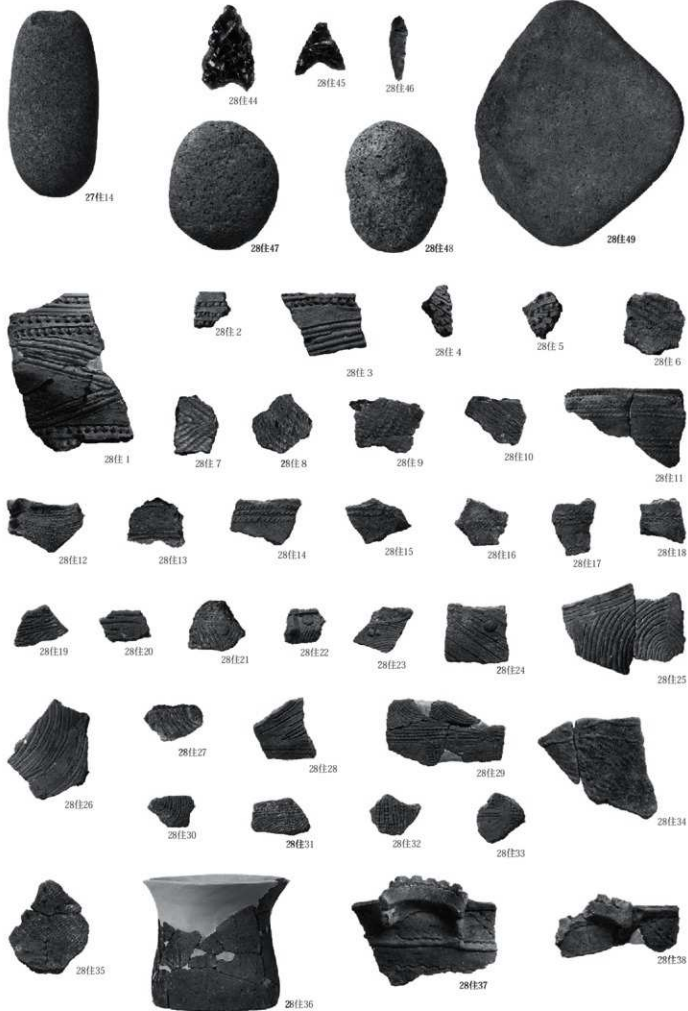
27住 11

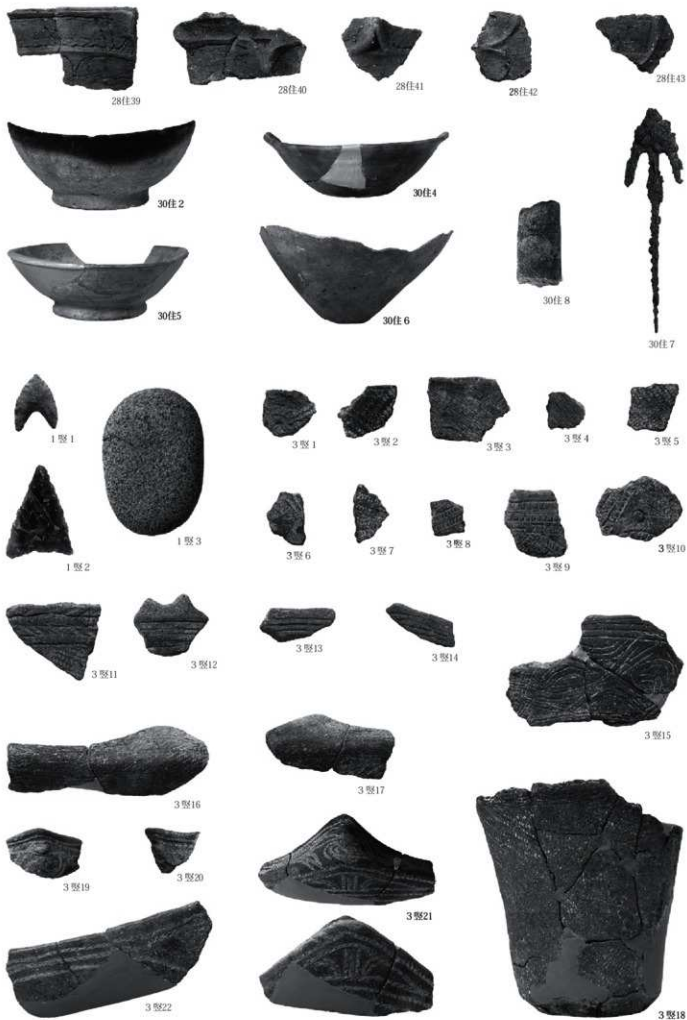


27住 9

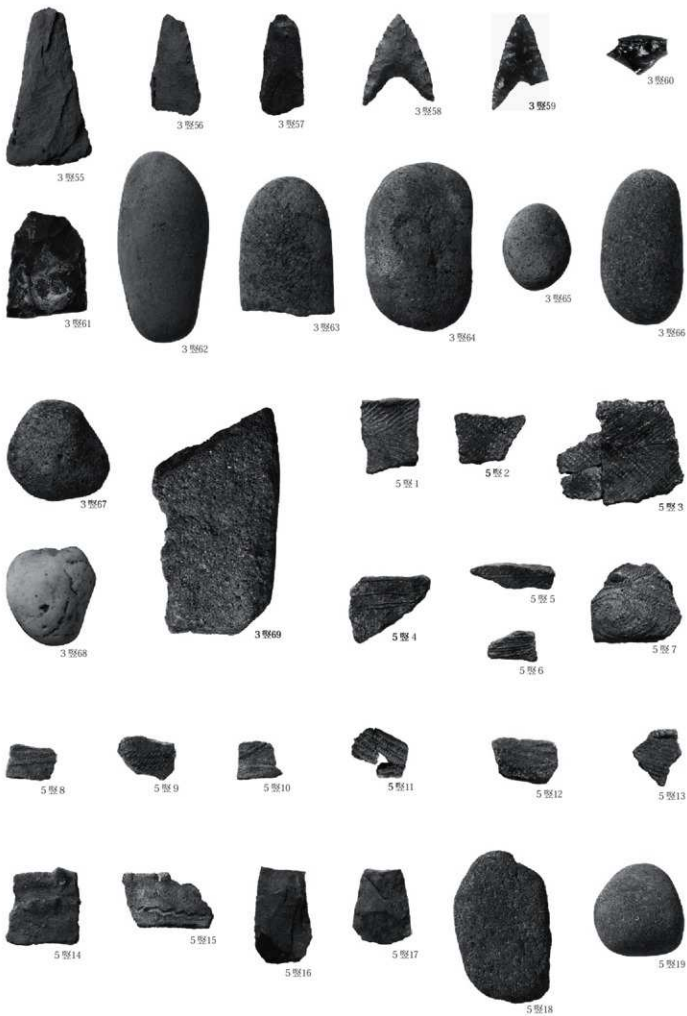


27住 10











5 型20



4 型57



4 型58



4 型59



4 型60



4 型01



4 型02



4 型1



4 型2



4 型3



4 型4



4 型5



4 型6



4 型7



4 型8



4 型9



4 型10



4 型11



4 型12



4 型13



4 型14



4 型15



4 型16



4 型17



4 型18



4 型19



4 9820



4 9821



4 9822



4 9823



4 9824



4 9825



4 9826



4 9827



4 9828



4 9829



4 9830



4 9831



4 9832



4 9835



4 9836



4 9833



4 9837



4 9838



4 9834



4 9839



4 9840



4 9841



4 9842



4 9843



4 9844



4 9845



4 9846



4 9847



4 9848



4 9849



4 9850



4 9851



4 9852



4 9853



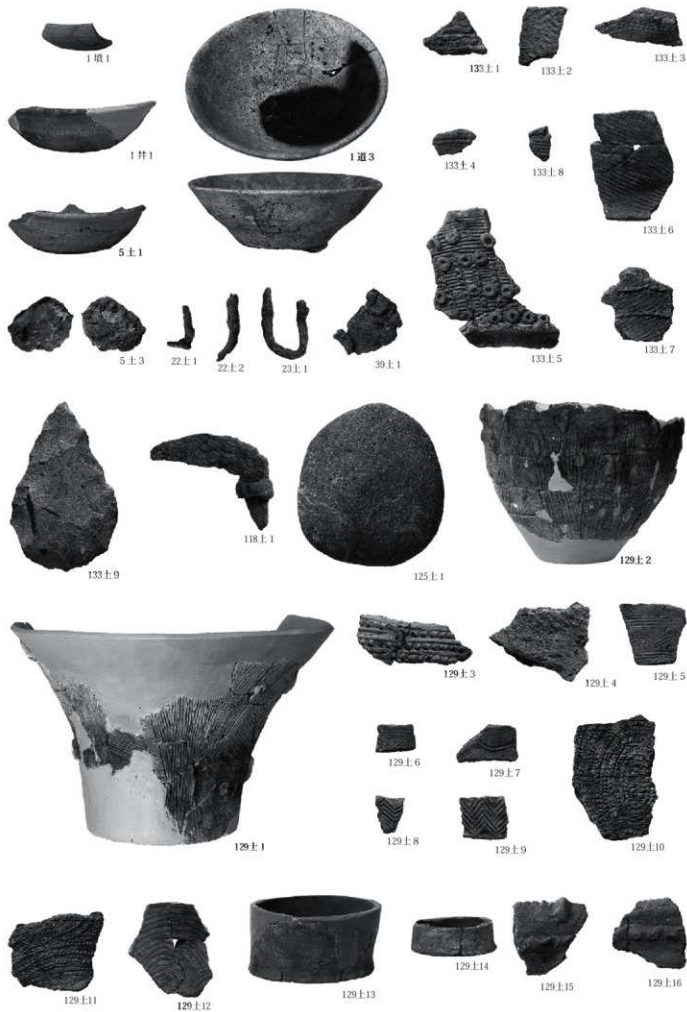
4 9854



4 9855



4 9856





129上17



129上18



129上19



129上20



129上21



129上22



130上1



130上2



130上3



130上4



130上5



130上6



130上7



130上8



130上9



134上1



134上2



134上3



134上4



134上5



134上6



134上7



134上8



134上9



134上10



134上11



134上12



134上14



134上15



134上16



134上17



134上18



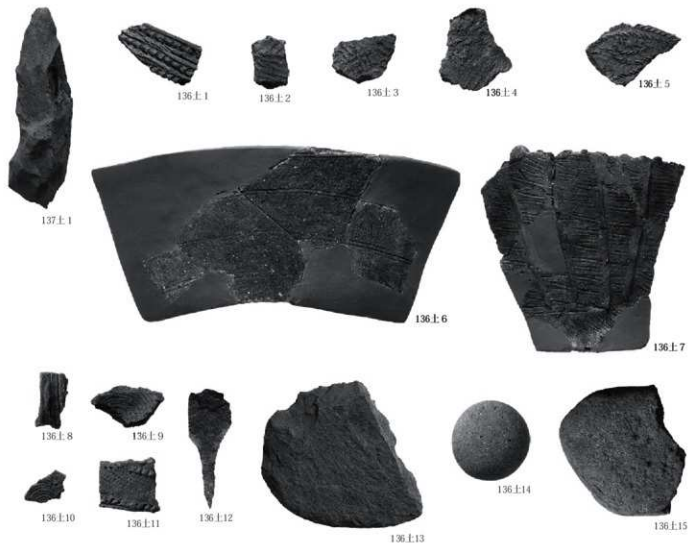
134上19



134上20



134上13

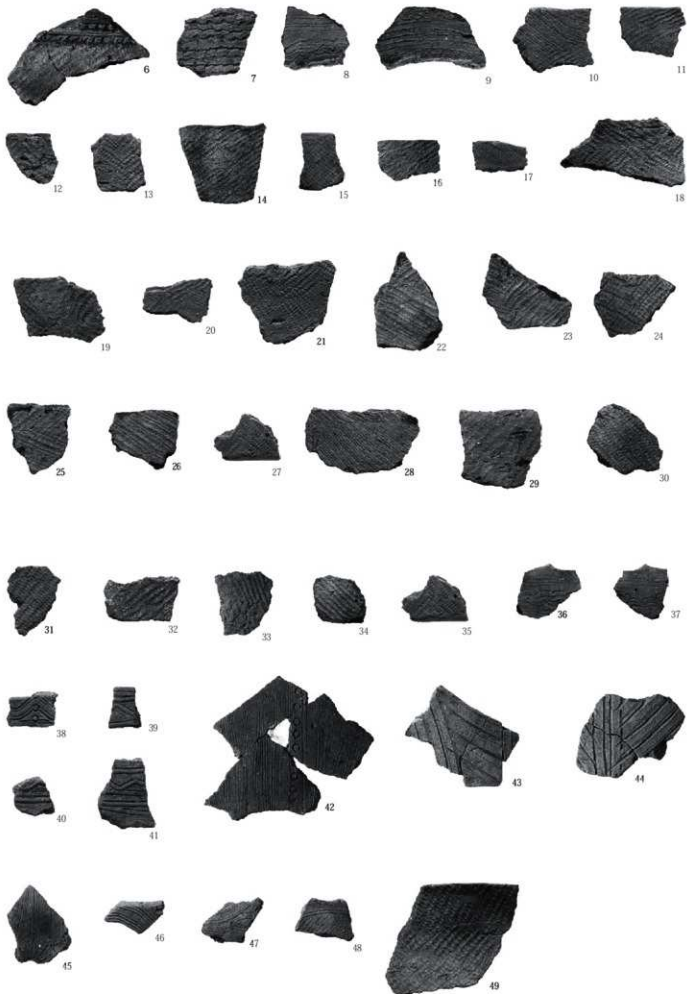


旧石器調査グリッド



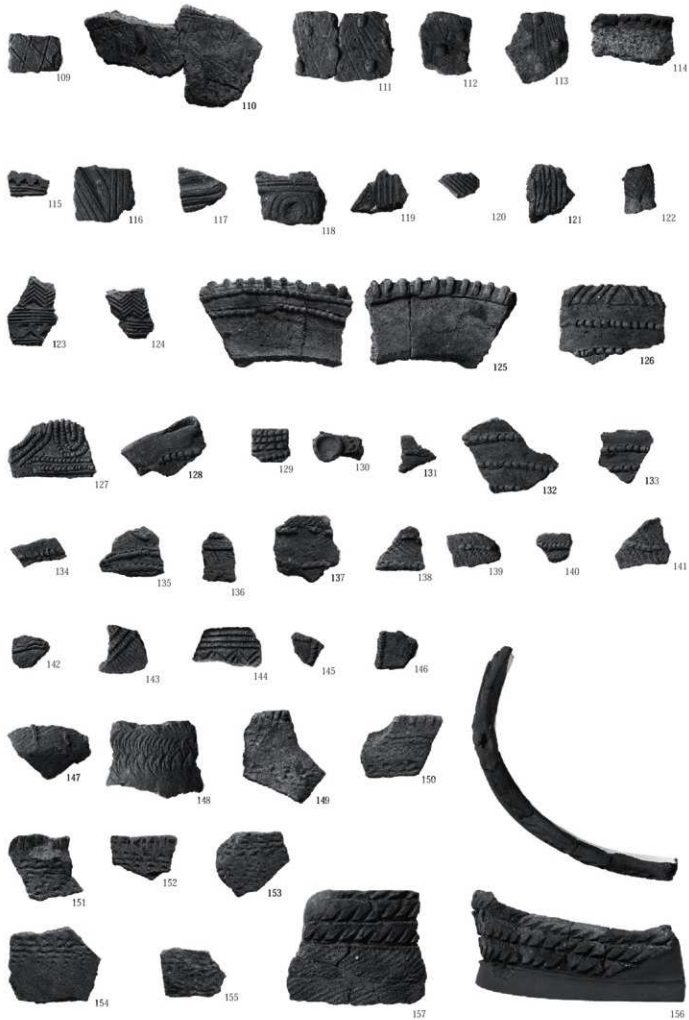
遺構外

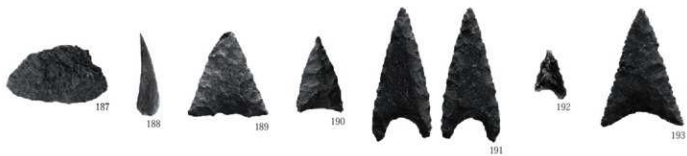


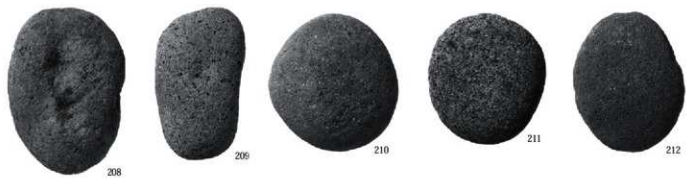












報告書抄録

書名ふりがな	かみほそいせみやまいせき
書名	上細井嶺山遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第560集
編著者名	矢口裕之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北桶町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみほそいせみやまいせき
遺跡名	上細井嶺山遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみほそいまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上細井町
市町村コード	10201
遺跡番号	786
北緯(日本測地系)	362528
東経(日本測地系)	390440
北緯(世界測地系)	362540
東経(世界測地系)	1390429
調査期間	20091001-20100331/20121101-20121130
調査面積	10,772.68
調査原因	道路建設
種別	集落・古墳
主な時代	旧石器／縄文／古墳／奈良／平安
遺跡概要	集落-縄文前期-竪穴住居1+竪穴2/古墳-飛鳥-1/集落-古墳-竪穴住居1+飛鳥-竪穴住居1+奈良-竪穴住居2+平安-竪穴住居25/道路-平安-1/井戸-平安1/土坑-136
特記事項	平安時代の竪穴住居掘方から須恵器の二面碗が出土した。
要約	縄文時代前期及び古墳時代後期から飛鳥、奈良、平安時代に継続する集落である。9世紀中頃に道が構築され本格的な集落が形成された。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第560集

上細井蟬山遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成25年(2013)3月11日 印刷

平成25年(2013)3月18日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話(0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社

